

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10

小迫辻原遺跡 I

OZAKOTUZIBARU SITE

A・B・C・D区編

1999

大分県教育委員会

序

大分県の西端に位置する日田盆地は、北部九州との交通の要衝にあたることから、歴史的に重要な役割を担ってきた地域として知られています。

盆地内には、弥生時代の王墓として注目された吹上遺跡をはじめ、各時代の遺跡が濃密に分布しており、近年の調査により、その様相が明らかとなってまいりました。

小迫辻原遺跡は、九州横断高速道路の建設に先立って昭和58年以来発掘調査を実施してきたもので、その結果、古墳時代前期初頭の居館遺構2基が発見されました。これによって、方形の区画をもつ我が国最古の居館遺構としてその重要性が認識されることとなり、日本道路公団の協力により、遺構の大部分が現地保存されることになりました。

その後、日田市教育委員会が実施した小迫辻原台地の環壕集落を含む遺構群と合わせて、平成8年11月に国の史跡として指定をうけました。

こうして保存された小迫辻原遺跡は、先人の足跡を学ぶ貴重な文化遺産として広く活用されることが望まれますし、また本書がそうした文化財の保護と学術研究等の分野に寄与できれば幸いに存じます。

最後に発掘調査から本書の作成に至るまで多大なご協力をいただいた関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成11年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は九州横断自動車道（把木～日田間）の建設にともない、日本道路公団福岡建設局の委託をうけて、大分県教育委員会が実施した、大分県日田市所在小迫辻原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に報告する遺跡は、昭和61～63年度に大分県教育委員会が調査主体として本調査をおこなった小迫辻原遺跡のA・B・C・D区である。県調査分として『小迫辻原遺跡Ⅰ』とする。
3. 平成元年以後日田市教育委員会が調査をおこなったG～Q区は、今後『小迫辻原遺跡Ⅱ・Ⅲ』として刊行される。また調査全体の写真図版はさきに下記の表題で刊行した。
4. 小迫辻原遺跡の調査概要は以下の概報に速報している。試掘調査の結果は概報1と2に、本調査の結果は概報3・4・5で速報している。なお概報1～4までは小迫辻原遺跡を「小迫原遺跡」と表記している。
5. 大分県教育委員会調査分の出土遺物ならびに実測図・写真等の原資料は、下記の大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。

問い合わせ先：☎870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977

☎097-597-5675 FAX097-597-5680

6. 本書の執筆には、第1章を清水宗昭・田中裕介・土居和幸、第2章を土居、第3～7章を田中がたった。
7. 本書の編集と構成は田中がおこなった。

写真図版編：『小迫辻原遺跡 写真図版編』1998 大分県教育委員会・日田市教育委員会

概報1：芝嶺編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』1984 大分県教育委員会・日本道路公団

概報2：芝嶺『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』1985 大分県教育委員会・日本道路公団

概報3：芝・桑原幸則編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報—日田地区—』1986 大分県教育委員会・日本道路公団

概報4：渋谷忠章・田中裕介編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報—日田地区—』1987 大分県教育委員会・日本道路公団

概報5：渋谷・田中・小柳和宏・行時志郎編『九州横断自動車道（日田地区）建設に伴う発掘調査概報Ⅴ』1988 大分県教育委員会・日本道路公団

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	13
第1節 遺跡の立地	13
第2節 日田市の歴史	14
第3節 日田盆地の遺跡と遺物	16
第3章 調査の方法と報告書の凡例	25
第4章 A区の記録	29
第1節 A区の調査概要	32
第2節 縄文時代	34
1)上墳 34	
第3節 弥生時代前期後半～中期初頭	35
1)壙穴住居跡 36 2)土壇 39 3)ピット 105	
1)上墳 107	
第4節 弥生時代中期後半	107
第5節 古墳時代前期前半	114
1)壙穴住居跡 116 2)竪立柱建物跡 124 3)土壇 124	
第6節 奈良時代	126
1)ピット 126	
第7節 中世	126
1)竪立柱建物跡 128	
第8節 近世	133
1)溝 133	
第9節 表面採集遺物	135
第5章 B区の記録	161
第1節 B区の調査概要	167
第2節 弥生時代前期後半～中期初頭	168
1)壙穴住居跡 168 2)土壇 171 3)墓 191 4)ピット 192	
1)上墳 195 2)墓 211 3)ピット 220	
第3節 弥生時代中期後半	195
第4節 古墳時代前期前半	223
1)壙穴住居跡 223 2)土壇 256 3)墓 256 4)ピット 258	
1)壙穴住居跡 258 2)ピット 261	
第5節 奈良時代	258
第6節 中世	261
1)竪立柱建物跡 262 2)土壇 268 3)墓 269 4)溝 271 5)ピット 273	
1)竪立柱建物跡 274 2)土壇 274 3)溝 279	
第7節 近世	274
第8節 表面採集遺物	280
第6章 C区の記録	309
第1節 C区の調査概要	315
第2節 古墳時代前期前半	315
1)方形埴輪遺構 316 1.1号方形埴輪 321 2.2号方形埴輪 334 2)1号水溝 343	
3)壙穴住居跡 377 4)竪立柱建物跡 406 5)上墳 407	
第3節 奈良時代	408
1)壙穴住居跡 408 2)土壇 414 3)ピット 414	
1)竪立柱建物跡 415 2)墓 417 3)溝 417	
第4節 中世	415
1)竪立柱建物跡 419 2)土壇 419 3)溝 421	
第5節 近世	418
第6節 表面採集遺物	425
第7章 D区の記録	447
第1節 D区の調査概要	450
第2節 弥生時代前期後半～中期初頭	450
1)上墳 450	
第3節 古墳時代前期前半	452
1)壙穴住居跡 452 2)土壇 456 3)溝 456	
1)溝 458	
第4節 近世	458

細目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経過	1
1)	九州横断自動車道	1
2)	地力増進事業	4
3)	保存までの経過	7
4)	調査組織	8
第2章	遺跡の立地と環境	13
第1節	遺跡の立地	13
第2節	日田市の歴史	14
第3節	日田盆地の遺跡と遺物	16
第3章	調査の方法と報告書の凡例	25
第1節	調査の方法	25
第2節	整理の経過	27
第3節	報告書の凡例	28
第4章	A区の記録	29
第1節	A区の調査概要	32
第2節	縄文時代	34
1)	土墳	34
	A区-1号土墳	34
	A区-2号土墳	35
第3節	弥生時代前期後半～中期初頭	35
1)	竪穴住居跡	36
	A区-1号竪穴住居跡	36
	A区-2号竪穴住居跡	36
	A区-3号竪穴住居跡	36
	A区-4号竪穴住居跡	38
	A区-5号竪穴住居跡	38
	A区-6号竪穴住居跡	39
2)	土墳	39
	A区-3号土墳	39
	A区-4号土墳	40
	A区-5号土墳	40
	A区-6号土墳	42
	A区-7号土墳	42
	A区-8・9号土墳	42
	A区-10号土墳	43
	A区-11号土墳	44
	A区-12号土墳	46
	A区-13号土墳	48
	A区-14号土墳	49
	A区-15号土墳	51
	A区-16号土墳	51
	A区-17・18号土墳	52
	A区-19号土墳	52
	A区-20号土墳	53
	A区-21号土墳	54

A区-22号土墳	56
A区-23号土墳	56
A区-24号土墳	56
A区-25号土墳	56
A区-26号土墳	57
A区-27号土墳	57
A区-28号土墳	58
A区-29号土墳	60
A区-30号土墳	61
A区-31号土墳	61
A区-32号土墳	62
A区-33号土墳	62
A区-34号土墳	63
A区-35号土墳	63
A区-36号土墳	63
A区-37号土墳	64
A区-38号土墳	64
A区-39号土墳	65
A区-40号土墳	65
A区-41号土墳	65
A区-42号土墳	66
A区-43号土墳	66
A区-44号土墳	68
A区-45号土墳	68
A区-46号土墳	68
A区-47号土墳	70
A区-48号土墳	70
A区-49号土墳	71
A区-50号土墳	72
A区-51号土墳	73
A区-52号土墳	74
A区-53号土墳	75
A区-54号土墳	80
A区-55号土墳	80
A区-56号土墳	83
A区-57号土墳	83
A区-58号土墳	84
A区-59号土墳	84
A区-60号土墳	85
A区-61号土墳	85
A区-62号土墳	86
A区-63号土墳	87
A区-64号土墳	88
A区-65号土墳	94
A区-66号土墳	94
A区-67号土墳	94
A区-68号土墳	95
A区-69号土墳	95
A区-70号土墳	96
A区-71号土墳	97
A区-72号土墳	97
A区-73号土墳	97

A区-74号上墳	98
A区-75号上墳	99
A区-76号土墳	100
A区-77号土墳	100
A区-78号土墳	101
A区-79号上墳	103
A区-80号土墳	103
A区-82号土墳	104
A区-120号土墳	104
A区-121号土墳	105
A区-137号上墳	105
3) ビット	105
C18調査区ビット1	105
第4節 弥生時代中期後半	107
1) 土墳	107
A区-81号土墳	107
A区-83号土墳と周辺ビット群	108
A区-84号土墳	109
A区-85号上墳	111
A区-86号土墳	112
A区-87号土墳	114
A区-88号土墳	114
第5節 古墳時代前期前半	114
1) 竪穴住居跡	116
A区-7号竪穴住居跡	116
A区-8号竪穴住居跡	120
A区-9号竪穴住居跡	122
A区-10号竪穴住居跡	123
V19調査区ビット1	123
2) 掘立柱建物跡	124
A区-1号掘立柱建物跡	124
A区-2号掘立柱建物跡	124
3) 土墳	124
A区-89号土墳	124
A区-90号土墳	125
A区-91号土墳	125
A区-92号土墳	125
第6節 奈良時代	126
1) ビット	126
Q18調査区ビット6	126
T17調査区ビット3	126
第7節 中世	126
1) 掘立柱建物跡	128
A区-3号掘立柱建物跡	128
A区-4号掘立柱建物跡	128
A区-5号掘立柱建物跡	129
A区-6号掘立柱建物跡	129
A区-7号掘立柱建物跡	130
A区-8号掘立柱建物跡	130
A区-9号掘立柱建物跡	131
A区-10号掘立柱建物跡	131

第8節 近世	133
--------	-----

1) 溝	133
A区-1号溝	133
A区-2号溝	133
A区-3号溝	133
A区-4号溝	134
A区-5号溝	134
A区-6号溝	135

第9節 表面採集遺物	135
------------	-----

A区遺構一覧表・遺物観察表	136
---------------	-----

第5章 B区の記録	161
-----------	-----

第1節 B区の調査概要	167
-------------	-----

第2節 弥生時代前期後半～中期初頭	168
-------------------	-----

1) 竪穴住居跡	168
----------	-----

B区-1号竪穴住居跡	168
B区-2号竪穴住居跡	169
B区-3号竪穴住居跡	160

2) 土墳	171
-------	-----

B区-1号土墳	171
B区-2号土墳	171
B区-3号土墳	172
B区-4号土墳	174
B区-5号土墳	174
B区-6号土墳	174
B区-7号土墳	175
B区-8号土墳	175
B区-9号土墳	175
B区-10号土墳	176
B区-11号土墳	176
B区-12号土墳	176
B区-13号土墳	176
B区-14号土墳	178
B区-15号土墳	178
B区-16号土墳	178
B区-17号土墳	179
B区-18号土墳	179
B区-19号土墳	180
B区-20号土墳	180
B区-21号土墳	180
B区-22号土墳	180
B区-23号土墳	181
B区-24号土墳	182
B区-25号土墳	182
B区-26号土墳	182
B区-27号土墳	182
B区-28号土墳	184
B区-29号土墳	184
B区-30号土墳	185
B区-31号土墳	185
B区-32号土墳	187
B区-33号土墳	187

B区-34号土墳	188	2) ビット	261
B区-35号土墳	189	F2調査区ビット2	261
B区-36号土墳	190	第6節 中世	261
3) 墓	191	1) 掘立柱建物跡	262
B区-1号墓	191	B区-1号掘立柱建物跡	262
4) ビット	192	B区-2号掘立柱建物跡	263
K0調査区ビット2	192	B区-3号掘立柱建物跡	263
K1調査区ビット2	192	B区-4号掘立柱建物跡	264
I,2調査区ビット3	192	B区-5号掘立柱建物跡	264
第3節 弥生時代中期後半	195	B区-6号掘立柱建物跡	264
1) 土墳	195	B区-7号掘立柱建物跡	265
B区-37号土墳	195	B区-8号掘立柱建物跡	265
B区-38号土墳	195	B区-9号掘立柱建物跡	265
B区-39号土墳	196	B区-10号掘立柱建物跡	267
B区-40号土墳	196	B区-11号掘立柱建物跡	267
B区-41号土墳	199	2) 土墳	268
B区-42号土墳	202	B区-48号土墳	268
B区-43号土墳	206	B区-49号土墳	268
B区-44号土墳	207	B区-50号土墳	268
B区-45号土墳	210	B区-51号土墳	268
B区-46号土墳	210	B区-52号土墳	268
B区-1号土器溜まり	211	B区-53号土墳	269
2) 墓	211	B区-54号土墳	269
B区-2号墓	212	B区-55号土墳	269
B区-3号墓	213	3) 溝	269
B区-4号墓	213	B区-9号墓	269
B区-5号墓	214	4) 溝	271
B区-6号墓	215	B区-1号溝	271
B区-7号墓	218	B区-2号溝	271
3) ビット	220	B区-3号溝	273
E1調査区ビット2	220	5) ビット	273
G0調査区ビット3	220	I0調査区ビット6	273
第4節 古墳時代前期前半	223	I0調査区ビット8	273
1) 竪穴住居跡	223	I0調査区ビット9	273
B区-4号竪穴住居跡	223	I0調査区ビット11	273
B区-5号竪穴住居跡	229	H0調査区ビット7	273
B区-6号竪穴住居跡	239	I19調査区ビット7	273
B区-7号竪穴住居跡	244	第7節 近世	274
B区-8号竪穴住居跡	244	1) 掘立柱建物跡	274
B区-9号竪穴住居跡	247	B区-12号掘立柱建物跡	274
B区-10号竪穴住居跡	248	2) 土墳	274
B区-11号竪穴住居跡	254	B区-56号土墳	274
B区-12号竪穴住居跡	255	B区-57号土墳	274
2) 土墳	256	3) 溝	279
B区-47号土墳	256	B区-4号溝	279
3) 墓	256	B区-5号溝	279
B区-8号墓	257	B区-6号溝	279
4) ビット	258	B区-7号溝	279
I0調査区ビット4	258	B区-8号溝	279
第5節 奈良時代	258	第8節 表面採集遺物	280
1) 竪穴住居跡	258	B区遺構 覧表・遺物観察表	282
B区-13号竪穴住居跡	258		

第6章 C区の記録	309
第1節 C区の調査概要	315
第2節 古墳時代前期前半	315
1) 方形環溝遺構	316
1. 1号方形環溝	321
C区-1号掘立柱建物跡	322
C区-1号溝	322
2. 2号方形環溝	334
C区-2号掘立柱建物跡	334
C区-3号溝	338
C区-2号溝	339
2) 1号条溝	343
C区-4号溝	343
C区-4号溝内土壌A	376
C区-4号溝内土壌B	376
C区-4号溝内土壌C	376
3) 竪穴住居跡	377
C区-1号竪穴住居跡	377
C区-2号竪穴住居跡	380
C区-3号竪穴住居跡	382
C区-4号竪穴住居跡	385
C区-5号竪穴住居跡	387
C区-6号竪穴住居跡	388
C区-7号竪穴住居跡	390
C区-8号竪穴住居跡	396
C区-9号竪穴住居跡	404
C区-10号竪穴住居跡	405
4) 掘立柱建物跡	406
C区-3号掘立柱建物跡	406
C区-4号掘立柱建物跡	406
5) 土壌	407
C区-1号土壌	407
C区-2号土壌	407
第3節 奈良時代	408
1) 竪穴住居跡	408
C区-11号竪穴住居跡	408
C区-12号竪穴住居跡	408
C区-13号竪穴住居跡	411
C区-14号竪穴住居跡	413
2) 土壌	414
C区-3号土壌	414
C区-4号土壌	414
3) ビット	414
B3調査区ビット12	414
第4節 中世	415
1) 掘立柱建物跡	415
C区-5号掘立柱建物跡	415
C区-6号掘立柱建物跡	415
C区-7号掘立柱建物跡	416
C区-8号掘立柱建物跡	416
2) 墓	417
C区-1号墓	417

3) 溝	417
C区-5号溝	417
C区-6号溝	418
第5節 近世	418
1) 掘立柱建物跡	419
C区-9号掘立柱建物跡	419
2) 土壌	419
C区-5号土壌	419
C区-6号土壌	419
C区-7号土壌	420
C区-8号土壌	420
C区-9号土壌	420
C区-10号土壌	420
3) 溝	421
C区-7号溝	421
C区-8号溝	421
C区-9号溝	421
C区-10号溝	422
C区-11号溝	422
C区-12号溝	422
第6節 表面採集遺物	425
C区遺構一覽表・遺物観察表	426

第7章 D区の記録	447
第1節 D区の調査概要	450
第2節 弥生時代前期後半～中期初頭	450
1) 土壌	450
D区-1号土壌	450
M8調査区ビット1～5	450
第3節 古墳時代前期前半	452
1) 竪穴住居跡	452
D区-1号竪穴住居跡	452
2) 土壌	456
D区-2号土壌	456
D区-3号土壌	456
3) 溝	456
D区-1号溝	456
第4節 近世	458
1) 溝	458
D区-2号溝	458
D区-3号溝	458
D区-4号溝	458
D区-5号溝	458
D区遺構一覽表・遺物観察表	461

(報告書抄録)

巻末

挿 図 目 次

第1章	はじめに	
第1図	日田盆地の位置	1
第2図	自動車道の路線と遺跡の位置	2
第3図	小迫辻原遺跡調査区位置図	3
第4図	国指定史跡範囲図	7
第2章	遺跡の立地と環境	
第1図	日田盆地の位置と地勢	13
第2図	小迫辻原遺跡周辺の地形図	15
第3図	吹上遺跡(6次調査) 弥生時代墳墓群配置図	17
第4図	三和教田遺跡B地点の遺構図と 環濠出土の土器	18
第5図	上野第1遺跡出土(上)と三和教田遺跡 D地点(下)出土遺物	20
第6図	慈眼山瀬戸遺跡の遺構図	21
第7図	日田盆地周辺の主要遺跡分布図	23
第3章	調査の方法と報告書の凡例	
第1図	方位の凡例	25
第2図	小迫辻原遺跡A～D区調査設定図	26

第4章	A区の記録	
表紙	A区的位置	29
第1図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図①	31
第2図	小迫辻原遺跡A区遺構配置図②	33
第3図	A区-1号土壇	34
第4図	A区-2号土壇	35
第5図	A区-2号土壇出土遺物	35
第6図	A区-1～3号竪穴住居跡と A区-6号土壇	36
第7図	A区-2号竪穴住居跡出土遺物	36
第8図	A区-1・2・3号竪穴住居跡の変遷	37
第9図	A区-4号竪穴住居跡	38
第10図	A区-5号竪穴住居跡	38
第11図	A区-6号竪穴住居跡	39
第12図	A区-3号土壇	39
第13図	A区-3号土壇出土遺物	39
第14図	A区-4号土壇	40
第15図	A区-5号土壇	40
第16図	A区-4・5号土壇出土遺物	41
第17図	A区-6号土壇	42
第18図	A区-6号土壇出土遺物	42
第19図	A区-7号土壇	42
第20図	A区-8・9号土壇	42
第21図	A区-7・8・9号土壇出土遺物	43
第22図	A区-10号土壇	43
第23図	A区-10号土壇出土遺物	44
第24図	A区-11号土壇	45
第25図	A区-11号土壇出土遺物①	46
第26図	A区-11号土壇出土遺物②	47
第27図	A区-12号土壇	47
第28図	A区-12号土壇出土遺物	47
第29図	A区-13号土壇	48
第30図	A区-13号土壇出土遺物	49
第31図	A区-14号土壇	50
第32図	A区-14号土壇出土遺物	51
第33図	A区-15号土壇	51
第34図	A区-15号土壇出土遺物	51
第35図	A区-16号土壇	51
第36図	A区-16号土壇出土遺物	51
第37図	A区-17・18号土壇	52
第38図	A区-17・18号土壇出土遺物	52
第39図	A区-19号土壇	53
第40図	A区-19号土壇出土遺物	53
第41図	A区-20号土壇	54
第42図	A区-21号土壇	54
第43図	A区-20号土壇・A区-21号土壇 出土遺物①	55
第44図	A区-21号土壇出土遺物②	56
第45図	A区-22号土壇	56
第46図	A区-22号土壇出土遺物	56
第47図	A区-23号土壇	56
第48図	A区-23号土壇出土遺物	56
第49図	A区-24号土壇	57
第50図	A区-24号土壇出土遺物	57
第51図	A区-25号土壇	57
第52図	A区-25号土壇出土遺物	57
第53図	A区-26号土壇	57
第54図	A区-27号土壇	57
第55図	A区-27号土壇出土遺物	58
第56図	A区-28号土壇	59
第57図	A区-28号土壇出土遺物	60
第58図	A区-29号土壇	60

第59区	A区-29号上墳出土遺物	60
第60区	A区-30号上墳	61
第61区	A区-31号上墳	61
第62区	A区-31号上墳出土遺物	62
第63区	A区-32号上墳	62
第64区	A区-33号上墳	62
第65区	A区-33号上墳出土遺物	62
第66区	A区-34号上墳	63
第67区	A区-34号上墳出土遺物	63
第68区	A区-35号上墳	63
第69区	A区-35号上墳出土遺物	63
第70区	A区-36号上墳	63
第71区	A区-36号上墳出土遺物	64
第72区	A区-37号上墳	64
第73区	A区-37号上墳出土遺物	64
第74区	A区-38号上墳	64
第75区	A区-38号上墳出土遺物	64
第76区	A区-39号上墳	65
第77区	A区-39号上墳出土遺物	65
第78区	A区-40号上墳	65
第79区	A区-40号上墳出土遺物	65
第80区	A区-41号上墳	65
第81区	A区-41号上墳出土遺物	66
第82区	A区-42号上墳	66
第83区	A区-43号上墳①	66
第84区	A区-43号上墳②	67
第85区	A区-43号上墳出土遺物	67
第86区	A区-44号上墳	68
第87区	A区-44号上墳出土遺物	68
第88区	A区-45号上墳	68
第89区	A区-46号上墳	69
第90区	A区-46号上墳出土遺物	69
第91区	A区-47号上墳	70
第92区	A区-47号上墳出土遺物	70
第93区	A区-48号上墳	70
第94区	A区-48号上墳出土遺物	71
第95区	A区-49号上墳	71
第96区	A区-49号上墳出土遺物	72
第97区	A区-50号上墳	72
第98区	A区-50号上墳出土遺物	72
第99区	A区-51号上墳	73
第100区	A区-51号上墳出土遺物	73
第101区	A区-52号上墳	74
第102区	A区-52号上墳出土遺物	75
第103区	A区-53号上墳①	76
第104区	A区-53号上墳②	77
第105区	A区-53号上墳出土遺物①	78
第106区	A区-53号上墳出土遺物②	79
第107区	A区-54号上墳	80
第108区	A区-55号上墳	81
第109区	A区-55号上墳出土遺物①	82
第110区	A区-55号上墳出土遺物②	83
第111区	A区-56号上墳	83
第112区	A区-56号上墳出土遺物	83
第113区	A区-57号上墳	84
第114区	A区-58号上墳	84
第115区	A区-58号上墳出土遺物	84
第116区	A区-59号上墳	84
第117区	A区-60号上墳	85
第118区	A区-60号上墳出土遺物	85
第119区	A区-61号上墳	86
第120区	A区-62号上墳	86

第121区	A区-62号上墳出土遺物	87
第122区	A区-63号上墳	87
第123区	A区-64号上墳①	88
第124区	A区-64号上墳②	90
第125区	A区-64号上墳出土遺物①	91
第126区	A区-64号上墳出土遺物②	92
第127区	A区-64号上墳出土遺物③	93
第128区	A区-65号上墳	94
第129区	A区-65号上墳出土遺物	94
第130区	A区-66号上墳	94
第131区	A区-67号上墳	94
第132区	A区-67号上墳出土遺物	94
第133区	A区-68号上墳	95
第134区	A区-68号上墳出土遺物	95
第135区	A区-69号上墳	96
第136区	A区-69号上墳出土遺物	96
第137区	A区-70号上墳	96
第138区	A区-70号上墳出土遺物	97
第139区	A区-71号上墳	97
第140区	A区-71号上墳出土遺物	97
第141区	A区-72号上墳	97
第142区	A区-72号上墳出土遺物	97
第143区	A区-73号上墳	97
第144区	A区-74号上墳	98
第145区	A区-74号上墳出土遺物	98
第146区	A区-75号上墳	98
第147区	A区-75号上墳出土遺物	99
第148区	A区-76号上墳	100
第149区	A区-76号上墳出土遺物	100
第150区	A区-77号上墳	101
第151区	A区-77号上墳出土遺物	101
第152区	A区-78号上墳	102
第153区	A区-78号上墳出土遺物	102
第154区	A区-79号上墳	103
第155区	A区-80号上墳	103
第156区	A区-80号上墳出土遺物	103
第157区	A区-82号上墳	104
第158区	A区-82号上墳出土遺物	104
第159区	A区-120号上墳	105
第160区	A区-121号上墳	105
第161区	A区-137号上墳	105
第162区	A区-137号上墳出土遺物	105
第163区	A区-U18調査区ビット1出土遺物	105
第164区	小迫原遺跡A区遺構配置図③	106
第165区	A区-81号上墳	107
第166区	A区-81号上墳出土遺物	107
第167区	A区-83号上墳と周辺ビット群	108
第168区	A区-83号上墳周辺出土遺物	108
第169区	A区-84号上墳	109
第170区	A区-84号上墳出土遺物	110
第171区	A区-85号上墳	111
第172区	A区-85号上墳出土遺物	112
第173区	A区-86号上墳	113
第174区	A区-86号上墳出土遺物	113
第175区	A区-87号上墳	114
第176区	A区-88号上墳	114
第177区	A区-87・88号上墳出土遺物	114
第178区	小迫原遺跡A区遺構配置図④	115
第179区	A区-7号竪穴在り跡①	116
第180区	A区-7号竪穴在り跡②	117
第181区	A区-7号竪穴在り跡出土遺物	118
第182区	A区-8号竪穴在り跡①	119

第183図	A区-8号竪穴住居跡②	120
第184図	A区-8号竪穴住居跡出土遺物	120
第185図	A区-9号竪穴住居跡①	121
第186図	A区-9号竪穴住居跡②	121
第187図	A区-9号竪穴住居跡出土遺物	122
第188図	A区-10号竪穴住居跡と V19調査区ピット1	123
第189図	V19調査区ピット1出土遺物	123
第190図	A区-1号掘立柱建物跡	123
第191図	A区-2号掘立柱建物跡	124
第192図	A区-89号土壇	124
第193図	A区-90号土壇	125
第194図	A区-91号土壇	125
第195図	A区-91号土壇出土遺物	126
第196図	A区-92号土壇	126
第197図	A区-92号土壇出土遺物	126
第198図	A区奈良時代ピット出土遺物	126
第199図	小迫辻原遺跡A区道構配置図⑤	127
第200図	A区-3号掘立柱建物跡	128
第201図	A区-4号掘立柱建物跡	128
第202図	A区-5号掘立柱建物跡	129
第203図	A区-5号掘立柱建物跡出土遺物	129
第204図	A区-6号掘立柱建物跡	129
第205図	A区-7号掘立柱建物跡	130
第206図	A区-8号掘立柱建物跡	130
第207図	A区-8号掘立柱建物跡出土遺物	130
第208図	A区-9号掘立柱建物跡	131
第209図	A区-10号掘立柱建物跡	131
第210図	A区-10号掘立柱建物跡出土遺物	131
第211図	小迫辻原遺跡A区道構配置図⑥	132
第212図	A区-1号溝	133
第213図	A区-2号溝	133
第214図	A区-3・4・5号溝	134
第215図	A区-3号溝出土遺物	135
第216図	A区-6号溝	135
第217図	A区表面採集遺物	135

第5章	B区の記録	161
表紙	B区的位置	161
第1図	小迫辻原遺跡B区道構配置図①	163
第2図	小迫辻原遺跡B区道構配置図②	165
第3図	B区-1号竪穴住居跡	167
第4図	B区-2号竪穴住居跡	168
第5図	B区-2号竪穴住居跡出土遺物①	169
第6図	B区-2号竪穴住居跡出土遺物②	170
第7図	B区-3号竪穴住居跡	171
第8図	B区-3号竪穴住居跡出土遺物	171
第9図	B区-1号土壇	171
第10図	B区-1号土壇出土遺物	171
第11図	B区-2号土壇	171
第12図	B区-2号土壇出土遺物	172
第13図	H区-3号土壇	172
第14図	B区-3号土壇出土遺物	173
第15図	H区-4号土壇	174
第16図	B区-4号土壇出土遺物	174
第17図	B区-5号土壇	174
第18図	H区-5号土壇出土遺物	174
第19図	B区-6号土壇	174
第20図	B区-6号土壇出土遺物	175
第21図	H区-7号土壇	175
第22図	B区-7号土壇出土遺物	175
第23図	H区-8号土壇	175
第24図	B区-9号土壇	175
第25図	B区-9号土壇出土遺物	175
第26図	B区-10号土壇	176
第27図	H区-10号土壇出土遺物	176
第28図	B区-11号土壇	176
第29図	B区-11号土壇出土遺物	176
第30図	H区-12号土壇	177
第31図	B区-12号土壇出土遺物	177
第32図	B区-13号土壇	177
第33図	H区-13号土壇出土遺物	177
第34図	B区-14号土壇	178
第35図	B区-14号土壇出土遺物	178
第36図	B区-15号土壇	178
第37図	B区-15号土壇出土遺物	178
第38図	B区-16号土壇	178
第39図	B区-16号土壇出土遺物	179
第40図	H区-17号土壇	179
第41図	B区-17号土壇出土遺物	179
第42図	H区-18号土壇	179
第43図	B区-18号土壇出土遺物	179
第44図	B区-19号土壇	180
第45図	H区-19号土壇出土遺物	180
第46図	B区-20号土壇	180
第47図	H区-21号土壇	180
第48図	B区-21号土壇出土遺物	180
第49図	B区-22号土壇	180
第50図	B区-22号土壇出土遺物	180
第51図	B区-23号土壇	181
第52図	H区-23号土壇出土遺物	181
第53図	B区-24号土壇	182
第54図	B区-24号土壇出土遺物	182
第55図	B区-25号土壇	182
第56図	H区-25号土壇出土遺物	182
第57図	B区-26号土壇	182
第58図	H区-26号土壇出土遺物	182
第59図	B区-27号土壇	183
第60図	H区-27号土壇出土遺物	183

第61区	B区-28号土壌	184
第62区	B区-28号土壌出土遺物	184
第63区	B区-29号土壌	184
第64区	B区-29号土壌出土遺物	184
第65区	B区-30号土壌	185
第66区	B区-30号土壌出土遺物	185
第67区	B区-31号土壌	186
第68区	B区-31号土壌出土遺物	187
第69区	B区-32号土壌	187
第70区	B区-33号土壌	188
第71区	B区-33号土壌出土遺物	188
第72区	B区-34号土壌	189
第73区	B区-34号土壌出土遺物	189
第74区	B区-35号土壌	189
第75区	B区-35号土壌出土遺物	189
第76区	B区-36号土壌	190
第77区	B区-36号土壌出土遺物	190
第78区	B区-1号墓	191
第79区	B区-1号墓出土遺物	192
第80区	B区-ヒット川上遺物	192
第81区	小迫辻原遺跡B区遺構配器区③	193
第82区	B区-37号土壌	195
第83区	B区-37号土壌出土遺物	195
第84区	B区-38号土壌	195
第85区	B区-38号土壌出土遺物	195
第86区	B区-39号土壌	196
第87区	B区-39号土壌出土遺物	196
第88区	B区-40号土壌①	196
第89区	B区-40号土壌②	197
第90区	B区-40号土壌③	198
第91区	B区-40号土壌出土遺物	199
第92区	B区-41号土壌	200
第93区	B区-41号土壌出土遺物	201
第94区	B区-42号土壌	203
第95区	B区-42号土壌出土遺物①	204
第96区	B区-42号土壌出土遺物②	205
第97区	B区-42号土壌出土遺物③	206
第98区	B区-43号土壌	207
第99区	B区-43号土壌出土遺物①	208
第100区	B区-43号土壌出土遺物②	209
第101区	B区-44号土壌	210
第102区	B区-44号土壌	210
第103区	B区-45号土壌出土遺物	210
第104区	B区-46号土壌	210
第105区	B区-46号土壌出土遺物	210
第106区	B区-1号土器溜まり	211
第107区	B区-1号土器溜まり出土遺物	212
第108区	B区-2号墓	213
第109区	B区-2号墓出土遺物	213
第110区	B区-3号墓	213
第111区	B区-3号墓	214
第112区	B区-4号墓	214
第113区	B区-5号墓	215
第114区	B区-5号墓出土遺物①	216
第115区	B区-5号墓出土遺物②	217
第116区	B区-6号墓	218
第117区	B区-6号墓出土遺物	218
第118区	B区-7号墓	219
第119区	B区-7号墓出土遺物①	219
第120区	B区-7号墓出土遺物②	220
第121区	B区-ヒット川上遺物	220
第122区	小迫辻原遺跡B区遺構配器区④	221

第123区	B区-4号竪穴住居跡①	224
第124区	B区-4号竪穴住居跡②	225
第125区	B区-4号竪穴住居跡出土遺物①	226
第126区	B区-4号竪穴住居跡出土遺物②	227
第127区	B区-4号竪穴住居跡出土遺物③	228
第128区	B区-5号竪穴住居跡①	229
第129区	B区-5号竪穴住居跡②	230
第130区	B区-5号竪穴住居跡③	231
第131区	B区-5号竪穴住居跡出土遺物①	233
第132区	B区-5号竪穴住居跡出土遺物②	234
第133区	B区-5号竪穴住居跡出土遺物③	235
第134区	B区-5号竪穴住居跡出土遺物④	236
第135区	B区-5号竪穴住居跡出土遺物⑤	237
第136区	B区-5号竪穴住居跡出土遺物⑥	238
第137区	B区-6号竪穴住居跡①	239
第138区	B区-6号竪穴住居跡②	240
第139区	B区-6号竪穴住居跡③	241
第140区	B区-6号竪穴住居跡④	241
第141区	B区-6号竪穴住居跡出土遺物①	242
第142区	B区-6号竪穴住居跡出土遺物②	242
第143区	B区-7号竪穴住居跡	243
第144区	B区-8号竪穴住居跡①	243
第145区	B区-8号竪穴住居跡②	244
第146区	B区-8号竪穴住居跡出土遺物①	245
第147区	B区-8号竪穴住居跡出土遺物②	246
第148区	B区-9号竪穴住居跡	247
第149区	B区-9号竪穴住居跡の変遷	247
第150区	B区-9号竪穴住居跡出土遺物	247
第151区	B区-10号竪穴住居跡①	248
第152区	B区-10号竪穴住居跡②	249
第153区	B区-10号竪穴住居跡出土遺物①	250
第154区	B区-10号竪穴住居跡出土遺物②	251
第155区	B区-10号竪穴住居跡出土遺物③	252
第156区	B区-10号竪穴住居跡出土遺物④	253
第157区	B区-11号竪穴住居跡	254
第158区	B区-11号竪穴住居跡出土遺物	254
第159区	B区-12号竪穴住居跡	255
第160区	B区-12号竪穴住居跡出土遺物	255
第161区	B区-47号土壌	256
第162区	B区-47号土壌出土遺物	256
第163区	B区-8号墓	256
第164区	B区-8号墓出土遺物	257
第165区	B区-10調査区ヒット4出土遺物	258
第166区	B区-13号竪穴住居跡	258
第167区	小迫辻原遺跡B区遺構配器区⑤	259
第168区	B区-13号竪穴住居跡のカマド	261
第169区	B区-13号竪穴住居跡出土遺物	261
第170区	B区-F2調査区ヒット2出土遺物	261
第171区	B区-1号掘立柱建物跡	262
第172区	B区-2号掘立柱建物跡	262
第173区	B区-2号掘立柱建物跡出土遺物	262
第174区	B区-3号掘立柱建物跡	263
第175区	B区-4号掘立柱建物跡	263
第176区	B区-5号掘立柱建物跡	263
第177区	B区-6号掘立柱建物跡	264
第178区	B区-7号掘立柱建物跡	265
第179区	B区-7号掘立柱建物跡出土遺物	265
第180区	B区-8号掘立柱建物跡	265
第181区	B区-9号掘立柱建物跡	266
第182区	B区-9号掘立柱建物跡出土遺物	266
第183区	B区-10号掘立柱建物跡	267
第184区	B区-11号掘立柱建物跡	267

第185図	B区-11号掘立柱建物跡出土遺物	267
第186図	B区-48号土壇	268
第187図	B区-49号土壇	268
第188図	B区-49号土壇出土遺物	268
第189図	B区-50号土壇	268
第190図	B区-51号土壇	268
第191図	B区-52号土壇	268
第192図	B区-53号土壇	269
第193図	B区-53号土壇川上遺物	269
第194図	B区-54号土壇	269
第195図	B区-54号土壇川上遺物	269
第196図	B区-55号土壇	269
第197図	B区-9号竈	270
第198図	B区-9号竈出土遺物	270
第199図	B区-1号溝	271
第200図	B区-1号溝出土遺物	271
第201図	B区-2号溝	272
第202図	B区-2号溝川上遺物	273
第203図	B区-3号溝	273
第204図	B区中世ビット川上遺物	273
第205図	B区-12号掘立柱建物	274
第206図	B区-56号土壇	274
第207図	B区-57号土壇	274
第208図	小迫止原遺跡B区遺構配置図⑥	275
第209図	B区-4・5・6・7・8号溝	277
第210図	B区表面採集遺物①	280
第211図	B区表面採集遺物②	281

第6章	C区の記録	
表紙	C区の位置	309
第1図	小迫止原遺跡C区遺構配置図①	311
第2図	小迫止原遺跡C区遺構配置図②	313
第3図	1・2号方形形環溝遺構配置図	316
第4図	1号方形形環溝①	317
第5図	1号方形形環溝②	319
第6図	1号方形形環溝③	322
第7図	1号方形形環溝④	324
第8図	1号方形形環溝⑤	325
第9図	1号方形形環溝⑥	326
第10図	1号方形形環溝⑦	327
第11図	1号方形形環溝⑧	328
第12図	1号方形形環溝⑨	328
第13図	1号方形形環溝C区-1号溝 出土遺物①	330
第14図	1号方形形環溝C区-1号溝 川上遺物②	331
第15図	1号方形形環溝C区-1号溝 出土遺物③	332
第16図	1号方形形環溝⑩	333
第17図	2号方形形環溝②	334
第18図	2号方形形環溝①	335
第19図	2号方形形環溝③	337
第20図	2号方形形環溝C区-3号溝出土遺物	337
第21図	2号方形形環溝④	338
第22図	2号方形形環溝⑤	338
第23図	2号方形形環溝⑥	339
第24図	2号方形形環溝⑦	340
第25図	2号方形形環溝C区-2号溝出土遺物	342
第26図	1号条溝(C区-4号溝)①	345
第27図	1号条溝(C区-4号溝)②	345
第28図	1号条溝(C区-4号溝)③	347
第29図	1号条溝(C区-4号溝)④	349
第30図	1号条溝(C区-4号溝)⑤	351
第31図	C区-4号溝(条溝)出土遺物①	354
第32図	C区-4号溝(条溝)出土遺物②	355
第33図	C区-4号溝(条溝)出土遺物③	357
第34図	C区-4号溝(条溝)出土遺物④	359
第35図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑤	361
第36図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑥	363
第37図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑦	365
第38図	C区-4号溝(条溝)川上遺物⑧	366
第39図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑨	369
第40図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑩	370
第41図	C区-4号溝(条溝)川上遺物⑪	371
第42図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑫	373
第43図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑬	375
第44図	C区-4号溝(条溝)出土遺物⑭	376
第45図	1号条溝(C-4溝)内土壇A	376
第46図	C区-4号溝内土壇A川上遺物	376
第47図	1号条溝(C-4溝)内土壇B・C	377
第48図	C区-1号竈穴住居跡①	378
第49図	C区-1号竈穴住居跡②	379
第50図	C区-1号竈穴住居跡川上遺物	380
第51図	C区-2号竈穴住居跡①	380
第52図	C区-2号竈穴住居跡②	381
第53図	C区-2号竈穴住居跡出土遺物	382
第54図	C区-3号竈穴住居跡①	383
第55図	C区-3号竈穴住居跡②	384
第56図	C区-3号竈穴住居跡出土遺物	384
第57図	C区-4号竈穴住居跡①	385

第581図	C区-4号竪穴住居跡②	386
第591図	C区-4号竪穴住居跡出土遺物	387
第601図	C区-5号竪穴住居跡	387
第611図	C区-6号竪穴住居跡	388
第621図	C区-6号竪穴住居跡出土遺物	388
第631図	C区-7号竪穴住居跡①	389
第641図	C区-7号竪穴住居跡③	391
第651図	C区-7号竪穴住居跡出土遺物①	394
第661図	C区-7号竪穴住居跡出土遺物②	395
第671図	C区-8号竪穴住居跡①	397
第681図	C区-8号竪穴住居跡②	398
第691図	C区-8号竪穴住居跡③	399
第701図	C区-8号竪穴住居跡出土遺物①	400
第711図	C区-8号竪穴住居跡④	401
第721図	C区-8号竪穴住居跡出土遺物②	403
第731図	C区-9号竪穴住居跡	404
第741図	C区-9号竪穴住居跡出土遺物	404
第751図	C区-10号竪穴住居跡	405
第761図	C区-10号竪穴住居跡出土遺物	405
第771図	C区-3号掘立柱建物跡	406
第781図	C区-4号掘立柱建物跡	406
第791図	C区-1号土壇	407
第801図	C区-1号土壇出土遺物	407
第811図	C区-2号土壇	407
第821図	C区-2号土壇出土遺物	407
第831図	C区-11号竪穴住居跡	408
第841図	C区-12号竪穴住居跡	408
第851図	小迫辻原遺跡C区遺構配置図③	409
第861図	C区-13号竪穴住居跡①	411
第871図	C区-13号竪穴住居跡②	412
第881図	C区-13号竪穴住居跡出土遺物	413
第891図	C区-14号竪穴住居跡	413
第901図	C区-14号竪穴住居跡出土遺物	413
第911図	C区-3号土壇	414
第921図	C区-3号土壇出土遺物	414
第931図	C区-4号土壇	414
第941図	C区-4号土壇出土遺物	414
第951図	C区-B3調査区ビット12出土遺物	414
第961図	C区-5号掘立柱建物跡	415
第971図	C区-6号掘立柱建物跡	415
第981図	C区-7号掘立柱建物跡	416
第991図	C区-8号掘立柱建物跡	416
第1001図	C区-1号竪	417
第1011図	C区-5号溝出土遺物	417
第1021図	C区-5・6号溝	418
第1031図	C区-9号掘立柱建物跡	419
第1041図	C区-5号土壇	419
第1051図	C区-6号土壇	420
第1061図	C区-7号土壇	420
第1071図	C区-8号土壇	420
第1081図	C区-9号土壇	420
第1091図	C区-10号土壇	420
第1101図	C区-7・8号溝	421
第1111図	C区-7号溝出土遺物	421
第1121図	C区-8号溝出土遺物	422
第1131図	C区-9号溝出土遺物	422
第1141図	C区-10号溝出土遺物	422
第1151図	C区-12号溝出土遺物	422
第1161図	C区-9・10・11・12号溝	423
第1171図	C区 表面採集遺物	425
第1181図	C区遺構検出時出土遺物	425
第1191図	C区拡張区B試掘区出土遺物	425

第7章 D区の記録

表紙	D区的位置	447
第1図	小迫辻原遺跡D区遺構配置図①	449
第2図	小迫辻原遺跡D区遺構配置図②	451
第3図	D区-1号土壇	452
第4図	D区-1号土壇出土遺物	452
第5図	D区-M8調査区、D区-1号土壇 周辺ビット群	452
第6図	D区-1号竪穴住居跡①	453
第7図	D区-1号竪穴住居跡②	453
第8図	D区-1号竪穴住居跡③	454
第9図	D区-1号竪穴住居跡出土遺物	455
第10図	D区-2号土壇	456
第11図	D区-3号土壇	456
第12図	D区-1号溝出土遺物	456
第131図	D区-1号溝	457
第141図	D区-2・3・4・5号溝	459

表 目 次

第1章 調査の経過

第1表 小迫辻原遺跡の発掘調査等の経過表	6
----------------------	---

第4章 A区の記録

第1表 小迫辻原遺跡A区竪穴住居跡一覧表	136
第2表 小迫辻原遺跡A区掘立柱建物跡一覧表	136
第3表 小迫辻原遺跡A区土壇一覧表	137
第4表 小迫辻原遺跡A区溝一覧表	140
第5表 小迫辻原遺跡A区出土土器観察表	141
第6表 小迫辻原遺跡A区出土土器観察表	160

第5章 B区の記録

第1表 小迫辻原遺跡B区竪穴住居跡一覧表	282
第2表 小迫辻原遺跡B区掘立柱建物跡一覧表	283
第3表 小迫辻原遺跡B区土壇一覧表	284
第4表 小迫辻原遺跡B区墓一覧表	286
第5表 小迫辻原遺跡B区溝一覧表	286
第6表 小迫辻原遺跡B区出土土器観察表	287
第7表 小迫辻原遺跡B区出土土器観察表	306
第8表 小迫辻原遺跡B区出土土器観察表	307
第9表 小迫辻原遺跡B区出土土器観察表	308

第6章 C区の記録

第1表 小迫辻原遺跡C区竪穴住居跡一覧表	426
第2表 小迫辻原遺跡C区掘立柱建物跡一覧表	427
第3表 小迫辻原遺跡C区土壇一覧表	427
第4表 小迫辻原遺跡C区墓一覧表	428
第5表 小迫辻原遺跡C区溝一覧表	428
第6表 小迫辻原遺跡C区出土土器観察表	429
第7表 小迫辻原遺跡C区出土土器観察表	444
第8表 小迫辻原遺跡C区出土土器観察表	444
第9表 小迫辻原遺跡C区出土土器観察表	445

第7章 D区の記録

第1表 小迫辻原遺跡D区竪穴住居跡一覧表	461
第2表 小迫辻原遺跡D区土壇一覧表	461
第3表 小迫辻原遺跡D区溝一覧表	461
第4表 小迫辻原遺跡D区出土土器観察表	462
第5表 小迫辻原遺跡D区出土土器観察表	463

挿入写真目次

A区表紙 作業風景	29
写真1. A区南半遺構横切面状態(北東から)	32
写真2. A区北半遺構横切面状態(東から)	32
写真3. A区-10号土壇遺物出土状態(西から)	43
写真4. A区-11号土壇の側面の穴(西から)	44
写真5. A区-19号土壇遺物出土状態(西から)	52
写真6. A区-20号土壇遺物出土状態(北西から)	54
写真7. A区-29号土壇の断面土層(東から)	60
写真8. A区-31号土壇遺物出土状態(南東から)	62
写真9. A区-43号土壇完掘状態	66
写真10. A区-49号土壇No.1臺出土状態(西から)	71
写真11. A区-51号土壇遺物出土状態(西から)	73
写真12. A区-62号土壇発出状態(北西から)	87
写真13. A区-63号土壇遺物出土状態(西から)	87
写真14. A区-64号土壇中央部縦断面の上層	89
写真15. A区-64号土壇横断面の上層(B断面)	89
写真16. A区-64号土壇底部J層出土状態	89
写真17. A区-86号土壇とA区-9号竪穴住居跡の遺物出土状態(東から)	112

B区表紙 調査風景(1987年)	161
------------------	-----

C区表紙 2号方形環溝付近調査風景(1987年)	309
写真1. 1号方形環溝拡径区A(東北から)	321
写真2. 1号方形環溝C-1溝C-E地点の縦断面(南西から)	322
写真3. 1号方形環溝C-1溝 F地点縦断面(西から)	327
写真4. 1号条溝29群最下部の土器出土状態(左No.196・右No.197)	353
写真5. C区-1号竪穴住居跡入口施設の断面土層(東から)	379
写真6. C区-2号竪穴住居跡ベット状遺構の断面土層(南から)	381
写真7. C区-7号竪穴住居跡東北部遺物出土状態(北東から)	390
写真8. C区-8号竪穴住居跡ベット3. 板材とりあげ風景	399
写真9. 拡径区B川口遺物	425
D区表紙 実測風景(1987年)	447

カラー図版目次

A区全景	30
B区中世遺跡全景	162
C区上. 1号条溝遠景	310

C区下. C区-8号竪穴住居跡	310
D区上. D区-1号竪穴住居跡	448
D区下. D区-1号溝	448

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1) 九州横断自動車道(第2図)

大分と長崎を結ぶ九州横断高速道大分道路の建設に伴う日田地方の埋蔵文化財発掘調査が開始されたのは、昭和58年度からである。この高速道路の日田地方での路線は、盆地の北側の台地群を東西に縦断する形となり、これによって多くの遺跡の事前調査を実施することとなった。その中には、弥生時代後期から古墳時代中期に至る一大埋葬遺跡で、方形周溝墓、石棺墓、甕棺墓、土墳墓などを多数検出した草場第2遺跡をはじめ、弥生中期の集落跡の佐寺原遺跡、古墳時代前期の夕田古墳、同後期の有田塚・原古墳群、小迫横穴墓群さらに中世の尾滑遺跡群など、重要な遺跡が含まれており、日田地方の先史時代から中世に至る歴史の解明に大きく寄与するものとなった。

小迫止原遺跡は、これらの遺跡群の中でも最も注目される遺跡であり、昭和58年度、59年度に試掘調査を行い、昭和60年度から本調査を実施してきた。この遺跡が立地する台地は、標高124mの東西700m、南北400mの独立性の略三角形をなす。麓の水田部との比高差は35~40m、その面積は約18万㎡に及ぶほぼ台地の全域が遺跡と考えられているものである。そして自動車道は、この台地の南辺近くを東西方向に幅20~40mの幅に横断するものであった。

小迫止原台地の道路計画部分の調査区の設定については、試掘調査の資料を基に、遺構密度の高い地区から順次調査をすすめ、調査の進展に従ってA~F地区とした(報告書ではA~D区に改めた)。昭和60年度は台地の路線部のほぼ中心にあたり、61年度も継続して行った。その結果、弥生時代後期末から古墳時代前期初めの集落を構成する方形竪穴住居跡とB地区(新C区)において集落を画すと見られる南北方向の大規模な溝を検出した。また奈良時代の方形竪穴住居跡、さらに中世掘立柱建物跡も数棟確認した。台地の西端部のC地区(新A区)については61年度に実施し、Eとして弥生時代前~中期の住居跡、堅穴遺構、貯蔵穴等が検出された。このほか、弥生時代後期末から古墳時代前期初めの方形竪穴住居跡、中世の掘立柱建物群が確認されている。

昭和62年度は、A・B地区とC地区の中間のD地区(新B区)及びA・B地区東側一帯のE・F地区(新C・D区)の調査を実施し、E・F地区において、古墳時代前期初頭の方形の「豪族居館」跡2基を検出した。2基の「豪族居館」跡は、溝部を検出した当初は中世城館の遺構との思い込みがあったが、崖内の調査がすすむうち、遺物が古墳時代初頭の布留式古段階の土師器しかみられないところから、昭和63年1月末の段階で同期の居館遺構と判断されるに至った。この遺構は、当時の新聞記事に「小迫止原遺跡で日本最古の豪族居館発見」とあるように、我が国最古の古墳時代初頭の居館跡と確認され、その重要性がようやく認識されたのである。

調査主体者である大分県教育委員会は、ただちにこの2基の居館遺構の重要性に鑑み、事業主体者である日本道路公団をはじめ関係機関とその取扱いについて協議に当たった。高速道予定地にかかる遺跡の保存については、その道路の性格から線形の変更はほとんど不可能とされているものであるが、遺跡は国指定に相当する重要なも



第1図 日田盆地の位置

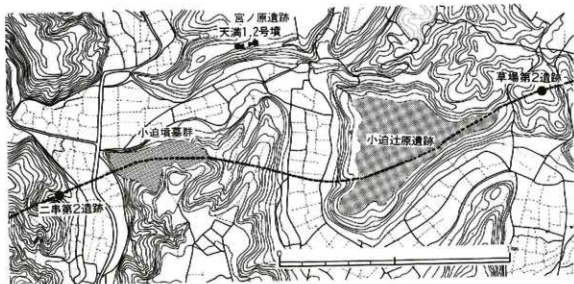
のであるところから、その保存についてその後2ヶ月にわたり白熱した協議がすすめられた。

その結果、(1)自動車道本線工事の工法変更により、2号居館を完全保存し、1号居館の一部を記録保存とする。(2)事後の方針として、1・2号居館遺構の全容を確認し、県指定史跡として保存する。(3)さらに、その周辺に展開する私有地での全面的な確認調査を実施し、その成果をふまえて遺跡全体の保存策を検討する、という方向が関係機関の間で確認された。

その後、H田市教育委員会が調査主体となって、すでに一部62年度から実施していた小迫辻原台地の14haに及ぶ畑地帯の試掘調査を国費と県費の補助を得て平成5年度まで、ほぼ台地全域を網羅する形で実施した。これは、開発に先行する遺構の確認調査としては大規模の調査となり、その結果、台地の西側部分に弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての環濠3基に加えて小型の居館遺構1基、さらに古代・中世居館遺構等の重要な遺構がこの台地にのこされていることが明らかになった。

高速道にかかる2基の居館遺構については早速、県史跡指定の手続きをとり、翌平成元年3月30日に指定をうけ、地元H田市が公有化することとなった。高速道路内の調査という遺跡の現地保存にとって最も難しい条件の中でこれだけの成果を得たことは、関係機関の遺跡に対する深い認識と理解があったものと評価されるものである。

ともあれ、小迫辻原遺跡は、弥生時代後期末の環濠集落と、その中から地域の支配者にあたる可祭者層の施設(方形両館)が創出されるという過程を表出するものとして、我が国の国家形成期の地方首長の姿を示してくれる貴重な遺跡である。これによって文化庁は遺跡の大部分について平成6年11月18日に国指定の答申を行い、平成8年10月31日に正式に国史跡として官報に告示された。



第2図 自動車道の路線と遺跡の位置

2) 地力増進事業 (第3回)

九州横断高速道大分道路建設に先立つ小迫辻原遺跡での発掘調査が進展し、古墳時代前期の豪族居館跡2基の発見を契機にこの遺跡が注目され始めた頃、辻原台地の畑地では白菜やスイカなどの作物の生産を高めるために機械(バックホウ)を使って畑の土を掘り起こす地力増進事業(大地返し)が実施計画された。この農業開発に対して市教委では、発掘された豪族居館跡を巡って遺跡の保存問題も検討されているさなかでもあることから、市農政課と再三にわたって遺跡の保存を前提とした協議を行ってきた。しかし、機械を使う単純な開発工事に対応できる工法変更等は見当たらず、最終的には工事予定地を対象に緊急の調査を実施する方針となり、昭和62年度から県教委の協力を得ながら調査を開始した。

こうした経過を経た翌年には本格的な発掘調査を始めたが、台地西端(N区)では豪族居館跡とは別のほぼ同時期とみられる環濠(2号)の一部が検出され、さらには平成元年度の豪族居館跡(大分県指定史跡)用地購入に伴う台地中央の調査(K-1区)では整然と区画された古代の建物群や「大須 銘の黒書土器などが調査された。これら相次ぐ発見はこの遺跡の価値をより一層高めることとなり、また豪族居館跡の保存経過もあって小迫辻原遺跡発掘調査指導委員会からは早急な遺跡の確認の必要性が指摘された。

このことを踏まえて市教委では平成2年度から豪族居館跡の内容把握や環濠(2号)の追跡確認、古代建物群の広がりを確認するなどの遺跡全容解明を目的とした小迫辻原遺跡確認調査事業費を予算化し、緊急調査と並行して調査を行うこととなった。2ヶ年間の同時調査の結果、①豪族居館跡(1・2号方形環濠)は方形に巡る溝内部に掘立柱建物跡を有する施設であること、②豪族居館跡西側の溝(1号条溝)は台地を分断する可能性が高いこと、③台地西側には時期が異なる3つの環濠(1~3号)が存在すること、④古代の建物群は「コ」の字型に配置されると推定されること、⑤中世には溝で区画された複数の環溝屋敷が存在することなどが判明した。こうした成果は遺跡の重要性をさらに高める結果となり、次節でもふれるが本格的な遺跡保存への協議へと進むこととなった。その後の調査は各時期の主要な遺構の確認に主眼を置いて進め、3号方形環濠1基などが追加確認され、平成5年度をもって県教委の調査から数えて9年間におよぶ発掘調査は終了した。

以下、市教委による各年度ごとの調査場所と調査成果を簡単にまとめるが、調査地点については昭和63年度に調査の増加による混乱を避けるために県・市教委担当者間において便宜的な呼び名に統一した経緯から、市教委調査実施区分については大半は当時の呼び名のままとしている。

(昭和62年度) L-1区の試掘調査(市国庫)を実施した。(註1)

1・2号方形環濠とほぼ同時期の竪穴住居跡を確認。

(昭和63年度) N区の発掘調査(市国庫)とO-1区の試掘調査(県国庫)を実施した。(註2・3)

この区では全長約48mの屈曲部を有する環濠(2号)の一部を検出したほか、環濠(2号)と前後する竪穴住居や中世墓などが発見された。

(平成元年度) O-1区の発掘調査(市国庫)とK-1区の発掘調査(市公社)、K-2区の試掘調査(県国庫)を実施した。(註4~6)

O-1区では環濠(2号)の追跡を行ったところ、さらに屈曲部1ヶ所が確認された。このほか、弥生時代の竪穴住居跡や小児用土器墓、古代の竪穴住居跡、中世の環溝屋敷や墓といった多くの遺構が重複して発見された。

K-1区では古代建物6基を中心に竪穴住居跡、溝などを発掘した。これらの遺構からは「大須?」と読める黒書土器数点や土壁、鉄製紡錘車などが出土した。このほかにも、中世の掘立柱建物跡や墓などの遺構を検出した。

(平成2年度) II-1区・K-3区の発掘調査(市国庫)とG-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区(市庫)の確認調査を実施した。(註7)

H-1区とG-1区では新たに重複する2つの環濠(1・3号)の一部が検出された。1号環濠には屈曲部1ヶ所が確認され、3号環濠はほぼ方形に巡ると予想された。

K-3区では1・2号環濠の屈曲部と3号環濠の一部を検出した。このほか、弥生時代の竪穴住居跡や中世の溝、掘立柱建物跡を確認した。

P区では1・2号方形環濠の北側を調査し、1号は溝の内側に小溝が巡ること、2号は溝の北側に陸橋部が存在しその内部に掘立柱建物跡2棟が存在することが判明した。このほか前後する竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡、溝などの遺構を検出した。

J-1区では新たに中世の環溝屋敷1つが発見された。

(平成3年度) H-2区・O-2区の発掘調査(市国庫)とG-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区(市単)の確認調査を実施した。(註8)

H-2区では弥生時代の土壇や円形溝遺構、方形環濠と前後する竪穴住居跡を検出した。

O-2区では新たに方形環濠(3号)が検出した。このほか、前後する竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡などの遺構を検出した。

(平成4年度) Q区の発掘調査(市国庫)とR-2区・I区・J-2区の試掘調査(市国庫)を実施した。(註9)

Q区では弥生時代の竪穴住居跡や土壇、中世の掘立柱建物跡などを検出した。

R-2区では弥生時代の竪穴住居跡や土壇、古代の墓、中世の掘立柱建物跡などを検出した。

I区では1号条溝の追跡を行い、その確認ができたことから、1号条溝は台地を分断する溝であることが想定できた。

J-2区では2・3号環濠の追跡を行い、それぞれの一部が確認され、2号環濠の内側に小溝が巡ることが判明した。

(平成5年度) G-5区の発掘調査(市国庫)とG-1~4区・H-3・4区・M区・J-3~5区の試掘調査(市国庫)を実施した。(註10)

G-1~5区では1・3号環濠の追跡を行い、3号環濠が台地上で巡ることが確認された。また、1号環濠内で同時期と考えられる竪穴住居跡を検出した。

H-3区では3号環濠の一部を検出した。

J-3~5区では2号環濠の追跡を行い、溝が3号環濠同様に台地上で巡ることが確認された。

平成6~8年度は遺物の整理作業(市国庫・市)を行い、平成9年度には発掘調査報告書(写真図版編)を発行した。

なお、括弧内に記載した事業主体および事業費内訳は、(市国庫)は市教委実施の国庫補助事業、(市単)は市教委が実施した市単独費小迫辻原遺跡確認調査事業、(市公社)は市教委実施の県史跡公有化に伴う発掘調査である。

註1) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』「小迫辻原遺跡」1988年 日田市教育委員会

註2) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』「小迫辻原遺跡」1989年 日田市教育委員会

註3) 『大分県内遺跡群分布調査概報7』「小迫辻原遺跡」1989年 大分県教育委員会

註4) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅴ』「小迫辻原遺跡」1990年 日田市教育委員会

註5) 『小迫辻原遺跡発掘調査概報』1990年 日田市教育委員会

註6) 『大分県内遺跡群分布調査概報8』「小迫辻原遺跡」1990年 大分県教育委員会

註7) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅵ』「小迫辻原遺跡」1991年 日田市教育委員会

註8) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ』「小迫辻原遺跡」1992年 日田市教育委員会

註9) 『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ』「小迫辻原遺跡」1993年 日田市教育委員会

註10) 『平成5年度埋蔵文化財年報』「小迫辻原遺跡」1995年 日田市教育委員会

第1表 小迫辻原遺跡の発掘調査等の経過表

1883(昭和58)年度	県教委が試掘調査を実施する。
1984(昭和59)年度	県教委が試掘調査を実施する。
1985(昭和60)年度	県教委が本格的な発掘調査を開始し(1年次)、1号条溝を確認する。
1986(昭和61)年度	県教委が発掘調査を実施する。(2年次)
1987(昭和62)年度	県教委が発掘調査を実施し(3年次)、豪族居館(方形環溝)2基が発見される。 県教委が発掘調査現地説明会を開催し、約500名の参加がある。(昭和63年1月23日) 豪族居館跡2基が工法変更による保存が決定する。 市教委が試掘調査を実施する。 遺跡名を「小迫原遺跡」から「小迫辻原遺跡」へと変更する。
1988(昭和63)年度	市教委が本格的な発掘調査を開始し(1年次)、2号環濠が発見される。 豪族居館跡2基を含む6,522㎡が大分県指定史跡となる。(平成元年3月30日)
1989(平成元)年度	市教委が発掘調査を実施し(2年次)、古代の建物群や「大須」銘の筆書上器が発見される。 市教委が発掘調査報告会を開催し、約80名の参加がある。(平成元年6月18日) 日田市が大分県指定史跡用地(6,129㎡)を購入する。
1990(平成2)年度	市教委が発掘調査を実施し(3年次)、新たに1・3号環濠や中世環溝段が発見され、1・2号豪族居館(方形環溝)の全容を確認する。 市教委が発掘調査現地説明会を開催し、約300名の参加がある。(平成3年2月10日) 日田市が大分県指定史跡用地(393㎡)を購入する。
1991(平成3)年度	市教委が発掘調査を実施し(4年次)、新たに3号方形環溝が発見される。
1992(平成4)年度	市教委が発掘調査を実施し(5年次)、1号条溝が台地を分断する溝であることを確認する。
1993(平成5)年度	市教委が発掘調査を実施し(6年次)、2・3号環濠が台地上を巡ることを確認する。 発掘調査速報展を開催する。(平成5年9月1日～9月31日) 古代史シンポジウムを開催する。(平成5年10月3日) 「小迫辻原遺跡」概要パンフレットを発行する。(平成5年1月30日)
1994(平成6)年度	小迫辻原遺跡の国指定申請書を提出する。(平成6年9月21日) 小迫辻原遺跡が国指定史跡の答中を受ける。(平成6年11月18日)
1995(平成7)年度	小迫辻原遺跡保存整備基本構想策定委員会を発足させる。
1996(平成8)年度	小迫辻原遺跡81, 926.36㎡が国史跡として官報告示された。(平成8年10月31日) まちづくりフォーラム 98を開催する。(平成8年11月9・10日)
1997(平成9)年度	発掘調査報告書(写真図版編)を発行する。(平成10年3月31日)

3) 保存までの経過

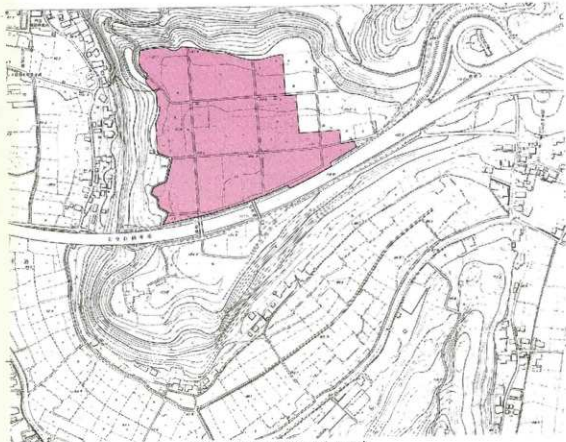
昭和63年1月23日、豪族居館跡の発見が公表され関係機関での幾度にもおよび協議の末、道路側面を約95mにわたって重直のコンクリート擁壁とする工法変更によってその一部は保存されることとなった。この決定により、日田市はすでにトレンチ調査で確認されていた豪族居館跡全ての範囲を保護すべく、道路北側民有地および豪族居館跡保存地区6,522㎡について大分県指定史跡の申請を行い、平成元年3月30日には史跡指定を受け、平成元・2年度にはその公有化を行った。

こうした豪族居館の保存が進むなか、市教委の周辺調査では弥生時代から古墳時代の3つの環濠や古代の建物群、中世の環溝屋敷などの遺構が次々と発掘され、遺跡の重要性が再認識されると同時に、豪族居館のマスコミ発表後の小迫辻原遺跡に対する市民の関心も高まり、さらに周辺調査での成果は遺跡の保存活用について県・市議会でも取りざたされるようになってきた。

このような動きに対し日田市は遺跡の保存と活用を目指す方針を固め、『第3次日田市総合計画』のなかでは小迫辻原遺跡歴史公園化をかがげ、平成4年度から国史跡指定に向けて本格的な保存への取り組みを行うこととなり、それまでの発掘調査成果をもとに文化庁に陳情などを行った。

平成5年8月6日開催の小迫辻原遺跡発掘調査指導委員会には、遺跡の保存すべき範囲について①方形環濠や環濠群を取り入れた範囲とし、②少なくとも発掘調査を実施した区域は取り込み、③将来史跡整備を行い十分な活用が可能な範囲を前提にした市教委事務局案を提示して意見を求めた。指導委員会からは小迫辻原遺跡を代表する豪族居館跡については将来の整備活用の中心となりえることからその周辺は広く保存する必要性があり、また関連する1号条溝についてはすべてを保存すべきとの意見を受け、一部修正を行った後県教委や文化庁との協議を重ね、最終的には第4図に示した里道を含む64第81,926.36㎡の範囲を保存すべき区域とした。

こうして遺跡の保存すべき範囲が決定し、区域内の土地権者の同意を得て、平成6年9月21日には国史跡指定申請書を提出し、文化財保護審議会は平成6年11月18日文部大臣に答申を行い、平成8年10月31日付け文部省告示第186号により遺跡の大半は保存されることとなった。



第4図 国指定史跡範囲 (1/5000)

なお、国史跡の範囲は次のとおりである。

日田市大字小迫宇経塚1175番の2、1176番の1、1176番の3、1176番の4、1177番のうち実測834㎡

日田市大字小迫宇辻原1189番の1、1190番、1191番、1193番の1、1193番の2、1194番、1196番、1197番、1198番の1、1198番の6、1198番の7、1199番の2、1199番の4、1204番の4、1214番の2、1214番の4、1215番の2、1215番の4、1216番、1217番、1218番、1219番、1220番の1、1220番の2、1221番の1、1221番の2、1222番の1、1222番の3、1223番の1、1223番の3、1224番、1225番、1226番、1227番、1228番、1229番、1230番、1231番、1232番、1233番、1234番、1235番、1236番、1237番の1、1237番の2、1238番の1、1238番の2、1239番、1240番の1、1240番の2、1241番、1242番の1、1242番の2

日田市大字小迫宇辻原1362番の1、1363番の1、1363番の2、1364番の1、1364番の2、1371番の1

上記の地域に介在する道路敷。

4) 調査組織

県教育委員会が発掘調査を実施した際の関係者は下記のとおりである。なお整理に関わる関係者は第3章で記す。

1983 (昭和58) 年度 試掘調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 手嶋誠一 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

調査総括 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員)

調査主任 清水宗昭 (大分県教育庁文化課主任)

調査担当 芝徹 (大分県教育庁文化課主任)

栗虎憲児 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査補助 小野信彦

1984 (昭和59) 年度 試掘調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 手嶋誠一 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

下條信行 (西南学院大学助教授)

調査総括 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査主任 清水宗昭 (大分県教育庁文化課主査)

調査担当 芝徹 (大分県教育庁文化課主任)

桑原幸則 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査補助 小野信彦・岩沢安晃

1985 (昭和60) 年度 旧A・B地区本調査

調査主体 大分県教育委員会

調査責任者 藤井義美 (大分県教育長)

調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)

小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)

森真二郎 (九州産業大学教授)

西谷正 (九州大学助教授)

調査総括 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)

調査主任 清水宗昭 (大分県教育庁文化課主査)

調査担当 高橋徹 (大分県教育庁文化課主任)

桑原幸則 (大分県教育庁文化課嘱託)

調査員 永松みゆき (大分県教育庁文化課嘱託)

友岡信彦 (大分県教育庁文化課嘱託)

田中裕介 (大分県教育庁文化課嘱託)

1986 (昭和61) 年度 旧A・B・C地区本調査

調査主体 大分県教育委員会
 調査責任者 藤井義美 (大分県教育長)
 調査指導委員 賀川光夫 (別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員)
 小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)
 調査総括 塔鼻勝人 (大分県教育庁文化課課長)
 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長)
 調査主任 渋谷忠章 (大分県教育庁文化課主事)
 調査担当 高橋徹 (大分県教育庁文化課主任)
 小柳和宏 (大分県教育庁文化課主事)
 田中裕介 (大分県教育庁文化課主事)
 小野信彦 (大分県教育庁文化課嘱託)
 橋本拓也 (大分県教育庁文化課嘱託)
 調査員 村上久和 (大分県教育庁文化課主任)
 江田豊 (大分県教育庁文化課主事)

1987 (昭和62) 年度 旧C・D・E・F地区本調査

調査主体 大分県教育委員会
 調査責任者 嶋津文雄 (大分県教育長)
 調査指導委員 賀川光夫 (別府大学学長・大分県文化財保護審議会委員)
 小田富士雄 (北九州市立考古博物館館長・大分県文化財保護審議会委員)
 石野博信 (権原考古学研究所)
 樺田比呂志 (大阪大学助教授)
 調査総括 後藤昭六 (大分県教育庁文化課課長)
 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課主幹)
 調査主任 渋谷忠章 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第二係長)
 調査担当 田中裕介 (大分県教育庁文化課主事)
 行時志郎 (大分県教育庁文化課嘱託)
 調査員 山田拓伸 (宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員)
 村上久和 (大分県教育庁文化課主任)
 永松みゆき (大分県教育庁文化課嘱託)
 後藤晃一 (大分県教育庁文化課嘱託)
 吉武牧子 (大分県教育庁文化課嘱託)
 調査補助 江藤和幸・藤本啓二・森山敬一郎

1988 (昭和63) 年度 旧E・F地区補足調査調査

調査主体 大分県教育委員会
 調査責任者 嶋津文雄 (大分県教育長)
 調査総括 小代基雄 (大分県教育庁文化課課長)
 後藤宗俊 (大分県教育庁文化課課長補佐)
 調査主任 渋谷忠章 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第二係長)
 調査担当 高橋徹 (大分県教育庁文化課主任)
 小林昭彦 (大分県教育庁文化課主事)

市教育委員会が発掘調査を実施した関係者は下記のとおりである。なお整理に関わる関係者は、『小迫辻原遺跡Ⅱ』に記載する

1987 (昭和62) 年度 L-1区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 楢原 芳彦 (日田市教育長)
 調査指導員 賀川 光夫 (別府大学教授)
 調査事務 武石 邦男 (日田市立博物館館長)
 調査員 後藤 宗俊 (大分県教育庁文化課主幹)
 清水 宗昭 (同 係長)
 土居 和幸 (日田市立博物館事務員) 調査担当
 友岡 信彦 (同 嘱託) 調査担当

1988 (昭和63) 年度 N区本調査、O-1区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 楢原 芳彦 (日田市教育長)
 調査指導員 賀川 光夫 (別府大学学長)
 小田富土雄 (福岡大学教授)
 西谷 正 (九州大学教授)
 後藤 宗俊 (大分県教育庁文化課課長補佐)
 佐藤 興治 (大分市歴史資料館館長)
 真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長)
 調査事務 武石 邦男 (日田市立博物館館長)
 調査員 清水 宗昭 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長)
 平川 信敬 (同 嘱託) 調査担当
 王永 光洋 (大分市歴史資料館学芸調査係長)
 田中 裕介 (大分県立津久見高等学校教諭)
 土居 和幸 (同 事務員) 調査担当

1989 (平成元) 年度 O-1区・K-1区本調査、K-2区試掘調査

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 楢原 芳彦 (日田市教育長)
 調査指導員 賀川 光夫 (別府大学教授)
 小田富土雄 (福岡大学教授)
 下條 信行 (愛媛大学教授)
 小笠原好彦 (滋賀大学教授)
 後藤 宗俊 (大分県教育庁文化課課長補佐)
 佐藤 興治 (大分市歴史資料館館長)
 真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長)
 調査事務 武石 邦男 (日田市立博物館館長)
 調査員 清水 宗昭 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第一係係長)
 渋谷 忠章 (同 埋蔵文化財第二係係長)
 高橋 敏 (同 埋蔵文化財第二係主査)
 王永 光洋 (大分市歴史資料館学芸調査係長)
 小倉 正五 (宇佐市教育委員会社会教育課主査)
 田中 裕介 (大分県立津久見高等学校教諭)
 土居 和幸 (日田市立博物館学芸員) 調査担当
 行時 志郎 (同 学芸員) 調査担当

1990 (平成2) 年度 H-1区・K-3区本調査、G-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区確認調査

調査主体 日田市教育委員会
 調査責任者 楢原 芳彦 (日田市教育長)
 調査指導員 賀川 光夫 (別府大学教授)

	小田富士雄 (福岡大学教授)	
	後藤 宗俊 (別府大学教授)	
	木村純多郎 (大分市歴史資料館館長)	
	真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長)	
調査事務	重石 巧 (日田市立博物館館長)	
	小笠サヅ子 (同 主任)	
調査員	清水 宗昭 (大分県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長)	
	渋谷 忠章 (同 埋蔵文化財第2係長)	
	田中 裕介 (同 埋蔵文化財第1係主任)	
	玉永 光洋 (大分市歴史資料館学芸調査係長)	
	七尾 和幸 (日田市立博物館学芸員) 調査担当	
	行時 志郎 (同 学芸員)	
	森山敬一郎 (同 嘱託) 調査担当	

1991 (平成3) 年度 H-2区・O-2区本調査、G-1区・J-1区・K-4区・L-2区・P区確認調査

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	鶴原 芳彦 (日田市教育長)
調査指導員	賀川 光夫 (別府大学教授)
	小田富士雄 (福岡大学教授)
	後藤 宗俊 (別府大学教授)
	真野 和夫 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長)
	石山 勲 (福岡県教育庁文化課参事補佐)
調査事務	重石 巧 (日田市立博物館館長) ~平成3年10月30日
	矢野 友章 (日田市教育次長兼博物館館長) 平成3年11月1日~
	小笠サヅ子 (日田市立博物館主任)
調査員	清水 宗昭 (大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長)
	渋谷 忠章 (同 埋蔵文化財第2係長)
	坂本 嘉弘 (同 埋蔵文化財第1係主査)
	田中 裕介 (同 埋蔵文化財第1係主任)
	上原 和幸 (日田市立博物館学芸員) 調査担当
	行時 志郎 (同 学芸員)
	森山敬一郎 (同 嘱託) 調査担当

1992 (平成4) 年度 Q区本調査、R-2区・I区・J-2区試掘調査

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	鶴原 芳彦 (日田市教育長) ~平成4年11月30日
	加藤 正俊 (同) 平成4年12月1日~
調査指導員	賀川 光夫 (別府大学教授)
	小田富士雄 (福岡大学教授)
	後藤 宗俊 (別府大学教授)
調査事務	原田 良伸 (日田市立博物館館長)
	阿部 正義 (同 次長)
	後藤 裕子 (同 臨時職員)
調査員	清水 宗昭 (大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長)
	渋谷 忠章 (同 主幹兼埋蔵文化財第2係長)
	牧尾 義剛 (同 埋蔵文化財第1係主査)
	宮内 亮己 (同 埋蔵文化財第1係主査)
	吉田 寛 (同 埋蔵文化財第1係主査)
	上原 和幸 (日田市立博物館学芸員) 調査担当
	行時 志郎 (同 学芸員)
	森山敬一郎 (同 嘱託) 調査担当

1993（平成5）年度 G-5区本調査、G-1～4区・H-3・4区・M区・J-3～5区試掘調査

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	加藤 正俊（日田市教育長）
調査指導員	賀川 光夫（別府大学教授） 小田富士雄（福岡大学教授） 後藤 宗俊（別府大学教授） 河原 純之（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）
調査事務	原山 良伸（日田市立博物館館長） 阿部 正義（同 次長） 羽野 恭子（同 臨時職員）
調査員	清水 宗昭（大分県教育庁文化課主任兼埋蔵文化財第1係長） 渋谷 忠章（同 上幹兼埋蔵文化財第2係長） 牧尾 義則（同 埋蔵文化財第1係土査） 上居 和幸（日田市立博物館学芸員）調査担当 行時 志郎（同 学芸員） 森山敬一郎（同 嘱託）調査担当
調査協力者	阿部 義平・池田 栄史・石野 博信・伊藤 稔・井上 和人・江上 波夫・岡村 道雄 栗焼 健児・後藤 直・甲元 寛之・斎藤 忠・坂井 秀弥・佐藤良二郎・沢村 仁 白石太郎・杉山 晋作・鈴木 敏則・須田 勉・関川 尚功・高橋 章・武末 純一 坪井 清足・都出比呂志・仲野 浩・西田 健彦・服部 英雄・橋口 定志・橋本 博文 寿成 秀爾・平川 南・藤尾慎一郎・松村 恵司・水野 正好・森 浩一・和田 晴吾

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地 (第1・2図)

小辺止原遺跡の所在する大分県日田市は九州島にあっては北部九州のほぼ中央にあたり、現在の行政区画である大分県の西北部に位置する。西は福岡県との県境をなし、玖珠町・天瀬町・人山町・前津江村・山国町・福岡県浮羽町・阿肥木町・岡添田町・阿立珠山村の7町2村と接する市域面積が約269平方km、人口約65,000人の四方を山々に囲まれた小都市である。

この日田市を起点に西へ向かえば福岡県久留米市や太宰府市・福岡市、北へ向かえば北九州市や中津市・宇佐市、東へ向かえば湯布院を抜ける分市、南へ向かえば竹田市や阿蘇・熊本市へと通じる。このルートは天領として築えた近世期には筑後国高良山路・久留米城路、筑前国宇府路・福岡城路、彦山路・小合城路、豊前国宇佐宮路・中津城路、玖珠郡森宮路、直人郡阿城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれ、旧国ごとの主要な地域と結ばれていた文字通り交通上の要衝の地にあたる。

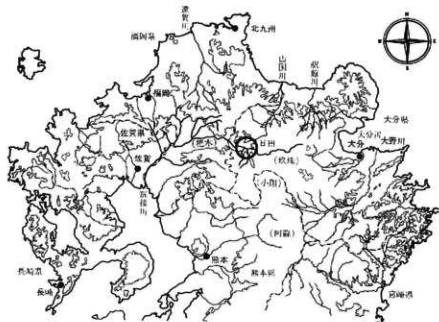
現在でも福岡県との交流が深い日田市は、西流する筑後川の上流に位置するなどその地理的条件に大きく左右されて、古来より西からの文化の影響を強く受けて発展してきた街で、大分県のなかにも伝統や文化など全般にわたって独自の文化を色濃く残している。江戸時代には幕府の西国郡代(代官所)が置かれ九州島の政治・経済の中心をなすいっぽうで、この時代に始まった杉の植林は日田杉の一大産地として知られるようになり、豊富な水源は“水郷”の地と称されるようになった。

この日田市の地形を概観すると、現在の市街地にあたるのが日田盆地の沖積面で標高は約75~90m、H隈・月隈・景隈と呼称される残丘が盆地内に点々と残っている。この盆地底の沖積面周囲には市内では原(はら)と呼ばれる山田原、吹上原、葛原、須ノ原、町野原、佐寺原、長者原などの阿蘇4火砕流の流川により形成された標高約150m前後の溶岩台地が段丘上に巡っている。

その行地の外側には龍体山(345m)、西の山(308m)、片峰(約500m)、大石峠(約400m)などの標高約200~600mの耶馬溪火砕流で形成された溶岩台地が占め、さらにその外側の市の境界域には岳藏泉山(1,036m)、大樽山(909m)、一尺八寸山(707m)、月山山(709m)、五条殿山(834m)、釈迦岳(844m)といった標高約400~1000m級の山々が連なり、さらに遠方には彦山(1,199m)系、久住山(1,786m)系、阿蘇外輪山(900~1,100m)が広がる。

久住山や阿蘇外輪山を源とする玖珠川や人山川は盆地東部で合流し三隈川となり、さらに台地の合間を縫うようにして流れ出る高瀬川、花月川、二中川、内河野川といった小河川が合わり九州最大河川である筑後川となり、さらに西流して大肥川が合流し筑紫平野を経て有明海へと注いでいる。

こうした日田盆地北部の台地上に小辺止原遺跡は存在している。遺跡の立地する通称止原台地は宮原台地



第1図 日田盆地の位置と地勢

とともに盆地内では最も発達した山田原台地の一角を占め、その南側には独立した吹上原台地がある。これらの台地は千田昇氏の地形分類によれば「中位段丘1面」と呼ばれ、その説明では「中位段丘1面」は阿蘇4火砕流地積面の下に比高10～30mの崖をつくって分布する地形面で、主として花月川右岸一帯に広がりがあるとされる。右岸一帯の広がりとはこの山田原台地や吹上原台地をさすもので、市内にみられる「中位段丘1面」のなかでは最も広範囲な地形である。

この発達した山田原台地は尾尾山の南側山麓にあたり、台地西側には君泊川と合流した二串川が南流し、東側では南流する花月川が吹上原台地の南で西流して二つの河川が重なるようにして三隈川に注ぎこんでいる。山田原台地では昭和30年代に大規模な基盤整備事業が実施され、台地上はより平坦に区画化されて夏はスイカ、冬は白菜の一大生産地となっている。

小泊辻原遺跡のある辻原台地は現状で東西約500m、南北約500mの上面観が三角形をなす。台地の西側は現在大分自動車道日田インターチェンジとなっているが以前は山田原台地と地続きで、東・南側は崖面、北側は小さな谷部へと傾斜している。この台地も昭和30年代に基盤整備事業が実施され平坦に区割りされているが、整備前の図面を見る限りでは台地の南側から北側に向ってゆるやかに傾斜する台地面であった。

辻原台地の南側は谷部が形成されており、本来は河川が流れていたであろうが現在ではみられず、灌漑用の水路が引かれている。台地西側下には現在でもわきで湧き出る湧水地が数点があり、この台地上もそうであるが周辺台地上には湧水はなく、古くから水の確保にはこうした台地下の湧水地が利用されていたことが想像される。

(参考文献)

- 千田 昇 「日田・玖珠地域の地形 とくに台地地形について」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』
大分大学教育学部 1992年
中島国夫 「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』日田市 1974年

第2節 日田市の歴史

現存する『豊後国風土記』によれば日田の地名の由来を「景行天皇が熊襲征討の帰途に日田へ行幸した折、景行天皇を久津媛が出迎えたことから“久津媛の郡”と呼ぶようになり、それが訛って「日田郡」となったと伝えられている。

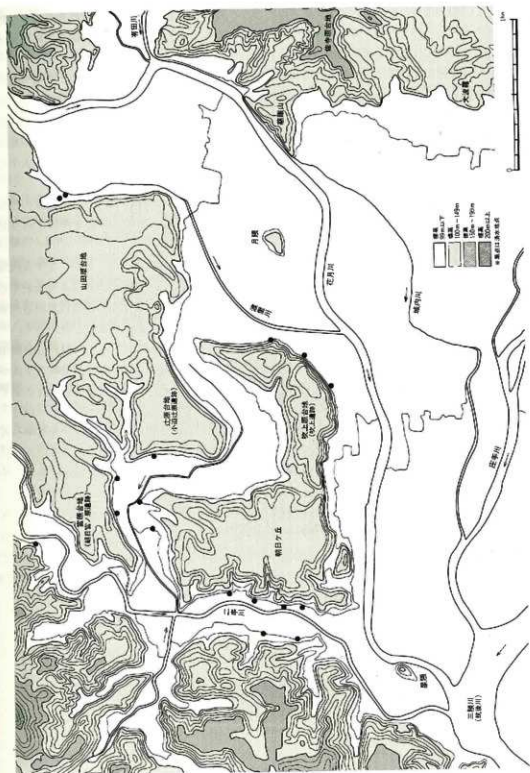
日田の歴史は長者原遺跡や吹上遺跡などの台地や山間部の遺跡で後期旧石器時代のナイフ形石器が出土していることから約2万年前に遡る。縄文時代になると周辺台地に加えて河川流域にも遺跡が広がるようになり、後期には堅穴住居が見えられた手崎遺跡や葛原遺跡に集落が営まれる。

弥生時代前期後半には福岡平野や筑後地域の弥生文化の影響を受けて吹上遺跡や徳瀬遺跡などに本格的な弥生集落が誕生する。とくに中期後半の吹上遺跡には甕棺墓や木棺墓に保持していた青銅器や鉄器などを副葬した日田盆地を治めるほどの有力な首長が出現するが、後期終りに小泊辻原遺跡に環壕集落や豪族居館が現れると、それまでの拠点地は吹上遺跡から小泊辻原遺跡へと変わる。

古墳時代中期（5世紀）になると日田の地にも城山に大和政権のシンボルである前方後円墳が建てられ、『国造本記』によればこのころ比多國造が置かれ止波足泥が会所宮に岩を備えたと伝える。後期（6世紀）には筑後地方の影響のもとにガランドヤ1・2号墳や穴観音古墳、法恩寺山古墳（4号墳）に装飾壁面が描かれるようになる。これらのうち法恩寺山古墳は、『豊後風土記』に記されている日下部氏が本拠とした場所に位置するとされ、その一族の奥津城と考えられている。

7世紀の後半には日田市に隣接する玖珠郡域や阿蘇において評の存在が確認されていることから、日田評が成立していたと考えられ、この評督・評造に日下部氏が任命されていたと推定されている。その後、8世紀の初めには豊後国が成立し、日田評は日田郡へと変わる。

『豊後風土記』によれば、律令下の日田郡には郷は5、里は14、駅は1所が存在した記述がある。郷5所とは



第2図 小迫川流域周辺の地形図 (1/25000)

石井・鞆・在田・亘理・夜間郷で、鞆郷は盆地東部の珍珠川右岸流域一帯、石井郷は盆地南部の三隈川左岸一帯、在田郷は盆地北東部の有田川流域沿い、亘理郷は盆地西北部の花月川右岸流域一帯、夜間郷は盆地最西端の大肥川流域沿い（註1）に比定されている。

また駅1所については『延喜式』に石井駅と記されており、その地名から石井郷内に存在したことが窺え、大宰府と豊後国府を結ぶ主要道の駅家は盆地南部に設置されていた。

この日田郡を支配していたのが日下部氏で、『豊後国正税帳』には「大領日下部連吉嶋、少領日下部君大國、

主帳目下部郡死」と当時の主要な役職と人物名が記されており、日田郡の支配構造は日下部姓を名乗る複数の豪族によってなされたと考えられている。日田郡衙の所在地についてははっきりしないが、鞆編郷内に比定する意見と花月川左岸の互理郷内に比定する意見にわかれている。

平安時代はじめの9世紀には日田に私邸を構える前豊後介中井下が惣政を行う事件が起こる。中頃(11世紀)になると日下部為行による田島別荘の水田開発を最後に古代日下部氏の勢力は衰え、その後中世期の日田を治めることとなる大藏姓日田氏が台頭してくる。大藏氏の出口については定かではないが、家系図などにより延久3年(1071)に京の相模御倉の記録が残る大藏永季が実在した人物とされる。この大藏氏は花月川左岸の慈眼山丘陵一帯を拠点にして花月川流域の開発を押し進め、また平安時代の終りには大藏氏が所有の日田郡の大半を占めていた日田荘を金剛心院に寄進した。

鎌倉時代になると建久5年(1194)に源平合戦の功により大藏永秀に対し地頭職が安堵され、後家人となり日田氏を称するようになる。文永3年(1266)の文永の役では大藏永基が活躍し軍功と恩賞を得たという記録が『豊後国日田郡司職次第』に残っている。

室町時代の文安元年(1444)には21代とも29代とも言われる大藏姓日田氏は断絶する。替わって大友四郎親満が日田氏を継ぎ大友姓日田氏として登場することになるが、16世紀前半には日田親符の自刃により断絶することとなる。その後は大友義隆により指名された、日田郡司職を相伝してきた大藏氏の中から選ばれた別名八奉行とも呼ばれる坂本・財津・羽野・石松・高瀬・堤・佐藤・瀬戸川各氏の8名による郡支配へと変わっていく。

文祿2年(1593)、日田は豊原秀吉の太閤蔵入地となり、翌年には宮本長次郎が代官として赴任し日隈山に日隈城を築き、隈町をつくって政治拠点とした。慶長6年(1601)には江戸幕府領となり、小川忠岐守光氏が日隈山に丸山城(後に永山城)を築き、城下町丸山町(後に豆田町)をつくると、以後明治維新を向かえるまでの260年余りの間、一時親藩・譜代大名の支配地を除けば天領の地となる。

寛永16年(1639)には永山城の堀外に代官陣屋が置かれ、豆田町には商人が集うようになり、その中から成長した千原家・森家・草野家・広瀬家などの有力商家は代官御用達となり金融業(掛屋)を営むようになる。この掛屋の一つ広瀬家の長男に生まれた広瀬誠窓は文化14年(1817)に私塾成宜園を開き、明治30年にその幕を閉じるまでの間ここで全国62ヶ国約5,000人の門弟が学んだ。

明治維新を向えると後に総理大臣となる松方正義が初代日田県知事として赴任し、明治4年には鹿藩領土により日田県は大分県に吸収合併され、明治34年には隈町と豆田町が合併して日田町となる。大正5年には日田山田と久留米を結ぶ筑後軌道が開通し、昭和9年には国鉄九大線が開通すると木材産業をささえてきた水運業は衰退していく。昭和15年、日田町と三芳・高瀬・光岡・朝日・三花・西有田の周辺6ヶ村が合併して日田市が誕生し、さらに昭和30年には東有田・五和・夜明・大鶴・小野村が合併し現在の日田市となる。

注1) 盆地北部の花月川流域にあてる説もある。

(参考文献) 『日田市史』 日田市 1980年

『日田市の歴史と文化財』 日田市教育委員会 1996年

第3節 日田盆地の遺跡と遺物(第7図)

現在日田市内には約250ヶ所の遺跡が周知されているが、ここ10数年間の緊急の発掘調査成果によって遺跡の内容が明らかになった例や、新たに発見される例が増えている。

とりわけ遺跡の立地場所については、過去には河川の集中するあるいはその流域沿いでは洪水などの自然発生的な出来事により遺跡は残存していないと考えられていたが、河川改修や圃場整備、道路建設に伴う調査が進むなかでそうした立地上での遺跡が次々と確認されてきている。

それまでは盆地周辺の台地を中心としてしかとらえられなかった遺跡の姿が沖積地を含めた盆地全域にまでおよび、考古学のみならず古代史・中・近世史を考える上で大きな資料を提供してきている。

こうしたことから、以下近年の発掘調査成果を中心に日田盆地の遺跡や遺物を概観する。

旧石器時代

これまでに表面採集により確認された遺跡は16ヶ所を数える(註1)が、いまだこの時代の本格的な調査は行われていない。発掘調査での出土資料としては草場第二遺跡(註2)ではナイフ形石器や台形様石器、三和教田遺跡B地点(註3)ではナイフ形石器、平島遺跡B区(註4)や馬形遺跡(註5)では三稜尖頭器、上野第1遺跡(註6)では剥片尖頭器が出土している。

縄文時代

この時代の調査例は増え、早期から晩期にいたる各時期の上器が出土した手輪遺跡(註7)や葛原遺跡(註8)では竈穴住居が調査されている。前者は両平式期にあたり径約4.5mのほぼ円形をなす、後者は三方田式期にあたり長軸約4.6m、短軸2.8mの長方形をなす。

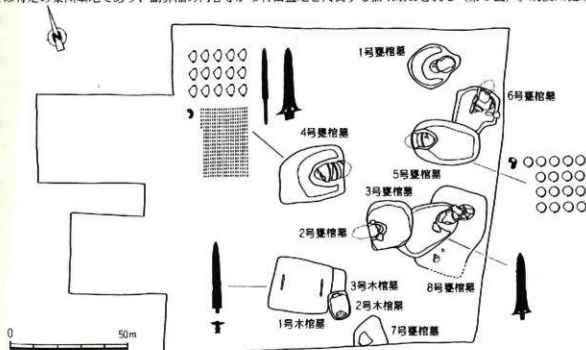
三和教田遺跡C地点(註9)では後・晩期の溝状遺構や流路が調査され、上側の頭部・胴部・腕部などが出土している。また、牧原遺跡(註10)においても御領式期の上側の左足部分が出土している。

このほか、石ヶ迫遺跡(註11)・上野第1遺跡(註12)・大部遺跡(註7)などでは早期の集石遺構が発掘され、森ノ元遺跡(註13)では晩期前半代の埴塹、石ヶ迫遺跡(註11)や有田塚ヶ原遺跡(註14)などでは陥穴遺構が調査されている。

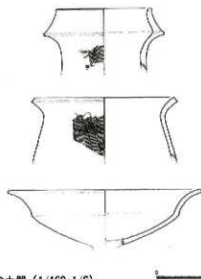
弥生時代

弥生時代の大規模な遺跡は小迫辻原遺跡を含めてその周辺に多くみられるが、なかでも日田盆地を代表する遺跡に吹上遺跡(註15)がある。これまでに行われた9次の調査では竈穴住居・袋状貯蔵穴・土壇・溝・大型成人用槨墓・石棺墓などの遺構が重複して検出され、弥生上器をはじめ大陸系磨製石器や立岩産石庖丁など数多くの遺物が出土している。

特に、平成7年に行われた6次調査(註16)で発見された墳墓群は、大型成人用槨墓8基と木棺墓3基で構成され、このうち3基の槨墓と1基の木棺墓には銅戈や銅剣などの青銅器・鉄剣・貝輪(ゴホウラ、イモ貝)・管玉・勾玉などの装身具などが副葬されていた。槨墓は立岩期の中期後半に位置づけられるもので、遺跡にあっては特定の集積地であり、副葬品の内容等から日田盆地を代表する盟主墓とされる(第3図)。筑後川流域に



第3図 吹上遺跡(6次調査)弥生時代墳墓群配置図(1/160)



第4図 三和教田遺跡B地点の遺構図と環濠出土の土器 (1/160・1/6)

され、朝日宮/原遺跡A区(註18)では中期後半から後期初めの竪穴住居・土壇・小児用甕棺墓などが発掘されている。小迫辻原遺跡に隣接するこの3遺跡はいずれも後期後半・末頃から台地縁辺部を中心に大型成人用甕棺墓や箱式石棺墓・土坑墓などで構成される墓地へとかわっている。

佐寺原遺跡(註19)では前期末から後期中頃の竪穴住居・土壇・小児用甕棺墓などが発掘されており、右田川を挟んで対峙する葛原遺跡(註20)では前期末から中期前半の竪穴住居や土壇などが調査されている。三隈川南部の長者原遺跡(註21)では後期前半の竪穴住居や土壇、上野第1遺跡(註12)では前期末から中期前半の土壇や小児用甕棺墓などが確認されている。

また、右田川左岸丘陵上に立地する祇園原遺跡(註22)では中期後半から後期中頃の竪穴住居・掘立柱建物・小児用甕棺墓・円形周溝遺構などが発掘されている。これらの遺構は3間×6間や3間×7間といった大型の建物を中心にその周囲に竪穴住居が配置されており、さらに竪穴住居の平面は円から不整形な門さらに方形へと変化する過程がみられるなどこの時期の集落構造を考える上で注目される。

いっぽう沖積地では庄手川と三隈川に挟まれた微高地上に位置する徳瀬遺跡で5次の調査(註23)が行われ、前期後半から後期後半の竪穴住居・溝・土壇などが発掘されている。後期末以降には方形周溝墓や箱式石棺墓などの墓地へと変わる現象は吹上遺跡など周辺台地と同じ状況を示している。盆地東部の会所山の裾に位置する会所宮遺跡(註24)では中期前半代の竪穴住居・土壇・溝などが調査されている。

このほか花月川左岸の低丘陵上の三和教田遺跡B地点(註3)では後期中頃から後半の竪穴住居・掘立柱建物・溝など、右田川左岸段丘上の平島遺跡A・B区(註4・25)では後期後半の竪穴住居・掘立柱建物・溝が調査されている。両遺跡で発見された溝は竪穴住居や掘立柱建物を囲むことから環壕集落と考えられている。いずれの環壕も地形的に見て完全に巡るものではなく半円状に巡らされている。とくに三和教田遺跡B地点の環壕は規模が大きく断面進台形の幅約5m、深さ約2mを測り、環壕内には竪穴住居のほか4間×6間の大型建物や1間×2間の掘立柱建物などが配置されている(第4図)。

この時代の墓の事例としては、先述した吹上遺跡のほかに草場第二遺跡(註2)があり、弥生時代後期の大型成人用甕棺墓や甕棺墓などの墓が発見されている。朝日宮/原遺跡D地区(註26)では後期の大型成人用甕棺墓1基、平島遺跡D区(註27)では後期の大型成人用甕棺墓4基が発掘されている。このほかに上野第1遺跡(註28)・元宮原遺跡(註28)・草場遺跡(註29)などでも偶然に大型成人用甕棺墓が発見されている。

古墳時代

これまでのところH田盆地では確実な前期古墳や前方後円墳の存在は確認されていない。この時期の墓地遺跡は草場第二遺跡・吹上遺跡・朝日宮/原遺跡・後迫遺跡・徳瀬遺跡・牧原遺跡などがあるが、大半は前代の集落跡が後に墓地化したもので、継続して営まれている例が多い。

草場第二遺跡(註2)では壺棺墓・土坑墓・割竹形木棺墓・箱式石棺墓・小型竪穴石室・方形周溝墓などが確認されており、鉄刀・鉄剣・刀子・鉄鏃・銅劍・玉類などが出土している。吹上遺跡(註15)では箱式石棺墓・木棺墓・土坑墓、朝日宮ノ原遺跡D地区(註26)では壺棺墓・箱式石棺墓・石蓋上坑墓・土坑墓などが発掘されており、16号石蓋上坑墓からは高環頭刀子1点が出土している。後泊遺跡(註17)では箱式石棺墓6基が発掘され、そのうち1基からは副葬品として小型仿製鏡1面が出土している。徳都遺跡(註23)では方形周溝墓5基・箱式石棺墓4基・土坑墓6基などが発掘され、方形周溝墓の主体部である箱式石棺墓には「位至三公鏡」片が副葬されていた。牧原遺跡(註10)では方形周溝墓4基・箱式石棺墓1基・木棺墓1基・土坑墓2基などが発掘され、鉄鏃や刀子などの副葬品が出土している。

このほか、徳都遺跡に隣接する草場遺跡(註28)では箱式石棺墓に伴って方格規矩鏡片が出土しており、長者原遺跡や元宮遺跡などでも箱式石棺墓の出土例がある。

また、手崎遺跡(註7)や夕田遺跡(註30)では布留式土器を伴う竪穴や土壇が散発的に発掘されており、該期の案落例としては数少ない資料である。

中期になると有田川右岸台地上に前方後円墳が築かれる。前方面を西に向けた城山古墳(註31)は、全長31mで主体部は箱式石棺もしくは竪穴式石室とみられている。

4世紀後半から5世紀前半の小迫古墳(註31)は、主体部に粘土埴を採用したなかに木棺(割竹形木棺?)を安置し、珠文鏡・勾玉・管玉・小玉が副葬されていた。尾漕古墳群は2号墳(註33)が5世紀初め、1号墳(註19)が5世紀末の築造である。前者は組合式の箱式石棺を主体部とし人骨3体と素環頭太刀・刀子・鏃などが出土しており、後者は単室の横穴式石室で須恵器のほか小玉が出土している。

このほか竪穴式石室を有し蛇行剣が出土した鉾塚古墳(註34)や、應付蓋や脚付臺のほか仿製六獣鏡1面・仿製珠文鏡1面・玉類などが出土した横穴式石室を有する有田古墳(註34)、直径約35mの円墳で主体部には箱式石棺が採用され円筒埴輪が配置されている乗師堂山古墳(註34)、江戸時代に掘り出された細線式獣帯鏡が副葬されていたと考えられる口辰古墳(註34)などの各古墳が盆地の各所に造られるようになる。

さらに尾漕古墳群に対峙する大迫遺跡(註35)では5世紀後半から末の石蓋上坑墓・土坑墓・箱式石棺墓が調査され、3号土坑墓からは県内でも類例の少ない蕨手刀子が出土している。また赤迫遺跡(註36)でもこの時期の石蓋上坑墓6基が調査されている。

この時期注目される遺跡に篠鶴遺跡(註37)があり、5世紀前半から中頃の鍛冶遺構とされる竪穴から鉄床石・鉄滓・高環転用羽口・鍛造剝片などが出土し、またこの遺構付近からは関連する鉄鏃や手掘土器・石製円盤などの祭祀遺物が集中して発見されている。

5世紀後半代には求米里平島遺跡(註38)のカマドを有する竪穴住居や、羽野横穴1号墓(註39)や夕田横穴第1支群1号墓(註30)が調査されており、いずれもH田地域での出現期の資料である。

6世紀には天満古墳群や装飾古墳が築かれる。長さ約30mの天満1号墳(註31)は社殿建設の際に仿製獣帯鏡・直刀・貝製雲珠などの馬具等の遺物が出土している。H田・玖珠地域最大の古墳である2号墳(註40)は長さ約60mの規模で、剣菱形と推定される周溝を持ち、大型平底室などが出土している。

ガランドヤ古墳群(註41)は3基の古墳で構成され、6世紀後半の1号墳は赤と緑を使って複式構造の横穴式石室の玄室奥壁に円文・同心円文・船・人物・鳥・馬などの多彩な装飾がなされている。須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・玉類などが出土している。同じく6世紀後半の2号墳は石室の玄室奥壁に赤を下地に緑を使って同心円文・騎射像・連続山形文などの装飾がなされている。須恵器・珠文鏡・直刀・馬具・鉄鏃・玉類などが出土している。

法恩寺山3号墳(註42)は独立した丘陵上に展開する7基の古墳群の一つで、6世紀後半築造の径約20mの円墳である。複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、袖石やまぐさ石などに赤を使って円文・同心円文・馬と人物・鳥などの装飾がなされている。出土遺物に須恵器や馬具などが出土している。

穴観音古墳(註43)は径12mの円墳で、複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、前室の左右側壁に赤と緑を使って円文・同心円文・船・両手を広げた人物・鳥などの装飾がなされている。

このほか有田塚ヶ原1号墳(註19)は直径約10mの円墳で、複式構造の横穴式石室の玄室平面は筑後の影響を受けた胴張プランである。

また、横穴墓の発掘例も増加し、平島横穴墓群(註44)では総数86基の横穴墓がすべて調査されたほか、羽野横穴墓群(註39)・佐寺横穴墓群(註35)・北友田横穴墓群(註45)・小迫横穴墓群(註32)・夕田横穴墓群(註30)などが発掘されている。市内にはこのほかにも、月限横穴墓群・星限横穴墓群・東寺横穴墓群・木目横穴墓群などがあり、そのほとんどは三隈川北側の台地崖に営まれている。

このほか、平島遺跡(註4・25)や長迫遺跡(註46)では竪穴住居や掘立柱建物などが大規模に調査され、長迫遺跡では鉄滓が出土しており鍛冶を行っていたと考えられている。さらに、西有田赤ハグ遺跡(註47)では斜面を削りだして作られた道状遺構が、尾漕遺跡(註48)では河川と並行する道状遺構がそれぞれ調査され、三和教田遺跡B地点(註3)では水路の一部が発見されている。また、長者原遺跡(註49)では竪穴住居から製塩土器が出土している。

古 代

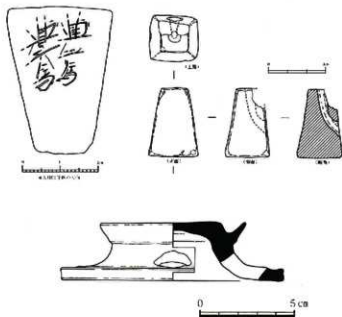
三和教田遺跡B地点(註3)では7世紀後半から8世紀前半の掘立柱建物が調査され、この時期に伴うと考えられる門面観が出土している(第5図)。

上野第1遺跡(註50)では8世紀前半から中頃の掘立柱建物・竪穴住居・土坑・道状遺構・粘土探掘土坑・水田などの遺構が調査された。これらの遺構からは「豊馬豊馬」と刻まれた石製品や転用硯などが出土しており、石井駅開通施設などの説が考えられている。

慈眼山瀬戸口遺跡(註51)では8世紀中頃から末の辺り0.8mの横板井桁組の井戸枠を設置した井戸と水汲場状遺構が確認され、これらの遺構からは「門」「林」などと書かれた墨書土器・曲物・木製品・漆漕などが出土している。8世紀代の井戸は大宰府でも少なく、横板井桁組の井戸枠は官人クラスの居住区に限られ、墨書土器などの遺物の出土から公的施設が存在が指摘されている。

このほか長者原田遺跡(註52)・手崎遺跡(註7)・後迫遺跡(註17)・尾漕遺跡(註48)・長迫遺跡(註46)・石ヶ迫遺跡(註11)・馬形遺跡(註5)・クビリ遺跡(註53)・草場第二遺跡(註2)などで掘立柱建物や竪穴住居などが調査されている。なかでも手崎遺跡・長迫遺跡・石ヶ迫遺跡では製塩土器が出土し、長者原田遺跡・クビリ遺跡では鉄滓が出土し鍛冶を行っていたと考えられている。

馬形遺跡(註5)では市内では数少ない9世紀中頃から後半の2基の土坑墓が発見されている。1号墓は上層器坏に毛抜き、2号墓は木棺が据えられ副葬品に越州系青磁碗・須恵器坏・内黒土器・土師器坏のほか刀子が出土している。また、吹上遺跡(註16)では12世紀前半頃の経塚が発見されており、90cm×80cmの円形の墓坑から青銅製経筒と共伴品として合子や刀子が出土している。



第5図 上野第1遺跡出土遺物(上)と三和教田遺跡B地点(下)出土遺物

中 世

この時期の遺跡例はここ数年間で最も増えてきている。

慈眼山瀬戸口遺跡(註51)では溝・石垣状の石組・井戸・土坑状遺構などが調査され、多量の土師器・輸入陶磁器・銅鉢・火鉢・渡米銭・硯・石臼・高さ4cmの十一面観音菩薩などが出土している。この遺跡は中世豪族大蔵氏が本拠としていた場所にあたり、発掘された遺構は関連遺構であろう(第6図)。

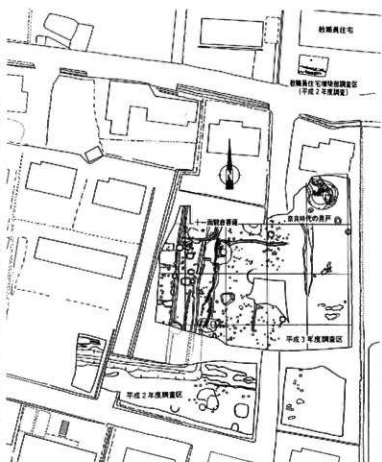
長者原田遺跡(註52)・荻崎遺跡(註37)・尾漕遺跡(註48)では掘立柱建物の周囲を礎で囲む環溝基礎が調査されている。

このほか、朝日宮ノ原遺跡(註18)・三和教田遺跡(註3)・森ノ元遺跡(註13)・寺

内遺跡(註54)・会所宮遺跡(註24)・惣田遺跡(註55)などで掘立柱建物などが発掘されている。

中世墓の調査事例も増加してきている。これまでの発掘例(註56)は朝日宮ノ原遺跡(註18)5基・小迫墳墓群(註32)1基・尾漕遺跡A区(註19)3基・手崎遺跡(註7)2基・慈眼山瀬戸口遺跡(註51)4基・寺内遺跡(註54)1基・徳瀬遺跡(註57)1基・森ノ元遺跡(註13)1基・尾漕遺跡4地点(註48)2基などである。とくに朝日宮ノ原遺跡4号墓では炭敷きの上に木棺をすえ、被葬者の胸部には念珠を頭部には青磁碗・合子・瀬州鏡・和鉄・竹箆などの副葬品を納めていた。また尾漕遺跡A区2号墓には鉄鍋・300枚を越える六道銭などが副葬されていた。

また、牧原遺跡内に残る牧原千人塚(註10)は、頂上に高さ約2.8mの四面に梵字が刻まれた角塔婆が立つ15m×14mの方形プランの高さ約2mの塚であることが確認されている。



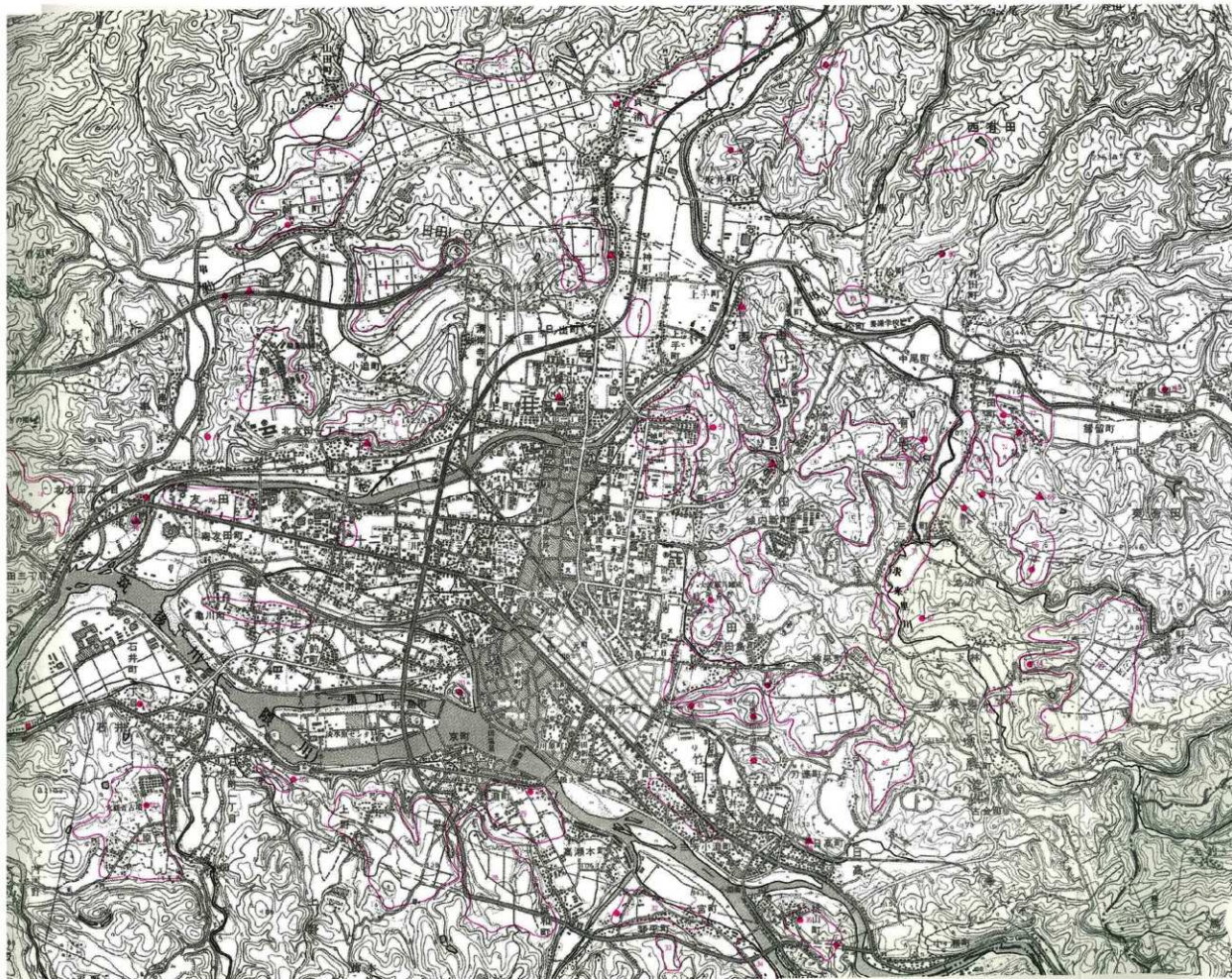
第6図 慈眼山瀬戸口遺跡の遺構図

近世

この時期の調査例としては牧原遺跡(註10)において小国街道の一部の発掘が行われ、後藤家墓地(註58)や祇園原遺跡(註22)では近世墓、山口遺跡(註59)では近世建物の調査が行われている。

- 註1) 橋昌信編『大分県旧石器時代遺跡分布図』別府大学付属博物館 1986年
- 註2) 高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)大分県教育委員会 1989年
- 註3) 土居和幸ほか「三和教田遺跡B地点」『平成6年度(1994年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996年
- 註4) 行時志郎編『平島遺跡B区』日田市埋蔵文化財調査報告書第4集 日田市教育委員会 1991年
- 註5) 土居和幸ほか編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1995年
- 註6) 調査担当者に見せさせていただいた。
- 註7) 田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査2 手崎遺跡・大部遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 大分県教育委員会 1998年
- 註8) 永田裕久「葛原遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註9) 吉田博嗣編『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯 大分県教育委員会 1997年
- 註10) 松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集 日田市教育委員会 1997年
- 註11) 松下桂子「石ヶ迫遺跡」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
- 註12) 土居和幸「上野第1遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註13) 行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998年
- 註14) 行時志郎ほか「有田塚ヶ原遺跡」『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
- 註15) 村上久和編『吹上遺跡I・II』日田市教育委員会 1980年・1981年
土居和幸「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報I・II』日田市教育委員会 1986年・1987年
行時志郎「吹上遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報VI』日田市教育委員会 1991年
- 註16) 土居和幸ほか編『吹上遺跡-6次調査の概要-』日田市教育委員会 1995年
土居和幸「吹上遺跡」『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註17) 土居和幸ほか編『吹上遺跡-6次調査の概要-』日田市教育委員会 1995年

- 註17) 村上久和ほか編『後迫遺跡』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ田→玖珠間第2・3集』大分県教育委員会 1992・1993年
- 註18) 昭和62年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註19) 友岡信彦ほか編『佐寺原遺跡・尾清遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)大分県教育委員会 1998年
- 註20) 昭和61・62年度、平成6年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註21) 土居和幸『長者原遺跡』『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会 1986年
- 註22) 行時志郎ほか『武淵原遺跡』『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註23) 行時志郎『徳瀬遺跡』『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995年
福村博文ほか編『徳瀬遺跡』大分県文化財調査報告書第94編 大分県教育委員会 1996年
- 註24) 土居和幸ほか編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996年
- 註25) 土居和幸編『平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第3集 日田市教育委員会 1990年
- 註26) 土居和幸『朝日宮ノ原遺跡(D地区)』『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』日田市教育委員会 1986年
- 註27) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註28) 土居和幸『第2章 弥生時代2. 後期の遺跡』『日田市史』日田市 1991年
- 註29) 工事中に大型成人用墓室が露出しているのを確認している。
- 註30) 友岡信彦ほか編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14)大分県教育委員会 1999年 発行予定。
- 註31) 大分県前方後円墳研究会「大分県の前方向後円墳集成(1)」『おおいの考古Ⅰ』大分県考古学会 1988年
- 註32) 小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3)大分県教育委員会 1995年
- 註33) 行時志郎ほか『尻窪2号墳』『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註34) 後藤宗俊『第3章 古墳時代2. 日田地方の古式古墳』『日田市史』日田市 1991年
- 註35) 村上久和ほか編『田糸里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下級垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)大分県教育委員会 1997年
- 註36) 行時志郎『赤迫遺跡E・F地点』『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995年
永田裕久『赤迫遺跡』『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註37) 行時志郎編『筑崎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995年
- 註38) 行時志郎ほか『求米里平島遺跡A・B地点』『平成5年度(1993年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995年
- 註39) 渋谷忠章ほか編『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会 1985年
- 註40) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註41) 小柳和宏編『ガランドヤ古墳群』日田市教育委員会 1986年
- 註42) 黄川光大編『法恩寺古墳』日田市教育委員会 1959年
- 註43) 渋谷忠章ほか編『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92編 大分県教育委員会 1995年
- 註44) 行時志郎ほか『平島横穴墓群』『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
- 註45) 玉永光洋編『北友田横穴』大分県教育委員会 1993年
- 註46) 行時志郎『長迫遺跡』『平成8年度(1996年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1998年
- 註47) 行時志郎編『西有田赤ハグ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992年
- 註48) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註49) 土居和幸『長者原遺跡』『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会 1987年
- 註50) 山中裕介編『上野第1遺跡』『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ・Ⅳ』大分県教育委員会 1991・1993年
- 註51) 坂本弘弘編『慈眼山瀬戸山遺跡』大分県教育委員会 1992年
- 註52) 行時志郎編『長者原円遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992年
- 註53) 行時志郎ほか『クビリ遺跡』『平成7年度(1995年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年
- 註54) 平成9年度に大分県教育委員会が調査を実施した。
- 註55) 土居和幸編『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第8集 日田市教育委員会 1994年
- 註56) 註19)のなかに集成されている。
- 註57) 平成9年度に日田市教育委員会が調査を実施した。
- 註58) 山中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査Ⅰ 誠和神社裏遺跡・後藤家築地・陣ヶ原止原遺跡・高瀬深ノ田遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大分県教育委員会 1995年
- 註59) 平成10年度に日田市教育委員会が調査を実施した。



- | | |
|---------------|-------------|
| 1 小滝辻遺跡 | 45 今所山遺跡 |
| 2 草尾遺跡 | 47 会高河遺跡 |
| 3 草尾遺跡 | 48 大波遺跡 |
| 4 鎌倉遺跡 | 49 新築山古墳 |
| 5 新野塚古墳群 | 50 赤池遺跡 |
| 6 日田東原上平地区 | 51 上馬場遺跡 |
| 7 月原塚古墳群 | 52 越前山瀬戸口遺跡 |
| 8 伏上遺跡 | 53 大蔵宮城跡 |
| 9 末次附塚古墳群 | 54 丸山古墳 |
| 10 朝日ヶ丘遺跡 | 55 水口塚古墳群 |
| 11 小迫塚古墳群 | 56 佐々木遺跡 |
| 12 小迫古墳 | 57 夕張塚古墳群 |
| 13 鳥居古墳 | 58 中尾遺跡 |
| 14 穴塚遺跡 | 59 大沙洲跡 |
| 15 三郎丸古墳 | 60 中尾古墳群 |
| 16 高野塚古墳群 | 61 高野遺跡 |
| 17 石籠遺跡 | 62 ガニク古墳群 |
| 18 日田東原跡部地区 | 63 赤原平古墳群 |
| 19 徳原遺跡 | 64 電ノ甲古墳 |
| 20 日野古墳 | 65 朝野塚遺跡 |
| 21 津江古墳群 | 66 塚ノ原遺跡 |
| 22 グランドヤク古墳群 | 67 塚ノ原古墳群 |
| 23 穴敷古墳群 | 68 石鳥塚古墳群 |
| 24 長巻遺跡 | 69 尾巻2号古墳 |
| 25 寺内遺跡 | 70 尾巻古墳 |
| 26 権願寺古墳群 | 71 森ノ元遺跡 |
| 27 上野塚1遺跡 | 72 尾巻遺跡 |
| 28 陣ヶ塚遺跡 | 73 尾巻遺跡 |
| 29 飯沼遺跡 | 74 松園遺跡 |
| 30 飯塚古墳 | 75 平島古墳 |
| 31 惣田塚古墳 | 76 塚ノ本古墳 |
| 32 惣田遺跡 | 77 牛島遺跡 |
| 33 ログノ塚遺跡 | 78 城山古墳 |
| 34 平崎遺跡 | 79 内ノ下遺跡 |
| 35 千人塚古墳群 | 80 有田古墳 |
| 36 牧原千人塚(牛世) | 81 西有田ハグ遺跡 |
| 37 大野遺跡 | 82 萩原遺跡 |
| 38 東寺塚古墳群(牛世) | 83 嶋宮古墳 |
| 39 塚ノ末遺跡 | 84 塚ヶ谷古墳群 |
| 40 東寺塚遺跡 | 85 三和塚古墳群 |
| 41 元宮遺跡 | 86 塚中村古墳 |
| 42 法皇山古墳群 | 87 谷ノ久保遺跡 |
| 43 会所山古墳 | 88 岩崎遺跡 |
| 44 徳山古墳 | 89 徳山宮ノ原遺跡 |
| 45 鳥居古墳 | 90 天満古墳群 |

第7図 日田盆地周辺の主要遺跡分布図 (1/25000)

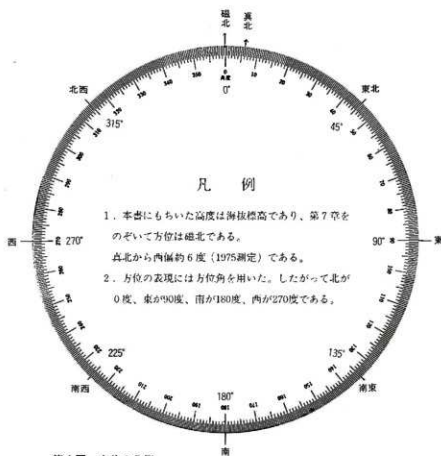
第3章 調査の方法と報告書の凡例

1984～88年度に大分県教育委員会が九州横断自動車道建設にともなう事前発掘調査としておこなった小迫辻原遺跡のA～D区の調査方法と整理報告についてまとめておきたい。

第1節 調査の方法

発掘調査の経過をまじえながら、発掘調査の推移と方法を述べておく。なお概報4作成の1987年までは小迫辻原遺跡は「小迫原遺跡」と表記していたが、遺跡の大部分は大宇小迫字辻原に所在することと、地元では「小迫原」は別な台地を指し、小迫辻原遺跡の所在する台地は古くから「辻原」と呼ばれているという指摘があり、概報5作成段階で遺跡の名称を「小迫辻原遺跡」に改めた。

試掘調査 1984年度は辻原台地の東部にあたる、細く東に伸びる丘陵上の平坦面の試掘調査をおこなった（概報1、P2～5）。対象地区に任意に10m方眼を設定し、その東隅に1箇所2×2mの正方形の調査区（グリッド）を設け、手掘りで基盤層まで掘り下げ、その過程で遺構・遺物の存否を検討した。その結果、土器片・須恵器片・箱形石棺の安山岩石棺材を抽出したが、遺構は発見されなかった。この結果から、D区より東のこの地区は近現代の畑地化・果樹園開発による削平のため、すでに遺構は失われていると判断し、本調査はおこなわなかった。なお1987年度のD区本調査時に、念のためこの地区の表土剥ぎを重複でおこなって、遺構の存否を検討したが、結果は同じであった。



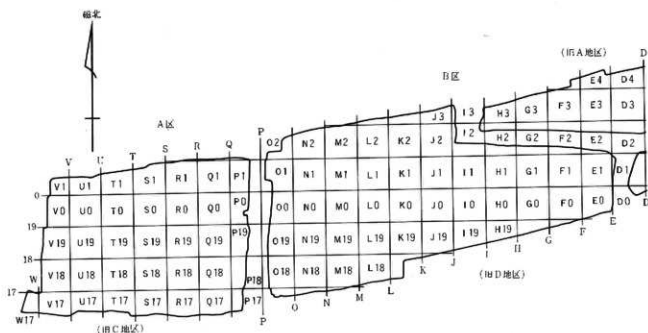
第1図 方位の凡例

1985年度は辻原台地の残りの高速道路建設用地の試掘調査を、前記の方法を基本としながら調査坑（トレンチ）を併用して同じく手掘りでおこなった（概報2、P21～24）。その結果、過去の耕地整理による部分的な削平にもかわらず、各時代の遺構・遺物の存在が明らかとなり、次年度以降順次本調査をおこなうこととなった。

本調査 1986年度に旧A地区（B区の一部）と旧B地区（C区の一部）の本調査を開始した。表土を重機で削いで遺構検出をおこない、切り合い関係と遺構の埋没土の質と色調を検討したのち、ピットは半苺、土壌は土層観察用土手を一本、竪穴遺構等の大型遺構は土手を十字に残して、手掘りて掘り下げをおこなった。また遺構は検出順に番号を与え、ピットは10m方眼の調査区毎に番号をつけた。なお各地区には実測用に10mの方眼を組み、南北方向を磁北にあわせた。したがって真北とは約6度、第1図のようにずれることになる。以後の調査ではこの10m方眼を東西に拡張した。その結果、第2図のように調査区が設定された。この調査区には南北線にアルファベットを、東西線にアラビア数字を与え、その交点の南西方眼をB5調査区というように呼ぶことにした。実測は原則として20分の1実測図を作成し、遺構によっては10分の1・5分の1実測図を作成した。写真は35ミリカメラでモノクロ・カラースライド撮影をおこない、遺構によっては6×9大型カメラを併用した。

1987年度には旧C地区（A区）、旧D地区（B区の大部分）、旧E地区（C区の大部分）、旧F地区（D区）の本調査を、前年度と同じ手続きでおこなった。さらにC区ではいわゆる「豪族居館」遺構の発見により、居館周辺のトレンチ調査と遺構検出調査（C区拡張区A）をおこなっている。また調査区全体の空中写真撮影をあわせておこない、C区-8号竪穴住居跡では、山田拓伸（宇佐風上記の丘歴史民俗資料館）がベッド状遺構の炭化木材の取り上げをおこなった。

補足調査 1988年度には「豪族居館」の保存工事の一環として、1号方形環溝の一部の調査（C区拡張区B）とC区の空中写真測量をおこなった。



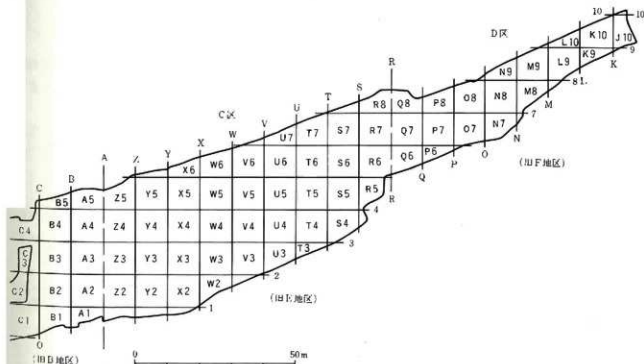
本調査中、第1章第1節4)で前記した調査委員・調査員以外の、現地で調査の方法・遺構遺物の検討と評価についてご助言をいただいた方々と調査に協力いただいた機関は以下のとおりである。明記して謝意を表したい。

(アイウエオ順・現職)

岡村道雄(文化庁) 小倉正五(宇佐市教委) 梶原秀彦(日田考古学同好会) 片岡宏二(福岡県小郡市教委) 河津修吉 菊田徹(臼杵市役所) 栗田勝弘(大分県教委) 坂本嘉弘(大分県教委) 佐田茂(佐賀大学) 佐藤良二郎(宇佐市教委) 高倉洋彰(西南学院大学) 高島忠平(佐賀県教委) 武行邦男 武末純一(福岡大学) 辰巳和弘(同志社大学) 田中常雄 王永光洋(大分市教委) 土居和幸(日田市教委) 中村勝 中山晋(栃木県教委) 西別府元日(広島大学) 西谷正(九州大学) 故丹羽茂(前福岡県豊前市教委) 橋本博文(新潟大学) 原田勝宏(日田市文化財調査委員) 原田昭(大分県教委) 林一也(宇佐市教委) 広瀬和雄(奈良女子大学) 牧尾義則(大分県教委) 三辻利一(奈良教育大学) 宮小路宏 八重津清 綿貫俊一(大分県教委)

第2節 整理の経過

遺物整理作業は、本調査中に現地で遺物洗浄と注記をおこなったが、すべての遺物は終了しなかった。1995・96年度に大分県教育庁文化課文化財資料室で遺物の洗浄・注記と接合作業をおこない、同時に遺物の実測・観察作業にはいった。1997・98年度は遺物の実測と復元、遺構図の編集と浄書をおこなった。遺物の接合には、高森美恵子、高橋孝子、上崎弘子があたり、復元は田北節子があつた。また報告書の作成は田中の指揮のもと、遺物の観察・実測は久住猛雄、土崎、麻生廣美、東冬子、田中がおこない、浄書は今泉正子、金丸涼子と麻生がおこなった。編集作業には、土崎、麻生、金丸、大倉久美子、二宮恵子、後藤京子の協力をえた。遺物の写真撮影は、文化財写真家の長谷川正美氏があつた。



第2図 小迫辻原遺跡、A～D区調査区設定図(1/120)

鉄器は宇佐風上記の匠歴史民俗資料館においてレントゲン撮影をおこない、実測の参考にした。また炭化種実の同定はパリノサーベイ社がおこない、B区-3号竪穴住居跡出土の鏡片の鉛同位体分析は半尾良光・鈴木浩子（東京国立文化財研究所）氏がおこなった。また鏡片に付着した赤色顔料の分析は本田光子（別府大学）氏がおこなった。この3件の自然科学的分析の報告は、本報告書には掲載せず、最終巻に報告する予定である。

整理報告書作成中、遺物の検討と評価についてご助言いただいた方々は以下のとおりである。明記して謝意を表したい。（アイウエオ順・現職）

江見正美（岡山県教委） 大久保徹也（徳島文理大学） 久住猛雄（福岡市教委） 佐々木憲一（国際日本文化研究センター） 高橋敏（大分県立歴史博物館） 土居和幸（日田市教委） 牧尾義則（大分県教委） 宮内克己（大分県教委） 村上恭彦（愛媛大学） 山本悦世（岡山大学） 行時志郎（日田市教委） 吉田寛（大分県教委） 総貞俊一（大分県教委）

第3節 報告書の凡例

- 1、本調査地区の名称は本調査着手順にA～F地区と名付けたために、調査地区名称がモザイク状になった。整理時に西からA・B・C・D区と改めた。その関係は第2図に示した。
- 2、調査地区の名称変更にもなって、遺構の名称を区ごとに改めた。各区本文末尾の一覧表・観察表に旧名称の欄を設けて、対応関係を示した。
- 3、各遺構は「B区-5号竪穴住居跡」のように表記し、本文中や挿図・一覧表で省略する場合には「B-5住」のように表現する。したがって、掘立柱建物・土壇・墓・溝も「B-4建物」「C-3上壇」「D-1墓」「A-6溝」のように省略形をもちいる。
- 4、挿図中に書き込んだ方位はすべて磁北である。真北との関係は第1図ようになる。
- 5、遺構の方向は、長軸線をもとに計測し、方位角で表現した。第1図参照。
- 6、挿図の遺構の縮尺は、竪穴住居跡が60分の1、その遺物出土状態図は40分の1を原則とした。掘立柱建物跡は80分の1とし、上壇は30分の1と40分の1とした。墓は20分の1、溝は100分の1を原則とした。また遺構配置図はすべて300分の1で統一している。
- 7、挿図の遺物の縮尺は、土器が4分の1、石器が2分の1ないし3分の1、鉄器・鏡は2分の1に統一した。
- 8、なお竪穴住居跡の床面積は、竪穴の下バをプランメータで計測した。
- 10、（一図版5）とした見出しのあとの矢印の指示は、『写真図版編』の番号である。
- 11、一覧表中の土器の分類は、平面形を基本に断面形と底面の形状をもとに分類したものである。
- 12、本書でもちいる「古墳時代前期前半」という時期は、庄内式および布留式古段階の上器使用期で、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半とされる時期である。表現の煩瑣をさけるために古墳時代前期前半という表現に統一した。したがって上器もすべて土器と表現している。
- 13、観察表中の土器の分類は本文中で適時、解説をおこなっている。
- 14、観察表中に胎土の項目で「搬入」と表現した土器は、必ずしも遠隔地を意味せず、小迫辻原遺跡で大多数を占める在地胎土と異なることを意味する。したがって近隣地域からの搬入の可能性を含めて考えている。
- 15、観察表中の弥生式土器の底部表現（a手法等）は、田崎博之氏の須玖式土器の研究によった。
- 16、土器の分類は、久住猛雄氏の一連の古式土器研究の成果をもとにしたものである。その内容は適時本文中でふれる。

第4章 A区の記録

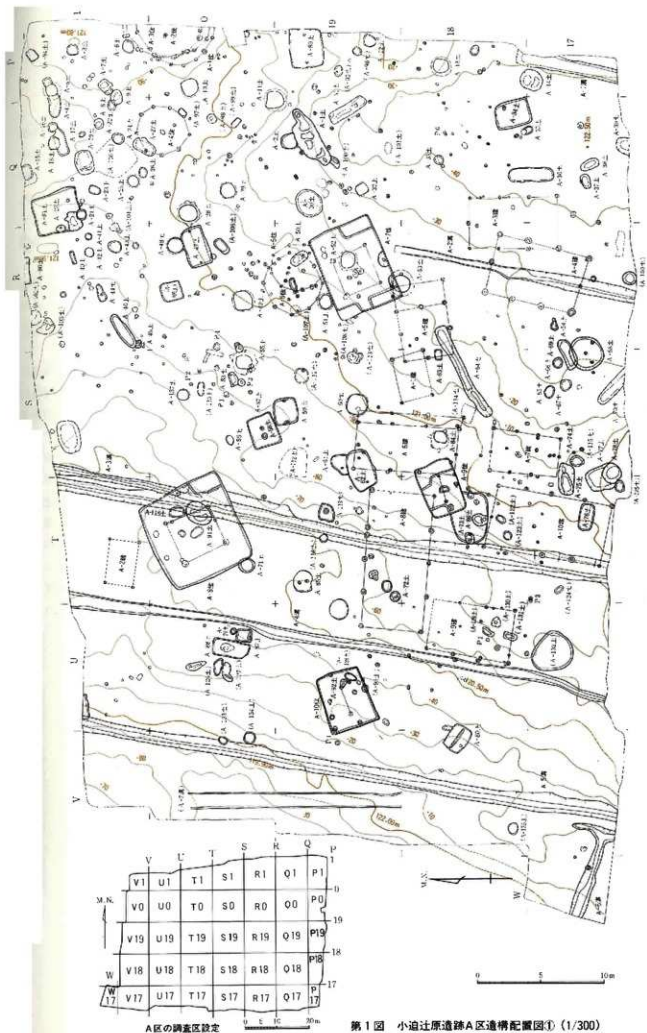


A区作樂風景





▲ 瓦舍群



A区の調査区設定

第1図 小泊辻原遺跡A区遺構配置図①(1/300)

第1節 A区の調査概要（カラー図版、第1図、写真1・2 →空撮図版1）

A区は本調査時の旧C地区である。高速道路調査区のもっとも西端の調査区で台地の西端にあたる。現状は畑で、A区の南東部がもっとも高く、北と西に向かって次第に低くなる。しかし北東部分では本来伸びていたはずの近世の畑地境界溝が途中で削平されて途切れている。したがって北側に低くなる現状の地形は、1960年代の耕地整理によるもので、近世までは東部が全体として高く、西に向かって次第に低くなる地形であったと推定される。その東西の比高差は2m強である。近世の畑地開発や近年の耕地整理で、高い部分特に北東部分が削られているが、西に低く東に高い地形の基本はそれほど変化していないと推定される。ただし弥生時代や古墳時代前期の地表面は検出面から50cm以上高かったことは遺構の削平状態からみて明らかである。

A区では現地地形の上面で、明らかに自然が生み出した凹みや現代の穴を除いて、竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡10棟、土壇137基、溝7条とピット多数を検出した。このうち以下に報告する遺構は、出土遺物・切り合い関係・土質等により時期の判定が可能であったもののみである。文章のない遺構は章末の遺構一覧表を参照された。い。（第1～4表）

A区の遺構の時期別分布の特徴は、①この区でのみ縄文時代の遺構が検出されたこと。②弥生時代前期後半から中期初頭の遺構がまとめて検出されたこと。③散漫ながら弥生時代中期後半と古墳時代前期前半の遺構が存在すること。④中世の掘立柱建物群がまとめて検出されたこと。⑤近世の畑地境界溝が多く存在する、などである。小迫辻原遺跡の中で、遺構の密集がもっとも激しい場所であった。しかし以上の時期以外の時代の遺構は全く検出されないのは、ほかの地区でも同様であり、特定の歴史的条件が揃ったときに遺跡が形成されるという特徴を一方で備えている。

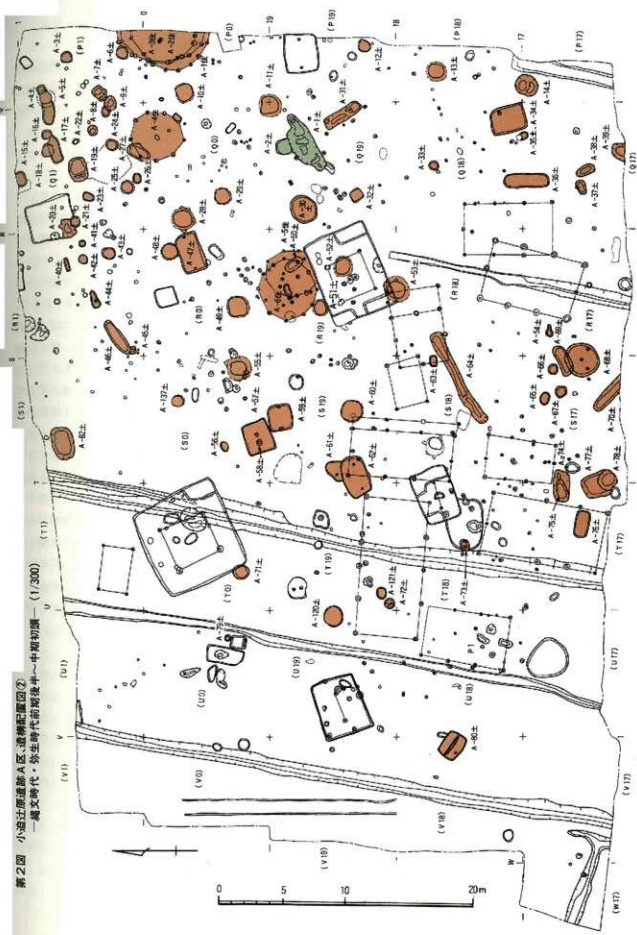


写真1. A区南半遺構検出状態（北東から）



写真2. A区北半遺構検出状態（東から）

解之四 小治土原遺跡A区遺構配置圖②
 一屬文時代・弥生時代の後半～中層初頭一 (1/300)

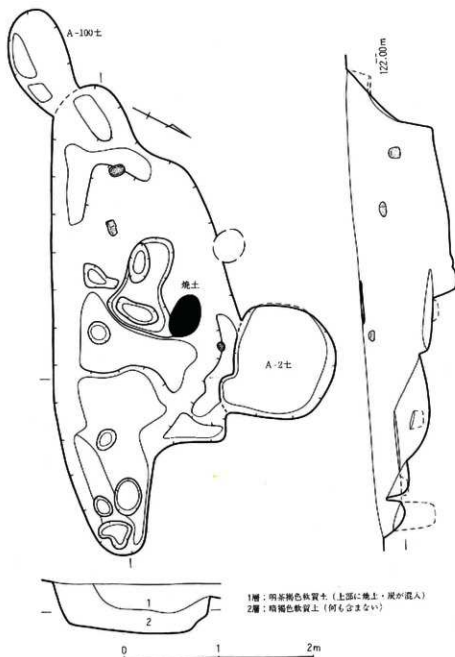


第2節 縄文時代 (第2図)

小迫辻原遺跡では縄文時代、特に後期あるいは晩期の小規模な包含層が点々と存在することが、その後の日田市の調査により判明している。しかし県が調査したA～D区では包含層の検出はなく、唯一このA区のQ19調査区で後期末の三万田式期の土壌が2基みついている。それは、A区の中でも最も高い位置に掘りこまれていた。

1) 土壌 (第3・5表)

A区-1号土壌 (第3図 図版1)



明確な形をなさない大型の土壌で、規模は長さ498cm・幅200cm、底面は凸凹して定まっていない。数度にわたる掘削行為の繰り返しの結果であろう。実際、検出時には二つの土壌と考えた。深さは検出面から101cmほどである。A-2土壌に切られているので縄文時代の遺構と推定した。埋土は二層に別れるが下部の2層には遺物はなく、上部の1層に拳大の礫と炭それに焼土の集中箇所が見つかり、人為的な土壌と判断した。土壌の具体的な機能を推定する手がかりはなかった。(旧C地区土壌78・79)

第3図 A区-1号土壌 (1/40)

A区-2号土壇（第4・5図 →図版1・29）

A-1土壇をわずかに切って掘りこまれた小型円形の土壇である。規模は長軸長128cm・短軸長107cm、底面は平坦で深さは検出面から70cmほどである。袋状ではなくほぼ垂直に壁がおちる壑穴状の断面形である。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は三層に別れるが、全体に小さな炭片と小礫を含み、土器の破片が混ざりこんでいた。貯蔵穴として使用したのち生活廃棄物が捨てられて埋没したと思われる。

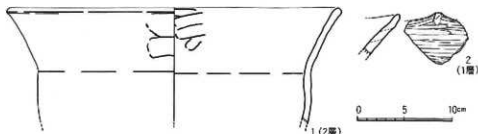
1は縄文時代後期末の三万田式の粗製深鉢で、2は浅鉢である。

（旧J地区土壇80）



- 1層：明茶褐色硬質土
（小礫を含む）
2層：暗茶褐色軟質土
（炭多く含む）
3層：明茶褐色砂質土
（炭を少し含む、やわらかい）

第4図 A区-2号土壇（1/40）



第5図 A区-2号土壇出土遺物（1/4）

第3節 弥生時代前期後半～中期初頭（第2図）

この時期にあたる遺構はさきわめて多く、堅穴住居跡6軒・土壇82基を確認し、ピット1本を掲載した。この時代のピットはまだ多いであろうが、土器を含まないためにはかの時代のピットと区別できなかった。

遺構の配置は、第2図をみると東北部から南部中央にかけて太い帯状に遺構が密集するように一見みえるが、この現象は後世の削平による遺構の消失によるものである。つまり南東部の遺構が少ない場所は、調査区内でもっとも高い場所で、後世の畑地化に際して一番影響を受けやすい場所にあたる。またA区の西半分はこの時代の遺構が少ないのは、西にいくにつれて遺構の深さが総じて浅くなる傾向から考えて、削平をかなり受けたために浅く掘られた遺構が消失したので少なくなったと推定される。しかし最も後世の削平を受けたと推定した東北部では、円形壑穴の壑穴部分まで全く削平されているにもかかわらず、遺構が最も密集する。したがって東北部には本来この時代の遺構がほかの場所に比べてもっとも密集していたと考えられる。

なお弥生時代前期後半から中期初頭としたこの時期は、北部九州の土器編年と比較した場合、次の三期に編年できると考えられる。すなわち板付Ⅱ式の新しい段階、前期末段階、中期初頭の城ノ越式段階におおよそ対応する。以下の本文中では板付Ⅱ式の新しい段階にあたる時期を「弥生時代前期後半」、前期末段階を「弥生時代前期末」、中期初頭の城ノ越式段階を「弥生時代中期初頭」と表現することにする。

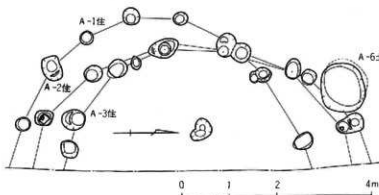
1) 竪穴住居跡 (第1・5表 →空撮図版2上)

6軒検出された竪穴建物はいずれも竪穴部分が削平されているため、柱穴群の配列をもとに復元した。なかでもA-1住・A-2住・A-3住の三軒と、A-5住・A-6住の二軒は位置をずらしながら重複している。いずれも竪穴建物の拡張ではないので、一定の時間をおいてあえて同一の場所に竪穴建物を建設した小集団(生活をともにする世帯)の存在が想定できる。竪穴建物を重複してたてたこの小集団はみずからの系譜を意識し、同一場所に再び居住することで、その系譜を集落内の他の小集団に誇示したと思われる。

またA-1・2・3住の三軒はいずれも大型の円形竪穴住居跡と考えられ、同一の場所にたてる際の竪穴の規模が変わらない点も興味深い。

A区-1号竪穴住居跡 (第6・8図 →図版1)

C区の東端で西半分のみ検出された。A-2住・A-3住と重複し、柱穴6の切り合いから三軒のなかでも最初に建設された竪穴である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物に復元される。柱穴を8本確認した。柱穴の数はきわめて多い。柱穴1-8間で630cmをはかり、本来床面積が50㎡を越える大型の竪穴であったと推定される。



第6図 A区-1~3号竪穴住居跡とA区-6号土壇 (1/80)

竪穴の時期は、柱穴3から小土器片が出土してこの時期に属することは判明したが、細かい時期の特定はむずかしい。あとに作られたA-2住の出土土器(第7図)からみて、弥生時代前期後半~末の間と推定される。(旧C地区竪穴住居9)

A区-2号竪穴住居跡 (第6~8図 →図版1)

A-1住と同じく西半分のみ検出された。A-1住・A-3住と重複し、柱穴4の切り合いから三軒のなかで二番目に建設された竪穴である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物と復元される。柱穴は6本確認した。柱穴の数はこれもかなり多く、深さはA-1住より全体に深く掘られ、高さも揃っている。柱穴1-6間で660cmをはかり、本来の竪穴部分の床面積は同じく50㎡を越える大型の竪穴と推定される。また柱穴1の途中に角礫が柱穴をふさぐように検出された。柱抜き取り後に意図的に入れた可能性がある。

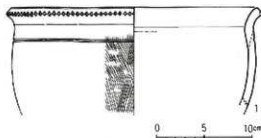
竪穴の時期は、柱穴6から柱抜き取り後に混ざりこんだと推定される1の如意形口縁の甕Aの破片からみて、弥生時代前期後半~末の間と推定される。(旧C地区竪穴住居15)

A区-3号竪穴住居跡 (第6・8図 →図版1)

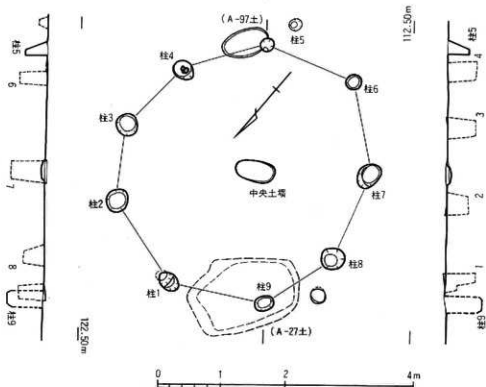
A-1・2住と同じく西半分のみ検出された。A-1住・A-2住と重複し、柱穴5と7の切り合いから三軒のなかで最後に建設された竪穴である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物と復元される。柱穴は7本確認した。深さはA-2住と同じで高さも揃っている。柱穴1-7間で640cmをはかり、竪穴部分の床面積はやはり50㎡を越える大型の竪穴と推定される。

竪穴の時期は、切り合い関係と柱穴3から出土した壺形土器の小片から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区竪穴住居8)

またA-6土壇はA-1~3住のいずれかの屋内貯蔵穴であった可能性が高い。



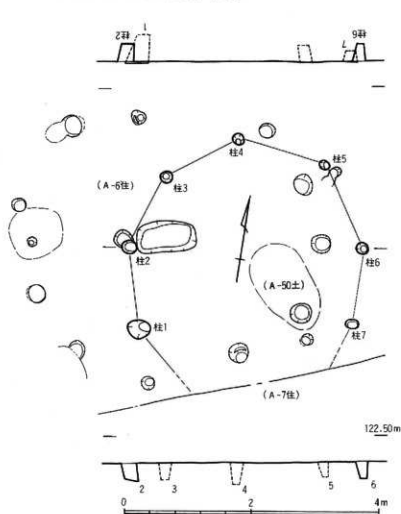
第7図 A区-2号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)



第9図 A区-4号竪穴住居跡 (1/60)

A区-4号竪穴住居跡 (第9図 → 図版2)

A-1~3住の西隣に位置し、柱穴がA-97土壌を切り、A-27土壌に切られている。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から9本柱の円形竪穴と復元される。中央に焼土を含む暗褐色土が充満した長円形の中央土壇がある。柱穴間の径は平均450cmで、本来の床面積は30㎡前後の中型の竪穴であったと推定される。

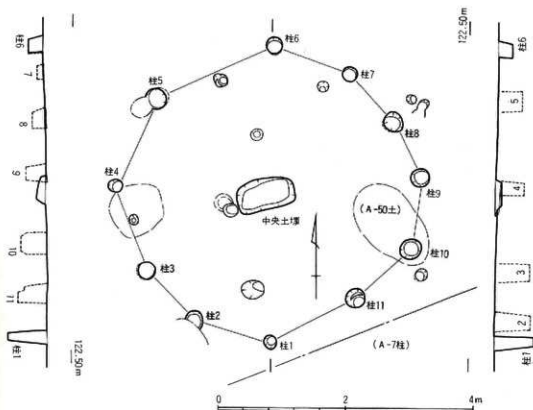


第10図 A区-5号竪穴住居跡 (1/60)

柱穴から土器小片が出したが、時期のわかる遺物はない。竪穴の時期は、柱穴9を切ったA-27土壌以前で、その土壌の時期は弥生時代前期末と推定されるので、竪穴の時期はそれ以前である。またA-1~3住と同時に存在したとは考えられないほど近接する。(旧C地区竪穴住居10)

A区-5号竪穴住居跡 (第10図 → 図版2)

C区の中央近くにA-6住と重複して建設された竪穴建物である。A-6住との直接の切り合いはなく時期の前後関係は不明である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から円形竪穴建物と復元される。柱穴は7本確認した。南部をA-7住に切られている。柱穴間の径は平均410cmで、本来の床面積は30㎡前後の中型の竪穴だと推定される。柱穴から出土した土器小片からこの時期に属することがわかる。(旧C地区竪穴住居11A)



第11図 A区-6号竪穴住居跡 (1/60)

A区-6号竪穴住居跡 (第11図 →図版2)

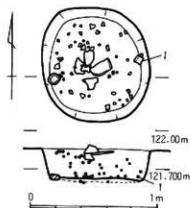
A-5住と重複した建設された竪穴建物である。竪穴部分は削平され、柱穴の配列から11本柱の円形竪穴と復元される。中央に炭片と焼土を含む暗褐色土が充滿した長円形の中央土壇がある。柱穴間の径は平均510cmで、本米の床面積は40㎡前後の大型の竪穴であったと推定される。出土物はないが、柱穴10に切られた弥生時代前期末のA-50土壇より後で、竪穴の時期はその土壇より新しい弥生時代前期末から中期初頭になる可能性もある。(旧C地区竪穴住居11B)

2) 土壇 (第3・5表)

平面形からみると①小型円形(A)、②大型円形(B)、③小型方形(A5)、④長円形(C)、⑤船底形(D)、⑥長方形(E)、⑦形の定まらない不定形(F)の7種類に大別されるさまざまな遺構を含めて、土壇と一括した。また以上の土壇は断面形からみて底が広がる袋状と壁が真っすぐに落ちる竪穴状と、底面が丸い皿状に大別される。

A区-3号土壇 (第12・13図 →図版2)

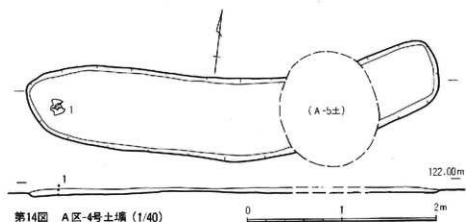
①調査区検出の小型円形竪穴状の土壇で、規模は長軸長98cm・短軸長85cm、底面は平坦で深さは検出面から26cmほどである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は単一層で、炭片と焼土・小礫・土器片を多量に含む暗褐色土である。5cm大の黄色土ブロック(基盤層の上)がかなり含まれるので、貯蔵穴として使用したのち生活廃棄物が捨てられて短期間に埋没したと思われる。遺物は一括廃棄状體であり、大型の破



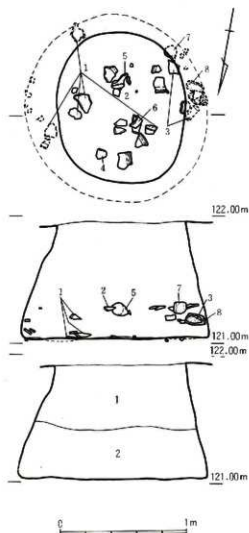
第12図 A区-3号土壇 (1/30)



第13図 A区-3号土壇出土物 (1/4)



第14図 A区-4号土坑 (1/40)



- 1層：暗褐色砂質土（灰・磁土・小土器片・黄色粘土ブロックを多く含む）
 2層：暗褐色砂質土（大型土器片を多く含む、灰・焼土・黄色粘土ブロックも多い）

第15図 A区-5号土坑 (1/30)

片も含まれていたが、保存状態が悪く実測できたのは1の底部部のみだった。この土器などから土坑の埋没時期は弥生時代前期末とみられる。（山C地区土坑17）

A区-4号土坑
 （第14・16図 → 図版3・29）

P1～Q1調査区
 検出の長い船底形の土坑で、東西にやや

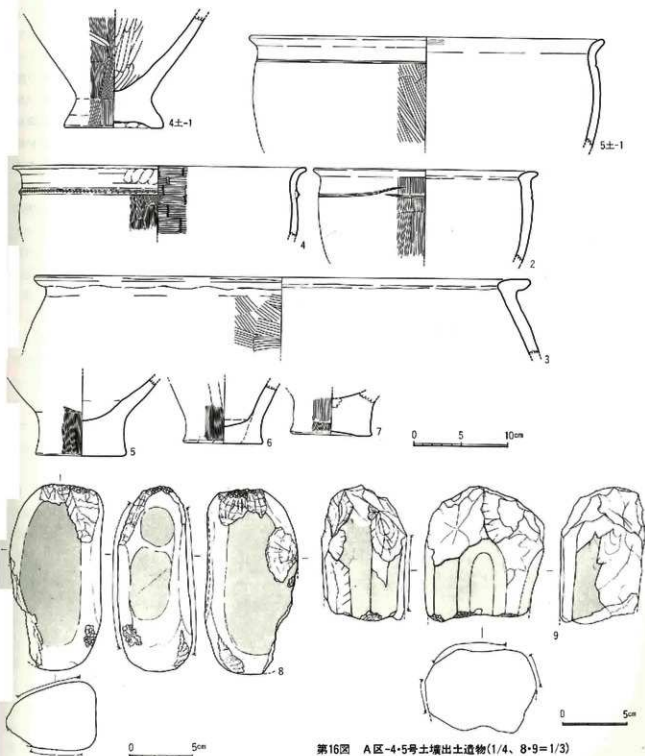
曲がりながら伸びて、底は皿状で浅い。A-5土坑に切られている。規模は長さ436cm・幅73cm、深さは検出面から7cmほどである。西端の底部に接して第16図1の壺の底部片のみが横倒して出土した。この土器から土坑は弥生時代前期末ごろと考えられる。（山C地区土坑19）

A区-5号土坑（第15・16図 → 図版3・29）

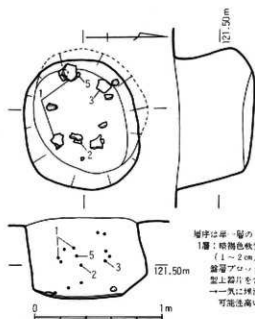
P1調査区で検出された大型円形袋状の土坑で、A-4土坑埋没後に掘りこまれている。その形態からみて貯蔵穴として作られたものと推定される。規模は長軸長150cm、短軸長140cmで、検出面からの深さは93cmである。埋土は二層に分かれ、2層下部の底面上に土器片を中心に灰・焼土・小礫を多量に含む遺物の一括廃棄行為が行なわれている。同時に埋土全体が二層にしか分層できないことと、多量の黄色土ブロックを含む点から、遺物の一括廃棄をおこなうと同時に一気に埋め戻した可能性が高い。そして基盤層の上層である黄色土ブロックを含む点からみて、埋め戻す際には別な遺構が掘られ、その排土で埋められたと考えられる

2層下部の一括廃棄遺物には土器と石器があり、弥生土器は壺ばかりである。1・2・3は如意形口縁の系譜を引く壺A、4はそれに尖唇をはりつけ刻目を施す壺Bである。3は大型品で沈線がない。5・6・7は1～3の底部と推定される壺の底部である。石器として、8は端部に敲打痕をもち、両面が磨れた磨石で一部欠けている。9は半分に折れた大型の砥石である。土器・石器ともに破損しており、土器は使用の痕跡が明らかなのが多いので、この貯蔵穴を埋め戻す際にすてられた生活廃棄物の一群と評価できる。廃棄の時期は壺Aの口縁部形態と、底部の形態か

らみて弥生時代中期初頭になるだろう。(旧C地区土壇18)



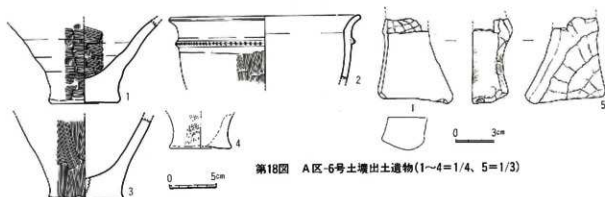
第16図 A区-4・5号土壇出土遺物(1/4、8・9=1/3)



第17図 A区-6号土壌 (1/30)

A区-6号土壌 (第6・17・18図 →図版3・29)

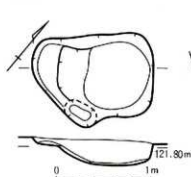
P1調査区で検出され、重複するA-1~3住に近接した小型円形の土壌である。西北半の片側のみが袋状に張り出した特異な形態をしている。袋の方向がA-1~3住の遠心方向と一致するので、そのいずれかの円形竈穴住居の柱並びと壁の間に設けられた屋内貯蔵穴の可能性が高い。規模は長軸長105cm、短軸長88cmで、検出面からの深さは64cmである。埋土はその深さにもかかわらず分層できない単一の暗褐色土で、大きく割れた土器片と1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含む。遺物は一括して土とともに短期間に廃棄されている。1は竈の底部片、2は甕Bの口縁部、3・4は甕の底部である。5はよく研ぎこまれた頁岩製の砥石の破片である。土器・石器ともに破損し、土器は使用痕跡の明らかなものが多いので、この屋内貯蔵穴を埋め戻す際にすてられた生活廃棄物の一群であろう。この土壌の廃絶時期は、土器の特徴からみて弥生時代前期末で、A-2住かA-3住にともなった可能性が最も高い。(旧C地区土壌20)



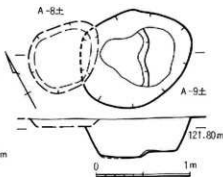
第18図 A区-6号土壌出土遺物(1~4=1/4、5=1/3)

A区-7号土壌 (第19・21図 →図版3)

P1調査区で検出された不定形で底部に段のある皿状の土壌である。規模は長軸長133cm、短軸長86cmで、検出面からの深さは29cmである。埋土は単一の炭屑・土器片を含む暗褐色土で、黄色土ブロック(基盤層の上)がかなり含まれる。生活廃棄物を捨てて埋没したと思われる。1は高坏の口縁部で、その形態から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土壌21)



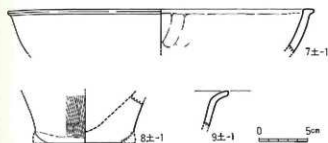
第19図 A区-7号土壌(1/40)



第20図 A区-8-9号土壌(1/40)

A区-8・9号土壌 (第20・21図 →図版3)

Q1調査区で検出された、どちらも不定形で小型の土壌である。A-8土壌をA-9土壌が切っている。A-8土壌からは1の甕底部片が、A-9土壌からは1の鉢の口縁部が出土した。土器の時期から弥生時代前期末と考えられる。(旧C地区土壌23・22)



第21図 A区-7-8-9号土坑出土遺物(1/4)

A区-10号土坑(写真3、第22・23図 → 図版3・29)

P0調査区で検出された大型円形袋状の土坑である。その形態からみて貯蔵穴として作られたものと推定される。規模は長軸長154cm、短軸長140cmで、検出面からの深さは52cmである。

土坑の底部には貯蔵穴として使用中に堆積したと思われる8層が薄く広がり、その上に6・7層が西側から一方的に流れこんだ状態で堆積し、その後には土器片をかなり含む1～5層が堆積している。埋没状態は土層のなかに炭片や黄色土ブロックをかなり含む点から、短期間に埋められたものであろう。土器はいずれも2～4層中から破片となつて散在している。1・2・3は、突帯をもつ壺B、4・5・6も壺の口縁部と考えられる破片で、いずれも刻目を施す。7も壺の底部片である。廃棄された土器の殆どが壺の破片であることと、壺でありながら二次加熱を受けて、赤変したり煤が付着している。また、8は6層出土の完形のサヌカイト製打製石鎌である。以上の土層と遺物はこの貯蔵穴を埋め戻す際にすてられた生活廃棄物の一群と評価できる。廃棄の時期は壺Bの形態からみて弥生時代前期末になるだろう。(IFC地区土坑49)

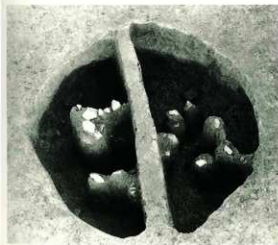
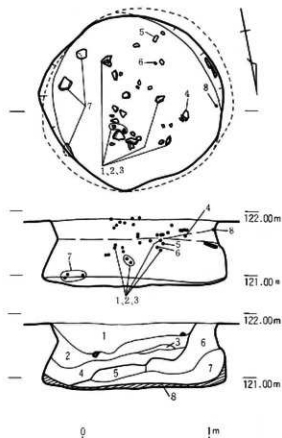


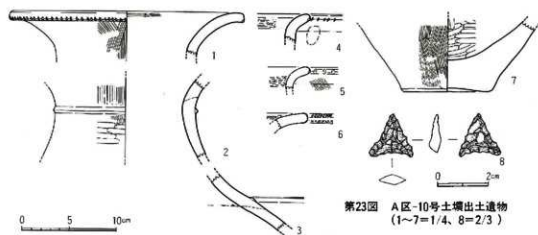
写真3. A区-10号土坑遺物出土状態(西から)



- 1層: 暗茶褐色土(炭土・炭片含む、黄色土ブロック多い)
 2層: 暗茶褐色土(炭土・炭片含む、黄色土ブロック少し含む)
 3層: 暗茶褐色土(炭少しと黄色土ブロック多く含む)
 4層: 暗茶褐色土(炭不多く、黄色土ブロック少し含む)
 5層: 暗茶褐色土(炭土・炭、黄色土ブロック少し含む)
 6層: 暗茶褐色土(炭片と黄色土ブロック少し含む)
 7層: 暗茶褐色土(炭片と黄色土ブロック少し含む)
 8層: 灰色がかった粘質の黒炭褐色土

1～5層が土器片を多く含む。

第22図 A区-10号土坑(1/30)



第23図 A区-10号土坑出土遺物
(1~7=1/4, 8=2/3)

A区-11号土坑 (写真4、第24~26図
図版3・29~31)

Q19交点で検出された大型円形の袋状土坑で、壁の側面に数箇所の深浅さまざまな穴が開られている(第24図)。規模は長軸長193cm・短軸長178cm、底面は平坦で、深さは検出面から142cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。なお底面中央には浅い皿状の凹を認めたが、袋状貯蔵穴でしばしばみられる中央ピットほどははっきりしていない。

使用状態は、まず底面に堅くしまった19層が形成される。この層は使用中に繰り返し踏まれて形成された最初の床面形成層で、遺物はまったく含まない。次に底面の壁ぎわに18層が堆積し、その上面が堅くしまってふたたびボールの底状の二次床面が形成されている(A層)。ところでこの18層は黄褐色土で、この土壌が攪りこまれた基盤の土そのものである。おそらく壁の側面に穿たれた穴からの排出上であろう。つまり壁に穴をほってその土で床を作る改修がおこなわれているのである。側面の穴がどのような機能をもつか不明だが、このような改修はこの時期の大型貯蔵穴ではしばしば認められ、弥生時代中期後半の貯蔵穴でも知られている。なお18層中からは土器の細片とともに27と29の完形の磨石が検出されている。まだ使用に耐える石器であり、埋納の可能性はある。

17層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は中位と下位に二度の遺物一括廃棄が認められることである。まず下位に黒褐色の16・17層が堆積する。この層では炭片と土器片が多量に検出された。1・2・4・5・7・11・12の甕、15~17・21~22・24の甕、20の鉢などが、いずれも破片で出土し、完形に復元できるものはなかった。甕の大部分には煤が付着して被熱した使用痕が残り、日常の生活用品を一括廃棄したものと考えられる。



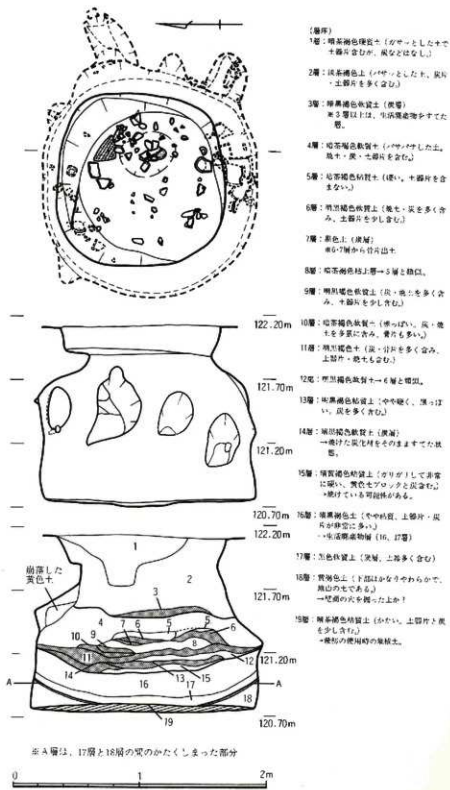
写真4、A区-11号土坑の側面の穴(西から)

次の中位の15層から4層までは5層をなして堆積する。最初に廃棄された15層はガリガリと非常に堅く、火を受けた土が持ち込まれた可能性がある。その上の14層は炭化材をまとめて捨てたような炭層である。13層から5層までは少量の層単位が積み重なったもので、中央が次第に高くなっていく様子が見てとれる。おそらく上層の上から投棄を繰り返したものであろう。最後にバサバサした4層が厚く堆積して、中位の遺物一括廃棄が終わっている。その中は全体に炭化材や炭片・焼土片を多量に含むほかに、13層では炭化した微量のマメ類と少量のコナラ属のどんぐりが出土し、10・

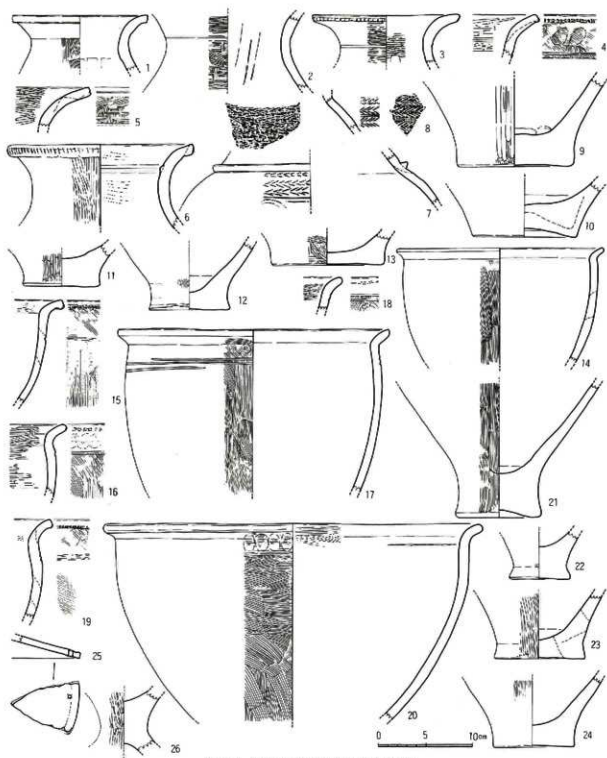
11層では細片化した動物の骨片がかなり検出された。いずれも食物残渣と推定される。さらにそれに伴って3・6・9・10・13の壺、14の甕を破片で検出した。壺が多いのが特徴で、甕には使用痕が明瞭である。以上の中位の廃棄は、日常の食事の残りの投棄がこの貯蔵穴の所有者によっておこなわれた結果とみる解釈も可能であるが、大量の廃棄が中間層を挟まずに累積する点と、廃棄された土器の器種構成も壺が多く甕が少ないことからみて、多量の食事を用意して壺を中心に使用した非日常的な短期間の行為の結果である可能性が高い。後者の場合はおそらく一邸穴住居に暮らす世帯の規模をこえた参加者によるもの、例えば住居改築の際の参加者全員による祭祀と共食などとなる。

即位の最後は、炭層の3層が投棄されて、軟らかい2・1層が堆積して終る。遺物は少なく8の壺小片と28の磨石の破片が含まれるのみである。遺物の少なからみて、中位の遺物一括廃棄の後、埋め戻された可能性がある。

出土土器には金雲母を含む胎土を使用した搬入品が多い。下位の4の壺・15・17・20の甕と鉢、中位の9の壺、18の甕などがそれにあたり、在地品と共存する。また6～8のような周防・豊前系の壺を含む他に、甕Aでは二条沈線がめだち、17には回転台を利用して螺旋状に施紋した二条沈線を認めた。中位と下位の間には廃棄の時期に大きな差はなく、土器全体からみて弥生時代前期末にあたる。(山C地区土層72)



第24図 A区-11号土層(1/30)

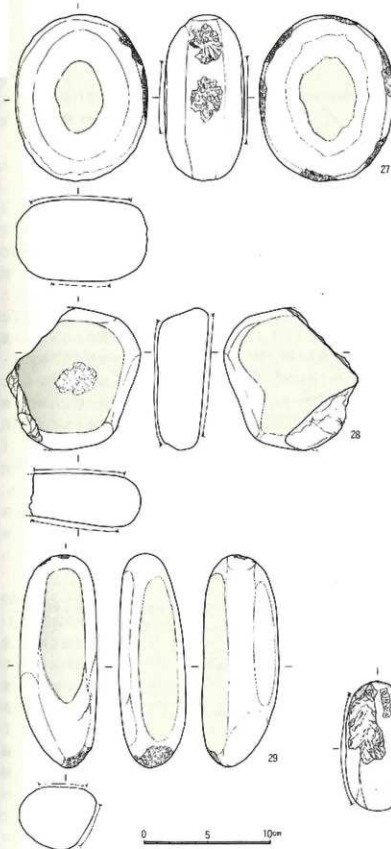


第25図 A区-11号土壇出土遺物①(1/4)

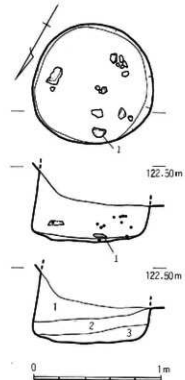
A区-12号土壇 (第27・28図 図版4・31)

P19調査区で検出された小型円形の袋状土壇で、規模は長軸長97cm、短軸長93cmである。底面はおおむね平坦で、検出面からの深さは56cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は三層に分かれ、2層に土器片・灰・焼土を多く含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。1の磨石は半分に割れた廃品のかたわれである。図示できないが土器の小片から判断して、

土壌の時期は弥生時代前期末とみられる。(旧C地区土壇75)

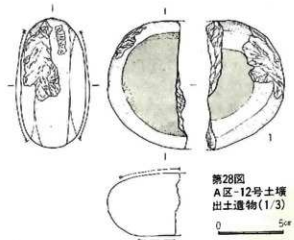


第26図 A区-11号土壇出土遺物② (1/3)



1層：暗褐色粘質土（黄色土小ブロック、炭・土器片含む）
 2層：暗褐色粘質土（粘土・土器片多く含む）
 3層：暗褐色粘質土（土器片・炭少し含む）

第27図 A区-12号土壇(1/30)

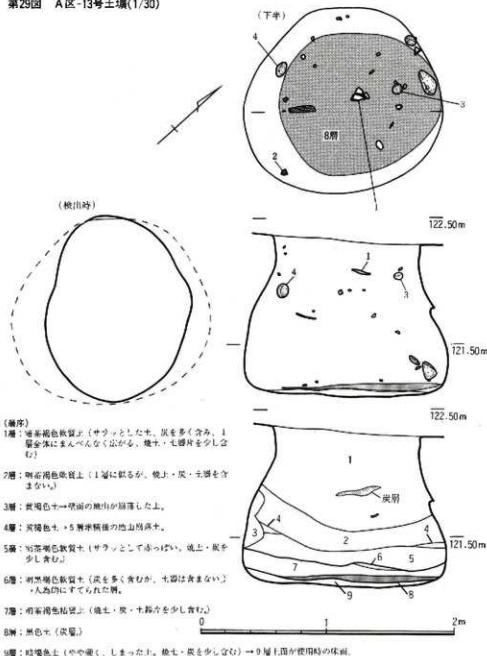


第28図
 A区-12号土壇
 出土遺物(1/3)

A区-13号土壌 (第29・30図) 図版4・31)

P18調査区で検出された大型円形の袋状土壌である。規模は長軸長158cm、短軸長145cmで、底面は平坦で、検出面からの深さは128cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。使用状態は、まず底面

第29図 A区-13号土壌(1/30)



(編序)

1層: 暗茶褐色軟質土(ヤラツとした土。炭を多く含む。1層全体にまんべんなく広がる。焼土・土器片を少し含む)

2層: 暗茶褐色軟質土(1層に似るが、焼土・炭・土器を含まない)

3層: 灰褐色土→壁面の地山が露出した。

4層: 灰褐色土→5層半前後の地山が露出す。

5層: 暗茶褐色軟質土(ヤラツとしてあつた。焼土・炭を少し含む)

6層: 暗茶褐色軟質土(炭を多く含むが、土器は含まない)・人為的に作られた層。

7層: 暗茶褐色粘質土(焼土・炭・土器片を少し含む)

8層: 黒色土(炭屑)

9層: 暗褐色土(やや硬く、しまった土。焼土・炭を少し含む)→9層土面が使用時の床面。

の炭片・焼土片・小礫・土器片が含まれている。1の壺破片と3・4の完形の磨石が1層に含まれていた。5層以上の堆積の特徴は、遺物量が少なく長時間かけて埋没した点にあり、おそらくこのA-13土壌付近は住居から離れた場所であったのであろう。

出土遺物のうち、1は頸部に三角突帯と羽状文を施す壺Bで、在地の胎土で作られたものである。2は小型の甕で、あるいは蓋になる可能性もある。3・4は地元に産出する安山岩製の磨石で、4は敲打痕が顕著である。いずれもまだ使えそうであるが廃棄されている。

土器からみて埋没の時期は弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌99)

によくしまった9層が形成される。この層は使用中に踏まれて形成された床面形成層で、炭・焼土を含むが、土器はまったく含まない。

7層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位に遺物一括廃棄が認められることである。その下位には黒褐色の8・7・6層が堆積する。特に8・6層は炭層である。これらの層では炭片と焼土片が多量に認められるほか小礫を含む。土器片は少なく2の壺底破片以外は細片である。貯蔵穴の使用停止直後に生活廃棄物を一括廃棄したものと考えられる。

5層から上は、埋没途中で壁が崩落して3・4層が堆積したり、全体に上質がさらっとした軟らかい状態であるから、比較的長時間かけて堆積が進行したものと推定される。少量

P17ライン上で検出された大型長円形の土壇である。規模は長軸長190cm、短軸長152cm、検出面からの深さは深いところで約50cmである。次のように土器焼成坑の可能性が指摘できる。

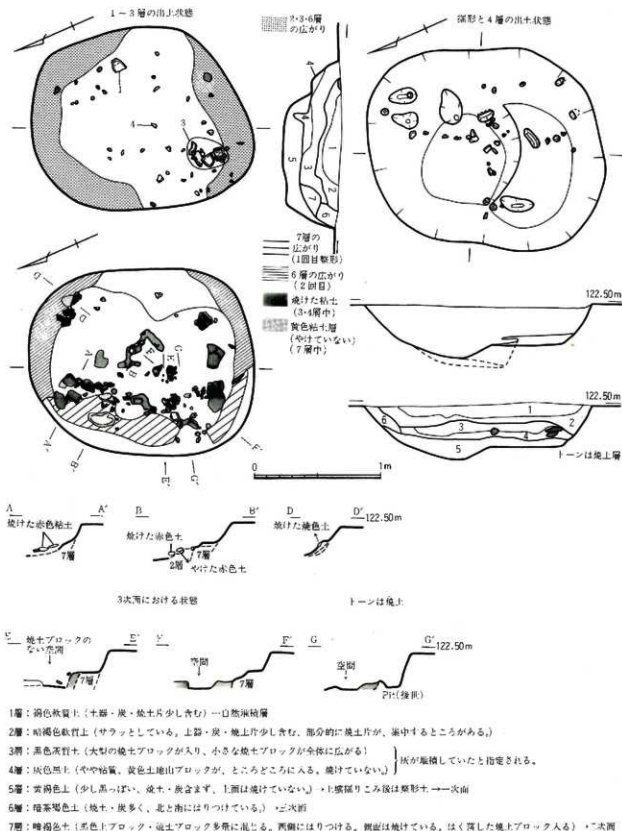
1. 土壇そのものの形状は断面皿状で底面に段がつく。いったん深く掘削して、すぐに基盤層の上である黄褐色土(5層)を埋めている。この層の上面は焼けておらず、また5層と4層の間に掘り直しの痕跡である破壊境界面が認められるので、おそらく二次面の炉床は次の炉床成形の際に掘りこられたものであろう。次の二次面は、上記したように底面を整えたのち、焼土ブロックを多量に含む暗褐色土(7層)を上壇の西面に貼りつけて炉床を形成する。その側面はよく焼けている。さらにその後南北西面に暗茶褐色土(6層)を貼りつけて三次面の炉床を形成している。以上都合二回の改修がおこなわれ、計三面の炉床をもつ焼成施設であることが判明する。

さて4層以上の堆積は二次面の廃絶状態を示している。まず3・4層は灰色がかった層で、拳大から人頭大の焼けた粘土の固まりと炭片が多量に含まれている(第31図中)。この粘土は、二次面の7層中に含まれる焼けていない黄色粘土と同質のものである。土器片は細片が少量含まれるのみで、3・4層は三次面の炉床使用中の堆積物とみられる。その中の焼けた粘土の固まり(焼土ブロック)を検出する際に、灰質土(3層)のつまる焼上ブロックのない径30cmほどの空間が何箇所か認められた。どうしてこのような状態になるのか不明だが、土器を握えるのに不都合はない形状である。

以上の三次面の炉床の廃絶状態からこの土壇の機能を推測すると次のようになる。①灰層中の焼土ブロックの粘土は、二次面の壁に貼られた7層にもちいられた粘土と同じものである。炉の残骸である可能性が高いので、二次面の炉の壁は本来まだ土にのびていたと考えられる。②土壇全体が炉として機能したことは明らかで、後世の削平を考慮すると、かなり深い位置に炉床があることになる。③さらに①のように壁体があったとすれば、内部に土器が置かれた場合、それは生活面からかなり下に位置することになる。そうすると火力の調節をするための焚き口施設が検出されないことが不自然である。このような構造の上壇が炊飯施設であるとするならば、焚き口施設は不可欠である。それがいないから、この土壇は炊飯施設ではなく、壁体を立ち上げて密閉する形式の一種の窯であった可能性が高くなる。金属関係の遺物が出土していない点を考慮すると、内部に土器が置かれたとしても不自然でない遺構の状態からみて、土器焼成坑であった可能性が最も高い。そうすると少なくとも3回の焼成がおこなわれたことになる。

第30図
A区-13号土壇出土遺物(1・2=1/4、3・4=1/3)

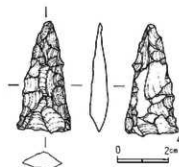
2層から上は伊奘絶後の堆積層で土器片・炭・焼土を多く含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。図示した遺物はこの1・2層から出土した。1は壺底部片、2の壺は使用痕が明瞭である。3の壺底部は、蓋かもしれない。いずれも日常品で、この土壇で焼かれた土器ではないと思われる。したがって廃絶後は生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。4は1層川上のサヌカイト製打製石鎌で、無茎平基重さ5グラムの大型



第31図 A区-14号土壌(1/30)



第32図 A区-14号土壇出土遺物(1~3=1/4, 4=2/3)



品である。土壇廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。

(旧C地区土壇110)

A区-15号土壇 (第33・34図 一図版31)

Q1調査区で検出された北の一部が調査区外につづく、大型円形の壁穴状の土壇である。規模は東西長129cm、南北長80cm以上で、検出面からの深さは48cmである。底面は平坦ではなく、中央がくぼむ。

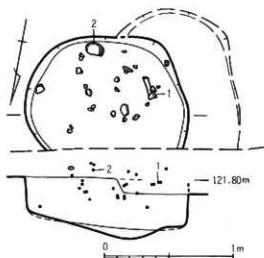
埋土は炭・焼土と土器の破片を含む暗褐色土の単一層(1層)で、その中には1・2の甕底部片が含まれていた。いずれも被熱して使用痕が顕著な日常品である。この土壇は、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。

土壇廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇175)

A区-16号土壇 (第35・36図 一図版5・31)

Q1調査区で検出された小型円形の底の丸い皿状の土壇で、A-17土壇と接するが切り合い関係は不明である。その規模は径約77cmで、検出面からの深さは29cmである。

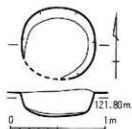
埋土は、炭・焼土と小礫を含むバサバサした黒褐色土の単一層(1層)で、埋土が厚いのに分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性がある。A-24土壇やA-25土壇の埋没状態とよく似ている。土器は出土せず、唯一1のサヌカイト製の打製石鏃を1点検出した。この石鏃は無茎凹基の軽量品(0.8グラム)である。ほかの時期の遺物を全く含まないことと、打製石鏃が出土したことから、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壇140)



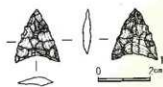
第33図 A区-15号土壇(1/30)



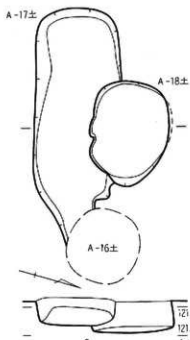
第34図 A区-15号土壇出土遺物(1/4)



第35図 A区-16号土壇(1/40)



第36図 A区-16号土壇
出土遺物(2/3)



第37図 A区-17・18号土坑(1/40)

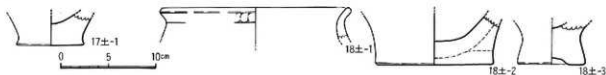
A区-17・18号土坑(第37・38図 →図版5)

Q1調査区で検出された、切り合った二つの土坑で、A-17土坑はA-18土坑に切られる。

A-17土坑は船底形で、規模は長さ247cm、幅90cm、検出面からの深さは31cmである。その底面は平坦である。埋土は炭・焼土と土器片を含む暗褐色土の単一層(1層)で、2~3cm大の基盤層に由来する黄色粘土の小ブロックをかなり含み、埋め戻された可能性がある。その中から1の埴底部片が出土した。

A-18土坑は小型円形の袋状土坑で、規模は長軸長109cm、短軸長82cm、検出面からの深さは34cmである。その底面は平坦である。形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は硬い黒褐色土の単一層(1層)で、炭・焼土と小土器片を含むが、とりわけ炭と焼土の入り方が著しい。A-17土坑同様に、2~3cm大の基盤層に由来する黄色粘土の小ブロックをかなり含み、短期間に埋没つまり埋め戻された可能性がある。埋土中からは、1の甕口縁片、2・3の甕底部片が検出された。2は甕の可能性もある。いずれも破片化して混入していた。

埋没の時期は、出土土器からA-18土坑が弥生時代前期末と推定され、A-17土坑はそれ以前である。(旧C地区土坑26・25)



第38図 A区-17-18号土坑出土遺物(1/4)

A区-19号土坑(写真5、第39・40図 →図版5・31)

Q1調査区で検出された長円形の土坑である。その規模は長軸長193cm、短軸長136cm、検出面からの深さは55cmである。西壁の傾斜は緩やかで途中に段がつき、底面はやや高低がある。埋没以前に使用された痕跡はなく、形状と底面の状態からみて、長く使用されたものではない。

4・3層と1層が生活廃棄物の堆積層で、上位の1層に遺物の一括廃棄が認められる。まず黒褐色の4・3層が堆積する。この層では炭片・焼土と土器片が検出された。2層は黄色土ブロックが多く含まれ、別の穴を掘る際の排出土を捨てたような状態であった。次にふたたび黒褐色の1層が堆積する。この層では炭片・焼土片と土器片が多量に検出された。特に東隅では2の甕、3・4の甕の大型破片がつぶれた状態で検出され、一括廃棄されたものとみられる。また3層以上では土器片が全体に散在した状態で含まれていた(写真5)。1の甕、5~10の甕で、いずれも破片で出土し完形に復元できるものはなかった。甕の大部分には煤が付着して被熱した使用痕が残り、日常の生活用具を廃棄したものと考えられる。

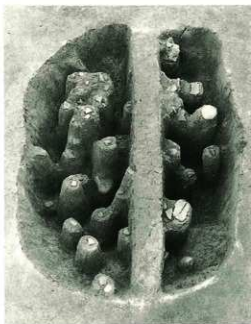
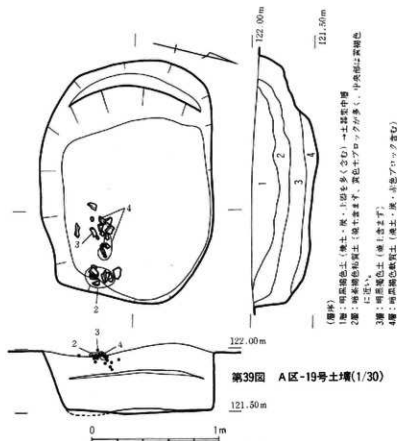


写真5. A区-19号土坑遺物出土状態(西から)

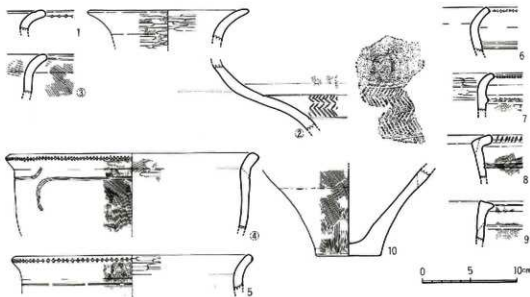
出土土器のなかで、1層遺物一括廃棄に含まれる4の甕は金雲母を含む胎上を使用した搬入品である。その甕の一条沈線は、上下に離れて接点がない文様である。2の甕の肩部には、沈線で区画されたヘラ描きの羽状文が施される。また如意形口縁の系譜をひく甕のほかに9のような逆L字形口縁の甕Cもふくまれ、6・8のような二条沈線の甕Aもある。

土城埋没の時期は土器全体からみて弥生時代前期末にあたる。(旧C地区土壙29)



第39図 A区-19号土壙(1/30)

(層序)
 1層：弥生前期末土(埴土・灰・土砂も多く含む)→土器も中期
 2層：弥生前期末土(埴土が主)→青灰色アロウクが多く、中央部は灰褐色に近しい。
 3層：弥生前期土(埴土が主)
 4層：弥生前期末土(埴土・灰・赤色アロウク含む)

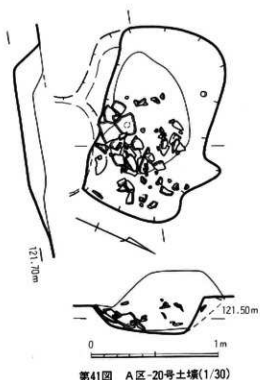


第40図 A区-19号土壙出土遺物(1/4)

※○数字は、一層集中

A区-20号土壙 (第41・43図上、写真6 →図版5・21・31)

Q1調査区で検出された長円形の土壙で、A-21土壙とA-81土壙(弥生時代中期後半)に切られている。その規模は東西長軸長153cm、南北短軸長85cmで、検出面からの深さは24cmである(第41図)。底面は皿状に近く、その機能を考える手がかりはない。また調査時にA-81土壙の一部と誤認して掘りすすめたために、埋没状態の詳細は不明である。しかしその下位に大量の上器が出土し、廃絶直後に遺物一括廃棄がおこなわれたことが判明



第41回 A区-20号土坑(1/30)

使われた土器を一括廃棄したものと推定される。

出土土器は、沈線で文様を施す壺・甕が主体で、沈線は1条である。6のような逆L字形口縁の甕Cもふくまれる。土坑廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区J坑144)

A区-21号土坑(第42~44回 図版5・21・32)

Q1調査区で検出された小型円形の土坑で、A-20土坑を切りA-81土坑(弥生時代中期後半)に切られている。壁はやや内傾しており袋状と推定され、その底面は平坦である。規模は長軸長83cm、短軸長70cmで、検出面からの深さは61cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋没状態の特徴は、下位と上位に遺物一括廃棄があることである。層序の観察をおこなっていないので詳細は不明であるが、下位では1の壺、4・8・10の甕、11の手づくねのミニチュア土器と12の磨製石斧が検出され、土器はいずれも比較的大型の破片だが、完形に復元できるものはなかった。そのうち1と10は同一個体の甕である。1の壺と4・8の甕は火を受けて赤く焼けていた。甕を火に掛けるという行為を伴う点と、11のようなミニチュア土器を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。

上位には3・6・7・9の甕の破片がまとめて出土した。いずれも被熱した使用痕が明瞭である。下位の遺物一括廃棄とどのような関係にあるか不明であるが、それほど時間を惜みずら廃棄されたものとみられる。

下位の廃棄土器の様相は、切り合ったA-20土坑の廃棄遺物のそれとよく似ている。時期を異にしながらも同じ場所に同じような廃棄行為がおこなわれていることになる。出土土器は、逆L字形口縁の甕Cが主体で、沈線文様の壺Aはすでに少数派である。また土器はすべて在地産で、搬入品はない。12の石器は太形蛤列の磨製石斧で、硬質砂岩製の完形品である。よく使い込まれており、再生不能の廃品として捨てられている。

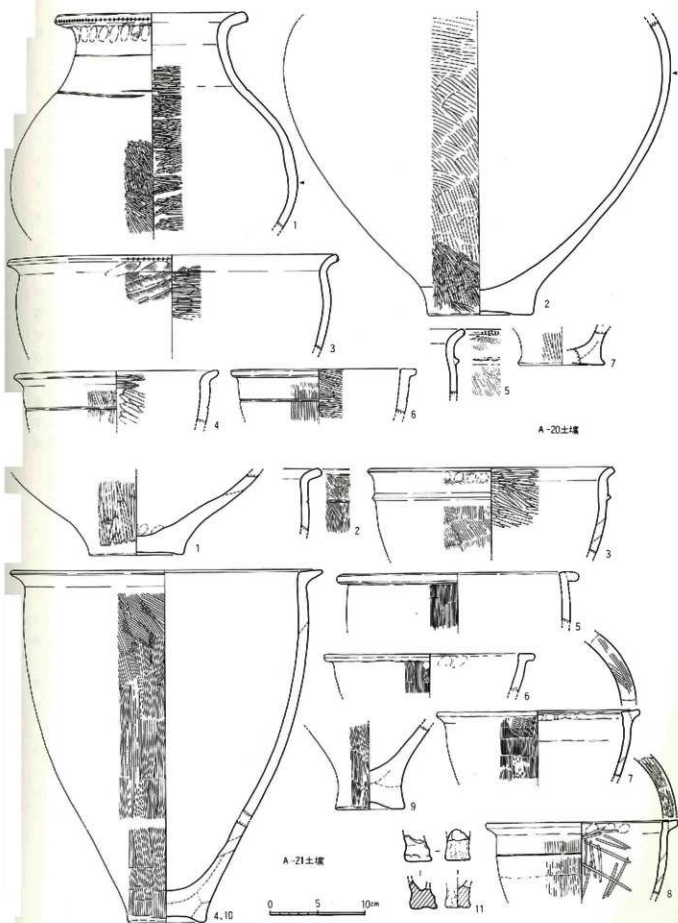
第42回 A区-21号土坑(1/30)



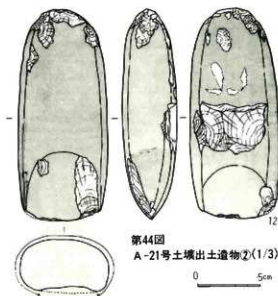
写真6. A区-20号土坑遺物出土状態(北西から)

した。

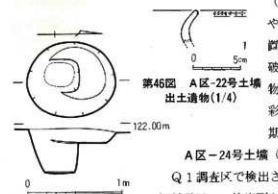
土器の出土状態は、大型の破片がまとめて投棄された状態であった。特に1・2の壺は大型の破片のままつぶれていた。1の壺は1寧に作られているにもかかわらず、火を受けて赤く焼けている。一方2の壺には被熱の痕跡はないが、これは胎土が異なる搬入品である。甕を火に掛けるという行為を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に



第43图 A-20号土壤·A-21号土壤出土文物①(1/4)

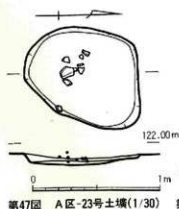


第44図
A-21号土壌出土遺物②(1/3)

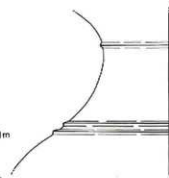


第45図 A区-22号土壌
(1/40)

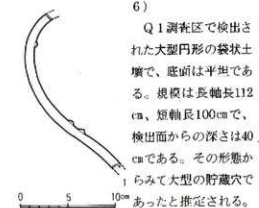
A区-24号土壌(第49・50図 →図版5)
Q1調査区で検出された小型円形の底の丸い皿状の土壌で、規模は長軸長102cm、短軸長90cm、検出面からの深さは34cmである。底面は掘りすぎで平坦になったもので実際には丸い。その性格は不明である。埋土はバサバサした黒褐色土の単一層(1層)で、小礫・炭・焼土と土器の細片を含む。埋土が厚いにもかかわらず分解できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性がある。A-16土壌やA-25土壌の埋没状態とよく似ている。図示できる土器は1・2の甕底部片のみである。いずれも被熱した使用痕が顕著な日常品である。焼絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末から中期初頭と推定される。(旧C地区土壌28)



第47図 A区-23号土壌(1/30)



第48図 A区-23号土壌出土遺物(1/4)



A区-25号土壌
(第51・52図 →図版6)

Q1調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長112cm、短軸長100cmで、検出面からの深さは40cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

上墳廃棄の時期は、出土土器の特徴から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土壌143)

A区-22号土壌(第45・46図 →図版5)

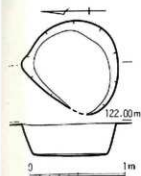
Q1調査区で検出された小型円形の土壌で、二段掘りになる。規模は長軸長92cm、短軸長77cmで、検出面からの深さは18cmである。埋土中から1の刻み目をもつ円縁部破片を検出した。土壌の性格等は不明とするしかない。他の時代の遺物を全く含まないので、1の土器からこの時期の遺物と認定した。(旧C地区土壌22)

A区-23号土壌(第47・48図 →図版32)

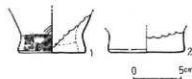
Q1調査区で検出された不定形の土壌で、底面はやや高低がある。規模は長軸長99cm、短軸長75cmで、検出面からの深さは9cmである。底部がわずかに残るのみで、その性格は不明である。埋土はバサバサした黒褐色土の単一層(1層)で、小礫を含むが炭や焼土は全く含まない。底面からやや浮いた検出面で、1の甕の破片がまとまって出した。その位置からみて土壌焼絶直後に廃棄されたものである。またこの甕の破片の一部は、この土壌から4mほど西に離れたA-41土壌の遺物一括廃棄の中からも検出されている。1は尖帯を施す甕Bで赤彩の痕跡がある。この土器からみて土壌焼絶の時期は弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌34)

A区-24号土壌(第49・50図 →図版5)

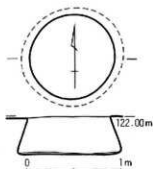
Q1調査区で検出された小型円形の底の丸い皿状の土壌で、規模は長軸長102cm、短軸長90cm、検出面からの深さは34cmである。底面は掘りすぎで平坦になったもので実際には丸い。その性格は不明である。埋土はバサバサした黒褐色土の単一層(1層)で、小礫・炭・焼土と土器の細片を含む。埋土が厚いにもかかわらず分解できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性がある。A-16土壌やA-25土壌の埋没状態とよく似ている。図示できる土器は1・2の甕底部片のみである。いずれも被熱した使用痕が顕著な日常品である。焼絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌廃棄の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末から中期初頭と推定される。(旧C地区土壌28)



第49図 A区-24号土坑(1/40)



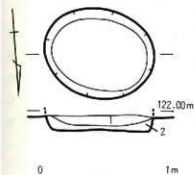
第50図 A区-24号土坑出土遺物(1/4)



第51図 A区-25号土坑(1/40)



第52図 A区-25号土坑出土遺物(1/4)



1層：暗褐色粘質土（泥・炭土・土器片少量含む）
2層：暗黄褐色粘質土（土器片少量含む）

第53図 A区-26号土坑(1/30)

70cm、深さは検出面から14cmほどである。埋土は2層に分かれ、底部の2層は硬く締まった暗黄褐色粘質土で遺物は何も含まない。土坑使用中の堆積であろう。1層には1器片・炭・焼土を含むが、図示できる遺物はない。底面に使用の痕跡があることから、この土坑は小型の貯蔵穴と推定され、廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土器の細片からこの時期の遺構と認定した。（旧C地区土坑32）

A区-27号土坑（第54・55図 図版6・32）

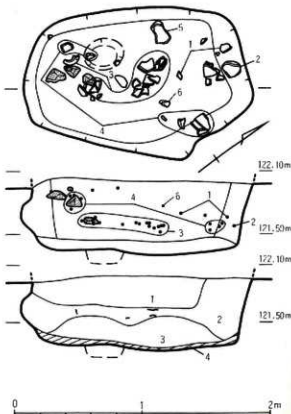
Q0ライン上で検出された長円形の1坑で、A4位の柱穴を切って掘りこまれている。底面はやや高低がある。規模は長軸長181cm、短軸長121cmで、検出面からの深さは62cmである。使用状態は、まず底面によくしまった4層が形成される。この層は使用中に踏まれて形成された床面層で、遺物はまったく含まない。このように底面に使用の痕跡があるので、この土坑は貯蔵穴と推定される。

3層から1層までは、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は2層に遺物一括廃棄が認められることである。まず床面の4層向上に、炭片を少し含むが他に何も含まない

埋土は暗黄褐色土の単一層（1層）で、炭・焼土・土器細片のほかに基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含む。埋土が厚いのに分層できない点や、黄色粘土ブロックを多量に含む点からみて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が高い。A-16土坑やA-24土坑の埋没状態とよく似ている。1層中から1の口縁部の破片が1点出土した。他の時期の遺物を全く含まないので、1の上層からこの時期の遺構と認定した。（旧C地区土坑33）

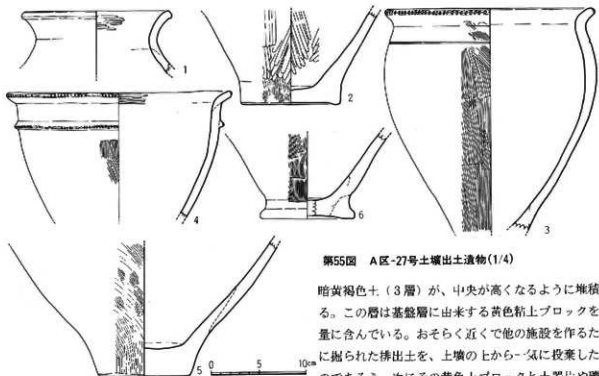
A区-26号土坑（第53図 図版6）

Q1調査区で検出された小型円形の土坑で、底面はほぼ平坦である。規模は長軸長87cm・短軸長



1層：暗赤褐色土（2層よりやや細かい、黄色土ブロック、炭含む）
2層：明赤褐色土（やわらかい、黄色土ブロック、土器片多量を含む）
3層：暗赤褐色土（土器片少量含む、炭少し含む、黄色土ブロック中位に広がる）
4層：暗赤褐色粘質土（土器片少ない、よくしまっている）

第54図 A区-27号土坑(1/30)



第55図 A区-27号土壇出土遺物(1/4)

暗黄褐色土(3層)が、中央が高くなるように堆積する。この層は基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んでいる。おそらく近くで他の施設を作るために掘られた排出土を、土壇の上から一気に投棄したものであろう。次にその黄色土ブロックと土器片や礫を多量に含む2層が堆積する。この層は汚れて黒色化し、

軟らかい。その層の土器の出土状態は、大型の破片をまとめて投棄したような状態であった。1・2は甕、3～6は甕でいずれも大型の破片である。特に1の甕は胎土に金雲母を含む搬入品である。2の甕底部と3・4・6の甕は火を受けて赤く焼けていた。甕だけでなく甕を火に掛けるという行為を伴う点からみて、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したと推定される。近接するA-20・21土壇の遺物一括廃棄にも類似の例がある。その後1層が堆積している。出土土器は、沈線で文様を施す甕が主体で、沈線は一条である。4のような如意形口縁に突帯を施す甕Bも共存する。土壇廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇31)

A区-28号土壇(第56・57図 → 図版6・32・33)

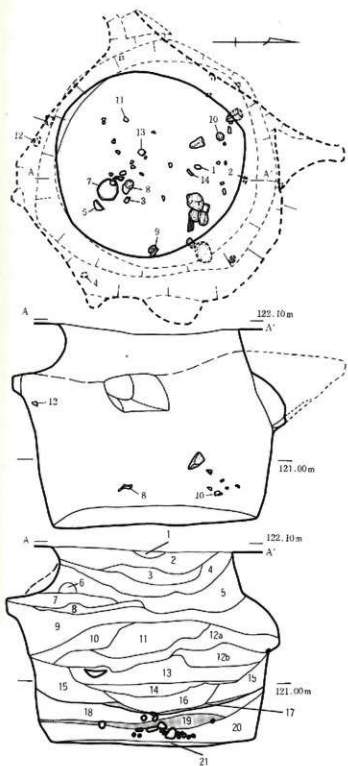
Q0調査区で検出された大型円形の袋状土壇で、壁の側面四方に深さまざまな穴が掘られている。規模は長軸長208cm・短軸長200cm、底面は平坦にならされ、深さは検出面から160cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

埋没状態は、まず底面に黒褐色の21層が形成される。この層は使用中に形成された最初の床面である。その上に黄色土ブロックや礫・砂を多く含む層(18・20層)に挟まれて、焼土・炭・土器片を含む汚れた19層が形成される。この層は8～10の甕を含む下位の遺物一括廃棄層である。土器片にはいずれも被熱した使用痕が残り、日常の生活用具を一括廃棄したものと考えられる。次に底面に黒褐色の17層が薄く堆積し、二次床面が形成されている。さらに無遺物で黄色土ブロックを多量に含む14～16層が堆積する。このうち15・16層は黄褐色土層で、基盤層の土そのものである。おそらく壁の側面に穿たれた穴からの排出土であろう。つまり壁に穴をほってその土で土壇を埋める行為がおこなわれているのである。側面の穴がどのような機能をもつかが不明だが、このような行為はこの時期の大型貯蔵穴でしばしば認められる。この行為を以て貯蔵穴は廃絶する。

13層から1層までは使用停止後の堆積層である。中位と上位にさらに2度の遺物一括廃棄が認められる。まず中位に黒褐色の13層が堆積する。この層では黄色土ブロックと土器片が多量に出土した。2の甕、3・5・7・11の甕などが、いずれも小片で出土した。甕の大部分は被熱しており、日常の生活用具を一括廃棄したものと考えられる。次に土器をほとんど含まない12～10層が、中央が次第に高くなるように堆積する。おそらく遺物一括

廃棄の直後に、土壇の上から上砂を投棄したものであろう。12層からは1の破片が出上した。

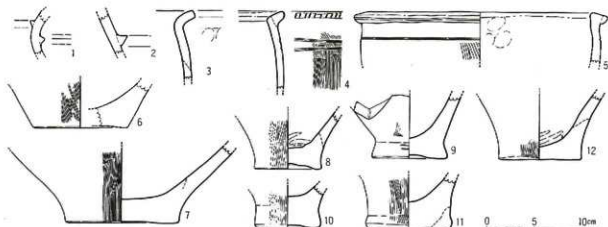
さらに9層で上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。土器は細片が多く、4と12の堿を含む。堿は被熱しており、日常の生活用具を一括廃棄したものと考えられる。その後は8～1層が順次投棄されている。浅くなった土壇を



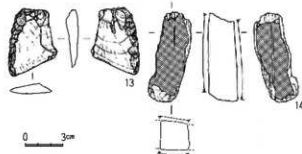
(層序)

- 1層：暗黒褐色軟質土（炭含む）・後世のビッドか?
- 2層：明茶褐色硬質土（黄色土ブロック・粘土・小礫・土器片多く含む）
- 3層：暗茶褐色軟質土（土器片・小礫少し含む）
- 4層：明茶褐色硬質土（2層より軟い、黄色土ブロック、小礫多く含む）
- 5層：明褐色軟質土（黄色土ブロック少しと炭多く含むが、小礫と土器は含まない）
- 6層：明茶褐色軟質土（なにも含まない）
- 7層：明茶褐色土（4層より黒い、土器・炭片少し含む）
- 8層：明茶褐色土（黄色土ブロックの塊状、遺物なし）
- 9層：暗茶褐色軟質土（炭・土器を多く、黄色土ブロックを少し含む）
→上位土器集中。
- 10層：明褐色軟質土（黄色土ブロック含むが土器はない）
- 11層：暗茶褐色硬質土（やや粘質、黄色土ブロック・炭を多く含むが、土器はない）
- 12a層：暗茶褐色土（9層よりやや粗い、土器片・黄色土ブロックを少し含む）
- 12b層：暗茶褐色土（12a層より、やや明るく、サラサラした土、黄色土ブロックを少し含むが、土器はない）
- 13層：明茶褐色土（サラサラした土、黄色土ブロック・土器を多く含む）→中位土器集中
- 14層：暗茶褐色軟質土（サラサラした土、何も含まない）
- 15層：黄褐色土（壇上層の土、黄色土ブロックのもの）→壁面の穴から掘りとられた土である。
- 16層：暗茶褐色土+黄色土ブロック混層（15層の土がまざったもの）
- 17層：明茶褐色土（小礫含む）
- 18層：黄褐色土+黄色土ブロック混層（人型體含む）
- 19層：暗茶褐色土（焼土・炭・土器片を多く含む）
→下位土器集中
- 20層：黄褐色土（中央に人型體、左には砂が多い）
- 21層：明茶褐色土（土器少し含む）
→最初の使用時の堆積。

第56図 A区-28号土壇(1/30)



第57図 A区-28号土壌出土遺物(1~12=1/4、13・14=1/3)



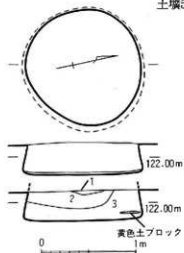
ゴミ捨て場所として利用していったと推定され、土器は少なくなって石器を含むようになる。6の壺小片・13の粘板岩製の完形のスクレイパーと14の硬質頁岩製の砥石の破片が含まれるのみである。

出土土器は、逆L字形口縁の壺Cが主体である。1は口縁内面に突起を施す周防・豊前系の壺である。また土器はすべて在産で、搬入品はない。上層廃棄の時期は、川土土器の特徴から弥生時代中期初頭と推定される。

(旧C地区土壌54)

A区-29号土壌(写真7、第58・59図 →図版6)

Q0調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長132cm、短軸長124cmで、検出面からの深さは34cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は3層に分かれ、どの層も土器片・炭・焼上を含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。土壌の廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土器は3層から出土した小片で、1と2は壺口縁片である。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌53)



1層: 黄褐色軟質土(焼土片、土器片含む)
2層: 硬くしまった暗黄褐色土(炭・焼土・土器片含む)
3層: 暗褐色軟質土(土器片含む)

第58図 A区-29号土壌(1/40)



写真7. A区-29号土壌の断面土層(東から)



第59図 A区-29号土壌出土遺物(1/4)

A区-30号土壌 (第60図 →図版6)

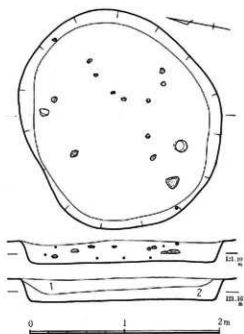
Q19調査区で検出された大型円形の袋状土塚で、底面は平坦である。規模は長軸長236cm、短軸長200cmで、検出面からの深さは25cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は2層に分かれ、どの層も小礫・土器片と炭片・焼土片を含むが、遺物はいずれも小片で散在する。土壌は焼絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土器は小片で図示できないが、甕の底部片がある。他の時期の遺物を全く含まないので、その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧C地区土塚85)

A区-31号土塚 (第61・62図、写真8 →図版7)

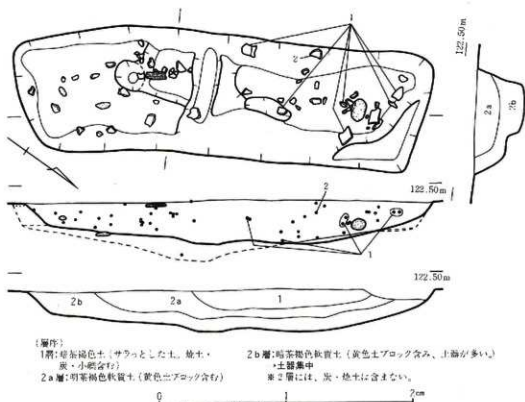
Q19調査区で検出された船底形の土塚で、底面は一定せず凸凹で、中央部がもっとも低い。規模は長さ334cm、幅98cmで、検出面からの深さは深いところで31cmである。長軸の方位角は149度である。形状と底面の状態からみて、埋没以前に使用された痕跡はなく、廃棄のために掘られた可能性が高い。

まず黄色1:ブロックと土器片を多く含む2層が堆積する。その下位の2b層に遺物の一括廃棄が認められる。2層は、炭や焼土が含まれない、この遺跡では稀な廃棄層である。土器片は散在してまんべんなく含まれる。1・2の甕が川から出土した。その上



1層:暗茶褐色土(ハサノヤシした土、礫と土器片を含む)
2層:茶褐色粘質土(小礫・土器小片を含む)

第60図 A区-30号土塚 (1/40)



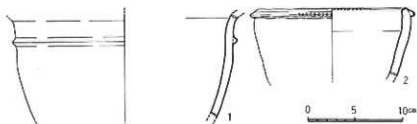
(層序)
1層:暗茶褐色土(サラッとした土、焼土・炭・小礫含む)
2a層:暗茶褐色粘質土(黄色土ブロック含む)
2b層:暗茶褐色粘質土(黄色土ブロック含む、土器が多い)
*土器集中
※2層には、炭・焼土に含まない。

第61図 A区-31号土塚 (1/30)



写真8.

A区-31号土壌遺物出土状態(南東から)



第62図 A区-31号土壌出土遺物(1/4)

にさらっとした茶褐色の1層が堆積する。この層には炭片・焼土片と小礫が含まれる。1は如意形口縁に三角突帯を施す甕B、2は逆L字形口縁の甕Cである。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(ⅢC地区上墳76)

A区-32号土壌(第63図 一図版7)

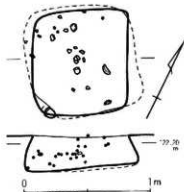
Q19調査区で検出された小型方形の袋状土壌で、底面は平坦だが、東がやや高い。規模は長さ88cm、幅86cmで、検出面からの深さは28cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定されるが、方形の袋状土壌というのはきわめて稀である。

埋土は二層に分かれ、どの層も土器片と炭片・焼土片を含むが、遺物はいずれも小片で散在する。黄色土ブロックが多量に含まれ、短期間の埋没、つまり埋められた可能性が高い。土器は小片で図示できないが、この時期の土器の細片である。その土器からこの時期の遺構と認定した。(ⅢC地区土壌84)

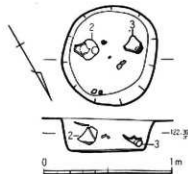
A区-33号土壌(第64・65図 一図版7・33)

Q18調査区で検出された小型円形の

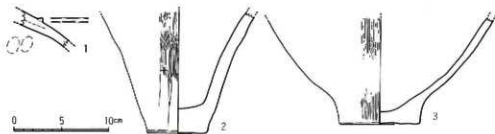
壁穴状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長80cm・短軸長73cm、深さは検出面から27cmほどである。小型の貯蔵穴の可能性もあるが、はっきりしない。埋土は暗褐色粘質土の単一層(1層)で、炭・焼土・大型土器片を多量に含む。埋土が厚いにもかかわらず分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が高い。埋没状態の特徴は、遺物の「括弧棄が



第63図 A区-32号土壌(1/30)



第64図 A区-33号土壌(1/30)



第65図 A区-33号土壌出土遺物(1/4)

あることにある。

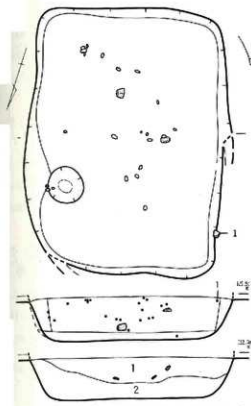
1の壺、2・3の甕はいずれも比較的大型の破片であるが、完形に復元できなかった。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生

時代前期末と推定される。(旧C地区土塊100)

A区-34号土塊(第66・67図 →図版7)

Q18調査区で検出された長方形の土塊で、底面は平坦である。規模は長さ323cm、幅197cm、検出面からの深さは46cmである。底面の壁際にピットがあるが、柱穴かどうかは不明。長軸の方位角は165度である。その大きさと形態からみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたことは明らかである。

埋土は二層に分かれ、どの層も土器片・炭・焼土と小片礫・黄色土ブロックを少量含むが、遺物はいずれも破片化して散在する。土塊は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。図示できるのは1層から出土した1の壺底部片のみである。土塊廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土塊150)



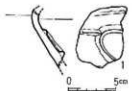
第67図 A区-34号土塊出土遺物(1/4)

1層:暗褐色硬質土(黄色土ブロック・炭・土器片を少し含む)
2層:黒色粘質土(遺物等少ない)

第66図 A区-34号土塊(1/40)



第68図 A区-35号土塊(1/30)



第69図 A区-35号土塊出土遺物(1/4)

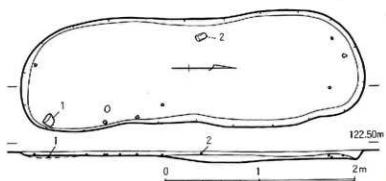
A区-35号土塊(第68・69図 →図版7)

Q17ライン上で検出された小型長円形の土塊で、底面は平坦である。規模は長軸長70cm、短軸長56cmで、検出面からの深さは12cmである。断面層序の観察をおこなっていないので埋没状態の詳細は不明だが、遺物はいずれも小片化して散在する。土塊は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。図示できるのは1の壺頸部片のみである。それは三角突帯が鍵の手に接続する文様をもつ壺Bである。土塊廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土塊161)

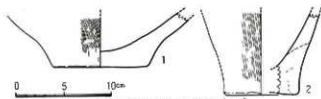
A区-36号土塊(第70・71図 →図版7)

Q17調査区で検出された船底形の上塊で、底面はやや高低がある。規模は長さ363cm、幅112cmで、検出面からの深さは12cmである。長軸の方位角は179度である。その性格・用途は不明である。

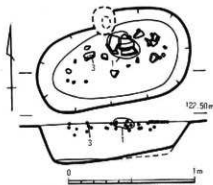
埋土は黒褐色軟質土の単一層(1層)で、炭・焼土・土器細片を含む。1層から出土の1の壺、2の鬘はいずれも底部破片である。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。土塊廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土塊111)



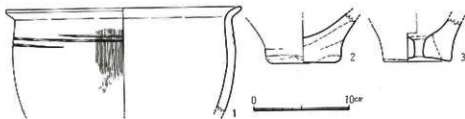
第70図 A区-36号土塊(1/40)



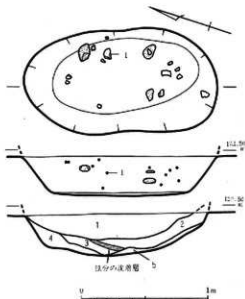
第71図 A区-36号土壌出土遺物 (1/4)



第72図 A区-37号土壌 (1/30)



第73図 A区-37号土壌出土遺物 (1/4)



- 1層:暗褐色土(土器片・炭多く含む)
 2層・3層:やや灰色かった黄褐色土(炭片含む)
 →中間に鉄分の沈着層あり
 4層・5層:暗黄褐色土(炭等含まない)
 →灰層層の可能性あり

第74図 A区-38号土壌 (1/30)

A区-37号土壌 (第72・73図 →図版8・33)

Q17調査区で検出された長円形の土壌で、底面は平坦だが束がやや高い。規模は長軸長123cm、短軸長62cmで、検出面からの深さは31cmである。その性格・用途は不明である。

埋土は暗褐色粘質土の単一層(1層)で、炭・焼土・土器小片を多量に含む。埋没状態の特徴は、1層上部に遺物の一括廃棄があることにある。2・3の層は断片で検出されたが、1の層は大型破片のままつぶれた状態で検出した。埋土が厚いにもかかわらず分層できない点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が高い。

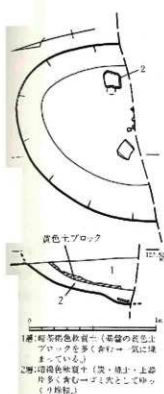
なお1は回転台を利用して螺旋状に施紋した二条沈線を施した甕Aで、胎土に金雲母と石英を多量に含む摺入品である。A-11土壌の17の摺入品の甕とよく似ている。また3は底部に焼成前の穿孔を施した甕である。土壌廃棄の時期は、川上土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌113)

A区-38号土壌 (第74・75図 →図版8)

Q17調査区で検出された長円形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長154cm、短軸長78cmで、検出面からの深さは31cmである。その性格・用途は不明である。埋土は下部に、黄色土ブロックの層(4・5層)がまず堆積し、その上に炭片を含むやや灰色かった黄褐色土(2・3層)がのる。その層中には鉄分の沈着層が挟まるが、遺物は全く含まない。最後は暗褐色土の1層で、炭・焼土・小礫と土器細片を含む。1層からは1の甕底部片が出土している。土壌は廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。土壌廃棄の時期は、その上層から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌112)



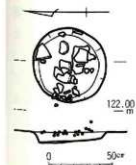
第75図 A区-38号土壌出土遺物 (1/4)



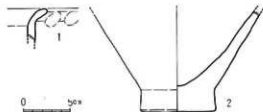
第76図 A区-39号土壌 (1/30)



第78図 A区-40号土壌 (1/40)



第80図 A区-41号土壌 (1/30)



第77図 A区-39号土壌出土遺物 (1/4)

軸長92cm以上で、検出面からの深さは36cmである。底面の状態からみて、埋没以前に使用された痕跡はなく、廃棄のために掘られた可能性が高い。

埋土は二層に分かれ、まず暗褐色軟質土の2層が堆積し、炭・焼土・土器片を多量に含む。遺物はいずれも破片化して散在する。土壌の腐敗後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。この2層からは1・2の壺片が出土した。壺は被熱した使用痕が残る日常の生活用具である。ところでその上に黄色土ブロックの1層が堆積しているのは、埋没の途中で別の穴からの精出土をいれて埋めたと考えられる。

土壌廃棄の時期は、2層出土の土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌151)

A区-40号土壌 (第78・79図)

R1調査区で検出された小型の船底形土壌で、底面はやや高低がある。規模は長さ119cm、幅35cmで、検出面からの深さは17cmである。長軸の方位角は62度である。

埋土は二層に分かれ、下部の2層は硬く締まった暗褐色粘質土で、無遺物である。その上の1層は軟らかく土器片を含む。全体に炭・焼土はきわめて少なく、短期間に埋没した状態である。平面形と埋没状態からみて、小児用の土壌墳墓の可能性はあるが、決め手がない。埋土中から1の壺片が出土した。被熱した日常品である。

土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌40)

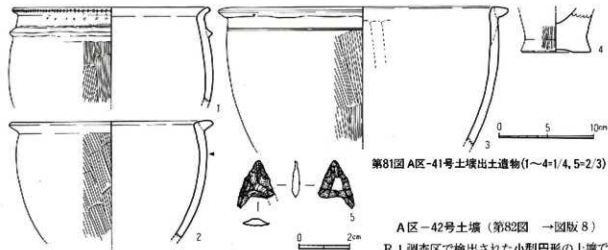


第79図 A区-40号土壌出土遺物 (1/4)

の深さは8cmである。その形態から小型の貯蔵穴である可能性も否定できない。

埋没状態の特徴は、下位に遺物一括廃棄があることにある。層序の観察をおこなっていないので詳細は不明であるが、1~4の壺と5の打製石鏃が検出された。土器とくに壺の口縁部片はいずれも大型破片であるが、完形に復元できるものはなかった。2~4の壺は火を受けて赤く焼けていた。ほかにA-23土壌の1の壺の一部が検出されている。破片が大きく底をふさぐように大量に廃棄されているところから、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄した可能性がある。

1は如意形口縁に三角突帯を施す壺B、2・3は逆L字形口縁の壺Cである。5は脚の一部欠損したサヌカイト製の打製石鏃で、無茎凹基の軽量品(0.7グラム)である。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌37)



第81図 A区-41号土壌出土遺物(1~4=1/4, 5=2/3)

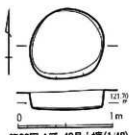
A区-42号土壌(第82図 →図版8)

R1調査区で検出された小型円形の土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長79cm、短軸長74cmで、検出面からの深さは20cmである。その形態から小型の貯蔵穴であった可能性も否定できない。

埋土は炭・焼土と土器片を含む暗褐色軟質土の単一層(1層)で、基盤層に由来する10cm大の黄色粘土の小ブロックを含むので、埋め戻された可能性がある。図示できる遺物はないが、土器の細片からこの時期の遺構と認定した。(旧C地区土壌36)

A区-43号土壌(写真9、第83~85図 →図版8・9・33・34)

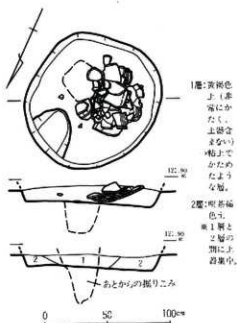
R1調査区で検出された大型円形の土壌で、底面は平坦である。中央部は後世のピットから切られている。規模は長軸長112cm、短軸長103cmで、検出面からの深さは18cmである。その形態から小型の貯蔵穴であった可能性も否定できない。



第82図 A区-42号土壌(1/40)

2層から1層が使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は1層に特異な遺物一括廃棄が認められることにある。まず底面の壁ぎわに2層が堆積し、ボールの底状の構造ができあがる。この層は基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んできわめて硬い。あるいは掘りすぎの基盤層かも知れない。後者の場合は土壌の形状は断面皿状となり、貯蔵穴ではないことになる。遺物は含まない。次に大型土器片を多量に含む明茶褐色土の1層が堆積する。

2層と1層の間に土器の一括廃棄がある。土器の出土状態は第84図のように、最初に1・2の同一個体の壺が、東に口縁を向けて完形のまま、横倒しで置かれる。その横に3・4の壺がこれも完形で同じ向きに横倒しで置かれる。次にその壺・壺の上に6の壺が逆向きの南西方向に口縁を向けて横倒しで置かれる。さらにその上に5の壺が同じく南西方向に口縁を向けて横倒しで置かれている。6・5の壺もほとんど完形である。以上の6個体の土器が重ねてつぶれた状態で出土した。そのうち3~6の3個体の壺はいずれも火を受けて赤く焼け、内

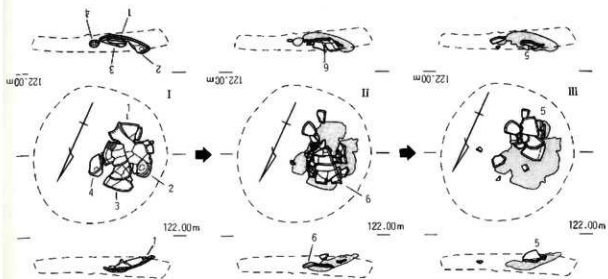


第83図 A区-43号土壌①(1/30)

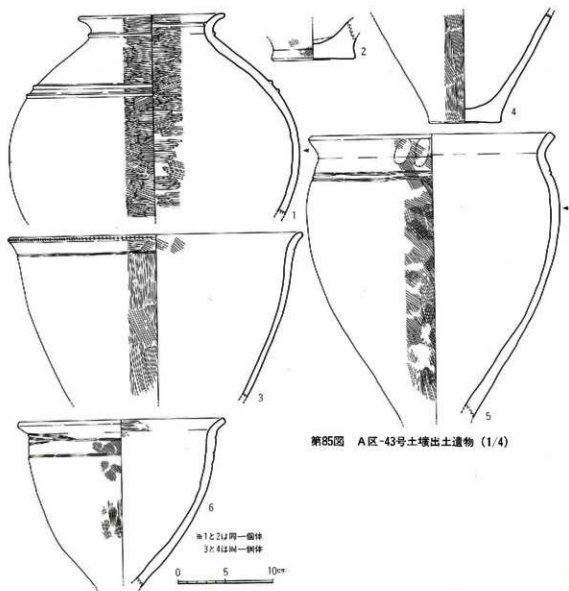


写真9. A区-43号土壌完掘状態

も火を受けて赤く焼け、内



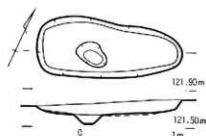
第84图 A区-43号土壤(2)·土器廃棄状況(1/30)



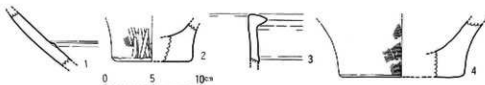
第85图 A区-43号土壤出土遺物(1/4)

面に焦げ状の炭化物が付着した使用品である。特に3・4と6の2個体は胎土に空雲母を含む搬入品である。一方6は在地産で被熱していない。完形品を横倒しに重ねている点からみて、単なる廃棄物の投棄ではなく、なんらかの事情でなお使用できる一群の土器を一括埋置したものと推定される。

出土土器の特徴は、まず1・2の甕は口縁内面に突帯を張りつける周防・豊前系の甕Bで、甕は沈線で文様を施す甕Aが主体で、沈線は一条と二条の両者がある。同じ甕Aでも搬入品の3・6に比べて、在地産の5は胴が張るという形態上の特徴がうかがえる。土壇の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇38)



第86図 A区-44号土壇 (1/40)

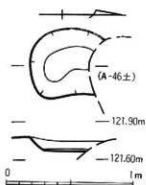


第87図 A区-44号土壇出土遺物 (1/4)

A区-44号土壇 (第86・87図 →図版9)

R1調査区で検出された船底形の土壇で、底面はやや高低があり、中央に浅いピットがある。A-46土壇と一連となる可能性がある。規模は長さ153cm、幅50cmで、検出面からの深さは17cmである。長軸の方位角は67度である。その形状と底面の状態からみて、廃棄のために掘られた可能性が高い。埋土は暗褐色上の単一層(1層)で、炭・焼土と小土器片を

多量に含むが、検出面では一部に焼土の集りが認められた。1層からは1・2の甕片、3・4の甕の破片が検出された。



第88図 A区-45号土壇 (1/30)

土器はいずれも小片で散在する。土壇の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区七墳43)

A区-45号土壇 (第88図 →図版10)

R1調査区で検出された不定形の土壇で、A-46土壇に切れ、底面は皿状である。規模は長軸長63cm、短軸長51cmで、検出面からの深さ10cmである。その性格・用途は不明で、遺物は何も出土していないが、弥生時代中期初頃のA-46土壇に切られているので、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壇147)

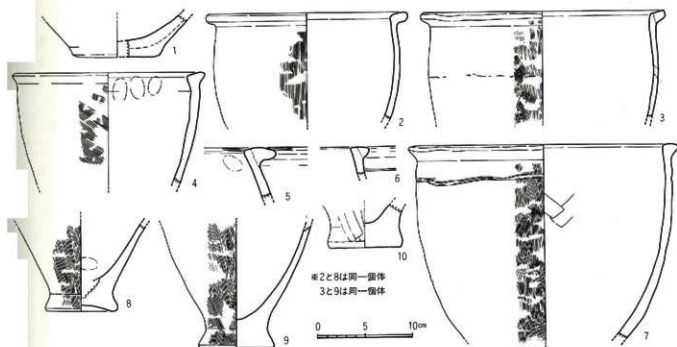
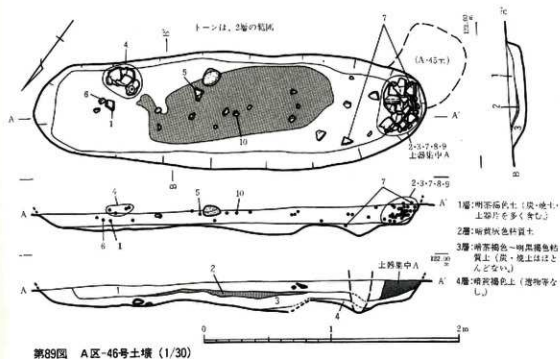
A区-46号土壇 (第89・90図 →図版10)

R1調査区で検出された船底形の土壇で、A-45土壇を切っている。底面はかなり凸凹している。規模は長さ312cm、幅73cmで、検出面からもっとも深いところ

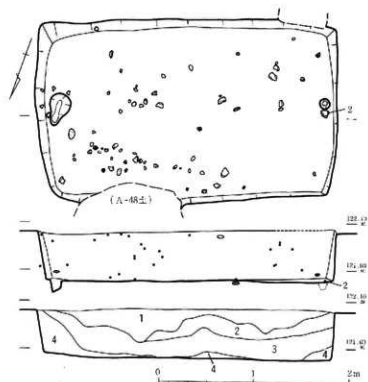
で25cmを測る。長軸の方位角は53度である。A-44土壇と一連となる可能性がある。後述するように粘土で床状の底面を作っている点と、その平面形からみて、なんらかの作業土壇であった可能性が指摘できる。

まず凸凹した底面に黄色土ブロックを多く含む4層が堆積し、その上に土壇の底面全体に茶褐色の粘質土(3層)が堆積する。この3層までは遺物を全く含まず、硬く締まっている。さらにその上面の中央に暗灰色粘質土(2層)の薄い層が広がる。2層上面は平均に整えられているので、おそらくなんらかの使用目的にあわせて床面整形をおこなったものと推定される。その底面には焼土など火を使用した痕跡はなく、西端がわずかにくぼむのが特徴である。しかし具体的な用途は不明である。

1層は産絶後の堆積層で土器片・炭・焼土・円礫を多量に含む。特に西端のくぼみの部分にA-43土壇のような土器堆積(集中A)が認められた。そこでは2・3・7~9の3個体の完形の甕がつぶれた状態で検出された。また東側にも縦に半分に割れた4の甕が、壁にたてかかるように検出されている。1・5・6・10は破片化して1層中に散在していた。さきの3個体の甕を含めて、いずれも火を受けて赤く焼け煤が付着した日用品である。



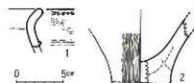
その土器の出土状態からみて、単なる廃棄物の投棄ではなく、なんらかの事情で一群の土器を一括埋置した上で、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。Ⅲ土器の特徴は、逆L字形口縁の甕Cが主体で、沈線文様の甕Aはすでに少数派である。また土器はすべて在地産で、搬入品はない。土壌廃絶の時期は、以上の出土土器から弥生時代中期初頭と推定される。(旧C地区土境46)



〔層序〕

- 1層：黄茶褐色硬質土（ガラガラした土。小礫多く、炭・土器片少し含む）
- 2層：明黄色土（小礫少し含むが、土器はない）
- 3層：暗褐色粘質土（黄色土ブロックが全体に入る。土器はない）
- 4層：明黒褐色土（サラサラした土。多量の炭と土器片を含む）

第92図 A区-47号土壇出土遺物(1/4)



第93図 A区-48号土壇(1/30)

A区-47号土壇 (第91・92図 →図版

11)

R0調査区で検出された長方形の大形土壇で、A-48土壇の一部を切られていた。底面は平坦で、規模は長さ352cm、幅179cm、検出面からの深さは53cmである。A-34土壇と規模はほぼ等しい。東西の壁際中央に小ピットがあり、二本柱の竪穴建物の可能性もあるが、ピットが貧弱すぎるので、柱が使われたとしても簡単な作りのものと推測される。長軸の方位角は70度である。

埋土は、まず底面内縁部に炭片と土器片を多量に含むサラサラとした黒褐色土の4層が堆積し、その上に黄色土ブロックが全体に入り土器を含まない3層と、小礫を含むが土器の入らない2層が厚く堆積する。短時間に埋め戻されたとみられる。その上に炭片・土器片を含む黄茶褐色土（1層）がのる。4層からは2の甕底部片が出上している。土壇は焼絶の際ある程度埋め戻され、その後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。上環商業の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。

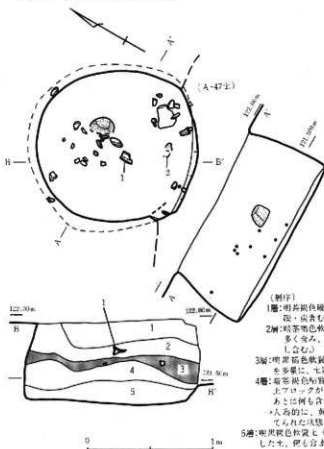
(旧C地区土壇56)

A区-48号土壇 (第93・94図 →図版

11・34)

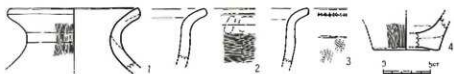
R0調査区で検出された大型円形の袋状土壇で、A-47土壇の北端をわずかに切って掘りこまれている。底面は平坦である。規模は長軸長142cm、短軸長137cmで、検出面からの深さは69cmである。その形態からみて大形の貯蔵穴であったと推定される。

5層から1層までは、使用停止後の堆積層である。その埋没状態



第93図 A区-48号土壇(1/30)

の特徴は3層に遺物一括廃棄が認められることである。まず床面直上にサラサラした明黒褐色土(5層)が、その上に基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に



第94図 A区-48号土壇出土遺物(1/4)

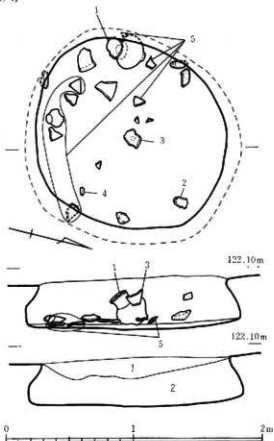
含んだ4層が、中央が高くなるように堆積する。この層はおそらく近くで他の施設を作るために掘られた排水上を、土壇の上から投棄したものであろう。4・5層ともに遺物は皆無である。次に土器片や礫にくわえて焼土を多量に含む3層が堆積する。この層は汚れて黒色化し軟らかい遺物一括廃棄層である。2・3の壺が含まれ、ともに胎土に金雲母を含む搬入品である。その後2・1層が堆積している。小礫・炭・土器片を含み、1・4の壺の小片が出土した。3層の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。上層廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(山C地区土壇55)

A区-49号土壇(写真10、第95・96図 図版12・34)

R0調査区で検出された大型円形の袋状土壇で、底面は平坦である。規模は長軸長180cm、短軸長170cmで、検出面からの深さは42cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

2・1層は、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は2層に特徴的な遺物一括廃棄が認められることである。まず床面直上に、炭片・焼土・少円礫と黄色粘土ブロックを含む暗茶褐色土(2層)が厚く堆積する。その層の特に底面直上に多量の土器が検出された。2層の土器の出土状態は、すべて大型の破片を投棄したものであり、1の壺は東側の壁面に立てるように完形のまま出土した。この壺の底面側面には外側から焼成後に施された穿孔があり、口縁の一部も失われていた。そこでは壺の機能をなくす象徴的な行為がおこなわれている。同時に5の鉢はやはり壁際に大きく割れて散らばっていたが、完形に復元できるので、おそらく打ち割って壺の周辺に廃棄したのであろう。2の壺、3・4の壺も大型の破片であるが、その一部である。3・4・5の壺は火を受けて赤く焼けていた。なんらかの祭祀に使われた土器を一括埋置し、2層の土で埋めたものと推定される。なお1層はやや硬い明茶褐色土で、土器は含まない。

出土土器はいずれも在地産で、1は肩部に

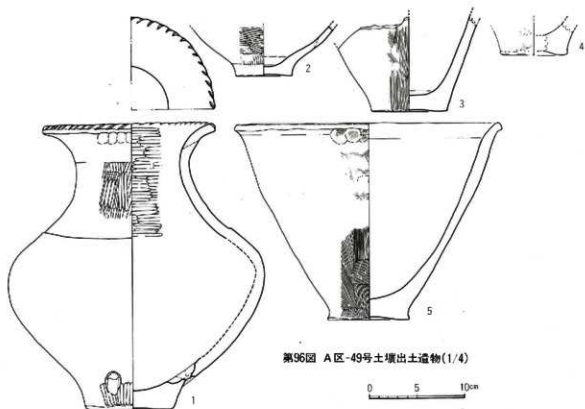


1層：明茶褐色土(やや硬い、炭・焼土小片含む)
2層：暗茶褐色土(1層より軟かい、炭・炭土・黄色粘土ブロックを含み、土器多い)
→土壇→56cm深層

第95図 A区-49号土壇(1/30)



写真10・A区-49号土壇 No.1壺出土状態(西から)



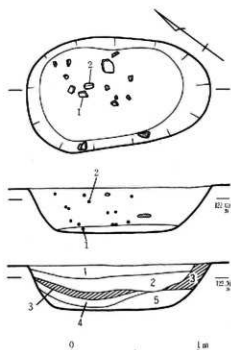
第96図 A区-49号土壌出土遺物(1/4)

削り出しの段をつける壺Aで、口縁部上面に斜めの刻目を施す。
5の鉢Aは、被熱しており甕としてよいかもしれない。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期後半と推定される。(旧C地区土壌59)

A区-50号土壌(第97・98図 →図版12)

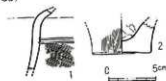
R19調査区で検出された長円形の土壌で、A-6位の柱穴に切られている。底面は平坦である。規模は長軸長146cm、短軸長80cmで、検出面からの深さは36cmである。平坦な底面からみて、廃棄用以外の目的で掘られた土壌であるが、その用途は不明である。

5層から1層までは、使用停止後の堆積層である。埋設の途中で、基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んだ3層が廃棄されているが、全体に炭・焼土と土器の小片が含まれた廃棄物の堆積である。土壌使用後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたと推定される。1は3層より下から出土した壺A、2は2層出土の壺底部で、胎土に金雲母を含む燻入品である。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌86)



1層:暗褐色粘土(粘質強い)…1-2cm大の油山小礫、黄色上ブロック・焼土・炭・土器片含む。
2層:暗褐色土(やや粘質)…炭・焼土・土器片含む。
3層:黄褐色粘質土…基盤層ブロックそのもの、炭焼土なく、土器片少。
→炭に投げ入れられている。
4層:黄褐色粘質土…よこれている。炭・焼土・土器片多い。
5層:暗褐色土(やや粘質)…炭・焼土・土器片少し含む。

第97図 A区-50号土壌(1/30)

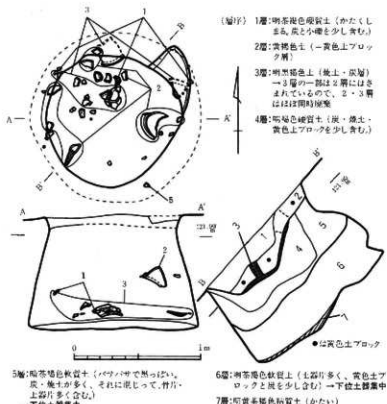


第98図 A区-50号土壌出土遺物(1/4)

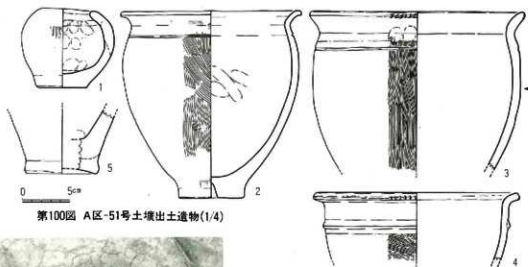
A区-51号土壌 (第99・100図、
写真11 → 図版12・34)

R19調査区で検出された大型円形の
袋状土壌で、底面はやや高低がある。
規模は径135cmでほぼ正円形に近く、
検出面からの深さは92cmである。その
形態からみて大型の貯蔵穴であったと
推定される。

まず底面に硬く締まった7層がある。
この層は使用中に繰り返し踏まれて形
成された床面層で、遺物はなく硬く締
まっていた。6層から1層までは使用
停止後の堆積層である。その埋没状態
の特徴は下位に遺物一括廃棄が認めら
れることである。まず下位に茶褐色の
軟らかい6・5層が堆積する。6層に
は炭片と黄色土ブロックが含まれ、5
層は炭・焼土と動物の骨片が多量に検
出された。土器は大型破片の状態で6
層下部を中心に5層におよぶ。1の小



第99図 A区-51号土壌 (1/30)



第100図 A区-51号土壌出土遺物(1/4)



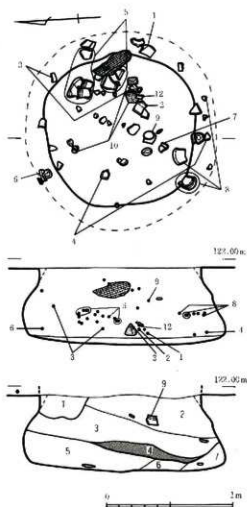
写真11. A区-51号土壌遺物出土状態 (西から)

型無頸壺と2の壺はばらばらで検出したが、完形に復元
できた。3～5の壺はいずれも大型破片で出したが、
完形には復元できなかった。2・4の壺は炭が付着して
被熱していた。以上のように完形の土器を割って廃棄し
ている点と1のような小型壺を伴う点からみて、単なる
生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた
土器を 一括廃棄して埋めていったものと推定される。こ
の下位の遺物 一括廃棄のあとに、やや硬い4層が投棄さ

れ、最後に、焼土・炭混層の3層が黄色土ブロックの2層と混ざりあうように、東の方向から投棄されている。そしてさらに硬く締まった1層が堆積する。4層以上には土器はないが、黄色土ブロックを多量に含むところから、おそらく故意に埋めたものであろう。

出土土器は、沈線で文様を施す甕Aが主体で、沈線は一条である。4のような如形形口縁に突帯を施す甕Bも共存する。土器はいずれも在地産で、胴部が膨らむ特徴をもつ。土壇廃棄の時期は、旧石器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇88)

A区-52号土壇 (第101・102図 →図版13・34・35)



第101図 A区-52号土壇 (1/30)

(層序)

- 1層: 黄褐色粘土と暗褐色土の混層。
一地面をほったよを投棄している。
- 2層: 暗褐色土(10cm大の黄色土ブロックと炭を含むほか、小礫と土器片多く含む)。
- 3層: 暗褐色土(土器片1cm大の黄色土小ブロックと片炭を含む)。
- 4層: 暗褐色土(炭を多く含む)。
- 5層: 暗褐色粘質土(礫と黄色土ブロック少し含む)。
- 6層: 灰褐色粘質土(黄色土ブロックを多量に含む)。
- 7層: 暗褐色粘質土(黄色土ブロックを多く含むほか、土器片含む)。

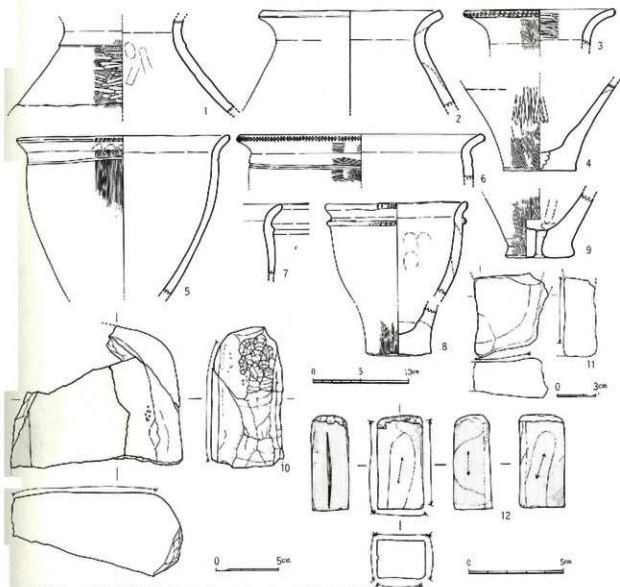
●3~7層は、築成直後の築成で、4~2層は、ゴミ穴化した陥式灰積。

R19調査区のA-7住(古墳時代前期前半)の床面下で検出された大型円形の袋状土壇で、底面はやや中央がくぼむが、おおむね平坦である。規模は長軸長157cm、短軸長167cmでほぼ正円形に近く、検出面からの深さは61cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用の痕跡をしめす層や床面の硬化は認められず、7層から1層まではすべて使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は4層に遺物一括廃棄が認められることである。まず底面直上に、基盤層に由来する黄色粘土ブロックを多量に含んだ黄褐色土(7~5層)が堆積する。この層には小礫と土器細片を含むが、炭や焼土はほとんどない。6の甕の口縁片が唯一図示できるものである。おそらく近くで、他の施設を作るのに掘った排土土を、土壇使用停止直後に投棄したものと推定される。次に土器片や礫にくわえて炭を多量に含む4層が堆積する。この層は遺物一括廃棄層である。1~4の甕、5の甕が含まれ、比較的大型の破片のまま廃棄されている。またそこには10・11の石皿の破片が含まれていた。特に10は被熱して割れた破片で、3片が接合した。12もこの層から出土した小型砥石の定形品である。甕の破片が多い点と、10のように火を受けてはじけた石皿を伴う点、それ

れに12のようなまだ十分使える砥石を廃棄した点からみて、生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。その後3~1層が堆積している。3~1層には小礫・土器片と黄色土ブロックを含み、炭片・炭化材が多い。4層の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。3~1層からは7・8の甕と9の甕の破片が出土した。

出土土器はいずれも在地産で、1は肩部に削り出しの段をつける甕Aである。甕は沈線文様の甕Aと、突帯の甕Bで、沈線は一条である。また9は底部に焼成前に穿孔を施した甕である。甕の胴部は膨らまない古い特徴をもつ。土壇廃棄の時期は、旧石器から弥生時代前期後半と推定される。(旧C地区土壇174)

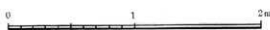
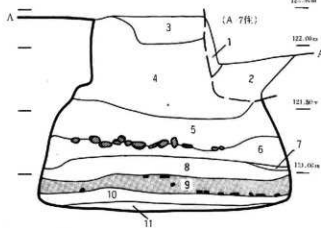
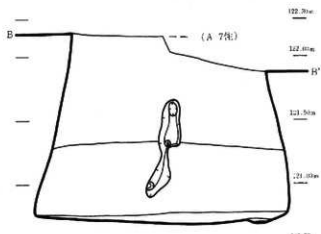
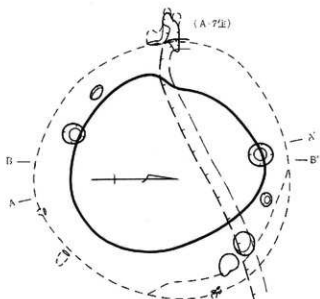


第102図 A区-52号土壇出土遺物(1~9=1/4, 10=11=1/3, 12=1/2)

A区-53号土壇(第103~106図 →図版13・14・35・36)

R18ライン上で検出され、A-7住(古墳時代前期前半)に切られた大型円形の袋状土壇で、底面は平坦である。規模は長軸長203cm、短軸長202cmでほぼ正円形に近く、検出面からの深さは150cmである。壁の1箇所にたての裂目が入っている。水が流れこんだことによる侵食の可能性がある。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される(第103図)。

まず底面によごれて黒褐色の11層が形成される。この層には炭・焼土・土器の細片を含み、基部が折れた産品の磨製石斧(32)が検出された。おそらく使用中に形成された床面層である。その上の10層から1層までは使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位と中位に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第104図)。まず床面直上に茶褐色の軟らかい10層が堆積する。この層には黄色土ブロックが含まれるが焼土・炭等は含まれない。おそらく故意に投棄したものであろう。その上の黒褐色の9層は炭・焼土と土器片が多量に検出され、土器は大型破片の状態で5~10cm大の破片ばかりで、細片がほとんどない。これが下位の遺物一括廃棄である。そのなかには1~3の壺、8・10・12・18・21・22・24の甕をばらばらで検出したが、完形に近く復元できるものが多い。甕は煤が付着し被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したと考えられる。

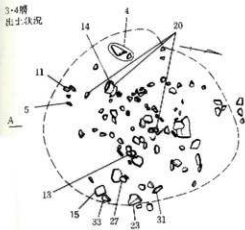


- (層序)
- 1層:暗褐色土
 - 2層:黄茶褐色粘質土(黄色土ブロック含む)
※1・2層は、A区-7号貯穴住居の灰皿下出土。
 - 3層:暗褐色粘質土(焼土・炭片・大粒礫・土器片含む)
 - 4層:暗茶褐色土(やや粘質。焼土・炭片、小礫、土器片を多く含む)
 - 5層:暗茶褐色土(バラバラして軽い。焼土・炭・土器片を多量に含む。骨片も含む)
 - 礫層:5-10cm大の円礫の堆積。
 - 6層:暗褐色粘質土(非常にやわらかい。灰・焼土・土器片・骨片の集中的な堆積がみられる。)
 - ※5・6層は一連の遺物堆積層で、灰中で埋め込まれたもの→中位土器集中
 - 7層:茶色粘質土(水っぽくやわらかい)
 - 8層:暗茶褐色粘質土(かたい。黄色土ブロック、焼土・炭・土器片少し含む)→中央部がもり上がる。
 - 9層:暗黒褐色粘質土(やわらかい。灰・焼土多く、5cm大の土器破片が多量に含まれる)→下位土器集中
 - 10層:明茶褐色粘質土(やわらかい。黄色土ブロック含むが、焼土・炭・土器等は含まない)
 - 11層:明茶褐色土(灰・焼土・土器片を少し含む)・貯蔵穴として使用中の基壇。

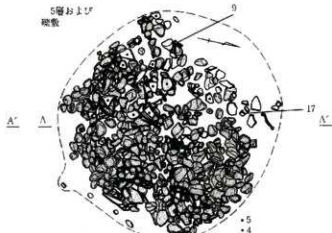
第103図 A区-53号土壇①(1/30)
—平面・断面と層序—

また28の完形の石鐮が1点伴出した。以上は単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。この下位の遺物一括廃棄の後に、黄色土ブロックを含んで硬い8層が、中央部が盛り上がるように堆積し、さらに水を含んで軟らかい7層が一部に堆積する。おそろい壁にある裂目と関連

3・4層
出土状況



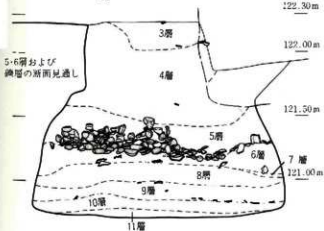
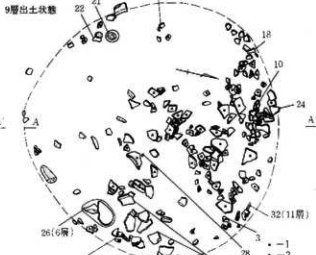
5層および
秘敷



6層出土状態



9層出土状態

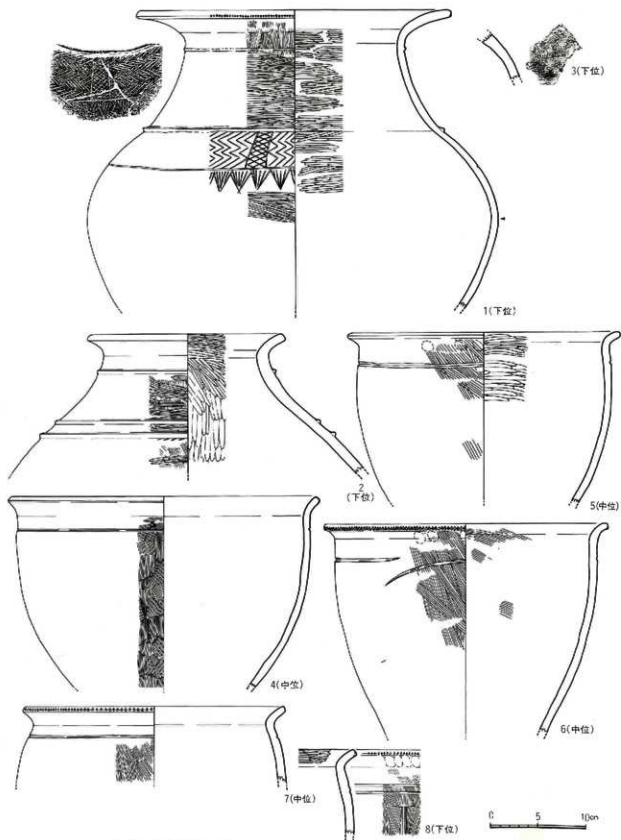


5・6層および
秘敷の断面見直し

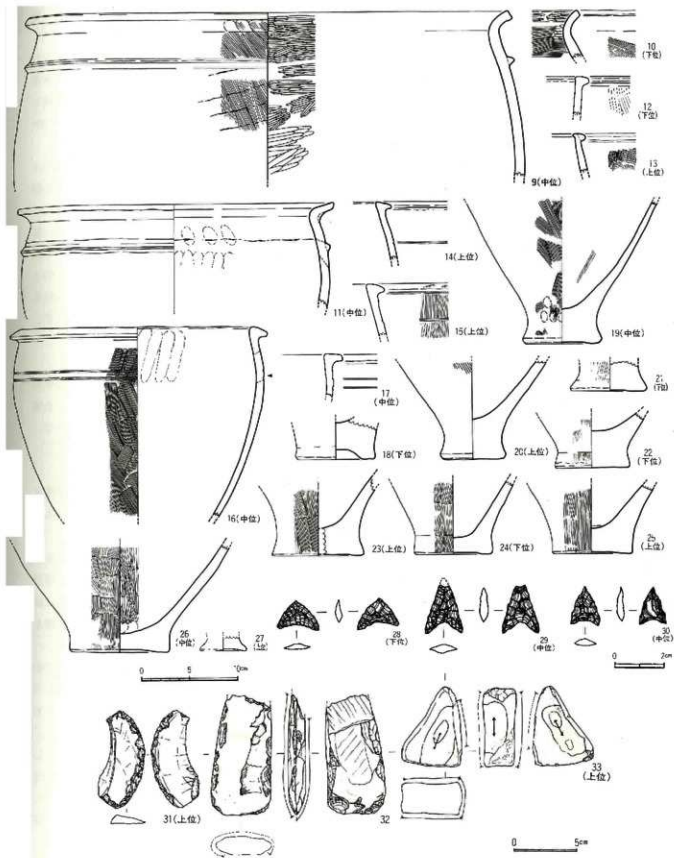
第104図 A区-53号土塚②

一埋没過程における遺物の出土状態(1/30)

する層で、8層堆積後に水が流れこむ状態が一時あったことを示す。その上の6・5層ではさらに中位の遺物一括廃棄がおこなわれている。両層とも土質は非常に軟らかい茶褐色土で、糞土・灰のほかには多量の土器・円礫・動物の骨片を含む。廃棄状態はまず6層に土器の大型破片を投棄し、その上に土塊をふさぐように大量の5～10 cm大の円礫が投棄されて隠層が形成される。そのため下の土器が押しつぶされて割れている。さらにその上から再び多量の土器破片が投棄される。4の層のように隠層の上下で接合する例があり、土器片・礫・土器片という投棄の過程は、一連の廃棄行為の結果とみてよい。下の6層からは6・7・9・16・19・26の礫と29・30の石鏃を検出し、上の5層からは5・17の礫を検出した。器種は礫のみで、完形に近く復元できるものが多い。礫のは



第105图 A区-53号土坑出土器物①(1/4)

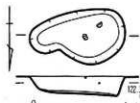


第106图 A区-53号土坑出土遗物②(1/4, 28~30=2/3, 31~33=1/3)

とんどは煤が付着して被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したとみられる。骨片を含む食物残滓と使用の痕跡のある甕のみを、多量の礫とともに投棄する点からみて、日常の生活廃棄物の投棄ではなく、一時に多量の食事を用意して、それに使われた土器を一括廃棄したなんらかの非日常的な行為の結果と推定される。なお下位と中位の土器は、下位の土器の一部が上に浮いたものを除いて全く接合せず、上下の遺物一括廃棄はそれぞれ異なる背景を持っていると推定される。最後に、焼土・炭・礫と土器片を含む4・3層が厚く堆積して埋没する。中位の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。13~15・20・23・25・27の甕・31のスクレイパーと33の砥石が出土した。

出土土器。下位では突帯を施す甕Aと沈線で文様を施す甕Aが主体で、沈線は一条と二条があるほかに12のような逆L字形口縁の甕Cも共存する。12は搬入品である。中位では甕のみで、沈線で文様を施す甕A、突帯の甕B、逆L字形口縁の甕Cが主体で、沈線は一条と二条がある。9の大型甕は甕棺として使われてもおおくない土器である。4・6・16・19は搬入品である。そして上位の4・3層から出土した土器は甕Cのみであった。石器。下位の遺物一括廃棄に伴った28は、豊后産黒曜石製の完形の打製石鎌で、中位の遺物一括廃棄には同じく豊后産黒曜石製の先端部欠損の打製石鎌の29と、姫島産黒曜石製の完形の打製石鎌である30がともなう。上位の4層から出土した31はサヌカイト製の完形のスクレイパーである。土器廃棄のなかに伴う石器が、石鎌に限られる点は興味深く、あるいは土器とともに祭祀に使われたのかも知れない。土器全体に大きな時期差は認められず、土壇廃棄の時期は、その上七土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇102)

A区-54号土壇 (第107図)



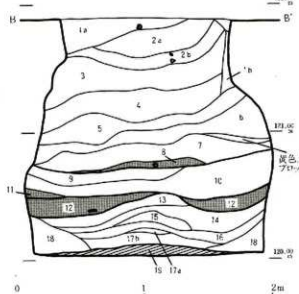
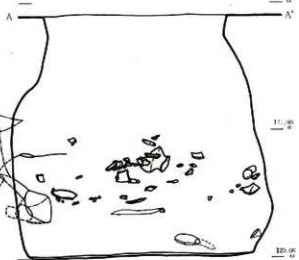
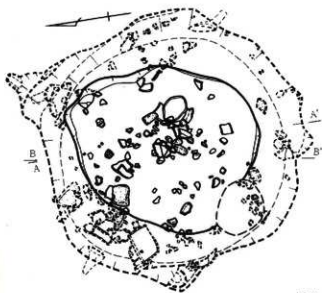
第107図 A区-54号土壇 (1/40)

R17調査区で検出された不定形の土壇で、底面はやや傾斜があるが、おおむね平坦である。規模は長軸長100cm、短軸長58cmで、検出面からの深さは21cmである。土壇の性格は不明だが、埋土中に弥生時代前期末の甕の底部片2片が混入していたので、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壇114)

A区-55号土壇 (第108~110図) 版図14・36・37)

S 0 調査区で検出された大型円形の袋状土壇で、底面は平坦で、甕の側面に深ささまざまな穴が四方に掘られている。その規模は長軸長216cm・短軸長210cmで正円形に近く、深さは検出面から186cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

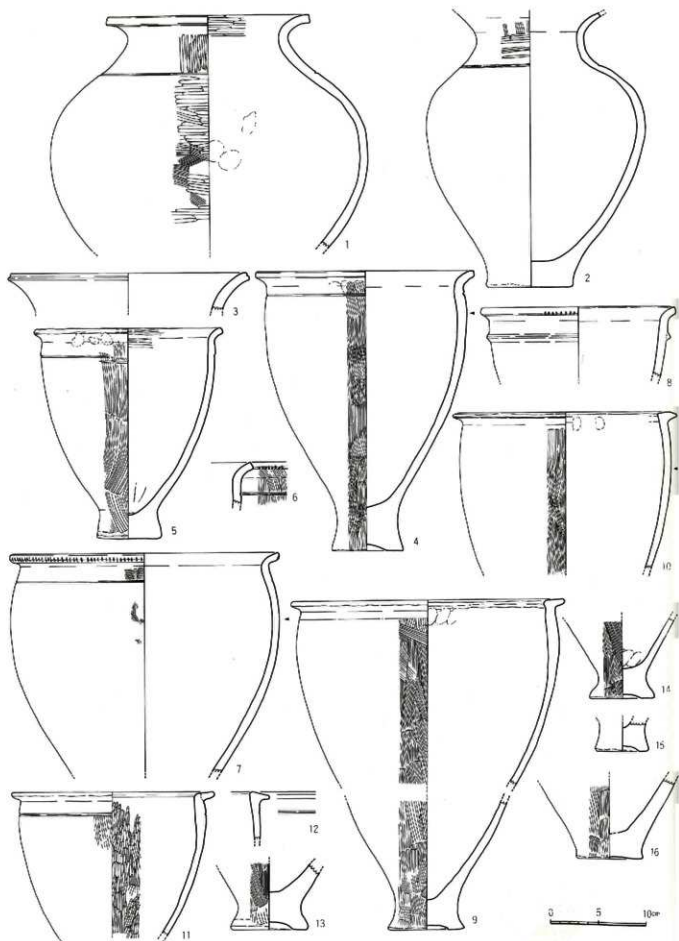
まず底面に黒褐色の19層が形成される。この層には炭・土器の細片を含み、20の高杯の破片と22の石皿破片が出土した。貯蔵穴使用中に形成された床面層である。その上の18~1層が使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位と中位に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第108図)。まず床面直上の周縁に砂混じりの黄褐色土(18・17層)が堆積する。基盤層とまったく同質の土であることから、この層は壁の穴を掘る際の排土上であることがわかる。遺物は何も含まない。さらに16~13層が、中央部が盛り上がるように堆積し、砂層と焼土・炭混じりの層が互層をなしている。3の壺口縁片と12の甕Cの破片が混入する。おそらく壁の穴を掘ったのちきつづき生活廃棄物を土壇の上から投棄したものであろう。その上の黒褐色の12・11層は黄色土ブロックと炭層の混層で、土器片を多量に含む下位の遺物一括廃棄である。そのなかには1の甕、4・6・7・9~11・13・14の甕を検出したが、完形に近く復元できるものが多い。甕はすべては煤が付着して被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したとみられ、なんらかの非日常的な行為に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。この下位の遺物一括廃棄の後に、やや粘質の10・9層が堆積し、16の甕底部以外に遺物はほとんどない。次の8層ではふたたび中位の遺物一括廃棄がおこなわれ、小礫と大型土器片を多く含む。2の甕、5・8・15・17~19の甕などで、完形に近く復元できるものが多い。甕も含めてすべての土器が煤が付着して被熱していた。甕が被熱している点などからみて、日常の生活廃棄物の投棄ではなく、一時に多量の食事を用意して、それに使われた土器を一括廃棄したなんらかの非日常的な行為の結果と推定される。なお下位と中位の土器は、下位の土器の一部が上に浮いたものを除いて全く接合せず、遺物一括廃棄にはそれぞれ異なる背景を持っていると推定される。この中位の遺物一括廃棄の後に、遺物の少なく硬い7・6層が堆積し、その上の軟らかい



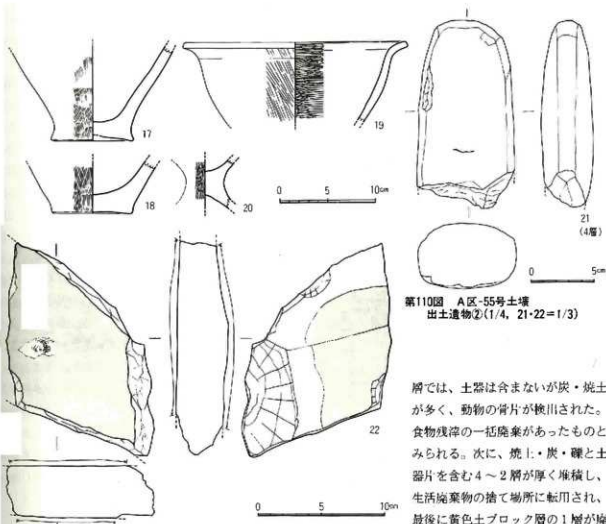
第108回 A区-55号土壤 (1/30)

(層序)

- 1a層:黄赤褐色土(黄色土ブロック層,土器片含む)
- 1b層:黄赤褐色土(黄色土ブロック層,土器片含む)・壁面が陥落した層
- 2a層:暗赤褐色土(小礫多く,上層も含む)
- 2b層:暗赤褐色土(小礫多く,焼土片・土器片を少し含む)
- 3層:赤褐色軟質土(サラッとした土,小礫と土器片は含まない)
- 4層:暗赤褐色粘質土(かたい,土器片少し含むが,小礫は含まない)
- 5層:暗赤褐色土(4層より軟い,焼土・炭少し含む,骨片を抽出)→上位腐植層
- 6層:暗赤褐色硬質土(5層よりやや硬い,上層片含む)
- 7層:赤褐色粘質土(非常にかたい,土器片含む)
- 8層:暗黒褐色軟質土(焼土・炭・土器片を多量に含む)→中位土器集中
- 9層:暗赤褐色土(やや粘質,小礫を多く含む,焼土・炭・土器片を少し含む)
- 10層:暗赤褐色土(やや粘質,焼土・炭多く,土器片と小礫を少し含む)
- 11層:暗黒褐色土(→灰層,土器片多量に含む)
- 12層:暗黒褐色土(黄色土ブロックと炭層の混層,土器片を多量に含む)
※11・12層は下位土器集中
- 13層:暗赤褐色土(土器片を少し含む,礫多いが,焼土・炭は含まない)
- 14層:暗赤褐色土(焼土・炭多く,礫と土器片少し含む)
- 15層:暗赤褐色土(砂まじり粘質土,何も含まない)
- 16層:暗赤褐色土(焼土・炭多く,礫と土器片少し含む)
- 17a層:灰黄色砂質土(粘質もある,何も含まない)
- 17b層:灰黄色土(砂まじり,何も含まない)
※15・17層の砂層は,掘面の穴からの排出土
- 18層:暗赤褐色土(砂多い,17b層と同じ)→掘壁からおちた土
- 19層:暗赤褐色土(ややかたく,炭・土器片少し含む)
→貯蔵穴として使用中の地壇。



第109图 A区-55号土坑出土器物(1/4)



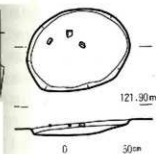
第110図 A区-55号土壌
出土遺物②(1/4, 21-22=1/3)

層では、土器は含まないが炭・焼土が多く、動物の骨片が検出された。食物残渣の一括廃棄があったものとみられる。次に、焼土・炭・礫と土器片を含む4～2層が厚く堆積し、生活廃棄物の捨て場所に転用され、最後に黄色土ブロック層の1層が廃

棄されて最終的にこの土壌は埋没する。4層からは刃部が欠けた21の磨製石斧の断片が出土した。

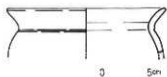
出土土器は沈線で文様を施す壺Aと壺Aが主体で、沈線は一条である。8のような尖唇の壺B、9～11のような逆し字形口縁の壺Cも共存する。すべて在地産である。土器全体に大きな時期差は認められず、土壌廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と中期初頭の間と推定される。(旧C地区土壌62)

A区-56号土壌(第111・112図 →図版15)



第111図 A区-56号土壌(1/30)

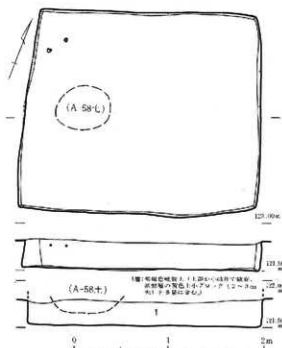
S0調査区で検出された長円形の土壌で、底面はやや高低がある。規模は長軸長83cm、短軸長63cmで、検出面からの深さは9cmである。埋土は暗褐色土の単一層(1層)で、炭と土器細片を含む。胎土に石英を多量に含む搬入品の1の壺口縁が含まれる。残存部が浅いので土壌の性格と埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌67)



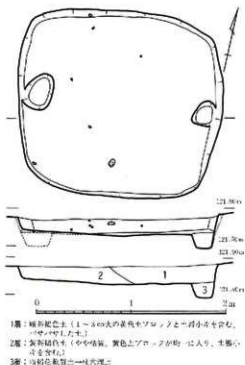
第112図 A区-56号土壌
出土遺物(1/4)

A区-57号土壌(第113図 →図版15)

S0調査区で検出された長方形の大型土壌で、A-58土壌に切られている。底面はおおむね平坦である。規模は長さ253cm、幅214cm、検出面からの深さは34cmである。長軸の方位角は70度で、A-47土壌と同じ方位である。その大きさや形態からみて、居住用ではないならぬ施設として建設されたことは明らかである。埋土は暗褐色土の単一層(1層)で、土器細片を少量含む。2～3cm大の黄色土ブロックを多量に含くみ、かつ層が厚いにもかかわらず分層できない点からみて、故意に埋め戻したものと推定される。土壌廃棄の時期は、土器細片から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌68)



第113図 A区-57号土壇 (1/40)



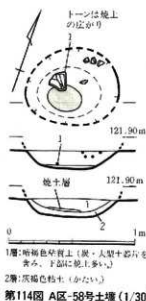
1層: 暗褐色粘土 (1~3cm先の黄色土ブロック) と一層小石を含む。
 (やや硬い土)
 2層: 灰褐色土 (やや粘質。黄色土ブロックが均一に入り、土器細片を含む)
 3層: 白褐色粘土(硬い土)

第116図 A区-59号土壇 (1/40)

A区-58号土壇 (第114・

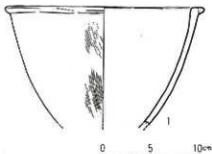
115図 →図版15)

A-57土壇の埋土中に別に掘りこまれた円形で底の丸い皿状の小型土壇である。上手の断面で確認したため一辺のみしか計測できなかったが、長さは60cm、検出面からの深さは14cmである。埋土は二層に分かれ、下の2層は硬い灰褐色粘土で、底面に張られたように検出した。その上に焼土層が堆積して、1層の土で埋まっている。おそらく伊として使われたものであろう。



1層: 暗褐色粘土 (炭・土器土器片を含む。下部に焼土多い)
 2層: 灰褐色粘土 (かたい)

第114図 A区-58号土壇 (1/30)



第115図 A区-58号土壇出土遺物 (1/4)

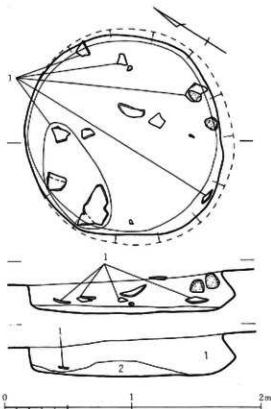
A区-59号土壇 (第116図 →図版15)

S19調査区で検出された長方形の土壇で、底面はおおむね平坦である。規模は長さ221cm、幅196cm、検出面からの深さは18cmである。長軸の方位角は84度である。両短辺に1本づつ柱穴があり、二本柱の支えを備えている。その規模と構造からみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたことは明らかである。埋土は、二層に分かれるが、全体に黄色土ブロックが均一に入り、土器細片を少量含む。短時間で埋め戻されたとみられる。土壇廃棄の時期は、土器細片から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇69)

A区-60号土壌 (第117・118図 →図版15・37)

同じくS19調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長168cm、短軸長166cmでほぼ正円形に近く、検出面からの深さは33cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用状態を知る手がかりはなかったが、埋没状態では1層に遺物一括廃棄があることを確認した。まず黄色土ブロックと炭・焼土を含む1層が、中央部に盛り上がるように堆積している。土器は含まない。おそらく土壌使用停止直後に土壌の上から落下した自然堆積物であろう。その上に茶褐色のバサバサした1層が厚く堆積する。そのなかに焼けた礫と大型土器片が多量に含まれ、逆に細片はほとんどないので遺物一括廃棄と評価される。散らばっていた大型破片の大部分は1の壁に接合復元されたが、その底部はなかった。壺は被熱した大型の壺Bである。他に破片の中には壺の破片が含まれている。おそらく打ち割られたものを廃棄したとみられる。焼けた礫もいっしょに捨てられているので、なんらかの非日常的行为に使われた土器を一括廃棄したものとも考えられるが、はっきりしない。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌93)



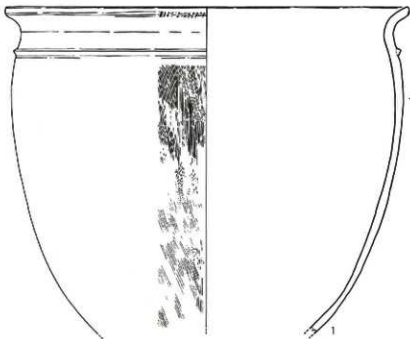
1層:茶褐色上(バサバサした土、焼土・炭・土器を多量に含む)土器廃棄中
2層:茶褐色土(やや粘質上、1~3cm大の黄色土ブロックを含む。焼土・炭を少し含むが、土器は含まない。)

第117図 A区-60号土壌 (1/30)

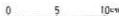
A区-61号土壌 (第119図)

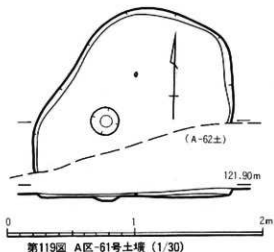
S19調査区で検出された不定形の土壌で、A-62土壌に南側を切られている。底面は平坦で浅いピットが1箇所ある。規模は長軸長183cm、短軸長104cmで、検出面からの深さは10cmである。なんらかの使用目的を以て掘られた穴だが、その性格は不明である。

埋土は暗褐色粘質の硬い単一層(1層)で、炭・焼土等はなく、土器細片を1点検出した。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その細片から判断して弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌95)



第118図 A区-60号土壌出土遺物 (1/4)





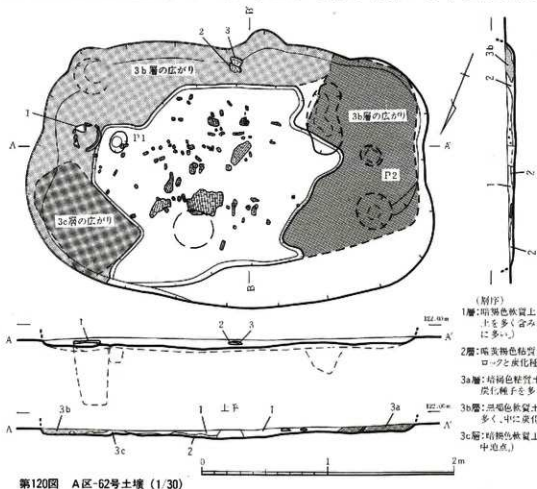
A区-62号土壤 (第120・121図、写真12 → 図版16・37)

S19~T19調査区で検出された東西に長い隅丸長方形の大型土壇で、A-61土壇を切って掘りこまれている。底面はやや高低があるが、おおむね平坦である。規模は長さ329cm、幅205cm、検出面からの深さは11cmである。長軸上に二本柱を備えている。しかし床面には炉はなく、食物貯蔵用の窪穴建物であった可能性が高い。そして廃絶時に「火災」により焼失したものと推定される。

上部の削平が激しいので底部の埋没状態しわからなかった。まず南壁ぎわの中央に、二枚のサヌカイト製スクレイパー(第121図2・3)が刃を外に向けて、重ね置かれた状態で検出された。まだ使用に耐える製品が置かれたままになっている。さらに東側のP1の外側に、底面に密着して逆さまに置かれた1の壺を検出した。削平のため胴部以下はなくな

っているが、おそらく完形品をふせて置いたものであろう。ちなみにこの壺は、胎土に金雲母を含む搬入品で、被熱した日常土器の転用品である。以上の土器と石器の出土状態が、H常の使用状態のままであるとは考えにくい。おそらく廃絶時に意図的に配置されたと推定される。

その上に以上の遺物をおおって、まず炭片・焼土片と炭化種実を大量に含む3層が、土壇の周縁に広く堆積する。場所によりその含む密度が異なり、3C層は土壇の隅に長方形に検出された。腐朽した入れ物の痕跡であろうか。分析の結果、炭化種実はすべてマメ類であることが判明した(資料17・18)。つまりこの土壇に貯蔵され



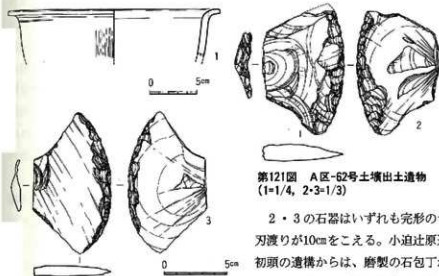
(層序)

- 1層: 暗褐色粘質土(土器片・焼土を多く含む。炭化材が特に多い。)
- 2層: 暗赤褐色粘質土(黄色土ブロックと炭化種子を含む。)
- 3a層: 暗褐色粘質土(焼土・炭・炭化種子を多く含む。)
- 3b層: 暗褐色粘質土(炭が非常に多く、中に炭化種子多い。)
- 3c層: 暗褐色粘質土(炭化種子集中地点。)



写真12. A区-62号土壇検出状態(北西から)

ていた食料そのものである。同時に中央部には、炭化種実と黄色上ブロックを含む粘質の2層が薄く広がり、その上に炭化材と焼土を多量に含む、軟らかい1層が堆積していた。1層堆積時に明らかに木材が燃える状態であったことがわかり、それが3層と2層をおおっている。この埋没状態を、不時の火災による食料貯蔵穴の焼失と考えることも可能であるが、土器と石器の出土状態と、柱穴とみられるP2は廃絶時に3層におおわれ、焼けた状態の柱は検出されていないことなどから、意図的な焼却という解釈も可能である。後者の場合、最初に置かれた石器と壺は一種の埋納ということになる。



第121図 A区-62号土壇出土遺物(1-1/4, 2-3-1/3)

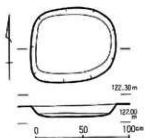
2・3の石器はいずれも完形のサヌカイト製のスクレイパーで、刃渡りが10cmをこえる。小迫辻原遺跡の弥生時代前期後半から中期初頭の遺構からは、磨製の石包丁がまったく出土していないので、この石器がこの時期の収穫具である可能性が高い。土壇廃棄の時期

は、壺から判断して弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇96)

A区-63号土壇(第122図、写真13)

S18調査区で検出された、円形で底の丸い皿状の小型土壇である。規模は長軸長89cm、短軸長76cmで、検出面からの深さは13cmである。その性格は不明である。埋土は暗黄褐色の単一層(1層)で、炭・焼土と土器細片を含む。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。土壇廃棄の時期は、その細片に含まれた壺底部の小片から判断して、弥生時代前期末と推定される。

(旧C地区土壇103)



第122図 A区-63号土壇(1/40)



写真13. A区-63号土壇遺物出土状態(西から)

堆積する。この層は黄色土ブロックを含まず、ほかの穴からの排出土を利用したものではないので、土そのものが選ばれている可能性がある。土器はなく、少量のコナラ属の炭化種実と、礫石器類が底面から出土した。特に後者は、40・43の小型石皿の完形品と、同じ大きさの円礫6個の計8個からなっていた(写真16)。

この石にどんぐり類が伴っている点を考慮すると、この土壌は石皿を使ってどんぐり類を加工する施設、すなわち食物加工の目的で掘られた可能性が指摘できる。そして使用した道具をそのまま残して埋め戻した可能性が高いのである。さらに8・9層埋没の直後に、東半分の残された凹みに大量の土器を主とした遺物一括廃棄がおこなわれて7層が形成される。さらに、遺物の少ない間層(6層)を挟んで、3層と2層の土器一括廃棄層が、一部下の8・9層を掘りこんで形成される。3層にはコナラ属の炭化種実がふくまれ、2層には動物骨片が含まれる。また東の7層の上には、動物の骨片を多量

に含む4層が堆積する。層序からは7層→6層→3+2層・4層の順は明らかだが、相互に土器が接合するので、以上の遺物一括廃棄は、短期間の一連の廃棄行為の累積と言える。7層遺物一括廃棄層では、4・7の壺片と10~12・18・21・23・33の甕および38の高杯が、大きく割られ大型破片のまま、口縁部を上に向けてのように廃棄されていた。この層では完形の39の石匙も検出された。3層と2層の遺物一括廃棄層では、1~3・8の破片と9・13~15・17・19・22・25・32・33の甕および37の鉢が、同じく大型破片のまま、口縁部を上に向けてのように廃棄されていた。この層では41の石皿片も検出された。7層と3+2層の土器出土状態はよく似ており、ところどころ折り重なるように集中する地点がある。その上別な地点で折り重なった大型破片同士が接合する例(10・17・25・34)があるので、おそらく別な場所でまとめて打ち割られたものを次々と廃棄したとみられる。甕は被熱していないが、対照的に甕はほとんど被熱した日常品である。少なくとも5個体以上の壺と17個体以上の大小の甕が転用されて、なんらかの非日常的行為に使われた後、動物骨片やどんぐりなどの食物残渣とともに一括廃棄されたものと推定される。かなり大規模な共食を伴う祭祀がおこなわれたものと推定される。最後にこの遺物一括廃棄の後に1層が堆積し、やはり大量の土器片と炭・焼土・炭化種実が含まれる。土器は一括廃棄のものに比べて小片であるが、下の土器と接合する例(14~16・18・20・33)が多



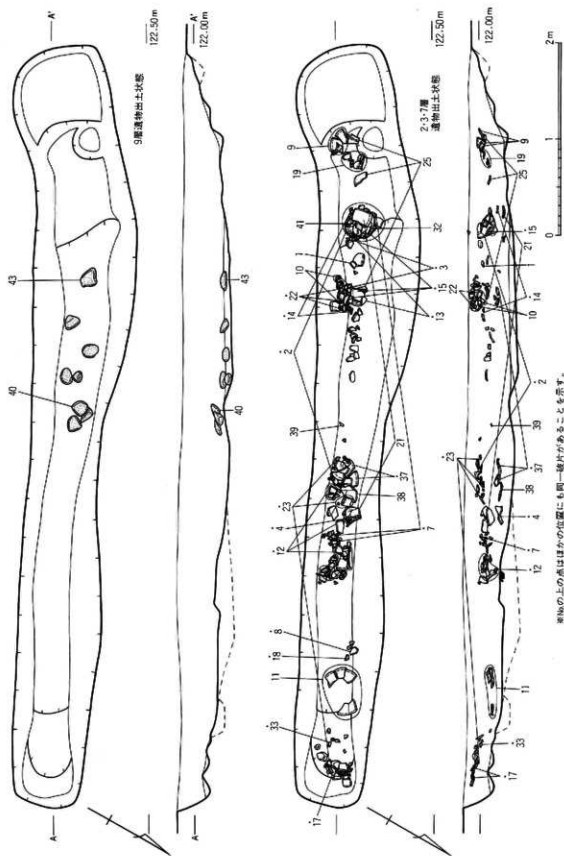
写真14. A区-64号墳中央縦断面の土層



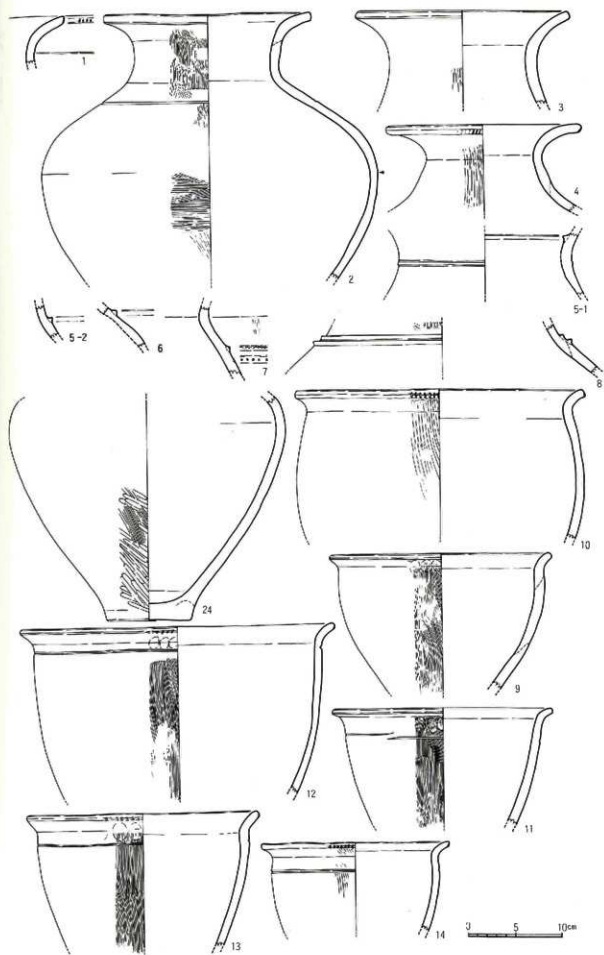
写真15. A区-64号土壇横断面の土層(B断面)



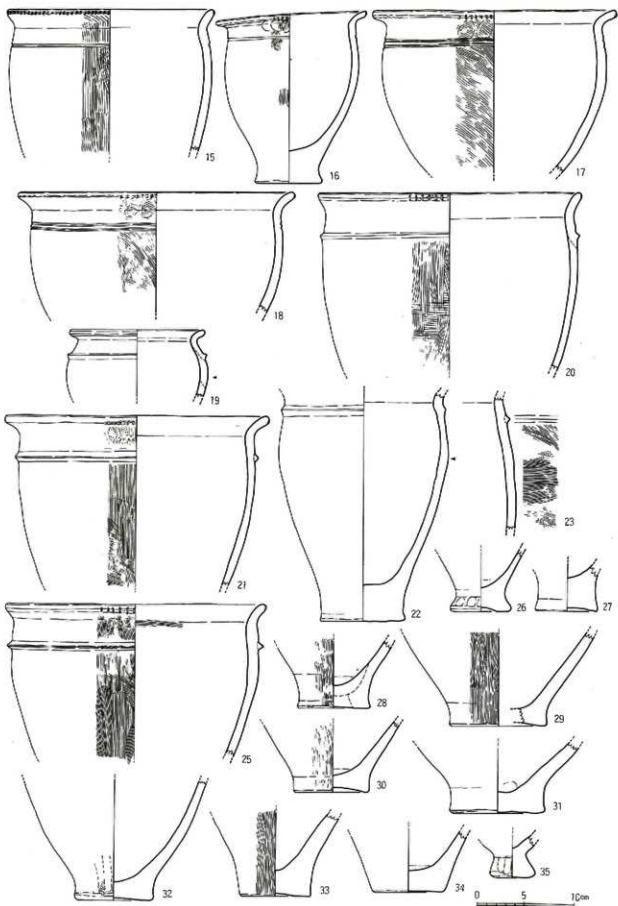
写真16. A区-64号土壇底部円礫出土状態



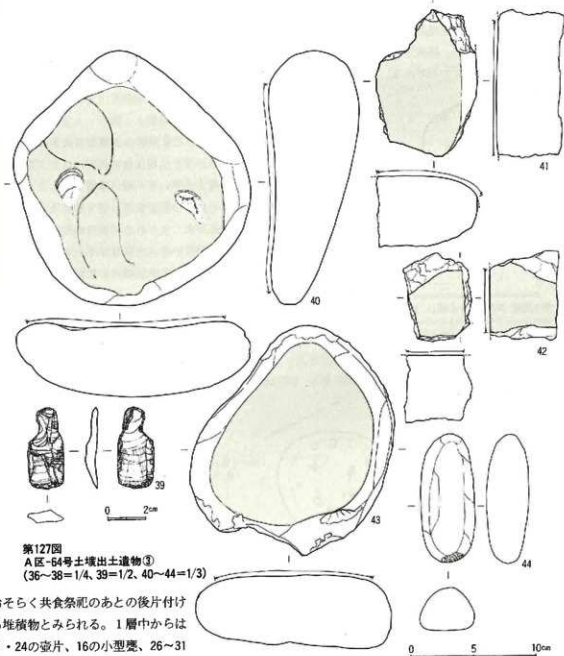
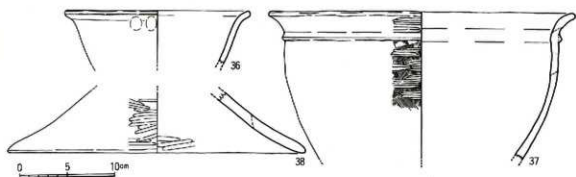
第124図 A区-64号土壤②-下部遺物出土状態-(1/40)



第125图 A区-64号土坑出土器物① (1/4)



第126図 A区-64号土坑出土遺物②(1/4) №24は第125図にある。



第127図
A区-64号土壇出土遺物③
(36~38=1/4, 39=1/2, 40~44=1/3)

く、おそらく共食祭祀のあとの後片付けによる堆積物とみられる。1層中からは5・6・24の壺片、16の小型甕、26~31の甕底部片、36の鉢片、42の石皿破片と

44のハンマーストーンが出土している。他に1層からは打製石鏃が2点出土している。

出土遺物として、土器の壺は突帯を施す壺Bが主体で、沈線で文様を施す壺Aが少ない。甕は反対に壺Aが主で壺Bが従である。壺Aの沈線は一条と二条がある。その内一条沈線の11・14・15は胎上に金雲母と石英を含む

搬入品である。逆L字形口縁の甕Cは1点も含まれない。35は出土位置不明のミニチュアの甕である。石器では、7層の遺物（括弧案に伴った39は標岳産黒曜石製の完形小型の石匙である。最下層にのこされた40・43の安山岩製の石皿は小型で、いずれも完形品である。41・42の安山岩製の石皿はいずれも破片の一部である。44は砂岩製の完形のハンマーストーンである。土器全体に大きな時期差は認められず、土壌産棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌104）

A区-65号土壌（第128・129図 →図版18）

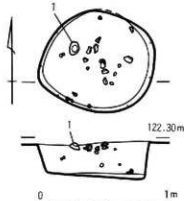
S17調査区で検出された小型円形の壺状穴土壌で、底面は平坦だが西がやや高い。規模は長軸長96cm・短軸長76cm、深さは検出面から29cmほどである。小型の貯蔵穴の可能性もあるが、はっきりしない。埋土は暗褐色粘質土の硬い単一層（1層）で、炭・焼土と土器細片を多量に含むほかに、コナラ属の炭化種実が少量検出された（資料40～43）。埋土が厚いのに分層できず、硬く締まる点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が高い。隣接するA-66土壌の堆積層と非常によく似ている。土器はいずれも細片で、図示できるのは1の釜底破片のみである。1は金尖母を含む胎土の搬入品である。土壌産棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌153）

A区-66号土壌（第130図 →図版18）

S17調査区で検出された小型円形で壺状穴の土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長88cm・短軸長75cm、深さは検出面から31cmほどである。性格は不明である。埋土は暗褐色粘質土の硬い単一層（1層）で、炭・焼土と土器細片を多量に含む。埋土が厚いのに分層できず、硬く締まる点から考えて、短時間の埋没すなわち埋め戻しがおこなわれた可能性が高い。隣接するA-65土壌の堆積層と非常によく似ている。土器はいずれも細片で、図示できるものはない。土壌産棄の時期は、A-65土壌との類似から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌116）

A区-67号土壌（第131・132図）

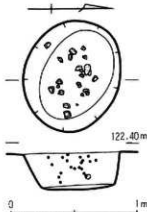
S17調査区で検出された平面形は円形だが、断面は皿状で、底は凸凹した小皿土壌である。規模は長軸長98cm・短軸長82cm、深さは検出面から45cmほどである。その性格・用途は不明である。埋土は、まず壁面から下部全体に、やや硬い3層が堆積する。ついで炭片を多量を含む軟らかい黒褐色土（2層）が入る。その層中ではコナラ属の炭化種実が少量検出された（資料44）。最後にやや硬い茶褐色土の1層が堆積する。どの層も炭・焼土と土器細片を含む。1は1ないし2層から出土した甕Aの口縁破片である。土壌は使用



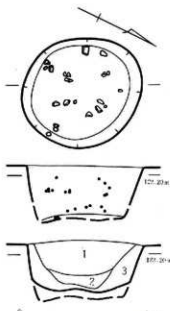
第128図 A区-65号土壌 (1/30)



第129図 A区-65号土壌出土遺物 (1/4)



第130図 A区-66号土壌 (1/30)



第131図 A区-67号土壌 (1/30)

（順序）

- 1層：明茶褐色土（ややかたい、炭・焼土と土器を多く含む）
- 2層：暗褐色粘質土（炭片が非常に多く、土器小片を含む）
- 3層：暗褐色土（ややかたい、炭土・炭を少し含むが土器はほとんどない）



第132図 A区-67号土壌出土遺物 (1/4)

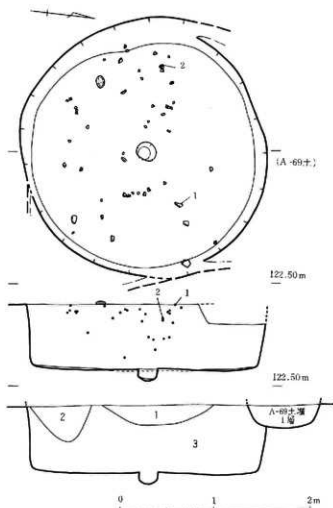
後、生活産棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌産棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定され

る。(旧C地区土壌154)

A区-68号土壌 (第133・134図 →図版18・

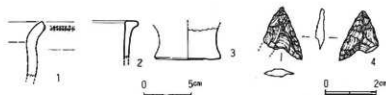
38)

R17～S17調査区で検出された大型円形の竪穴状土壌で、A-68土壌に北端を切られている。規模は長軸長276cm・短軸長268cmでほぼ正円形に近く、底面は平坦で、深さは検出面から74cmほどである。その構造から貯蔵穴であると推定される。底面中央にいわゆる中央ビットがある。ビット内には散らかい明黒褐色土が詰まっていた。埋土は三層に分かれるが、暗黄褐色粘質土の3層が大部分で、その上部に2・1層が部分的のっている。3・2層には2～3cm大の黄色土ブロックが多量にふくまれ、炭・焼土・小礫と土器細片を含む。黄色土ブロックの大量廃棄とその厚さからみて、故意に埋め戻したものと推定される。この埋め戻し土中からは、1～3の甕の破片と、脚を欠損した4の石鏝1点が散在する状態で出土したほか、コナラ属の炭化種実が少量検出された(資料38・39)。出土遺物は、1が如意形口縁の下端に刻み目をもつ甕A、2が逆L字形口縁の甕C、3の底部片は胎土に石英を多量に含む搬入品である。4はサヌカイト製打製石鏝で、小型品である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌115)



- 1層: 暗褐色土(かたい)。焼土・炭屑を非常に多く含む。土器片も含む。
- 2層: 暗褐色粘質土(かたい)。土器片と、5cm大の炭・焼土・黄色土小ブロックを多く含む。
- 3層: 暗褐色粘質土(2～3cm大の黄色土ブロックを非常に多く含む。少量の焼土・炭・土器片を含む) →埋め戻した土。

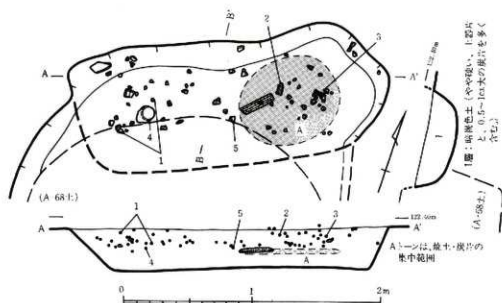
第133図 A区-68号土壌 (1/40)



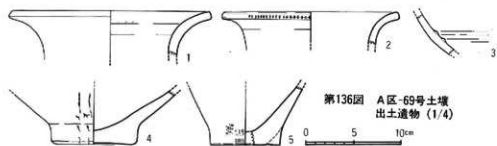
第134図 A区-68号土壌出土遺物(1～3=1/4, 4=2/3)

A区-69号土壌 (第135・136図 →図版18)

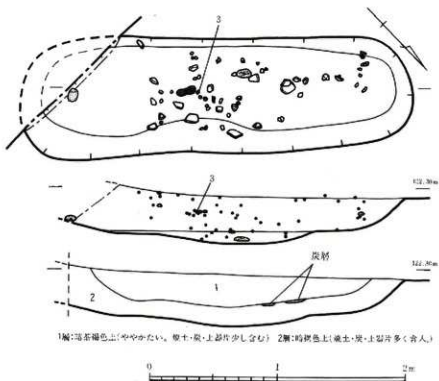
A-68土壌を切って掘りこまれた船底形の土壌で、底面は皿状である。規模は長さ255cm、幅110cmで、検出面からの深さは24cmである。歪んでいるので方位角は計測しなかったが、A-61土壌とほぼ同じ方位をとる。その性格は不明である。埋土は暗褐色土のやや硬い単一層(1層)で、炭・焼土と土器細片を多量に含む。炭化材と炭・焼土が集積する地点があり、遺物はその高さより上で多量に検出された。廃棄に先立って木材の焼却がおこなわれている。その後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。その層中に1～4の甕の破片と5の甕底部片が含まれている。3の破片と5の甕は被熱している。また2の甕片は、石英の多い胎土をもちいた搬入品である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌165)



第135図 A区-69号土壌 (1/30)



第136図 A区-69号土壌
出土遺物 (1/4)

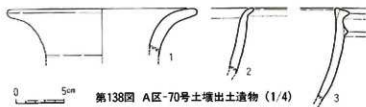


第137図 A区-70号土壌 (1/30)

A区-70号土壌 (第137
~138図 → 図版18)

S17調査区で検出された、
南半が調査区外に伸びる船底
形の土壌で、底面も船底状で
ある。規模は長さ310cm以上、
幅90cmで、検出面からの深さは
15cmである。長軸の方位角
は130度である。使用の状態
を推測させる手がかりはなく、
その性格と用途は不明である。
埋土は二層に分かれるが、暗
褐色土の2層と暗茶褐色土の
1層が順に堆積し、2層と1
層の間に炭層の堆積が認めら
れる。全体に炭・焼土・小礫
と土器細片を多量に含む。2
層を中心に1の破片と2~3

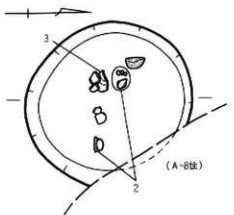
の漆の薄片が散在する状態で出土した。
3は逆L字形口縁の壺Cで、突帯が一条めぐる。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌162)



第138図 A区-70号土壌出土遺物(1/4)

A区-71号土壌(第139・140図 → 図版18)

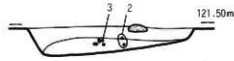
T0調査区で検出された大型円形の土壌で、A 8住(古墳時代前期中半)に東端を切られている。底面は皿状である。規模は長軸長135cm、短軸長110cmで、検出面からの深さは20cmである。貯蔵穴の名残りであろうか。埋土は暗褐色土の硬い単一層(1層)で、炭・焼土・円礫と土器片が散在する。残存部が浅いので埋没状態の詳細は不明である。1~3の壺が破片で含まれ、壺の底部は被熱している。1は一条沈線の壺Cである。土壌廃棄の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌118)



第139図 A区-71号土壌(1/30)

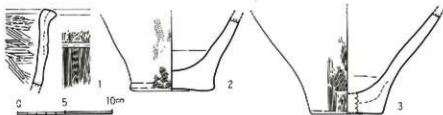
A区-72号土壌(第141・142図 → 図版18)

T19調査区で検出された小型円形の土壌で、底面は凸凹である。規模は長軸長88cm、短軸長81cmで、検出面からの深さは19cmである。埋土は二層に分かれ、下部に黄色土ブロックを多量に含む2層が、その上に土器片を含む1層が堆積する。1は1層から出土した逆L字形口縁一条沈線の壺Cで、被熱している。残存部が浅いので土壌の性格と埋没状態の詳細は不明である。土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌127)



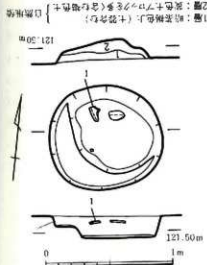
第140図 A区-71号土壌出土遺物(1/4)

A区-73号土壌(第143図)

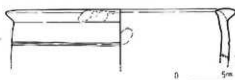


第141図 A区-72号土壌出土遺物(1/4)

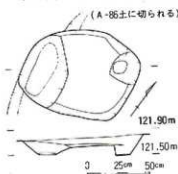
T18調査区で検出された



第142図 A区-72号土壌(1/30)



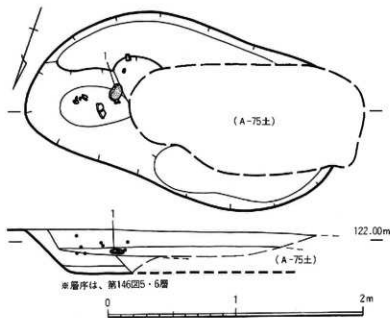
第143図 A区-72号土壌出土遺物(1/4)



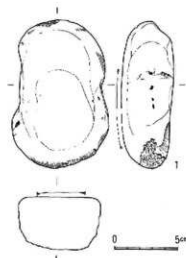
第144図 A区-73号土壌(1/30)

不定形の土壌で、A-86土壌(弥生時代中期後半)の床面下で検出された。底面は凸凹である。規模は長軸長97cm、短軸長70cmで、検出面からの深さは20cm

である。その性格は不明である。埋土は、黄色土ブロックを多量に含む暗黄褐色粘質土で、遺物はなにも含まない。A-86土壌以前の遺構なのでこの時期と認定した。(旧C地区土壌169)



第144図 A区-74号土壌 (1/30)



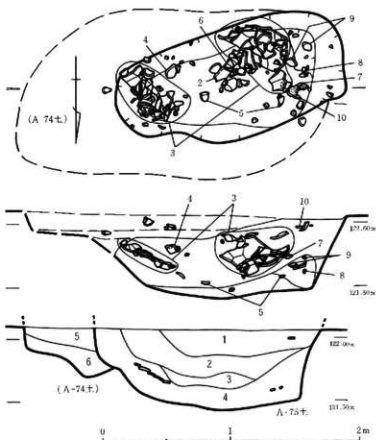
第145図 A区-74号土壌出土遺物 (1/3)

A区-74号土壌 (第144・145図

→図版19)

S17～T17調査区で検出された不定形の大型土壇で、埋没後にA-75土壇が重複するように掘りこまれている。

底面は凸凹で高さは一定していない。規模は長軸長250cm、短軸長128cmで、検出面から最も深いところで35cmである。埋上(第146図)は二層に分かれ、まず黄赤褐色土上の6層が堆積し、次に土器片等を含む5層が堆積する。土壇の廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。1層からは壘Bの小片と1の完形の磨石が出土した。土壇廃絶の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇160)



第146図 A区-75号土壌 (1/30)

(層序)

1層: 黄赤褐色軟質土

(サラッとした土。検上裏片をまじらに含む。土器片は多いが散在している。)

2層: 暗褐色硬質土(やや粘質。検上・検上裏片を少し含む。)

3層: 黄褐色土(2層より軟い。黄色土のロツクを多量に含むが、検上と戻は少ない。)

4層: 明黄褐色土(灰・炭土。土器片を多量に含む。土器片は2ヶ所に集中する。)

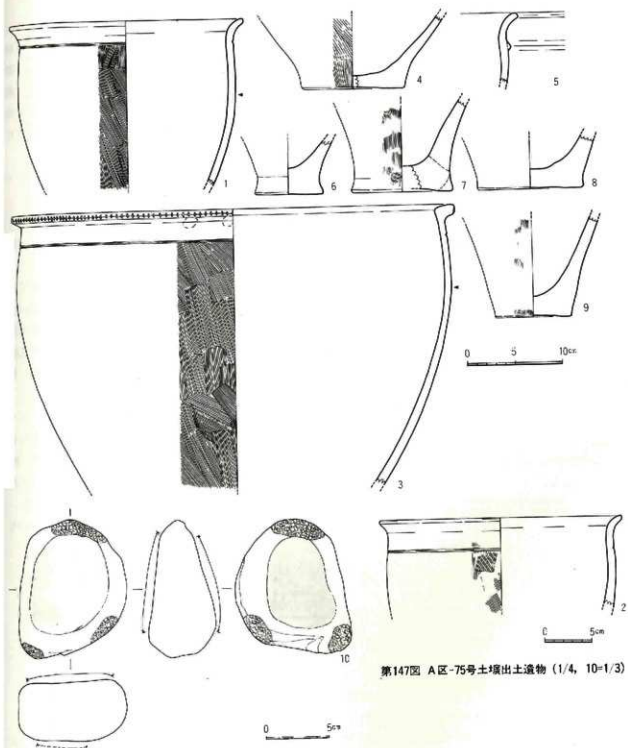
→下位土器廃絶

※以上A-75土壇

5層: 明赤褐色土(やや硬い。土器片を少し含む。)

6層: 黄赤褐色土(灰を少し含む。)

※5・6層は、A-74土壇の埋上。



第147図 A区-75号土壇出土遺物 (1/4, 10=1/3)

A区-75号土壇 (第146・147図 →図版19・38・39)

S17～T17調査区で検出された長円形の土壇で、A-74土壇埋没後にその中央に重複して掘りこんでいる。底面は皿状である。規模は長軸長187cm、短軸長85cmで、検出面からの深さは59cmである。土壇の用途ははっきりしない。

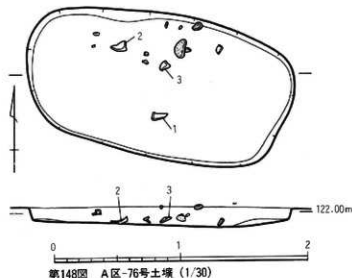
埋没状態の特徴は下位に遺物一括廃棄が認められることである(第146図)。まず底面から壁の全周に炭・焼土と土器片を多量に含む、黒褐色の軟らかい4層が堆積する。土器は大型破片の状態で、壁に張りつくように廃棄され、二ヶ所では特に重なって集中する。この遺物一括廃棄のなかには1・3～5・7～9の甕と10の磨石が

含まれ、甕には完形に近く復元できる例(3+4)がある。壺はなく、甕は大半が煤が付着して被熱していた。また磨石も火を受けている。おそらく土器はまとめて打ち割られて廃棄されたとみられる。以上は単なる生活廃棄物の投棄ではなく、甕のみを少なくとも4個体以上と磨石を使用した非日常的な行為に使われた遺物を、一括廃棄したものと推定される。この下位の遺物一括廃棄の後に、黄色土ブロックを多量に含む3層が投棄され、最後に焼土・炭・礫と土器片を含む2・1層が厚く堆積して埋没する。下位の遺物一括廃棄を契機に、生活廃棄物の捨て場所に転用されたか、遺物一括廃棄の残りの遺物を片付けたものであろう。1・2層からは2・6の甕片が出土した。

出土土器。F位では、沈線で文様を施す甕A、突帯を施す甕B、逆L字形口縁の甕Cが共伴し、沈線は一条である。石器には完形で被熱した磨石がある。

上層廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇167)

A区-76号土壇(第148・149図 →図版20)

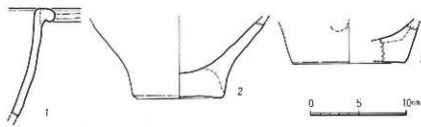


第148図 A区-76号土壇(1/30)

T17調査区で検出された長円形の土壇で、底面はやや傾斜するが、おおむね平坦である。規模は長軸長213cm、短軸長102cmで、検出面からの深さは16cmである。その大きさや底面の平坦さからみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたと思われる。

埋土は暗褐色土の単一層(1層)で、炭・焼土・小礫と土器細片を含む。1層から出土の1~3の甕壁はいずれも被熱している。残存部が浅いので、埋没状態の詳細は不明である。1は逆L字形口縁の甕Cである。

土壇廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇159)



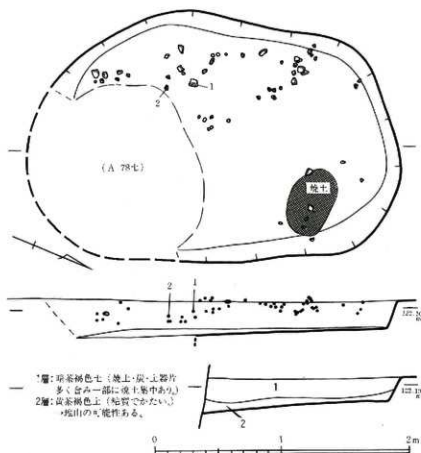
第149図 A区-76号土壇出土遺物(1/4)

A区-77号土壇(第150・151図 →図版20)

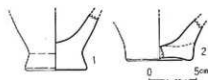
S17~T17調査区で検出された長円形の大型土壇で、A-78+壇に南半分を切られている。底面はやや傾斜するが、おおむね平坦である。規模は長軸長285cm以上、短軸長175cmで、検出面からの深さは31cmである。その大きさや底面の平坦さからみて、居住用とは異なるなんらかの施設として使用されたとみられる。

埋土は二層に分かれ、下部に黄色土ブロック層(2層)があり、粘質で硬く遺物は何も含まない。あるいは基盤層の掘りすぎかもしれない。その上に炭片・焼土片と土器片を多量に含む1層が堆積する。検出面で焼土の集中する地点がある。土器はいずれも細片である。1・2は1層から出土した甕の底部片である。1は被熱している。土壇の使用後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。

土壇廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壇158)



第150図 A区-77号土壌 (1/30)



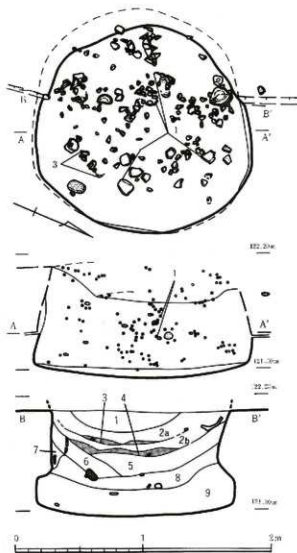
第151図 A区-77号土壌出土遺物(1/4)

A区-78号土壌 (第152・153図 →図版20・39)

S17～T17調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、A-77土壌を大きく切って掘りこんでいる。底面は浅い皿状である。規模は長軸長185cm、短軸長170cmではほぼ正円形に近く、検出面からの深さは84cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用状態をみず堆積はなく、その上の9～1層が使用停止後の堆積層である。埋没状態の特徴は下位と上位に二度の遺物一括廃棄が認められることである(第152図)。まず炭片と土器の細片を多量に含む暗黄褐色土(9・8層)が堆積する。焼土は少なく、そのなかには1の壺が大型破片で散在し、さらに3・7の甕を検出した。甕は金雲母を胎土に含む雑人品である。甕は煤が付着して被熱していた。おそらくまとめて打ち割られたものを廃棄したとみられる。

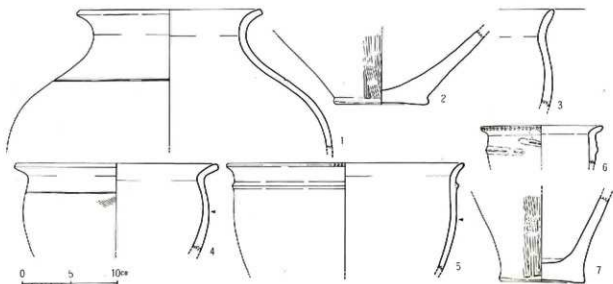
この下位の遺物一括廃棄の後に、壁から崩落した7層が壁ぎわに堆積し、その7層を覆うように斜めに黄色土ブロックを多量に含む6層と、炭・焼土を多量に含む5層が順に堆積する。7～5層には土器はほとんど含まれない。次の4～1層ではふたたび上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。黒褐色で軟らかい4層と3層に、暗褐色



第152図 A区-78号土壌 (1/30)

(順序)

- 1層:暗褐色粘質土(100cm以上の土の上、0.5-1.0cm大の炭片、土ロップ、灰・土器の多く含むが、炭片は少ない。)
 - 2a層+2b層:暗褐色粘質土(大型の炭片、土器片が多いが、炭片は少ない。)
 - 2層だが、間に3層が入るので、2aと2bに分ける。
*上位土層集中
 - 3層:茶褐色粘質土(炭・灰土・土器片を含ま、特に炭が多い。)
 - 4層:砂質褐色粘質土(炭土・灰・土器片と、0.5cm大の黄色土ロップが非常に多く含む。)
 - 5層:茶褐色粘質土(100cm大の炭片・灰土粒子が非常に多く、土器片も含む。)
 - 6層:やや灰化かった暗褐色土(炭・灰土片、0.5cm大の黄色土ロップが非常に多く含む。)
 - 7層:茶褐色粘質土と暗褐色土の混層。
*埴の池土が露出した。
 - 8層:灰化かった暗褐色土(炭・土器片多いが、炭土は少ない。)
 - 9層:暗褐色粘質土(土器片と1cm大の炭片を多く含む。)
- ※R・3層・下位土器集中



第153図 A区-78号土壌出土遺物 (1/4)

の2層が、互層で堆積する。どの層も炭・焼土・小礫と土器片を含むが、黄色土ブロックが特に多い層(4層)、炭が多い層(3層)、土器片が多い層(2層)などと各層単位の内容は異なっている。この中から4~6の層の縁部が出土した。6は胎土に金雲母を混ぜる搬入品で、4の層は被熱している。なお下位と上位の土器で接合する例はない。この上位の遺物一括廃棄の後に、バサバサして黄色土ブロックと炭・土器細片を多量に含む1層が堆積している。全体に、遺物とくに土器の量が少ないので、二回の遺物一括廃棄をどのように評価するかは難しい問題だが、少なくとも土器は日常品であることは間違いない、それが廃棄される際の契機が何であるかが問題である。

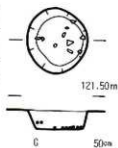
出土土器の特徴は、沈線で文様を施す甕Aと甕Aに、突帯を施す甕Bが加わる点にある。6の甕Bの突帯は交わらない。1・6以外は在産である。土器全体に大きな時期差は認められず、土壌廃棄の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。

(旧C地区七瀬166)

A区-79号土壌(第154図 図版22)

U0調査区で検出された小型円形の堅穴状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長32cm・短軸長18cm、深さは検出面から16cmほどである。その性格は不明である。

埋土は暗褐色土上の単一層(1層)で、炭片と黄色土ブロックと土器細片を多量に含む。残存部が浅いので、埋没状態の詳細は不明である。その細片から判断して、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壌119)



第154図 A区-79号土壌(1/30)

A区-80号土壌(第155・156図 図版20)

V18~U18調査区で検出された中央に船底状のくぼみのある長方形の大型土壌である。底面は平坦である。規模は長さ218cm、幅160cm、検出面からの深さは、もっとも深いところで23cmである。長軸の方位角は126度である。中央の船底状のくぼみのなかには、黄色土ブロックの小粒子と炭・焼土と土器細片が含まれ、一部に焼土の堆積する地点があったが、この土壌の

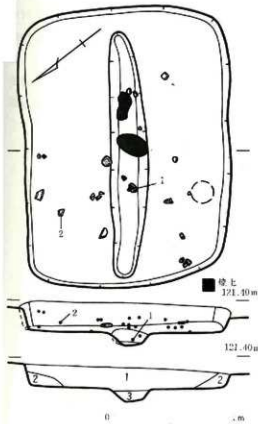


第156図 A区-80号土壌出土遺物(1/4)

機能とどのようにかわるのか判然としなかった。

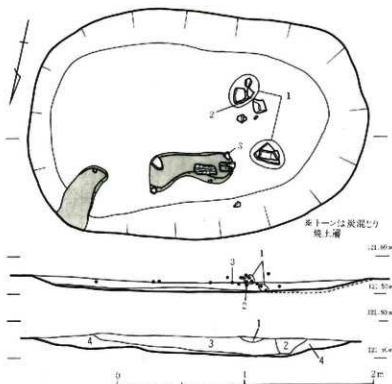
埋土は二層に分かれ、基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に含む2層が、土壌の隅に堆積し、その上に1層が堆積している。2層と先の3層はほとんど同質の土で、おそらく一連の過程で埋没したものと推定される。そうすると中央の船底状のくぼみは、土壌廃絶時まで閉口した状態を保っていたことになる。くぼみの中の3層からは1の甕底部片が、堅穴埋土からは2の炭底部片が出土した。1はよく焼けている。

土壌廃棄の時期は、その土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌139)



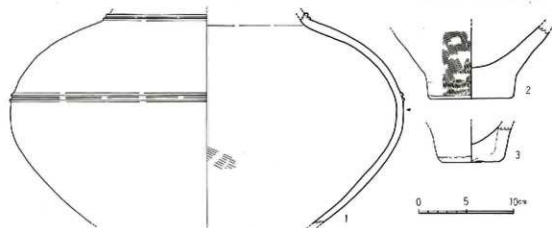
1層: 船底状のくぼみ・炭・焼土・土器片・0.5cm以下の黄色土ブロック多量を含む
2層: 同様な黄色土ブロックの多量を含む
3層: 同様な黄色土ブロック・炭・焼土を含む。0.5cm以下の黄色土ブロックを含む。

第155図 A区-80号土壌(1/30)



- 1層：明赤褐色軟質土（炭・灰土含まない）
 2層：暗赤褐色土（炭土・灰を多く含む、3層に比べてやわらかい）
 3層：黒褐色土（焼土ブロック・灰多く含む）
 4層：暗黒褐色粘質土（かたく、炭と黄褐色粘土ブロック含む）

第157図 A区-82号土壌 (1/30)



第158図 A区-82号土壌出土遺物 (1/4)

焼け、煤が付着している。その出土状態からみて、焼却された廃棄物の一括廃棄がおこなわれたと考えられる。

出土土器の特徴としては、1の壺は肩部と胴部にM字突帯をめぐらし、胎土に金雲母と石英を含む搬入品である。土壌断絶の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。（旧C地区土壌47）

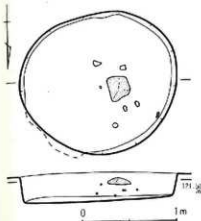
A区-120号土壌（第159図 →図版21）

じ19調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。第159図では竈穴状に見えるが、これは

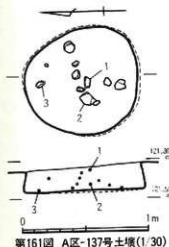
A区-82号土壌（第157・158図 →図版20）

S1調査区で検出された長円形の大型土壌で、底面は皿状である。その規模は長軸長269cm、短軸長167cmで、検出面からの深さは14cmである。後述するように床状の底面が形成されている点と、その平面形からみて、なんらかの作業土壌であった可能性が指摘できる。

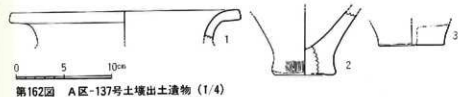
まず内凹した底面に黄色土ブロックと炭片を多量に含む4層が堆積し、硬く締まっている。1層は含まず、1層使用中の床面形成層である。その上の3～1層は断絶後の堆積層で、3・2層は土器片・炭・焼土を多量に含む。4層の直上には部分的に焼土の堆積があり、炭化材がかなり含まれる。また土器片の集中地点があり、そこから1の壺と2・3の壺底部片が検出された。壺は大型破片で、壺の底部片はいずれも火を受けて赤く



第159図 A区-120号土壌 (1/40)



第161図 A区-137号土壌 (1/30)



第162図 A区-137号土壌出土遺物 (1/4)

いずれも小片で、1は壺の口縁部、2・3は壺の底部片である。いずれも在地産で、壺は被熱が著しい。土壌断絶の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌66)

3) ビット (第2図、第5表)

遺物の上状態からこの時期であることが確実なビットは1本のみであった。

U18調査区ビット1 (第163図)

ビット内から1の壺の底部片が出土している。大型破片で、胎上に金堂母を含む搬入品である。



第163図 A区-U18調査区ビット1
出土遺物 (1/4)

冬の霜で壁が落ちてしまったものであり、実際の壁は内傾していた。その規模は長軸長166cm、短軸長148cmで、検出面からの深さは31cmである。その形態からみて大塚の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は暗褐色粘質土の単一層(1層)で、1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含み、炭片・焼土片・大型礫と土器細片を含む。30cm以上の深さを残していたのに分層できない均一層で、基盤層の由来する黄色土ブロックを多量に含む点から

みて、埋め戻された可能性が高い。

出土土器はいずれも細片で図示できないが、如意形口縁の裏と逆L字形口縁の裏Cが含まれている。土壌断絶の時期は、その出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧C地区土壌125)

A区-121号土壌 (第160図 →図版21)

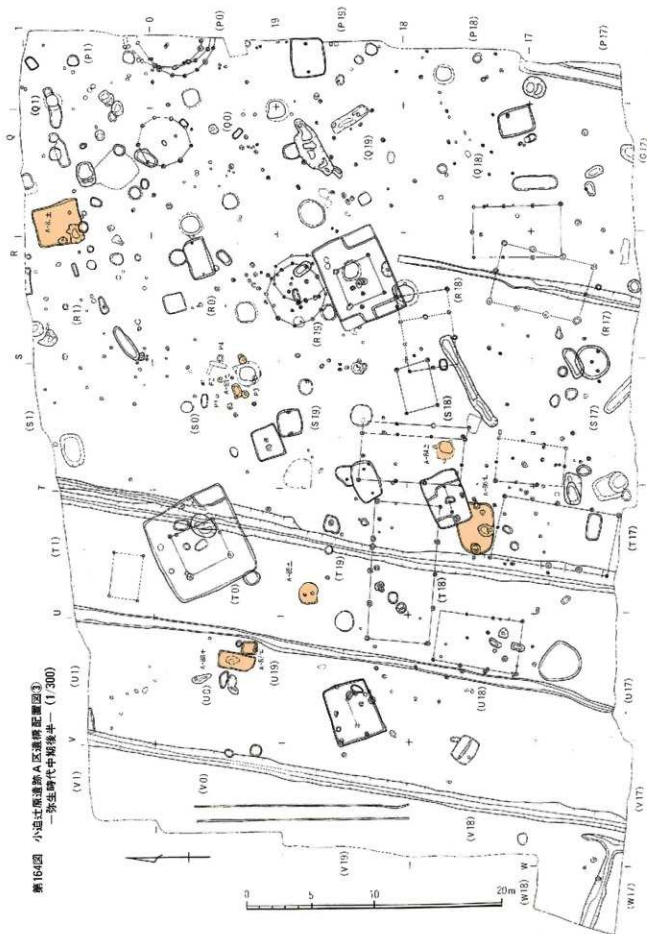
T19調査区で検出された長円形の小型土塊で、底面はやや傾斜するが、おおむね平坦である。規模は長軸長94cm、短軸長75cmで、検出面からの深さは16cmである。その性格は不明である。

埋土は暗褐色粘質土のよくしまった単一層(1層)で、炭化材と1~2cm大の黄色土ブロックと土器細片を多量に含む。残存部が浅いので、埋没状態の詳細は不明である。土壌断絶の時期は、その細片から判断して、この時期の遺構と認定した。(旧C地区土壌126)

A区-137号土壌 (第161・162図 →図版21)

S 0 調査区で検出された小型円形の袋状土塊で、底面は平坦である。規模は長軸長95cm、短軸長85cmで、検出面からの深さは24cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。断面順序の観察をおこなっていないので、埋没状態はわからないが、埋土中から土器片が比較的多く検出された。

第164圖 小迫丘陵遺跡A区遺構配置図③
 一弥生時代中期後半—(T-300)



第4節 弥生時代中期後半（第164図）

この時期にあたる遺構は、土壇7基を確認したのみである。関連するピット4本を本文に掲載する。この時代の遺構はまだ存在している可能性が高いが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

遺構の配置は、弥生時代前期後半～中期初頭の遺構群と重複する傾向があるが、A区の中で最も高い南東部には遺構の広がりはなかった。検出遺構は貯蔵穴または堅穴状の土壇で、堅穴住居跡は検出されなかったものの、削平の状態を考慮すれば周辺に存在したことは疑いなく、A区はこの時期においても生活空間として利用されていたと考えられる。

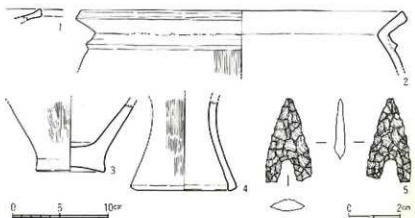
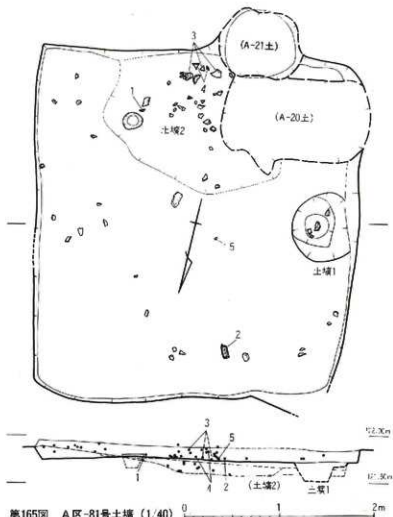
1) 土壇（第3・5・6表）

平面形からみると、①大期円形（B）、②長円形（C）、③長方形（E）、④形の定まらない不定形（F）の4種類に大別されるが、その遺構をすべて土壇に一括した。また以上の土壇は断面形からみて、底が広がる袋状と、壁が真っすぐに落ちる堅穴状と、底面が丸い皿状の三種に大別される。大型袋状の土壇はこの時期まで存在するが、小型円形や船底形の土壇は作られていない。

A区-81号土壇（第165・166図
→図版21・39）

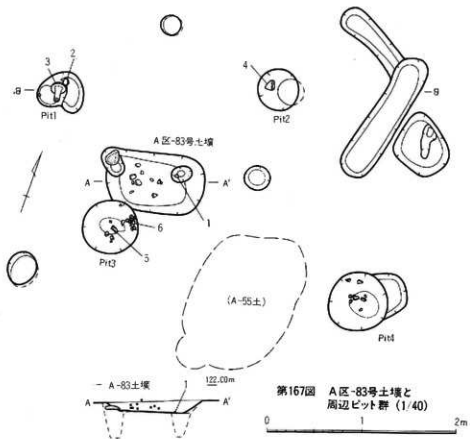
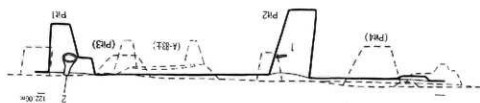
Q1～R1調査区で検出された長方形の大型土壇で、A-20・21土壇（弥生時代前期末）を切って掘りこまれている。底面は平坦である。規模は長さ356cm、幅342cm、検出面から長さ356cm、幅342cm、検出面からの深さは10cmである。長軸の方位土壇があり、土壇1は西辺中央壁ぎわに掘られている。土壇2は南辺中央の壁に接して掘られた浅い皿状の土壇である。跡がないので居住用ではないが、内部に土壁をもつ点からみて別の用途をもった施設であったと考えられる。

層序の観察をおこなっていない



第166図 A区-81号土壇出土遺物（1～4・1/4、5・2/3）

ので埋没状態の詳細は不明であるが、土壇2を中心に土器の小片が散在状態で検出された。1~3の壺と4の器台は破片となって、5の打製石鏝が完形品のまま検出された。ほかに図示していないが器種不明の鉄器片が1点出土している。1には丹塗りがあり、3・4は被熱している。胎上はいずれも在地産である。5の打製石鏝はサヌカイト製の無頭凹基の大型品（重さ2.3グラム）である。



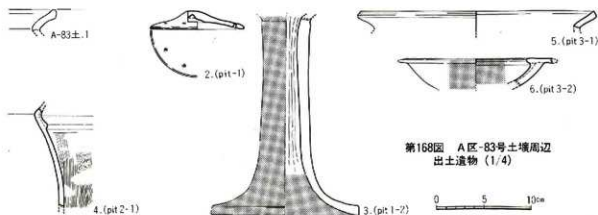
第167図 A区-83号土壇と周辺ピット群 (1/40)

この土器からみて、土壇廃絶の時期は弥生時代中期後半と推定される。(旧C地区土壇141)

A区-83号土壇と周辺ピット群(第167・168図) 図版21・39)

A-83土壇はS0調査区で検出された長円形の小型土壇である。底面は皿状で、ピット3に切られている。その規模は長軸長114cm、短軸長62cmで、検出面からの深さは14cmである。埋土は炭混じりの暗褐色土層で、その中に土器小片が散在していた。1の壺口縁片が唯一図示できるものである。(旧C地区土壇63)

この土壇の周辺には、土壇の埋土と何



第168図 A区-83号土壇周辺出土遺物 (1/4)

質の土で埋まったピット群があり、そのうちピット1~4から土壌と同時期の土器が出土した。そのことからA・83土壌に関連するものと考えられる。ピット1からは2個1単位の穿孔のある丹塗りの蓋(2)の破片と、根元で折れた丹塗りの高坏脚部(3)が出土し、ピット2からは壺の胴部片が、ピット3からは壺口縁片(5)と丹塗りの高坏片(6)が出土した。

この付近のみ、この時期の遺構と遺物が検出される点からみて、以上の土壌とピットは同一の遺構の一部である可能性がある。しかし竪穴建物の残存と考えるには配置が不規則であるので、不明と言わざるをえない。

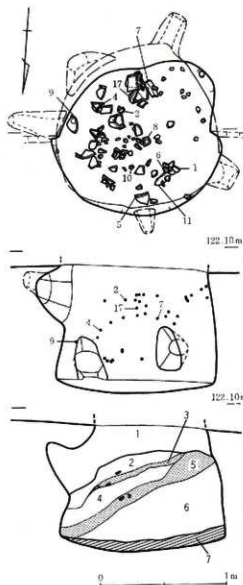
出土土器からみて、土壌等の時期は弥生時代中期後半と推定される。

A区-84号土壌(第169・170図) 一円版21・22・39・40)

S18調査区で検出された大型円形の袋状土壌である。壁の四方に深淺さまざまな穴が掘られている。規模は径133cmで正円形に近く、底面は平田で、深さは検出面から103cmほどである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用状態の痕跡として、上層部に表現できないほど薄い暗黄褐色土の広がりが、土壌底面にところどころ認められる。その表面は黒く汚れている。それは貯蔵穴使用中に形成された床面であると考えられる。

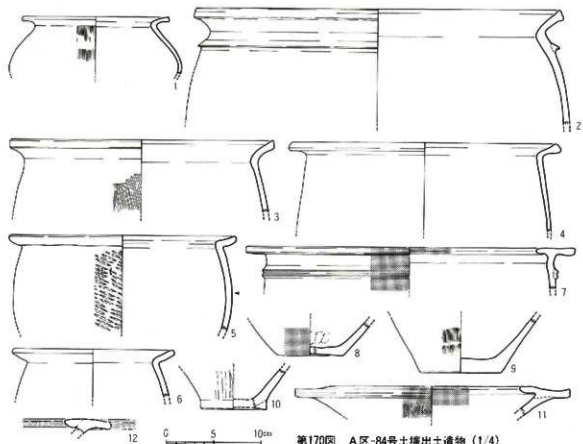
次の7層から1層までは、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は中位の3層に遺物一括廃棄が認められることである。まず底面全体に黄褐色土の7層が堆積する。この黄褐色土は、この土壌が掘りこまれた基盤層の土そのもので、遺物をまったく含まない。上質の一致から7層は、壁の側面に穿たれた穴からの排土土であると推定される。側面の穴がどのような機能をもつのか不明だが、この時期の大型貯蔵穴ではしばしば認められ、弥生時代前期の貯蔵穴でも知られている。次に黄色上ブロック



- (層序)
 - 1層:暗褐色軟質土(炭土・炭・土器片多い)
 - 2層:黄茶褐色粘質土、(やや硬い)黄色土ブロック非常に多く、炭土・炭・土器片は少ない。
→3層堆積直後に一気にうたれた土。
 - 3層:暗黒褐色軟質土。(炭土・炭は少ないが大形土器片を多く含む)
→土器集中
 - 4層:黄茶褐色粘質土。(2層と内容同じ)
→3層堆積前に一気にうたれた土。
 - 5層:明黄褐色軟質土。(黄色土ブロックと土器片を少量含む)
 - 6層:黄茶褐色土(ソマツク)の押し土。(黄色土ブロックを本塊に含むが、上部が炭・炭土は非常に多い)
→一人あての埋土。
 - 7層:黄褐色土(壁面の穴を掘った土が堆積した土である)堆積直後の地塊。
- ※底面に、部分的に黒っぽい暗黄褐色土の広がりがあり(土器片少し含む)
→貯蔵穴使用中の地塊。

第169図 A区-84号土壌(1/30)

を多量に含むバサバサした黄茶褐色の6層が、明らかに東側から投棄されたように厚く堆積している。この層にはわずかながら炭・焼土・土器細片が含まれる。その上から黒褐色の軟らかい5層が堆積し、この層中には黄色土ブロックとともに、1の小型壺の破片、10の壺底部片と11の丹塗りの高坏口縁片が含まれていた。そして上下の4層と2層に挟まれて、土器の大形破片を多量に含む3層が堆積する。上下の4・2層は黄色土ブロックを多量に含んで遺物の少ない、一度に廃棄された土である。3層中からは、4~9の壺と12の高坏がいずれも大きく割れた破片で出土したが、完形に復元できるものはなかった。4と5の壺口縁部は被熱していたが、8~10の底部破片は焼けていない。また5・7と8の丹塗りの須玖系の甕が含まれている。以上の6層から2層までは東



第170図 A区-84号土壇出土遺物(1/4)

側から堆積していることが明白で、短期間に一連の行為として投棄されたものと推定される。この一連の層中には基礎層に由来する黄色土ブロックが多量に含まれているので、おそらく別の土壇を掘る際の排出物が投棄されているとみられる。したがって貯蔵穴を作り替える作業の過程には、土器一括廃棄行為が介在している可能性が高く、丹塗りの壺と高坏を含む点から、その行為は土器をもちいた祭祀であって、おそらく貯蔵穴を意識したものであろう。そして最後に炭・焼土・土器片を含む1層が堆積して埋没している。その層からは2の大型壺の破片が出土した。

出土土器はすべて在地の胎土を使用したものである。2～6は遠賀川以東系の甕A、1・7・8・11・12は須玖系の壺と高坏である。土壇廃棄の時期は、土器全体からみて弥生時代中期後半の中でも新しい時期、つまり中期末=須玖Ⅱ式の新段階にあたる。(旧C地区土壇107)

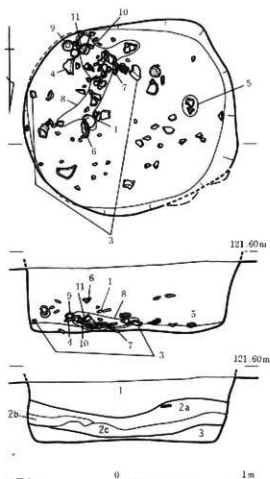
A区-85号土壇 (第171・172図 →図版22・40)

T19調査区で検出された大型円形の竪穴状土壇である。底面は中央がやや高いが、おおむね平坦である。規模は長軸長172cm、短軸長150cmで、検出面からの深さは57cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

使用状態を示す証拠として、まず底面に硬くしまった3層が形成されている。この層は使用中に繰り返し踏み踏まれて形成された床面形成層で、遺物はまったく含まない。

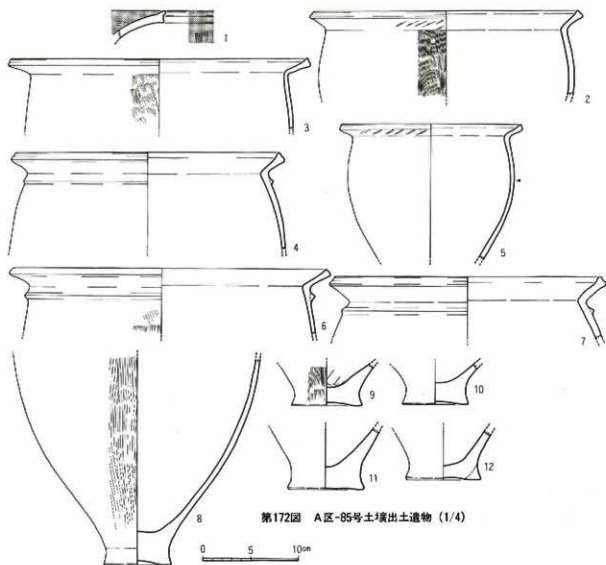
次の2層から1層までが、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は下位の2c層に遺物一括廃棄が認められることである。まずこの3層の直上に土器の大型破片がばらばらにつぶれた状態で検出され、基盤層に由来する小礫と黄色土ブロックを少量含む硬い2c層がその上を覆い、さらに同質の暗褐色粘質土(2b・2a層)がかぶさっている。2c層からは、3・5・7・11の甕が出土した。いずれも大型破片で、廃棄された土器片だけでは完形にならないものの、口縁片と底部片が揃うので、廃棄される直前までは完形品であったと推測される。いずれも底部片は被熱している。おそらく4個体ほどの甕が、直前に割られて廃棄されたものとみられる。また2b層から1の丹塗りの甕の破片と6の甕片が出土している。そしてその上に基盤層に由来する1cm大の小礫と1~2cm大の黄色土ブロックと土器の細片を多量に含む粘質の1層が厚く堆積している。1層からは2と12の甕片が出土し、基盤層の土砂を多量に含んで遺物が少ないので、短時間に埋まったものと推定される。以上の遺物一括廃棄は、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらか非日常の行為に使われた土器を一括廃棄したものと推定される。

出土土器はすべて在地の胎土を使用したものである。1の丹塗りの須玖系の甕Dを除いて、大型破片のもの(2~7)はすべて遠賀川以東系の甕Aである。土壇廃棄の時期は、土器全体からみて弥生時代中期後半の中でも新しい時期、つまり須玖Ⅱ式にあたる。(山C地区土壇124)



- (層序)
- 1 層: 暗褐色粘質土 (粘質強い、検出由来の0.5~1cm大の小礫と、1~2cm大の黄色土ブロックと、土器小片を多量に含む。)
- 2a 層: 暗褐色粘質土 (やや硬い、1~2cm大の黄色土ブロックと土器片を含む。)
- 2b 層: 暗褐色粘質土 (硬い、土器片・灰・黄色土小ブロック含む。)
- 2c 層: 暗褐色粘質土 (硬い、風山小礫・黄色土ブロック少し含む、この層の下部に大型土器片を多量に含む。) 一土器集中
- ※2a~c層は、土壇形成直後に短期間に生成・完成。
- 3 層: 黄色粘質土 (硬い、土器片・炭は含まない。) →使用中の堆積土。

第171図 A区-85号土壇 (1/30)



第172図 A区-85号土壇出土遺物(1/4)

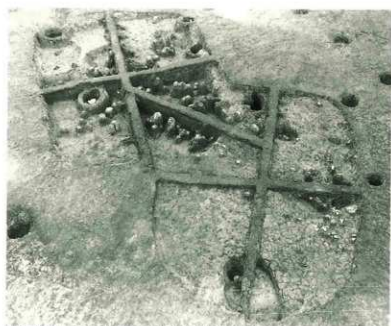


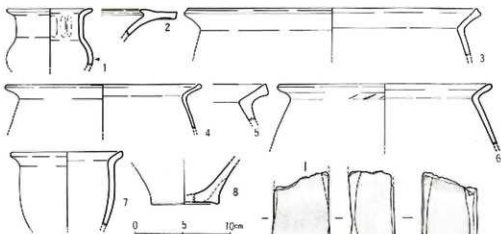
写真17. A区-86号土壇とA区-9号竪穴住居跡の遺物出土状態(東から)

A区-86号土壇(第173・174図、
写真17 - 図版22・40)

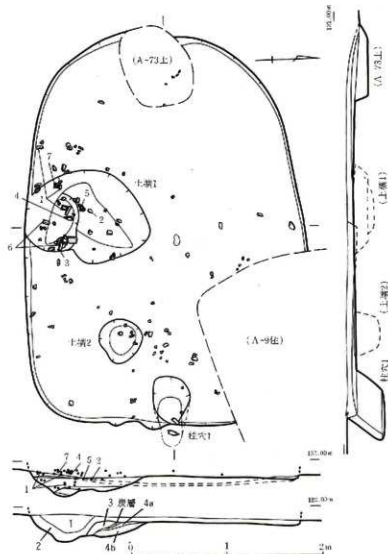
T18調査区で検出された扁平な長円形の大形土壇で、A-73土壇(弥生時代前期末)を切り、A-9位(古墳時代前期前半)に切られている。その規模は長さ420cm、幅300cm、検出面からの深さは8cmである。長軸の方位角は90度である。底面は平坦で、内部に2箇所の土壇と、斜めに穿たれた柱穴が1箇所存在する。土壇1は南辺中央の壁に接して掘られている。後述するように炉と密接にかかわる施設である。柱穴1は東辺の中央から壁の下に向かって斜めに掘られた柱穴である。西辺に

対応する柱穴はなく、あるいは方流れの根根をささえる支柱1本の小原掛けをした土壇であったのかもしれない。

まず土壇の使用状態を示すものは、土壇1の堆積である。その内部には炭を多量に含む4b層、何も含まない黄色土ブロック



第174図 A区-86号土壇出土遺物 (1/4, 9=1/2)



〔層序〕

- 1層: 暗褐色粘質土 (炭・灰・土砂り、少量の灰黄色土)
- 2層: 黒褐色粘質土 (少量の灰黄色土)
- 3層: 暗褐色粘質土 (硬い、炭片・土器含む)
- 4a層: 黄褐色粘質土 (=黄色土ブロックそのもの、何も含まない)
- 4b層: 黒褐色粘質土 (炭を多く含む、炭土・土器片も含む)

第173図 A区-86号土壇 (1/40)

クの4a層→硬い暗黄褐色の3層が順に堆積し、その表面は硬く縮まっている。おそらく土壇使用中に堆積したからの挿出土である。しかし土壇内には炉の跡はなく、外部から持ち込まれたものと推定される。そしてその上に炭・焼土・土器細片と黄色土ブロックの小粒子を多量に含む2・1層が、土壇1を埋めながら堆積している。遺物は土壇1を中心にこの土壇全体に散在する。2層中から1・2の壺の破片と3~8の葉の破片や、9の折れた砥石などが出土した。以上の埋没状態からみて、土壇廃絶後は生活廃棄物の捨て場所に転用されたと思われる。

出土土器はすべて在地の胎土を使用したものである。1は小型壺で、2は須玖系(須玖)の壺、7は小型の甕である。6・8は被熱している。9の砥石は砂岩質頁岩製でよく使い込まれている。

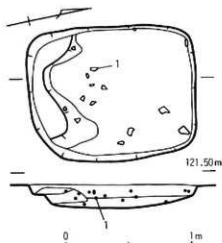
土壇廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の中でも古い時期、つまり須玖I式の新段階からII式の古段階にあたると思われる。(旧C地区土壇109)

A区-87号土壌 (第175・177図 →図版22)

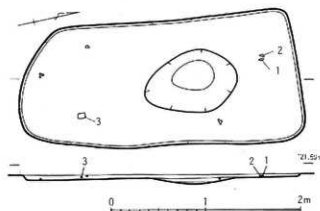
U0調査区で検出された長方形の土壌で、底面は皿状である。南側に段が付き、階段状の入り口施設を思わせる。その規模は長さ148cm、幅105cm、検出面からの深さは20cmである。

埋土は炭泥じりの暗褐色土層で、その中に土器小片が散在していた。図示できるのは第177図1の丹塗りの高坏D口縁部片のみである。胎土は在地産で、破片の一部はとなりのA-88土壌からも出土した。

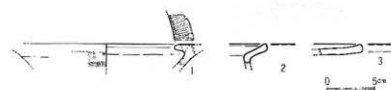
土壌廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半あたると考えられる。(旧C地区土壌120)



第175図 A区-87号土壌 (1/30)



第176図 A区-88号土壌 (1/40)



第177図 A区-87・88号土壌出土遺物 (1/4)

A区-88号土壌 (第176・177図 →図版22)

同じくU0調査区で検出された不定形の土壌で、A-87土壌に接するように掘られている。底面は平坦で、中央やや北よりに浅い凹みがある。その規模は長さ304cm、幅131cm、検出面からの深さは6cmである。土壌の性格は不明であるが、出土土器に同一個体のものがあることから、となりのA-87土壌と関連することは明らかである。

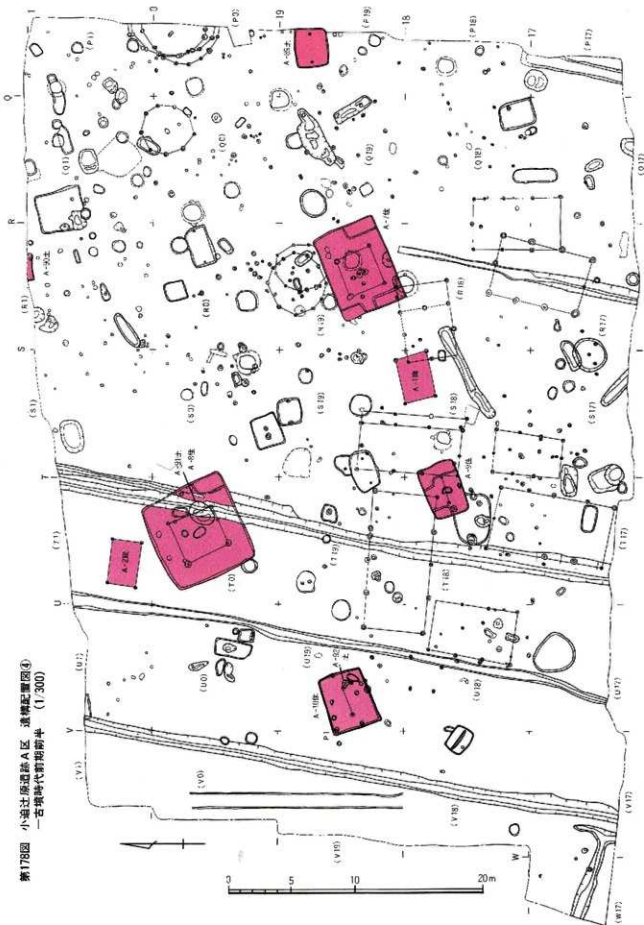
埋土は黄色土ブロックと暗褐色土の混在層で、炭・焼土は含まず、土器小片がわずかに散在していた。図示できるのは第177図2の頸口縁部片と、3の高坏の口縁部片のみである。いずれも胎土は在地産である。また1の破片の一部はとなりのA-87土壌からも出土した。

土壌廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半あたると考えられる。(旧C地区土壌121)

第5節 古墳時代前期前半 (第178図)

この時期にあたる遺構はそれほど密集しないが、A区全面に満遍なく分布する。竪穴住居跡4軒・獨立柱建物跡2棟、土壌4基を確認し、ピット1本を本文に掲載した。この時代のピットはまだ存在するであろうが、土器

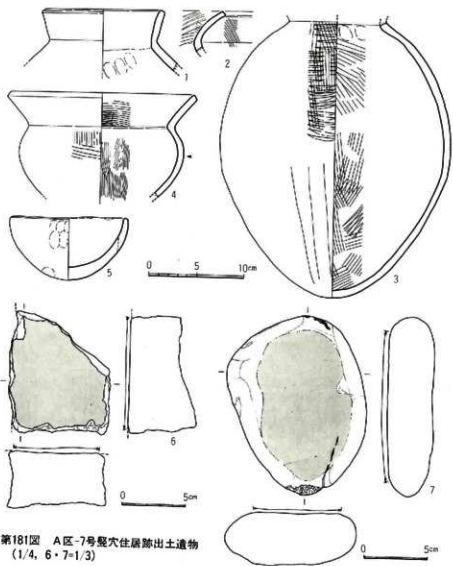
第178図 小湊川原遺跡A区 遺構配置図④
 一石室時代前期跡平 (1/300)





- 1層：暗茶褐色粘質土（粘土・炭・土器片少量含む）
- 2層：明褐色土（やや粘質、粘土・炭・土器片を多量に含む、炭・灰土が特に多い箇所部分を平面図に示した、かなりの部分が床面に密着して広がる）→焼酎行為がおこなわれている。
- 3層：灰褐色ブロックを含む明褐色土（上面が壊れている）→柱跡の跡の層。
- 4層：黄褐色土（やや粘質、粘土を少し含む、厚からのみでして2層とは異なる）
- 5層：暗茶褐色土（ベッド上面型地層）
- 6層：赤茶褐色土（ベッド上に広がる硬土・炭を含む層）→2層に近い。
- 7層：暗茶褐色土（2層の下に部分的に埋積、粘土・炭は含まない）柱跡よりやや下

第180図 A区-7号竪穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一 (1/40)



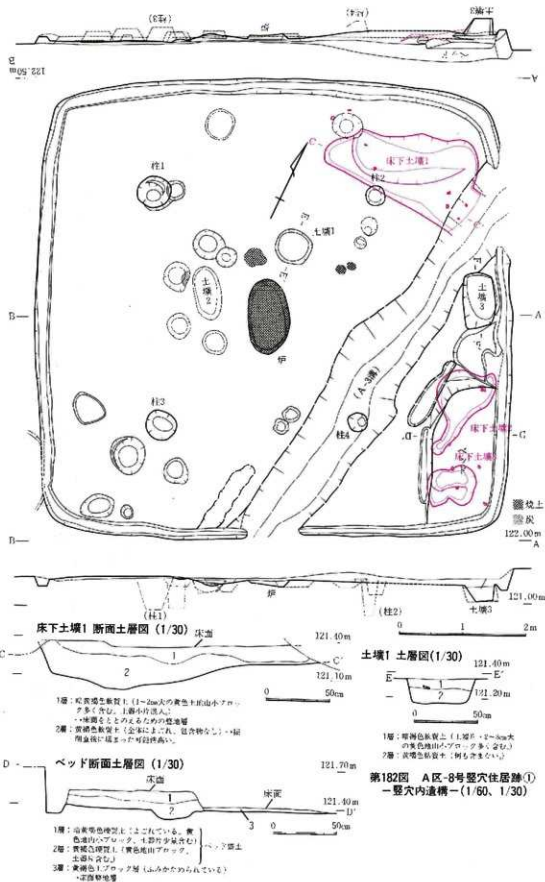
第181図 A区-7号竪穴住居跡出土遺物
(1/4, 6・7-1/3)

内部施設には、3箇所のベッド状遺構がある。西辺に南北に並んでベッド1と2が、地山を削りだして作られる。一方対面する東南隅には床下土壇1を埋めた上に、さらに盛り上をしてベッド3が築かれる。中央には炉が二箇所重複しており、廃絶時に投棄された遺物が炉2の中に入りこんでいるので、廃絶時に使われていたのは炉2の方である。つまり当初は竪穴の中心に炉1が設けられ、その後南側の炉2に造り替えられている。炉の構造は両者とも底の中央が焼けて焼土面となる通常の地床である。炉の北にある土壇1の内部に、炉内と同様の炭・焼土を含む土が多量にあり、炉に関連する施設であると考えられる。南辺中央の壁にそって作られた長円形の土壇2は、廃絶時の焼却行為の際に堆積した2層が内部

に流れこんでおり、竪穴廃絶時には閉口していたと推定される。この竪穴建物の機能は炉とベッド状遺構の存在からみて、居住目的に建設され、実際にそのように使われたものであると言える。

廃絶時に、次のような柱の抜取りと焼却行為がおこなわれている。まず床面に黄色土ブロックを含む茶褐色土(3・7層)が、第180図のように数か所に点在する。その位置は柱穴1・2・4の周りで、以上の3箇所の柱穴には明瞭に柱の抜取痕跡が認められることから、その土は柱抜取り時の排出土である。そのために掘り崩された基盤層の黄色土が含まれているのである。ただし不思議なことに柱穴3の周囲にはその排出土はなく、柱抜取りの掘り広げも認められなかった。柱穴3のみはそのままだったのだろうか。しかし柱穴3の上は焼却時の堆積である4層が覆い、また焼けた柱材も検出できないので、やはり抜取られていることは確かである。おそらく柱穴3の柱のみは切り取るか、あるいは特に丁寧に抜かれたと見られる。ところで炉の周辺では、焼土を含む炭層(4層)が薄く広がり、一部柱抜取り排出土の下になっていた。土器は含まず、柱抜取りの直前におこなわれた炉の片付けの跡とみられる。

次に炭・焼土・土器片を大量に含む黒褐色土(2層)が、竪穴全体を覆うように堆積している。柱抜き取りの排出土や炉の掻きだし土のないところでは、床面に直接接している。大量の炭と焼土を含み第180図のように部分的に炭・焼土だけの厚い堆積となっていた。この点とさらに柱穴抜取り排出土の上面が焼けて赤変している点からみて、竪穴全体を使った焼却行為がおこなわれたことは確実である。また炭片の中には茅材とみられる炭化物が点在し、おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。この層中では小片となった多量の土器片・磨石

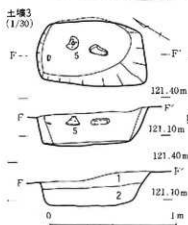


と焼けた円礫が散在した状態で検出され、また焼土・灰層の中に混ざりこむ破片も多い。3の礎は完形に近く復元できたが、破片は竪穴全体に散らばる。5の礎も同じである。ほかに1の破片、2の礎片が混じり、6の石目片は周囲の焼けた円礫といっしょに出土した。7の磨石は完形のまま床面直上に置かれ2層が覆っていた。そして最後に炭・焼土・土器片を少量含む1層が堆積している。

以上の竪穴築造時の状況をまとめると、炉の片付けと柱の抜取りがおこなわれ、腐材をその場で焼却する。その際、おそらくこの住居で使われていた磨石と円礫が残される。焼却層の中



に土器細片を多量に含む点（上層ほど土器片は少ない）からみて、土器片もまた焼却時に片付けたものである。焼却時に廃棄物となった土器片が偶然多量にあったと考えるよりは、焼却に先立ちまたは並行して祭祀がおこなわれ、そこで使われた土器の一部が廃棄された可能性が高い。完形に復元できる例がほとんどない点からみて、大部分はほかの場所に廃棄されたと推定される。この祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。



土壇3 (1/30)
土壇1
土壇2
柱穴1
柱穴2
柱穴3
土床
土壇1
土壇2
土壇3
柱穴1
柱穴2
柱穴3
土床

0 1 2m

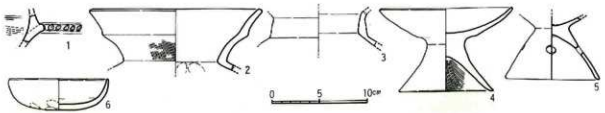
第183図 A区-8号竪穴住居跡②—遺物出土状態—(1/60)

出土遺物のうち、土器はいずれも在地系のA類のみで、胎土も在地産である。2・3は被熱している。6の石皿の破片と7の磨石は地元産の安山岩を利用している。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と出土土器からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用・廃絶したと推定される。（旧C地区竪穴住居12）

A区-8号竪穴住居跡 (第182—184図)

※空撮図版2下・図版24・25・41

削平が激しい場所で検出された長方形の竪穴建物で、A-3溝（近世）に大きく切られている。規模は東西長軸長760cm、南北短軸長720cmで東西方向にやや長く、検出面から最も深いところで約20cmである。東西長軸の方位角は65度で、床面積は51.3㎡の大型である。竪穴の平面形にあわせた4本柱の構造である。柱穴の深さは一定していない。ベッドの背後およびベッド前面に周溝がほぼ全周し、土層の観察からみて壁材固定用の溝と考えら

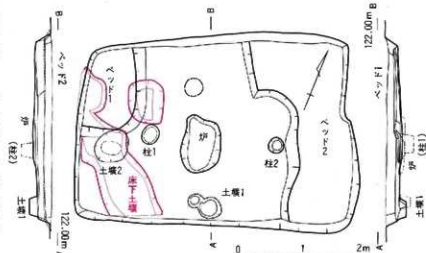


第184図 A区-8号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)

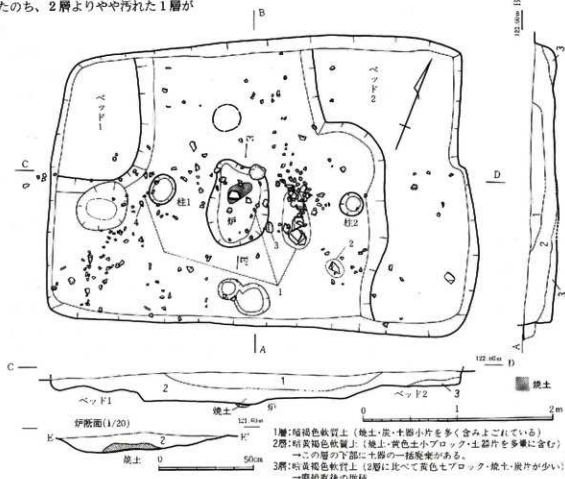
れる。特にベッド前面の周溝はC-8住例と同様に、ベッドの側面板材の固定用に掘られたものと考えられる。床面は踏みしめられて硬化したものである。床面の下では、大小3箇所の床下土塊を検出したが、ベッドと対応しないので堅穴掘削時の掘りすぎの可能性が高い。

内部には、まず東南隅のベッド状遺構がある。床面をいったん平らにした上に盛り土をして築かれている。堅穴中央には南北に長い長円形の地床炉があり、内部に焼土が堆積していた。炉の周辺を中心に床面で多数のピットと小土塊を検出したが、遺物の川十状態からこの堅穴にともなうと推定されるのは二箇所であった。そのうち土塊1と2は埋土からみて炉とは無関係のようである。東辺中央の壁に接する土塊3は廃絶時に土器が置かれていたので、その時点では開口していたとみられる。この堅穴建物の機能は炉とベッド状遺構の存在からみて、居住用と推定される。

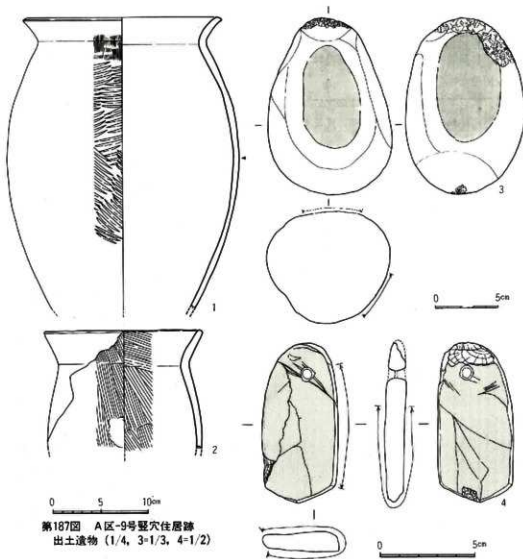
ほとんど床面近くまで削平されているので埋没状態は不明だが、残された柱穴や土塊内の様相からある程度推定可能である。まず柱穴3の柱痕内から3の二重口縁壺の破片がつぶれて出土したので、柱の抜取りがおこなわれたとみられる。また土塊3とその周辺では、興味深い出土状態が観察された。土塊3では、まず無遺物の2層が堆積したのち、2層よりやや汚れた1層が



第185図 A区-9号堅穴住居跡①-堅穴内の遺構-(1/60)



第186図 A区-9号堅穴住居跡②-遺物出土状態と層序-(1/40)



第187図 A区-9号竪穴住居跡
出土遺物 (1/4, 3-1/3, 4-1/2)

覆う。その1層の中に5の器台の脚部が正位で検出され、その隣で同じ高さで円礫が1個検出された。2・1層ともに黄色土ブロックを多量に含んでいるので、土塊3は埋め戻されたと考えられ、その過程で一旦埋め戻しを中止して、坏部を取り除かれた器台の脚部と円礫を埋置したものと推定される。さらに土塊3の北の壁ぎわに4

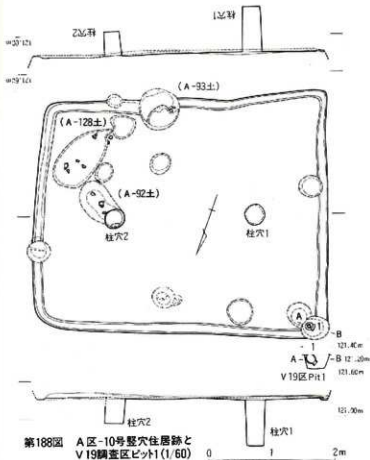
の小型高坏がつぶれて検出され、完形に復元でき、さらに被熱していた。同時に南側には2の二重口縁の壺の頸部以上の破片と、逆さに伏せられた完形の6の碗が検出された。竪穴住居廃絶時に土塊3を埋め戻し、3個体の小型供献用土器を用いた供献儀礼がおこなわれた可能性が高い。竪穴住居跡の廃絶祭祀の一例である。

出土土器はいずれも在地産の胎土を用いている。1は床面で検出された在地系の複合口縁壺Aの小片。2・3は布留系の二重口縁の壺D。4は伝統的V様式系の小型高坏B。5は布留系の器台D。6は在地系の碗Aである。4は被熱している。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と出土土器からみて古墳時代前期前半の小辺辻原3期に建設・使用・廃絶したと推定される。(IHC地区竪穴住居13)

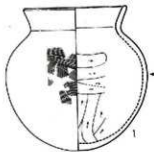
A区-9号竪穴住居跡 (第185~187図 図版25・41)

A-7住の長軸方向上に位置する長方形の竪穴建物で、A-86土塊(弥生時代中期後半)を破壊し、A-6・8建物(中世)の柱穴が重なっている。規模は東西長軸長450cm、南北短軸長315cmで東西に長く、検出面からの深さは30cmである。東西長軸の方位角は71度で、床面積は11.5㎡の小型竪穴である。竪穴の長軸にあわせた2本柱の構造で、その深さは揃っている。床面は踏みしめられて硬化したものである。床面の下には、大小2箇所の床下土塊を検出したが、ベッドと対応しないので、竪穴掘削時の掘りすぎの可能性が高い。

内部施設には、東西両辺にベッド状遺構がある。いずれも地山を削りだして作られたものである。ベッド1は西北隅に小規模に作られ、これに対しベッド2は東辺全体から北辺にかけてL字形に削りだされている。竪穴中央には南北に長い長円形の地床炉があり底に灰土が堆積していた(第186図)。床面上には土塊1と2がある。この竪穴建物の機能は炉とベッド遺構の存在などからみて、居住用に建設され、実際にそのように使われた竪穴住居であると言えるが、きわめて少人数しか寝起きできないと考えられる。



第188図 A区-10号竪穴住居跡と
V19調査区ピット1(1/60)



第189図
V19調査区ピット1
出土遺物(1/4)

柱穴の大きさは揃っている。周溝が全周するが、床下土壇はなく、ベッドの有無は不明である。周溝が残っているから、もし地床炉や土壇などの内部施設が存在したならば、その痕跡がのこって熱るべきであるが検出されなかった。それゆえ本来この竪穴建物には、炉などの居住用施設はなかったと推定される。したがってこの竪穴建物は人が寝泊りする住居そのものではなく、別な機能を考えなければならないだろう。その点でA-8住と一単位をなす配置は興味深い。出土遺物はまったく無く、直接竪穴の時期を示すことはできないが、廃絶直後に崩りこまれたと推定されるピット1の土器の時期と、A-8住との密接な関係が推定できる点からみて、古墳時代前期前半の小迫辻原3期と推定される。(旧C地区竪穴住居14)

V19調査区ピット1(第189図 図版26・41)

A-10住の西北隅の周溝に崩りこまれたものである。この位置にピットを掘るのが可能なのはA-10住廃絶直後の

3-1層は、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は2層下部に遺物一括廃棄が認められることである。まず床面直上に土器の大型破片がばらばらにつぶれた状態で検出され、その上を基盤層に由来する黄色土ブロックと炭・焼土を多量に含む軟らかい暗黄褐色の2層が覆い、さらに同質の暗褐色土(1層)が堆積している。2層からは1の裏が大型破片をまとめて投棄されたように検出され、2の裏は口縁部破片のみが検出された。ともに被熱している。3の磨石と4の小型携帯用砥石も検出されたが、この層には大量の弥生時代中期後半の上器片が混入しているので、一括廃棄の遺物かどうか判定できない。焼却の痕跡はなかったが、床面を覆う2層中に遺物一括廃棄があり、多量の基盤層に由来する黄色土ブロックを含むことから、単なる生活廃棄物の投棄ではなく、なんらかの祭祀的行為が介在した上で埋め戻された可能性が高い。

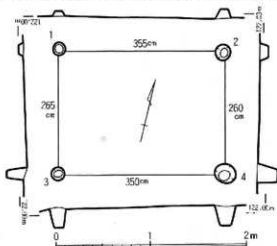
出土遺物。1は床面で検出された在地系の甕A。2は在地系の甕Aで、胎土に石英を多量に含む掘入片。3は安山岩製の完形の磨石。4は使い込まれた携帯用の砥石である。

この竪穴住居跡の時期は、建設時の方向と出土土器からみて、古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用・廃絶したと推定される。(旧C地区I:墳108)

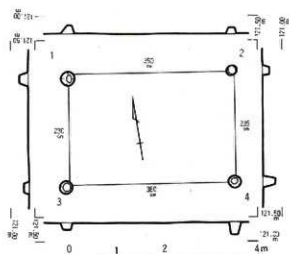
A区-10号竪穴住居跡(第188図 →図版26)

A区の西端で検出された長方形の竪穴建物である。後世の畑地化で床面まで削平され、周溝と柱穴のみを検出した。その規模は東西長軸長470cm、南北短軸長370cmで東西に長い。東西長軸の方位角は72度で、床面積は17.3㎡の小型竪穴である。

竪穴の長軸に配置された2本柱の構造である。柱穴1が非常に深いほかは、



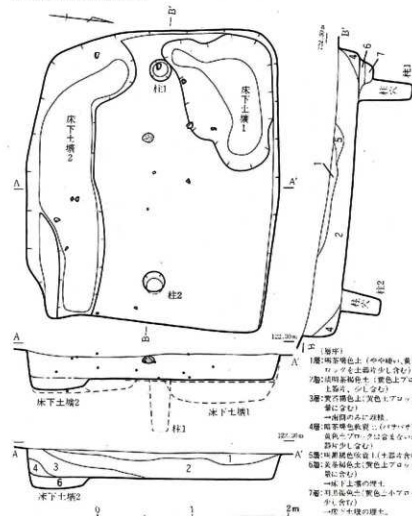
第190図 A区-1号掘立柱建物跡(1/80)



第191図 A区-2号掘立柱建物跡 (1/80)

を測る。床面積は9.40㎡で、長軸の方位角は77度である。この形式の掘立柱建物跡としては柱穴が小さく、削平された長方形竪穴住居の柱部分の可能性が高い。柱穴内から出土した土器の細片からは時期を特定できず、建物の方位が小迫辻原3～4期と異なるので、それ以前の古墳時代前期前半の小迫辻原1～2期の可能性がある。

(旧C地区掘立柱建物6)



第192図 A区-89号土壇 (1/40)

竪穴の輪郭が明瞭な時点しかないと思われるので、竪穴廃絶時の土器廃棄の一方法なのかもしれない。内部から完形の1の小壺蓋が逆さに出土した。土器の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原3～4期にあたる。

2) 掘立柱建物跡 (第2表)

掘立柱建物跡を2棟検出したが、いずれも削平された方形竪穴建物の柱穴の残存である可能性が高い。1間×1間という建物構造からみて、この時期になる可能性が最も高いと推定した。

A区-1号掘立柱建物跡 (第190図)

A-7住とA-9住の間で東西方向を向いて検出された1間×1間の柱構造の掘立柱建物跡である。その柱間寸法は、心臓距離で東西長軸長約350cm、南北短軸長約260cm

A区-2号掘立柱建物跡 (第191図 一図版26)

A-8住の北側で方向を異にして検出された1間×1間の掘立柱建物跡である。その柱間寸法は、心臓距離で東西長軸長約360cm、南北短軸長約235cmを測る。床面積は8.25㎡で、長軸の方位角は99度の東西棟である。A-1住と同様にこの形式の掘立柱建物跡としては柱穴が小さく、削平された長方形竪穴住居の柱部分の可能性が高い。遺物はなく建物の方位が小迫辻原3～4期と異なるので、それ以前の古墳時代前期前半の小迫辻原1～2期の可能性がある。(旧C地区掘立柱建物4)

3) 土壇 (第3・5表)

A区-89号土壇 (第192図 一図版26)

C区東端のP19調査区で検出された長方形の大塚土壇で、底面は平坦である。その規模は長

さ318cm、幅270cm、検出面からの深さは34cmである。長軸の方位角は85度である。長軸上に二本柱を備えているので小規模な竪穴建物とみてよいが、炉がなく居住用の竪穴住居とは考えにくい。柱穴の深さは揃い、床面はそれほど硬化せず、また床下土壌上でも貼り床ははっきりしていないので、長く使用されたとは考えがたい。床下土壌が2箇所あり、いずれも土壌掘削の際に掘りこんだ不整形の上墳である。内部は黄色土ブロックを多量に含む6・7層を充填して埋めている。次の4層から1層までが、使用停止後の堆積層である。その埋没状態の特徴は、埋土が南側から堆積していった点にある。まず土壌の周縁に自然流入土の4層が堆積し、その上に南から黄色土ブロックを多量に含む3層が堆積する。それは上墳使用停止直後の土砂の投棄である。遺物はなく別な施設からの排出土を、捨てたものである。さらに1:鑿小片と黄色土ブロックをわずかに含む2・1層が順次堆積して埋没する。混入した土器はいずれも細片で、図示できるものはない。廃絶後は生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土壌の時期は、床下土壌を掘る点で古墳時代前期前半の土壌といえ、長軸の方向から判断して小迫辻原4期の可能性がもっとも高い。(旧C地区土壌71)

A区-90号土壌 (第193図 →図版26)

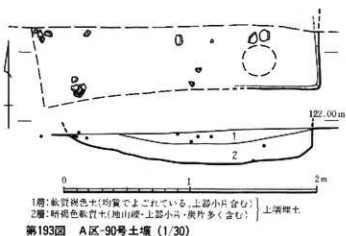
R1調査区で検出され、大半が調査区外となった長方形の土墳で、底面は皿状である。その規模は長さ200cm、幅64cm以上、検出面からの深さは28cmである。長軸の方位角は166度である。その用途は不明である。埋土は二層に分かれ、小礫と炭片を多く含む2層とそれが少ない1層である。どちらも軟らかく1層細片を少量含む。廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたものとみられる。図示できる土器はないが、内面ヘラケズリの破片が多いので、この時期の遺構と認定した。

(旧C地区土壌41)

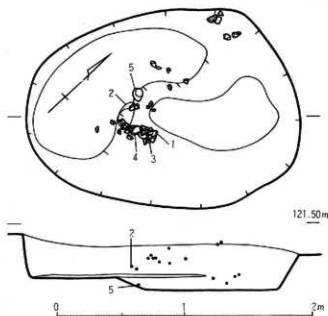
A区-91号土壌 (第194・195図 →図版26・41)

T0調査区のA-8住の床

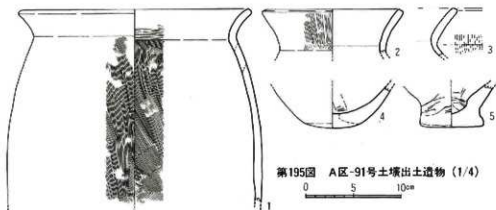
面下で検出された長円形の大型土墳で、底面は段が付き高低差がある。規模は長軸長215cm、短軸長155cmで、検出面からの深さは29cmである。底面の凸凹からみて、当初から廃棄土墳として掘られた可能性が高い。埋土は暗褐色の単一層(1層)で、炭・焼土は含まないが、土器片と1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含み、土器片が一括廃棄の状態でまとまって検出された。上墳が深く層単位が厚いにもかかわらず分層できない点と、黄色土ブロックを多量に含む点からみて、この土壌は人為的に埋められたと推定される。一括廃棄の上器はすべて堯の破片で、胎土はすべて在地産である。1~4は在地系の堯Aで、4はレンズ底。5は伝統的V様式系の堯Bの底部である。1の長脚蓋は被熱している。この土壌の廃絶時期は、小



第193図 A区-90号土壌 (1/30)



第194図 A区-91号土壌 (1/30)



第195図 A区-91号土壌出土遺物 (1/4)

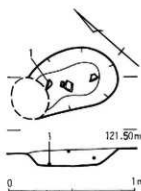
追辻原3期のA-8住よりも古く、出上した在地系の甕がまだ丸底ではなく、また5のような變を伴う点から古墳時代前期前半の小追辻原1ないし2期と推定される。(旧C地区)

土壌164)

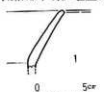
A区-92号土壌 (第196・197図)

U19区のア-10住の柱穴を切って掘りこまれた小型長円形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長76cm、短軸長47cmで、検出面からの深さは12cmである。性格は不明。埋土は軟らかい暗褐色の単一層(1層)で、炭・焼土は含まないが、

1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含む。土器小片が数点混入し、1は在地産の甕の口縁部片である。小追辻原3期のA-10住の柱穴を切る点から、この土壌の時期は古墳時代前期前半の小追辻原3ないし4期と推定される。(旧C地区上



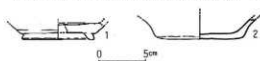
第196図 A区-92号土壌 (1/30)



第197図 A区-92号土壌出土遺物(1/4)

第6節 奈良時代 (第199図)

この時期にあたる遺構はきわめて少なく、ピット2本を報告する。



第198図 A区奈良時代ピット出土遺物 (1/4)

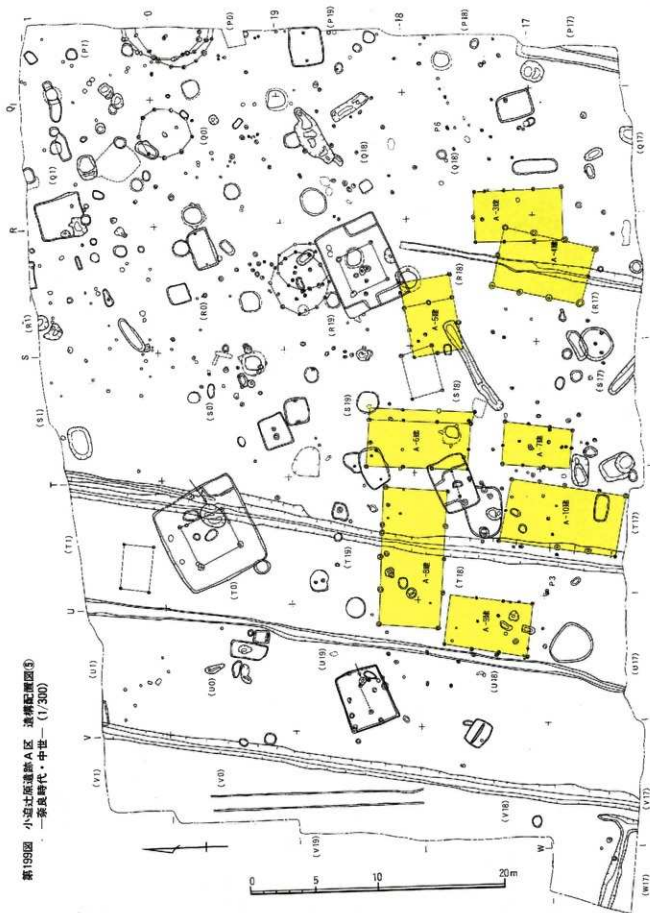
1) ピット (第198・199図、第5表)

Q18調査区ピット6からは、1の高台の付く土師器の坏底部片が出上した。またT17調査区ピット3からは、2の土師器坏の底部片が出上している。

第7節 中世 (第199図)

この時期にあたる遺構はかなり多く、掘立柱建物跡8棟を検出した。遺構の配置は、A区の南半中央に掘立柱建物群が密集する。なかでも東側に廂をもつA-6建物を主扉、その背後に直交して建てられたA-8建物を副屋とし、周囲に存在するA-4・7・9・10建物をあわせた六棟は、ほぼ方向を同じくしており、A-6建物の東側を広場=庭としたひとつの屋敷ととらえられるであろう。またA-3建物とA-5建物が直交して建っているところを見ると、この二棟も小規模な屋敷をなしていたとみてよいだろう。そしてA-5建物はA-6建物の庭先にあたり、同時にたっていたと考えるのは不自然であり、またA-3建物もA-4建物と重複している。したがって方向と時期の異なる二つの中世の屋敷が重複していると考えられる。A-3建物とA-4建物の柱穴の

第199图 小边土原遗址A区 透视配置图③
——奈良时代·中世——(1/300)



切り合い関係から、前者の屋敷群が古く後者が新しいと考えられる。この掘立柱建物からなる屋敷群の時期は、柱穴出土の遺物からみて、13世紀後半を中心とする時期と推定され、B区の掘立柱建物群とほぼ同時期と思われる。なお台地上は地下水位が低く、井戸は掘られていない。

ところで建物群の南限はA区外になるが、南となりのR-2区が日田市によって調査されており、この建物群に連続すると考えられる掘立柱建物跡が検出されている。それは1号建物で南北に廊の付く東西棟である(註1)。注目される。

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅷ、1993、日田市教育委員会

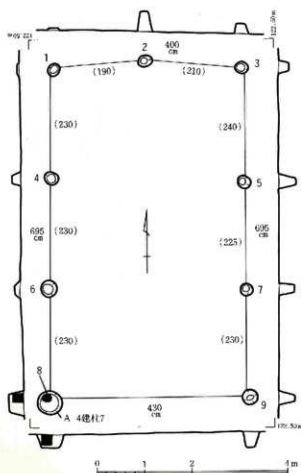
1) 掘立柱建物跡(第2・5表)

A区-3号掘立柱建物跡(第200図 →図版27)

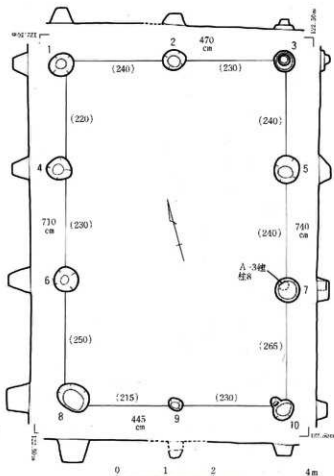
掘立柱建物群の西端で検出した3間×2間の掘立柱建物跡で、A-4建物と重複する。南の梁を支える柱の穴は未検出である。柱穴の大きさと深さは揃っている。柱穴8がA-4建物の柱穴7のなかに掘りこまれていたので、A-4建物→A-3建物の順になる。その柱間寸法は、心距離で南北長軸長約695cm、東西短軸長約430cmを測る。床面積は29.0㎡で、長軸の方位角は178度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋上の類似から中世の遺構と認定した。(ⅢC地区掘立柱建物9)

A区-4号掘立柱建物跡(第201図 →図版27)

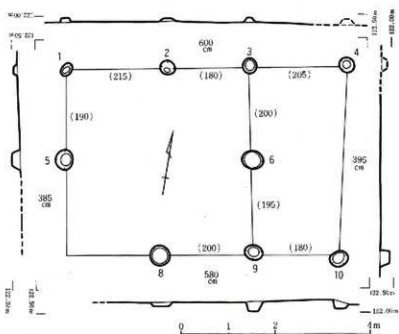
A-4建物と重複する3間×2間の掘立柱建物跡で、南北棟である。柱穴の大きさと深さは揃っている。柱穴7のなかにA-3建物の柱穴8が掘りこまれていた。その柱間寸法は、心距離で南北長軸長約740cm、東西短



第200図 A区-3号掘立柱建物跡(1/80)



第201図 A区-4号掘立柱建物跡(1/80)



第202図 A区-5号掘立柱建物跡 (1/80)

軸長約170cmを測る。床面積は33.3㎡で、長軸の方位角は15度である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物10)

A区-5号掘立柱建物跡(第202・203図 →図版27)

A-6建物の正面に位置する3間×2間の掘立柱建物跡で、東西棟である。南西隅の柱穴はA-64土壌(弥生時代前期末)と重複していた



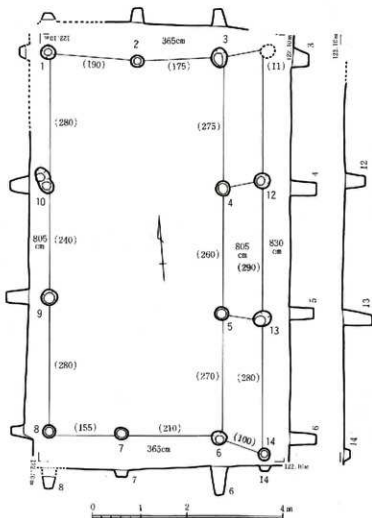
第203図 0 5cm

A区-5号掘立柱建物跡出土遺物 (1/4)

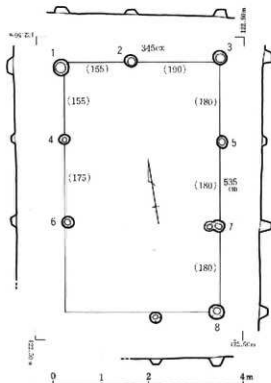
ため、間違えて掘り飛ばしてしまった。東の梁を支える柱の穴は未検出だが、内部に束柱と考えられる柱穴6がある。柱穴の大きさと深さは揃っている。その柱間寸法は、心点距離で東西長軸長約580cm、南北短軸長約395cmを測る。床面積は23.2㎡で、長軸の方位角は82度である。コーナーの柱穴4の内部から1の土師質土器の坏片が出土した。掘立柱建物のコーナーの柱穴に意図的におこなう土器片埋納の可能性がある。建物の時期はこの土器から中世前期と推定される。(旧C地区掘立柱建物5)

A区-6号掘立柱建物跡(第204図 →図版27)

建物群の中央に位置し、東側に扉の付く3間×2間の掘立柱建物跡で、南北棟である。柱穴の大きさは揃うが、深さはまちまちである。その柱間寸法は、心点距離で南北長軸長約805cm、東西短軸長約365cmを測り、扉を含めると460cmである。床面積は29.3㎡で、扉部分を含めると37.2㎡になる。長軸の方位角は4度である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘



第204図 A区-6号掘立柱建物跡 (1/80)



第205図 A区-7号掘立柱建物跡 (1/80)

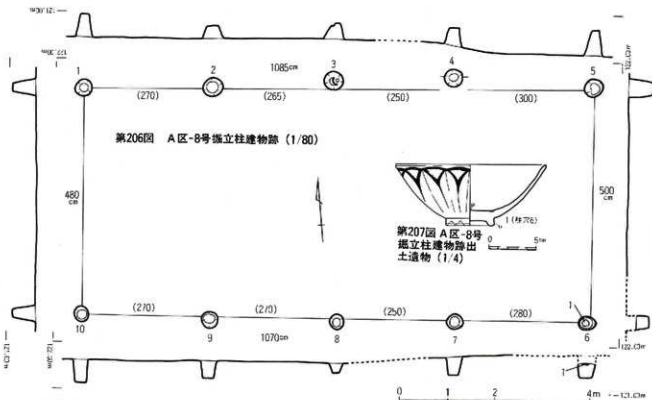
柱建物7)

A区-7号掘立柱建物跡 (第205図)

A-6建物の南に方向を同じくして建てられた3間×2間の掘立柱建物跡で、南西隅の柱穴は未検出である。柱穴の大きさと深さはほぼ揃っている。その柱間寸法は、心点距離で南北長軸長約535cm、東西短軸長約340cmを測る。床面積は17.0㎡の小型の建物である。長軸の方位角は10度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物11)

A区-8号掘立柱建物跡 (第206・207図 → 図版28・42)

A-6建物の背後西側の中央に直交して建てられた長大な掘立柱建物で、4間×1間の東西棟である。東西の梁を支える柱の穴はいずれも未検出である。柱穴の大きさと深さは揃っているが、隅の4木がやや深い。その柱間寸法は、心点距離で東西長軸長約1085cm、南北短軸長約500cmを測る。床面積は53.1㎡に達しA区最大の建物である。長軸の方位角は95度の東西棟で、A-6建物と正確に直交する。南東隅の柱穴6の内部中央から1の中国製青磁碗の大型破片が、柱穴をふさぐように出土しており、その状態から判断して柱抜き取り後に意図的に納められたものと推定される。破片を埋納する建物廃絶時の祭祀の一例と考えられる。



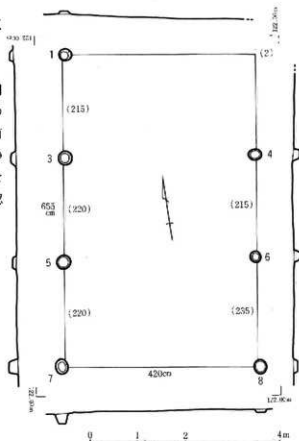
第206図 A区-8号掘立柱建物跡 (1/80)

第207図 A区-8号掘立柱建物跡出土遺物 (1/4)

建物の時期はこの青磁碗から中世前期と推定される。(旧C地区掘立柱建物8)

A区-9号掘立柱建物跡(第208図 →図版28)

A-8建物の南西隅に取りつくように接近して検出された3間×1間の掘立柱建物跡で、北東隅の柱穴は未検出である。柱穴の大きさと深さはほぼ揃っている。その柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約655cm、東西短軸長約420cmを測る。床面積は27.1㎡の中型の建物である。長軸の方位角は19度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧C地区掘立柱建物12)

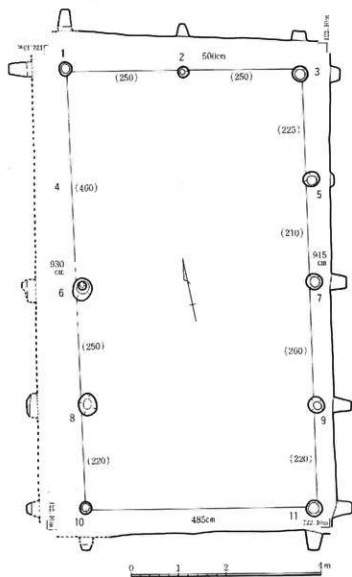


第208図 A区-9号掘立柱建物跡(1/80)

A区-10号掘立柱建物跡(第209・210図

→図版28)

ほかの建物群に取り囲まれたような位置で検出された4間×2間の掘立柱建物跡で、南の梁を支える柱の穴は未検出である。柱穴の大きさと深さはほぼ揃っている。その柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約930cm、東西短軸長約485cmを測る。床面積は45.5㎡の大型の建物である。長軸の方位角は9度の南北棟である。柱穴7の埋土中から1の口売げの中国製白磁皿片が1点出土している。建物の時期はこの白磁から中世前期と推定される。陶磁器の破片はコーナーの柱で検出される例が多いので、あるいはこの建物は柱穴6・7を隅柱として、南の調査区外に伸びる建物である可能性もある。(旧C地区掘立柱建物13)

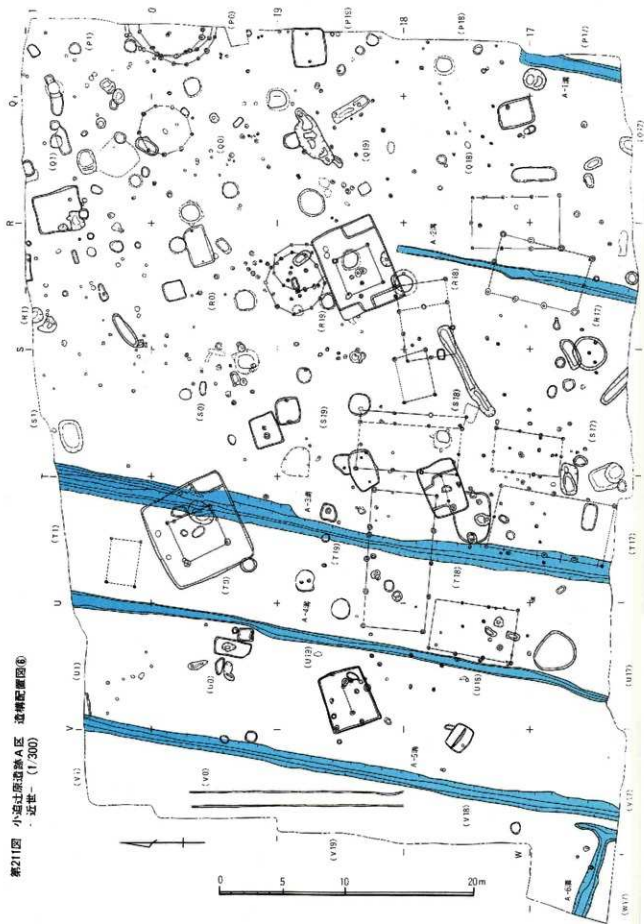


第209図 A区-10号掘立柱建物跡(1/80)



第210図 A区-10号掘立柱建物跡出土遺物(1/4)

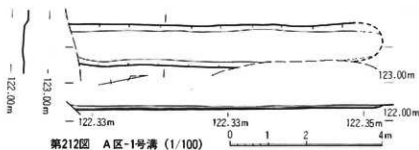
第211图 小边社原始葬人区 透视配置图⑥
 - 近世 - (1/300)



第8節 近世(第211図)

この時期にあたる遺構としては溝6条を確認した。この時代の遺構はまだ存在している可能性があるが、土器を含まないためにほかの時代の遺構と区別できなかった。

遺構の配置は、第211図のように東に10度ほどふって、南北に掘られた溝が平行に走っている。溝の間隔が西と東で異なるのは、この近世の畑地境界溝が掘られた当時の地形を反映していると考えられる。すなわち西側では傾斜が急で東側ではゆるい一枚の畑地のなかの高差を少なくするために、傾斜の急な西側の畑地の幅を狭めた結果であろう。またA-5溝とA-6溝の間にある狭い通路状の空間は、文字通り畑の間の道であった可能性がある。以上のようにA区は近世には、ほとんど畑地として利用されていたといえる。



1) 溝(第4・5表)

A区-1号溝(第212図)

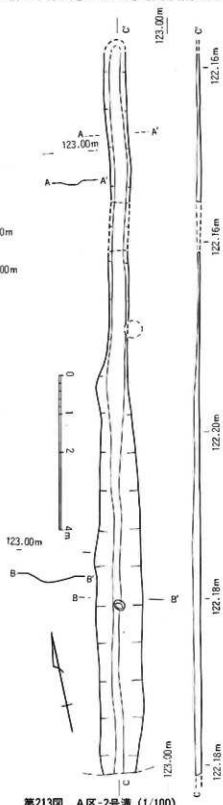
南側の一部のみに残存していたが、本来まだ北に伸びていた畑地境界溝と推定される。底面の高さはほぼ水平である。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時代の遺構と認定した。(旧C地区溝5)

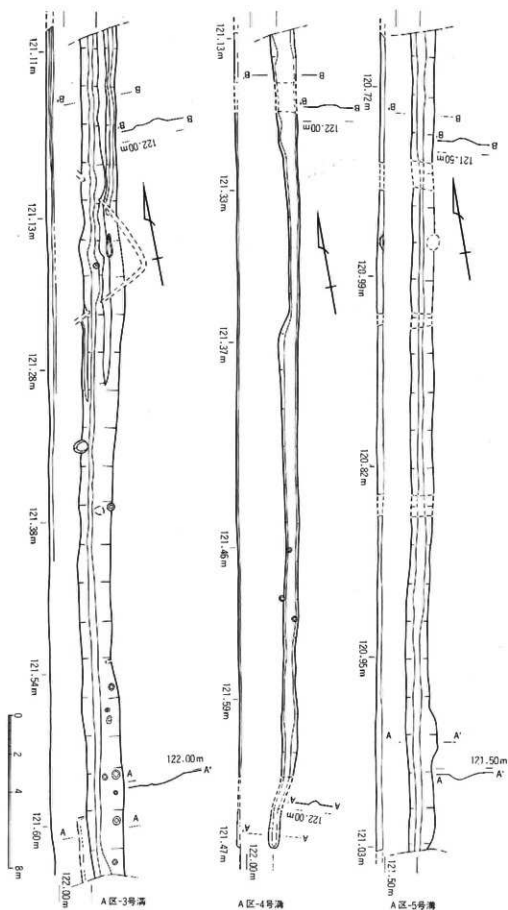
A区-2号溝(第213図)

重機で表土剥ぎをおこなった時点ではさらに20mほど北に伸びていたが、非常に浅かったために遺構検出時に消えてしまった畑地境界溝である。底面の高さはほぼ水平である。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時代の遺構と認定した。(旧C地区溝6)

A区-3号溝(第214・215図)

A区中央を南北に縦断する畑地境界溝である。途中で2条に分かれ、掘りなおしがおこなわれたと推定される。底面の高さは南にいくほどだんだん高くなる。埋土中から肥前磁器染付の破片が出土している。1は19世紀後半製作の鉢、2は18世紀後半から19世紀前半製作の碗の破片である。埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致、さらに染付から、少なくとも19世紀代には使用されていたと推定される。(旧C地区溝7)





第214図 A区-3・4・5号溝 (1/200)

A区-4号溝
(第214図)

A-3溝に平行し、約9mの間隔をおいてはしる畑地境界溝で、溝そのものは狭いものである。底面の高さは南にいくほどだんだん高くなる。A-3溝とこのA-4溝の間は、1筆の長大な畑地であったと推定される。出土遺物はないが、埋土の新しさほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(旧C地区溝8)

A区-5号溝
(第214図)

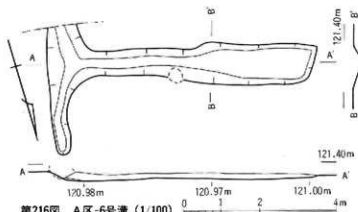
同じくA-3・4溝の西側に平行してはしる畑地境界溝で、底面はほぼ水平である。A-4溝との間に約10mの間隔があり、その間も同じく畑地の1筆であったとみられる。出土遺物はないが、埋土の新しさほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(旧C地区溝9)



第215図 A区-3号
清出土遺物(1/4)

A区-6号溝(第216図)

A 5溝に直交するT字形の畑地境界溝で、A 5溝との間の空間は通路状をなしている。底面の高さはほぼ水平である。出土遺物はないが、埋土の新しさとほかの近世溝との方向の一致から、この時期の遺構と認定した。(山C地区溝10)



第216図 A区-6号溝(1/100)

第9節 表面採集遺物(第217図、第6表 →図版42)

以下の遺物は遺構内出土遺物であるが、明らかに、より古い時代からの残留遺物と考えられるものである。1は弥生時代中期後半の遺構であるA-81土城内に残留した弥生時代前期の壺の口縁部破片で、口縁端部に羽状の刻目を施す。2は古墳時代前期のA-8住内に残留した弥生時代の磨製挟人片刃石斧で、頁岩質砂岩製である。

3は近世のA-3溝内に残留した弥生時代の石器の未製品である。結晶片岩製であるので、石包丁の未製品と推定される。



第217図 A区表面採集遺物(1=1/4, 2・3・4=1/3)

なお4はA区ではなく、C区X2調査区のビット1の埋土中から出土した結晶片岩製の携帯用砥石で、半分に分れている。最終校正中に間違いを発見したものでご寛恕願いたい。

AR-114号土層	F19	小型凹形	A	71	65	9	不明	自然土層?遺物等なし	C-174
AR-115号土層	G	小型長方形	E1	77	50	4	不明	遺物なし	C-175
AR-116号土層	Q	不定形	F	78	43	32	不明	遺物なし	C-176
AR-117号土層	Q0	長方形	E	94	44	44	不明	遺物なし	C-177
AR-118号土層	Q13	不定形	F	174	45	-	調査時代?	上土と連続する。自然土層?	C-178
AR-119号土層	Q13	長方形	F	110	150	-	不明	遺物等なし。自然土層?	C-179
AR-120号土層	31	本型凹形 (嵌込)	A4	135	74以上	34	不明	自然土層?遺物等なし	C-180
AR-121号土層	31	不定形	F	142	42	23	不明	遺物なし	C-181
AR-122号土層	31	不定形	F	142	-	-	不明	自然土層	C-182
AR-123号土層	31	長方形	E	144	144	7	不明	遺物なし	C-183
AR-124号土層	31	長方形	E1	144	144	7	不明	遺物なし	C-184
AR-125号土層	31	不定形	F	147	45	14	不明	自然土層?遺物等なし	C-185
AR-126号土層	31	不定形	F	80	34	34	不明	自然土層?	C-186
AR-127号土層	E7	小型凹形 (嵌込)	A5	104	104	23	不明	遺物なし	C-187
AR-128号土層	31	不定形	F	115	43	7	不明	遺物なし	C-188
AR-129号土層	S13	大型凹形	F	132	113	11	不明	遺物等なし	C-189
AR-130号土層	S18	不定形	F	271	244	57	不明	遺物等なし。風雨穴	C-190
AR-131号土層	S18	不定形	F	195	74	55	不明	自然土層?遺物等なし	C-191
AR-132号土層	S17	小型凹形	F	57	72	3	不明	自然の凹み	C-192
AR-133号土層	T0	不定形	A2	137	85	14	調査時代~出縄時代	中庭に。原と土器層片が重なり	C-193
AR-134号土層	T0	小型凹形 (嵌込)	A3	52	72	-	発土時代?	上・中庭に切られる。遺物なし	C-194
AR-135号土層	T18	小型凹形	A4	75	45	20	不明	上・中庭に切られる	C-195
AR-136号土層	T18	不定形	F	144	144	16	不明	遺物等なし。土器小片含む	C-196
AR-137号土層	T18	不定形	F	94	75	14	調査時代前後半~出縄初期	貯蔵穴	C-197
AR-138号土層	T18	不定形	F	31	56	4	不明	遺物等なし	C-198
AR-139号土層	T18	不定形	A4	71	44	14	不明	原。土器小片・灰入	C-199
AR-140号土層	T18	不定形	F	40	48	12	不明	原。土器小片含む	C-200
AR-141号土層	T18	不定形	F	78	70	15	不明	遺物等なし	C-201
AR-142号土層	J0	不定形	F	44	45	45	不明	遺物等なし	C-202
AR-143号土層	J0	不定形	F	142	45	45	不明	自然の凹み?遺物なし	C-203
AR-144号土層	J18	不定形	F	146	46	17	不明	自然の凹み?遺物なし	C-204
AR-145号土層	J18	不定形	F	100	40	44	不明	土器層片含む	C-205
AR-146号土層	J18	不定形	F	40	75	14	中世良前	遺物なし	C-206
AR-147号土層	J18	不定形	F	100	50	41	不明	土器小片含む	C-207
AR-148号土層	J17	不定形	F	340	305	41	不明	遺物なし→自然土層?	C-208
AR-149号土層	V0	小型凹形	A	47	45	41	中世~近世	土器小片混入。楕円あり	C-209
AR-150号土層	V0	小型凹形	A	141	42	42	不明	上土層より灰土か	C-210
AR-151号土層	V18	小型長凹形	A	105	115	42	不明	結土と土器層片含む	C-211
AR-152号土層	SC	小型凹形 (嵌込)	F	-	-	-	不明	自然土層?遺物等なし	C-212
AR-153号土層	SC	小型凹形	A1	35	85	44	不明	原層不露	C-213
								貯蔵穴	C-214

第4表 小畑江原遺跡 A区 溝一覧表

遺構名	調査区	断面形態	長さ	最大幅		方向と方位角	時期	備考	旧名称
				(単位 m)	溝小幅				
A区-1号溝 P17		U字形	(8.0)	1.2	1.0	南北12°	近世	埴地境界溝	C-溝5
A区-2号溝 R18, R17		U字形	(19.0)	1.3	0.6	南北12°	近世	埴地境界溝, A-4溝を切る	C-溝6
A区-3号溝 S1, T1, T0, T19, T18, T17		U字形, 二条	(45.2)	2.2	1.0	南北10° → 8°	近世	埴地境界溝, A-8溝・A-61溝・A-10溝を切る。畷りなおしあり	C-溝7
A区-4号溝 T1, U0, U19, U18, U17		U字形	(43.6)	1.2	0.5	南北10°	近世	埴地境界溝	C-溝8
A区-5号溝 U1, V1, V0, V19, V18, V17		U字形	(43.4)	1.6	1.0	南北10°	近世	埴地境界溝, A-133溝を切る	C-溝9
A区-6号溝 V17, W17		U字形	(7.3+3.4)		(1.2)	東西108°, 南北18°	近世	埴地境界溝, C-5溝に直交	C-溝10
A区-7号溝 V0, V19		U字形	(17.0)	1.2	0.4	南北0°	現代(1960年代以後)	—	C-溝11

第 5 表 小迫辻原遺跡 A区 出土土器類群表

小迫辻原 A区-4号 聖穴住居 弥生時代前期後半-中期前期

C-PO-住19

No	出土位置 -層位-	種類	形状	重量 g	容積 cm ³	底形	胎土	底彩	断面		備考
									断面	内面	
	北穴上層上段	赤土器	器A	27.1	26.6	楕圓形	伊賀赤い 斑織		多クハツク(1cm)	丁型ナナ子	伊賀赤 斑織 - スズリ目 - 土質土器

小迫辻原 A区-4号 聖穴住居 弥生時代前期後半

C-R19-住12

No	出土位置 -層位-	場所	形状	重量 g	容積 cm ³	底形	胎土	底彩	断面		備考
									断面	内面	
	北穴一階	土器類群 A	器A 三日月形	13.0	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 内面、底面に下凹凹線状加飾あり
	北穴一階	土器類群 A	器A	-	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 口縁部ナシ
	北穴一階	土器類群 A	器A 三日月形	27.1	26.6	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴一階	土器類群 A	器A 三日月形	20.1	11.6	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴一階	土器類群 A	器A	47.6	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁

小迫辻原 A区-4号 聖穴住居 弥生時代前期後半

C-PO-住10

No	出土位置 -層位-	場所	形状	重量 g	容積 cm ³	底形	胎土	底彩	断面		備考
									断面	内面	
	北穴一階上	土器類群 A	器A 三日月形	-	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴一階上	土器類群 A	器A 三日月形	18.2	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 口縁部ナシ
	北穴二階	土器類群 B	器B 三日月形	14.0	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴二階上	土器類群 B	器B 三日月形	8.6	14.2	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴二階上	土器類群 B	器B 三日月形	-	10.0	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴二階上	土器類群 B	器B 三日月形	3.7	10.5	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁

小迫辻原 A区-9号 聖穴住居 弥生時代前期前半

C-T19-住10B

No	出土位置 -層位-	場所	形状	重量 g	容積 cm ³	底形	胎土	底彩	断面		備考
									断面	内面	
	北穴一階上	土器類群 A	器A	29.8	24.2	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁
	北穴二階上	土器類群 A	器A	16.0	-	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁

小迫辻原 A区-5号 聖穴住居 弥生時代中期

C-S18-住18(遺物B)

No	出土位置 -層位-	場所	形状	重量 g	容積 cm ³	底形	胎土	底彩	断面		備考
									断面	内面	
	北穴A	土器類群 A	器A	3.5	13.4	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁

小迫辻原 A区-8号 聖穴住居 弥生時代中期

C-T17-住18(遺物B)

No	出土位置 -層位-	場所	形状	重量 g	容積 cm ³	底形	胎土	底彩	断面		備考
									断面	内面	
	北穴C	土器類群 A	器A	6.4	16.0	楕圓形	伊賀赤い 斑織	黒上掛け	白ナナ子	楕圓形	- 二次加飾 - スズリ目 - 底面、底縁

小笠原 A区-10号 獨立前階段 中層

NO	出土位置 -遺構	種別	時期	形状	出土 位置	形状	色調	使用 状況	備考
101	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—
102	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—

C-111-E-10

小笠原 A区-9号 土器 彌生時代後葉

NO	出土位置 -遺構	種別	時期	形状	出土 位置	形状	色調	使用 状況	備考
101	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—
102	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—

C-111-E-9

小笠原 A区-8号 土器 弥生時代前期後半-中期初期

NO	出土位置 -遺構	種別	時期	形状	出土 位置	形状	色調	使用 状況	備考
101	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—
102	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—

C-111-E-17

小笠原 A区-4号 土器 弥生時代前期後半-中期初期

NO	出土位置 -遺構	種別	時期	形状	出土 位置	形状	色調	使用 状況	備考
101	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—
102	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—

C-111-E-19

小笠原 A区-5号 土器 弥生時代前期後半-中期初期

NO	出土位置 -遺構	種別	時期	形状	出土 位置	形状	色調	使用 状況	備考
101	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—
102	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—

C-111-E-18

小笠原 A区-6号 土器 弥生時代前期後半-中期初期

NO	出土位置 -遺構	種別	時期	形状	出土 位置	形状	色調	使用 状況	備考
101	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—
102	中層1F	土器	弥生	土器	中層1F	土器	褐色	—	—

C-111-E-20

小笠原 A区-7号 土壌 養生時代前期後半～中期初期

G-01-E21

NO	土名(土質)	場所	層位	層厚	深さ	土質	形状	粒径	色調	硬さ	備考
1	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
2	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A

小笠原 A区-8号 土壌 養生時代前期後半～中期初期

G-01-E22

NO	土名(土質)	場所	層位	層厚	深さ	土質	形状	粒径	色調	硬さ	備考
1	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
2	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A

小笠原 A区-9号 土壌 養生時代前期後半～中期初期

G-01-E23

NO	土名(土質)	場所	層位	層厚	深さ	土質	形状	粒径	色調	硬さ	備考
1	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
2	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A

小笠原 A区-10号 土壌 養生時代前期後半～中期初期

G-01-E19

NO	土名(土質)	場所	層位	層厚	深さ	土質	形状	粒径	色調	硬さ	備考
1	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
2	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
3	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
4	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
5	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
6	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A

小笠原 A区-11号 土壌 養生時代前期後半～中期初期

G-01E-17

NO	土名(土質)	場所	層位	層厚	深さ	土質	形状	粒径	色調	硬さ	備考
1	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
2	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
3	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
4	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
5	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
6	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A
7	赤土(粘質)	赤土(粘質)	表層	10cm	10cm	粘質赤土	塊状	100%	赤褐色	硬	付録A

小池比鄰 A區-31号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土101

小池比鄰 A區-36号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土111

小池比鄰 A區-37号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土113

小池比鄰 A區-38号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土112

小池比鄰 A區-39号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土131

小池比鄰 A區-40号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土140

小池比鄰 A區-41号 土圍 養生時代前期後半～中期初期

No	出土位置		層別	土質	形状・土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	高さ	位置										
100	出土位置	高さ	位置	層別	土質	数量	出土位置	形状	土質	数量	用途	備考
	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

C-017-土171

小畑豆腐 A区-43号 工場 発生動向中間報告

NO	出土位置		種別	量	種別	量	土質		形状	成分	検出	検出	検出	備考
	層	深さ					層	深さ						
1	1層	20cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—

小畑豆腐 A区-43号 工場 発生動向中間報告

NO	出土位置		種別	量	種別	量	土質		形状	成分	検出	検出	検出	備考
	層	深さ					層	深さ						
2	2層	1-1	粘土状土層	1.5	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
3	3層	1-2	粘土状土層	2.5	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—

小畑豆腐 A区-43号 工場 発生動向中間報告

NO	出土位置		種別	量	種別	量	土質		形状	成分	検出	検出	検出	備考
	層	深さ					層	深さ						
4	4層	2-1	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—

小畑豆腐 A区-44号 工場 発生動向中間報告

NO	出土位置		種別	量	種別	量	土質		形状	成分	検出	検出	検出	備考
	層	深さ					層	深さ						
1	1層	10cm	粘土状土層	—	15%	1%	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
2	2層	10cm	粘土状土層	—	0.2%	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
3	3層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
4	4層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
5	5層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
6	6層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—

小畑豆腐 A区-44号 工場 発生動向中間報告

NO	出土位置		種別	量	種別	量	土質		形状	成分	検出	検出	検出	備考
	層	深さ					層	深さ						
1	1層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
2	2層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
3	3層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
4	4層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
5	5層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
6	6層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—

小畑豆腐 A区-44号 工場 発生動向中間報告

NO	出土位置		種別	量	種別	量	土質		形状	成分	検出	検出	検出	備考
	層	深さ					層	深さ						
1	1層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
2	2層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—
3	3層	10cm	粘土状土層	—	—	—	—	—	粘土状土層	—	—	—	—	—

小池沼原 A区-92号 工期: 古備時代前期前半

NO	出土位置 -遺構-	用途	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	大口罎A9	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色

C-90-1.16

小池沼原 A区-117号 土師 弥生時代前期後半-中期前期

NO	出土位置 -遺構-	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	21.0	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	二重口縁 底面(粘土)	口縁部
11	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	口上付	底面(粘土)
12	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	口上付	底面(粘土)
13	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	口上付	底面(粘土)

C-1-1.17

小池沼原 A区-93号 灰土

NO	出土位置 -遺構-	用途	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
11	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
12	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色

小池沼原 A区弥生時代前期後半

NO	出土位置 -遺構-	用途	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	15.0	10.0	10.0	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
11	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色

小池沼原 A区古備時代前半

NO	出土位置 -遺構-	用途	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	大口罎A9	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
11	出土位置 -遺構-	土師器	大口罎A9	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色

小池沼原 A区弥生時代前半

NO	出土位置 -遺構-	用途	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	15.0	10.0	10.0	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
11	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
12	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色

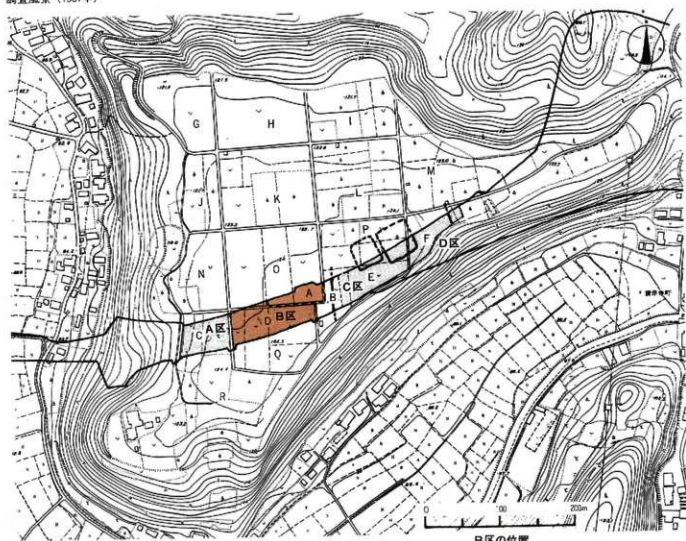
小池沼原 A区弥生時代後半

NO	出土位置 -遺構-	用途	器種	器高 (cm)	器径 (cm)	器口径 (cm)	器底径 (cm)	器口形状	器底形状	器底色	器身色	使用状況	備考
10	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	15.0	10.0	10.0	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色
11	出土位置 -遺構-	土師器	弥生土師器	-	-	-	-	口上付	口上付	黒褐色	黒褐色	-	口縁部粘土に黒褐色

第5章 B区の記録



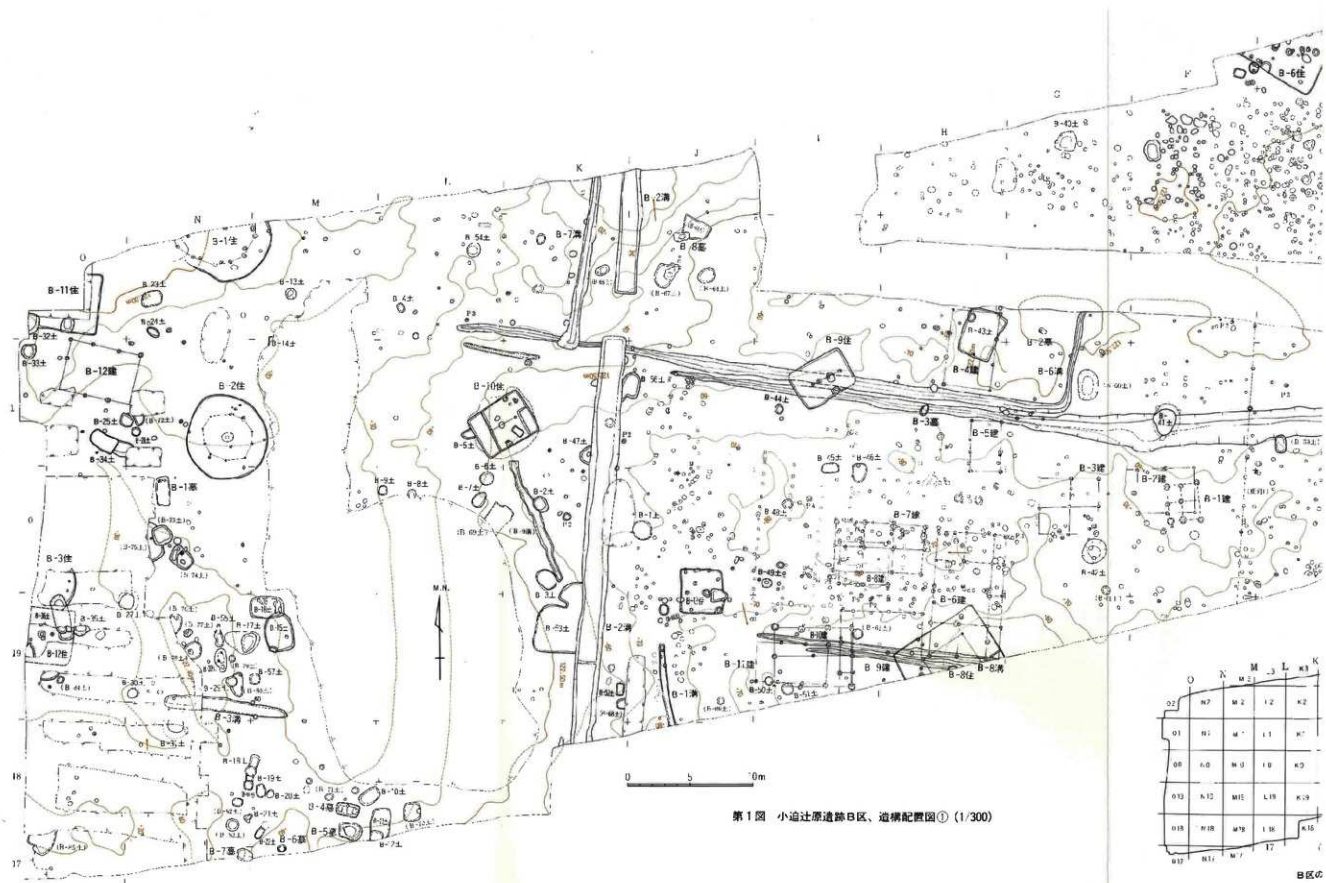
調査風景 (1987年)



B区的位置



6 区中世窟跡全景



第1图 小边洼原始遗址B区、遺構配线图① (1/300)



第2図 小迫辻原遺跡B区遺構配置図②
 —弥生時代前期後半～中期初頭— (1/300)



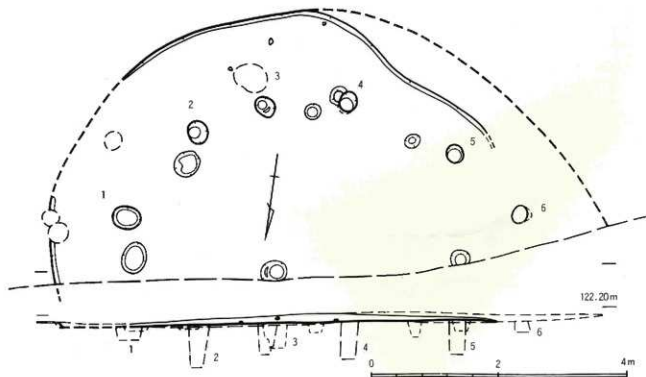
第1節 B区の調査概要（第1図 一回版1～3）

B区は本調査時の旧A地区と旧D地区である。調査区の中央にあたり、現状は大部分が畑であった。西から三分の一あたりまでは、かつて日田市西部地区農芸組合椎葉共同飼育所の跡地で、その建物基礎の掘削のためにかなり大規模な攪乱を受けていた。しかし全体に耕地整理などによる削平は少なく、C区にくらべて遺構の保存状態はよく、弥生時代の竪穴住居跡も竪穴部分まで遺存していた。

地形は全体に南側が高く、北と西にいくにしたがって低くなる。しかし西部分では本来伸びていたはずの近世の畑地境界溝が途中で削平されて途切れている（B-5・6・8溝）。したがって西側に低くなる現状の地形は、1960年代の耕地整理によるもので、近世までは東西の高さはそれほど変わらなかったと推定される。また北側特に旧D地区北部と旧A地区が低いのは、遺徳ながら調査時の表土剥ぎと遺構検出作業が深すぎたためであって、地形の実際を反映していない。したがって南北の高低差も本来それほどなかったものと推定される。

B区では現地地形の上で、明らかに自然が生み出した凹みや現代の穴を除いて、竪穴住居跡13軒・掘立柱建物跡12棟、土壇86基、墓9基、溝9条とピット多数を検出した。このうち以下に報告する遺構は、出土遺物・切り合い関係・土質等により時期の判定が可能であったもののみである。文章のない遺構は扉木の遺構一覧表を参照されたい（第1～5表）。

B区の遺構の時期別分布の特徴は、①A区と連続する弥生時代前期後半から中期初頭の遺構がまとまって検出されたこと。②弥生時代中期後半の遺構がかなり検出され、特に墓地の一角を発見したこと。③A区からつづく古墳時代前期前半の竪穴住居跡群が存在し、小迫辻原遺跡ではきわめて珍しい小児墓が検出されたこと。④A区の扉木群よりも大規模な溝で区画した中世の掘立柱建物群が検出されたこと。⑤近世の畑地境界溝が多く存在すること、などである。しかし以上の時期以外の遺構は全く検出されない。これはA区と同様であり、ある特定の歴史的条件が揃った時代にのみ遺跡が形成されるという、この台地の遺跡立地の特徴を備えている。

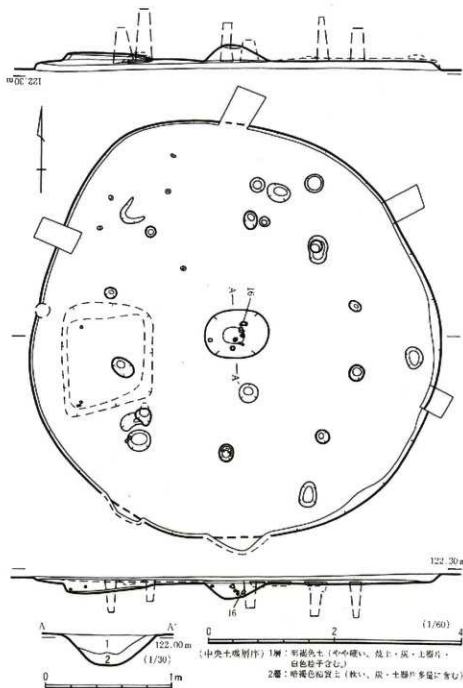


第3図 B区-1号竪穴住居跡（1/60）

第2節 弥生時代前期後半～中期初頭 (第2図)

この時期にあたる遺構は、竪穴住居跡3軒・土壇36基・墓1基を確認した。ほかにピット3本を本文に掲載した。この時代のピットはまだ存在するであろうが、土器を含まないために区別できなかった。

遺構の配置は、第2図をみると明白のようにB区の西半分に集中する。前記したようにこの時期の遺構の集中する西半分は、最近の削平と擾乱が最も激しい部分であり、さらに多くの遺構が存在した可能性が高い。一方削平の少ない東半分では、この時期の遺構が検出されなかったため、遺構の分布がB区の東半分にまで及ばないことも明らかである。つまりA区から連続する弥生時代前期後半から中期初頭の遺構の分布はB-1土壇があるIラインを東限とするとみられる。



第4図 B区-2号竪穴住居跡 (1/60, 1/30)

なお弥生時代前期後半から中期初頭としたこの時期は、北部九州の土器編年と比較した場合、次の三期すなわち板付Ⅱ式の新しい段階、前期末段階、中期初頭の城ノ越式段階におおよそ対応すると考えられる。以下の本文中では板付Ⅱ式の新しい段階にあたる時期を「弥生時代前期後半」、前期末段階を「弥生時代前期末」、中期初頭の城ノ越式段階を「弥生時代中期初頭」と表現することにする。

1) 竪穴住居跡 (第1・6・8表)

検出された三軒の竪穴住居跡が、A区の竪穴住居跡の検出状態と異なる点は、①A区よりも遺構の削平の程度が浅いために保存状態がよく、竪穴部分が遺存していたこと。②重複する竪穴がないことである。

B区-1号竪穴住居跡 (第3図 一図版4)

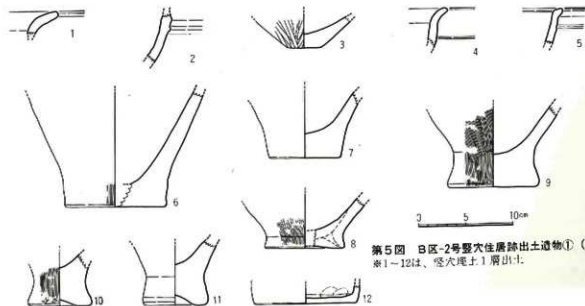
B区北端で南半分のみを検出した円形竪穴建物で、柱穴は6本検出した。柱穴の大きさはよく揃うが、深さは不揃いである。竪穴部分の西半分が消失しているた

め、正確に測定することはできなかったが、径850cm前後で、床面積も50㎡前後の大型竪穴建物と推定される。検出面からの深さは10cmに達しない。床面は貼り床である。削平が激しく深さ数cmを確認したのみだが、埋土は遺物をわずかに含む黄褐色土である。土器は細片が点在するのみで図示できないが、刻目のある甕の口縁部の小片と、打製石斧らしい石片が出土している。竪穴が円形であることとその柱構造の類似、それにその壺小片から、この時期の遺構と認定した。(旧D地区竪穴住居27)

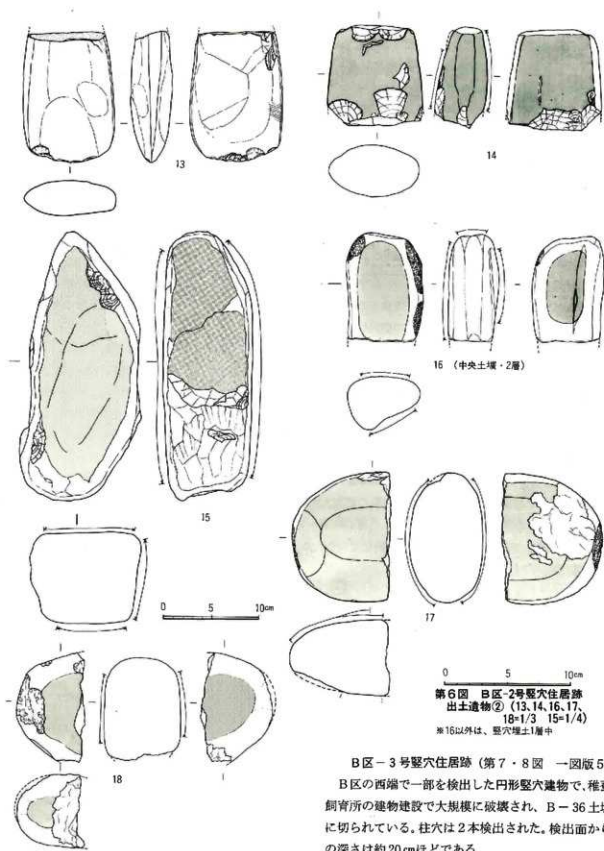
B区-2号竪穴住居跡(第4~6図 一図版4・37)

B-1住の真南で検出した10本柱の円形竪穴建物である。竪穴部分の径は630~680cmで、検出面からの深さは約15cmほどである。柱穴の大きさは細く揃うが、深さは不揃いである。また10本の主柱穴の外側に浅いピットが約3mの間隔で5本検出されたが、建物構造と関わりがあるかどうかは不明である。床面積は32.6㎡である。中央に炭片と焼土・土器片を含む暗褐色土(第4図2・1層)が堆積した長円形の中央土壌がある。底面に焼土面はないので、灰を利用した炉であったと考えられる。内部には土器の小片と縄が混入し、その中には甕の底部小片や半分に分れた16の磨石が入っていた。この竪穴廃絶時に廃棄されたものと推定される。そして床は貼り床で、同じ土が柱穴の埋土にも用いられている。床下に方形土壌が1箇所検出されたが、上面に貼り床がおこなわれたうえに柱穴が検出されているので、この床下の土壌は建設時の底の凸凹の一部であろう。中央土壌の存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

埋土は炭片・土器片と1~2cm大の黄色土ブロックを多量に含む暗褐色土の単一層(1層)である。遺物はいずれも小片で、大部分は床面からやや浮いた状態で出土した。1~3の壺片、4~11の甕片、12の底部片や、13~15・17-18の割れた石器が検出された。いずれの土器も小破片で、石器もほとんど破片である。竪穴廃絶後、この竪穴は生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。1層の廃棄遺物には土器と石器があり、土器は甕の底部片が多い。1・2・3は壺の破片で、2は胴部に浅いM字突起の付く小型の壺B、3は丁寧なミガキを施した小型の甕で、胎土に金雲母を含み搬入品の可能性がある。4・5は如意形口縁に沈線を施す壺A、6~11は甕の底部片で大小がある。大部分は被熱している。12は器種不明の土製容器の底部片で、被熱している。3以外はいずれも胎土は在地産である。石器には、13の砂岩製の磨製大型鈍刃石斧の刃部と14の基部がある。15はかなり破損しているがほぼ完形の安山岩製石皿、16の折れた磨石はホルンフェルス製、17・18は割れた磨石とともに安山岩製、とくに17は被熱して割れている。以上の土器などから、この竪穴住居跡の廃絶時期は弥生時代前期末とみられる。(旧D地区竪穴住居23)



第5図 B区-2号竪穴住居跡出土遺物①(1/4)
※1~12は、竪穴埋土1層出土

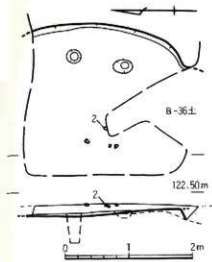


第6図 B区-2号竪穴住居跡
出土遺物② (13, 14, 16, 17,
18=1/3 15=1/4)
※16以外は、竪穴埋土1層中

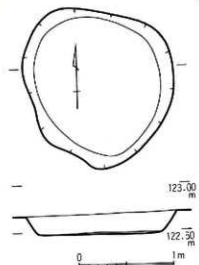
B区-3号竪穴住居跡 (第7・8図 一図版5)

B区の西端で一部を検出した円形竪穴建物で、稚蚕飼育所の建物建設で大規模に破壊され、B-36土壌に切られている。柱穴は2本検出された。検出面からの深さは約20cmほどである。

埋土は炭片と黄色土ブロックの小粒子を多量に含む暗黄褐色土の単一層(1層)である。遺物はいずれも小片で、大部分は床面からやや浮いた状態で出土した。1の甕口縁部片や2の底部片である。どちらも在産で、2は被熱している。この土器から、竪穴住居跡の廃絶時期は弥生時代前期末とみられる。(旧D地区竪穴住居29)



第7図 B区-3号竪穴住居跡(1/60)



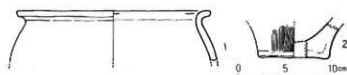
第9図 B区-1号土坑(1/40)

B区-1号土坑(第9・10図 一図版5・37)

大型円形の七坑で、底面は平坦である。規模は長軸長175cm、短軸長160cm、検出面からの深さ25cmである。底部しか残っていないため断面形態はよくわからないが、平面形と規模からみて貯蔵穴の可能性が高い。埋土は炭片・円礫と土器片を含む暗黄褐色土の単一層(1層)である。遺物はいずれも小片で、大部分は底面からやや浮いた状態で出土した。1の沈線にヘラ描き文様を施す壺Aの破片は、B-3土坑の3層遺物一括廃棄の1の壺片と同一個体である。2は被熱した壺あるいは甕の底部、3は姫島産黒曜石製の打製石鏃で、未製品の可能性がある。この土器から、この土坑の廃絶時期は弥生時代前期末とみられる。(旧D地区土坑471)

B区-2号土坑(第11・12図 一図版5・37)

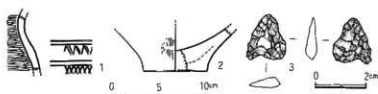
小型長円形の袋状の土坑で、B-9溝に切られている。その規模は長軸長122cm、短軸長84cm、検出面からの深さは50cmである。底面は平坦である。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。埋土は三層に分かれ、2層に遺物一括廃棄がおこなわれている。まず均質で何も含まない暗黄褐色の3



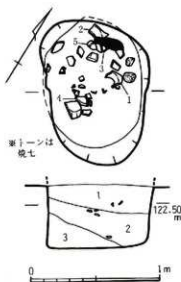
第8図 B区-3号竪穴住居跡出土遺物(1/4)

2) 土坑(第3・6~8表)

C区と同じく①小型円形(A)、②大型円形(B)、③小型方形(A5)、④長円形(C)、⑤船底形(D)、⑥長方形(E)、⑦形の定まらない不定形(F)の7種類が存在する。

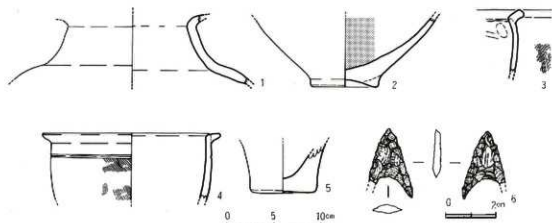


第10図 B区-1号土坑出土遺物(1・2=1/4, 3=2/3)

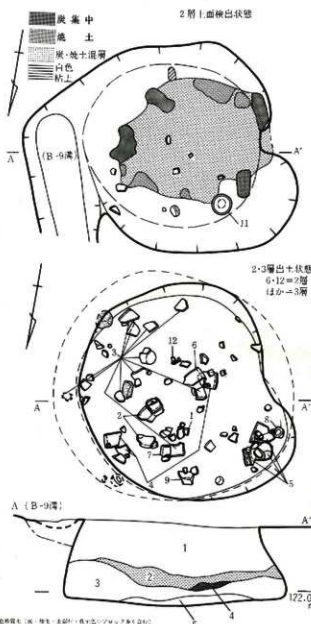


1層: 暗黄褐色軟質土(炭・土器片少しと黄色土小アロップ多量を含む)
2層: 均質軟質土(炭・礫土・土器片多量を含む)
3層: 均質褐色軟質土(均質で何も含まない)

第11図 B区-2号土坑(1/30)



第12図 B区-2号土壌出土遺物(1~5=1/4, 6=2/3)



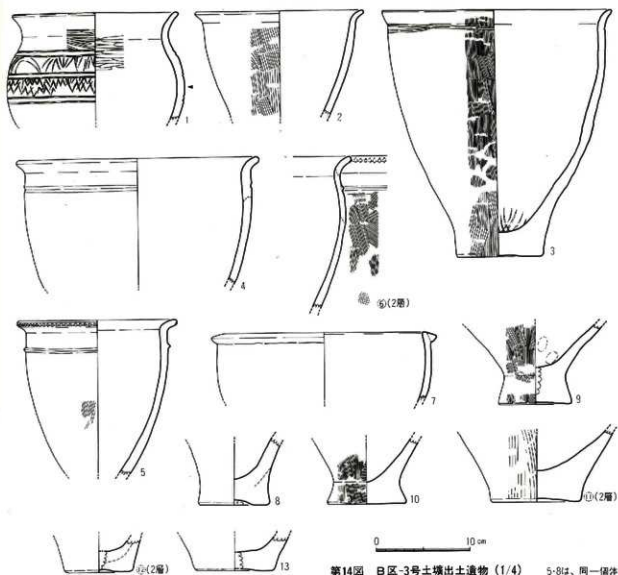
第13図 B区-3号土壌(1/30)

層が堆積する、その上に土器片を中心に炭・焼土・焼け小礫を多量に含む2層が堆積し、その中には白色の粘土も混じっている。いずれも西側から土砂が流れこんだ様子を示している。その堆積状態からみて3・2層は一連の廃棄で、その後1層が堆積して埋没している。2層の土器はいずれも小破片で、生活廃棄物を一気に捨てた可能性が高い。2層の一括廃棄物には土器と石器があり、土器は壺と甕がある。2は壺の底部で、3・4は逆し字形口縁の甕Cである。5は底部片で被熱している。6は脚の一部が破損した粘板岩製の無茶団基の打製石織で軽量品。1層からは1の壺Aの頂部片が出土している。土器はいずれも胎土からみて在地産である。廃棄の時期は、以上の土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌467)

B区-3号土壌(第13・14図一図版6・37)

大型円形の袋状土壌で、底面中央がやや凹むがおおむね平坦である。規模は長軸長200cm、短軸長183cm、検出面からの深さは67cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。土壌の底部中央には、貯蔵穴として使用中に堆積したと思われる無遺物の5層が広がり、その上に3層と2層に一連の遺物一括廃棄が認められる。まず底面全体に炭・焼土・黄色土ブロックを多量に含む3層が堆積する。この層はわれた完形品や大型破片のままの土器や円礫を含んで硬い。土器は1の壺が割れて中央にある。ただし底部の破片はなく、脚部の破片の一部は近接するB-2土壌に廃棄されていた(第5図1)。2~5・7~10・13の甕はいずれも大型破片で廃棄され、3はばらばらに検出されたが完形に復元できた。5と8も同一個体で土

【備考】
 1層：弥生時代前期末(炭・焼土・黒砂・赤土・白土・黄土・赤土・黒土)
 2層：炭・焼土混層(3層以下)
 3層：白色粘土(4層以下)
 4層：粘土(5層以下)
 5層：炭・焼土混層(6層以下)
 6層：炭・焼土混層(7層以下)

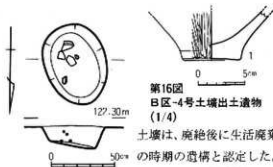


第14図 B区-3号土墳出土遺物(1/4) 5-8は、同一個体



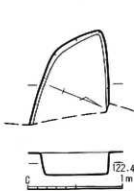
1の拓影

墳の隅に破片が重なるように検出された。1の壺以外はすべて被熱している。次に4層の焼土が廃棄されたのち、炭と焼土の混層である2層が、白色粘土と土器片とともに廃棄されている。3層に比べると土器片の量はかなり少なく、6の頸口縁部片と11・12の甕底部片が目立つ程度である。以上の遺物一括廃棄層は、3層に炭片や黄色土ブロックをかなり含む点、炭や焼土の集中が明確に認められる点と大量の廃棄物が同層を挟まずに連続する点などからみて、一連の廃棄行為の結果であり、土器の出土状態からみて1の壺を含む数個体の甕を使用した祭祀行為がおこなわれた可能性が高い。そして最後に炭・焼土・黄色土ブロックを多量に含む1層が土壇をふさぐように堆積する。基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に含む点から短期間に堆積したことは明白で、遺物一括廃棄をともしう祭祀のち埋め戻された可能性が高い。出土土器はほとんど在地産で、12の甕底部のみが余雲母を含む胎土を使用した瀬人産である。1はヘラ描き文様を施す壺A、2～4は甕Aで一糸沈線がめだつ。5・6は突帯を施す甕B、7は逆L字口縁の甕C、9～13は甕の底部。1と2を除きほかの土器はすべて被熱している。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壇466)



第15図 B区-4号土坑 (1/30) B区-5号土坑 (第17・18図—図版6・38)

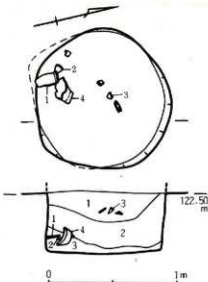
不定形の土坑で、B-10住(古墳時代前期前半)に切られている。底面は平坦である。その規模は長軸長124cm以上、短軸長75cm以上、検出面からの深さは23cmである。その用途は不明である。埋土は炭・焼土と土器の小片を含む暗褐色土の単一層(1層)で、その



第17図 B区-5号土坑 (1/40)

B区-6号土坑 (第19・20図—図版7)

大型円形の堅穴状土坑である。規模は長軸長120cm、短軸長110cm、深さは50cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であった可能性が高い。埋土は三層に分かれ、2層下部に遺物一括廃棄が認められる。まず暗褐色の3層が堆積する。この層は炭片と黄色土ブロックを多量に含まれ、別の穴を掘る際の排出土を捨てたような状態であった。次に暗褐色の硬い2層が堆積するが、それに先立って土器片が廃棄されている。1・2の甕口縁部の大型破片、4の底部に穿孔のある甕の破片が一箇所に集中して検出され、一括廃棄されたものと見られる。そして最後に炭と土器小片をわずかに含む1層が堆積する。3は1層出土の甕底部片である。以上の埋没状態から、貯蔵穴の作り替えに際して新しく排出された土砂と土器を一括廃棄し、その後生活廃棄物の捨て場所になったものと推定される。その際に祭祀行為があったかどうかは、土器の出土状態からは判然としない。出土土器はいずれも在地産の胎土を用い、4は被熱していた。1・2は甕Aで、2は一条沈線を施す。4は底部に穿孔して甕に転用した甕である。土坑埋没の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土坑462)



- 1層: 暗褐色硬質土(炭・土器片含む)
 2層: 暗褐色硬質土(炭・土器片・黄色土ブロックを含む)
 *下部に土器集中
 3層: 暗褐色土(炭・黄色土ブロックを多く、土器片も含む)

第19図 B区-6号土坑 (1/30)

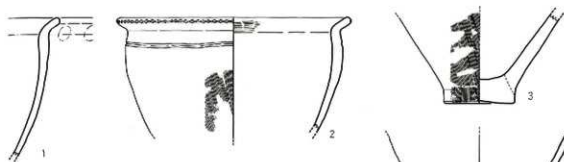
B区-4号土坑 (第15・16図—図版6・38)

小型長円形の土坑で、底面は皿状である。規模は長軸長64cm、短軸長48cm、検出面からの深さは18cmである。その用途は不明である。埋土は炭片と土器小片を含む暗褐色土の軟らかい単一層(1層)で、その中には1の甕底部片が含まれていた。この土坑は、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。その土器から、この時期の意構と認定した。(旧D地区土坑408)

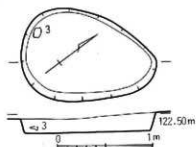


第18図 B区-5号土坑出土遺物 (1/4)

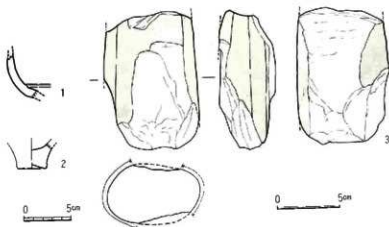
中には1・2の破片と3の鉢の口縁片が含まれていた。甕はいずれも胎土に金雲母を含む搬入品の甕Aである。遺物の出土状態からみて、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたものと推定される。土坑廃絶の時期は、出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土坑409)



第20図 B区-6号土壌出土遺物(1/4)



第21図 B区-7号土壌(1/40)



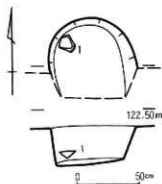
第22図 B区-7号土壌出土遺物(1・2=1/4, 3=1/3)

B区-7号土壌(第21・22図 一図版7・38)

不定形の土壌で、規模は長軸長144cm、短軸長96cm、深さは22cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壌であるが、その用途は不明である。埋土は硬くしまった粘質の強い暗褐色土の単一層(1層)で、その中には1の壺片や2の小型甕の底部片と、3の磨製石斧の破片などが含まれていた。また基盤層に由来する小礫を多く含み、別の土壌からの排出土を廃棄したと推定される。1は削りだし突帯の壺B、2はミニチュア土器の可能性もある。3の石斧は福岡市今山産の可能性のある玄武岩製。土壌廃絶の時期は、以上の出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌461)

れる。(旧D地区土壌461)

B区-8号土壌(第23図 一図版7)

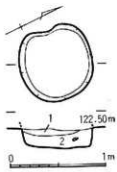


第23図 B区-8号土壌(1/30)

小型円形の土壌で、南半分は掘乱坑によって破壊されている。底面は平坦だが傾斜がある。規模は長軸長75cm以上、短軸長67cm、深さは31cmである。用途は不明である。埋土は炭・焼土・1~2cm大の黄色土ブロックと土器の細片を多量に含む暗褐色土の単一層(1層)で、硬く粘質が強い。その中には甕の底部片が含まれていたが保存状態が悪く図示できない。遺物の出土状態からみて、廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたと推定される。土壌の

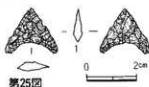
時期は、出土土器からこの時期と認定した。(旧D地区土壌463)

B区-9号土壌(第24・25図一図版7・38)



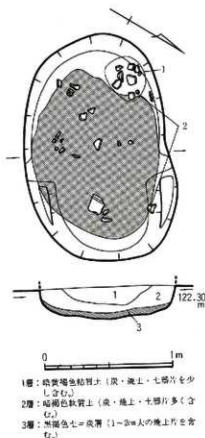
1層: 暗褐色土(炭・焼土・小片礫・白色砂多く含む)
2層: 暗褐色粘質土(炭・焼土・小片礫含む)

第24図 B区-9号土壌(1/40)

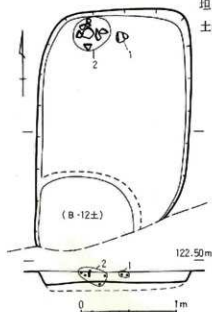


第25図 B区-9号土壌出土遺物(2/3)

小型円形の土壌で、規模は長軸長83cm以上、短軸長70cm、検出面からの深さは27cmである。底面が平坦なので小型の貯蔵穴の可能性が。埋土は二層に分かれ、炭・焼土・土器細片を



第26図 B区-10号土壌 (1/30)

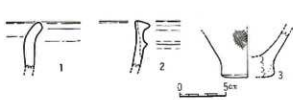


第28図 B区-11号土壌 (1/40)

ともに火を受けて赤く焼けていた。土壌廃絶直後に土器を一括廃棄したものと同様に火を受けて赤く焼けていた。土壌廃絶直後に土器を一括廃棄したものと同様に火を受けて赤く焼けていた。土壌の時期は旧D地区土壌468)

B区-13号土壌 (第32・33図 一図版8・38)

小型円形の土壌で、底は皿状である。規模は長軸長98cm、短軸長87cm、深さは30cmである。用途は不明であ



第27図 B区-10号土壌出土遺物 (1/4)

る。廃絶後に生活廃棄物の捨て場所に転用されたと推定される。土壌の時期は旧D地区土壌464)

B区-10号土壌 (第26・27図 一図版7)

長円形の土壌で、底面は皿状でやや凸出している。規模は長軸長177cm、短軸長112cm、深さは26cmである。用途は不明である。3層から1層までは使用停止後の堆積層で、埋没状態の特徴は底面に焼土と炭の廃棄層(3層)が認められることである。この3層は黒褐色の炭層で、1~2cm大の焼土粒子を多量に含むが、土器等は一切含まない。その上の2・1層は炭片・焼土片と土器片を含み、上部になるほど混入量は少なくなる。そこには1~3の壁の破片などが散在していた。土壌使用停止直後に何らかの焼却廃棄物を一括廃棄したものと考えられる。土器からみて埋没の時期は弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌463)

B区-11号土壌 (第28・29図 一図版8)

長方形と推定される土壌で、南端をB-12土壌に切られている。底面はおおむね平坦である。規模は長さ290cm、幅162cm、深さは20cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壌であるが、用途は不明である。埋土は炭片と土器片を含む黒褐色土の単一層(1層)で、1・2の壁片が含まれていたほかに、壁の底部片も出土した。1・2は突帯を施す壁B。廃絶直後に廃棄されたものである。土壌廃絶の時期は、旧D地区土壌464)

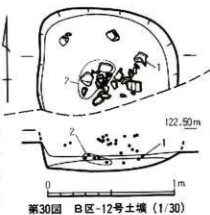
B区-12号土壌 (第30・31図一図版8)

不定形の土壌で、南半分は調査区外にのびB-11土壌を切っている。底面は皿状で、規模は長軸長115cm、短軸長84cm以上、深さは23cmである。埋没状態の特徴は遺物一括廃棄があることである。層序の観察をおこなっていないので詳細は不明であるが、1・2の壁下半が割れた状態で中央に集中して検出された。いずれも比較的大型の破片だが完形には復元できず、

ともに火を受けて赤く焼けていた。土壌廃絶直後に土器を一括廃棄したものと同様に火を受けて赤く焼けていた。土壌の時期は旧D地区土壌464)

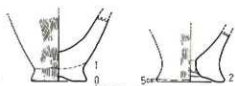
含む。図示できないが逆L字口縁の壁Bの破片がある。また2層中から1の完形の腰岳産黒曜石の打製石鏃が出土している。

る。埋土は三層に分かれ、2層に遺物一括廃棄が認められる。まず暗茶褐色粘質の硬い3層が堆積する。土器をはじめ炭・焼土も含まないので基盤層の掘りすぎかもしれない。次に土器片と炭片を多量に含む暗褐色の2層が堆積する。土器の大型破片と円礫が重なって中央部に検出された遺物一括廃棄層である。1・

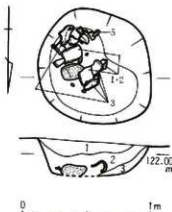


第30図 B区-12号土坑 (1/30)

2の壺は同一個体だが、胴部の破片がなく、3の甕も大型破片が重なったように検出された。復元すると完形に近くなるが底部がない。この甕は、胎土に金雲母を含む搬入品である。さらに4・5の甕破片と6の破損した石織を含む他に、B-14土坑出土の2・3(第35図)の破片が含まれていた。そして最後に炭・焼土と土器小片をわずかに含む1層が堆積する。出土土器は3を除き、いずれも在地産の胎土を用い、甕はすべて被熱していた。1・2は口縁部が逆L字口縁の壺Cである。3は一条沈線の甕Aで、4は逆L字口縁の甕C。6は姫島産黒曜石製の打製石織である。土坑埋没の時期は、出土土器からみて弥生時代中期初頭と推定される。(旧D地区土坑407)

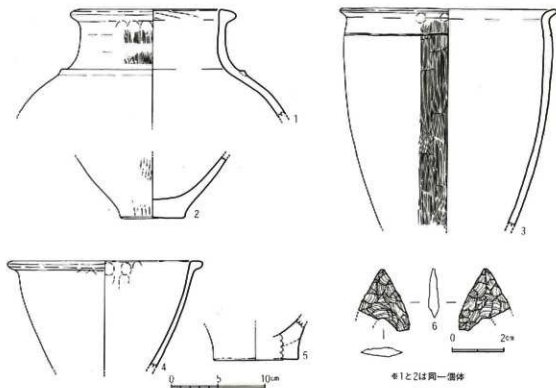


第31図 B区-12号土坑出土遺物(1/4)

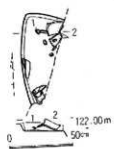


1層：暗茶褐色土(マラヤナしたヒ・焼土・炭と土器片を少し含む)
2層：暗褐色粘質土(やや硬い。土器と炭を多量に含む)→土器集中
3層：暗茶褐色粘質土(硬い)→地山か?

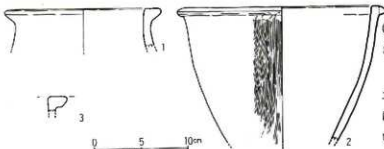
第32図 B区-13号土坑 (1/30)



第33図 B区-13号土坑出土遺物 (1-5=1/4, 6=2/3)



第34図
B区-14号土壙 (1/30)



第35図 B区-14号土壙出土遺物 (1/4)

B区-14号土壙
(第34・35図 一図版
8・38)

方形と推定される土壙で、大半が掘乱坑によって破壊されている。規模は長軸長71cm、短軸長31cm以上、深さは約8cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壙であるが、その用途は不明である。埋土は単一で、その1層に遺物一括廃棄があり、B-13土壙出土土器と接合するものが多い(2・3)。土器はいずれも大型破片で検出され、壺甕とも逆L字口縁のC類である。特に2の甕は胎土に金雲母・石英を含む搬入品で、かつ被熱している。以上の土器は土壙廃絶直後に一括廃棄されたとみられる。土器廃棄の時期は、出土土器から



第36図 B区-15号土壙 (1/40)

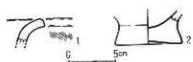
みて弥生時代中期初頭と推定される。(旧D地区土壙406)

B区-15号土壙 (第36・37図 一図版8)

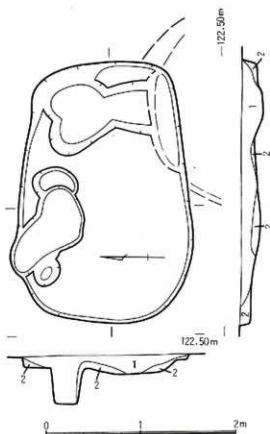
長円形の大型土壙で、B-16土壙に北端を切られる。規模は長軸長313cm、短軸長230cm、深さは45cmである。底面が平坦なので何らかの目的をもつ土壙であるが、その用途は不明である。埋土は炭片と土器片と多量の黄色土ブロックを含む暗黄褐色の単一層(1層)で、1・2の甕小片が含まれていた。黄色土ブロックを多量に含む遺物も少ない点から、廃絶直後に埋め戻されたと推定される。出土土器から土壙をこの時期と認定した。(旧D地区土壙457)

B区-16号土壙 (第38・39図 一図版8)

長円形の大型土壙で、B-15土壙の北端を切る。底面はかなり凸凹していて、用途は不明である。規模は長軸長235cm、短軸

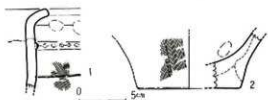


第37図 B区-15号土壙出土遺物 (1/4)



1層: 暗褐色土(中や粘質、炭土・土器片・黄色土ブロック含む)
2層: 炭屑を主とする地山の可能な高さ

第38図 B区-16号土壙 (1/40)

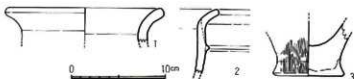
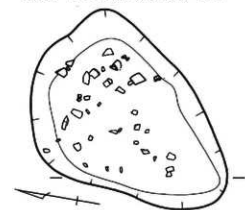


第39図 B区-16号土坑出土遺物 (1/4)

長187cm、深さは23cmである。埋土は炭片・土器片と黄色土ブロックを含む暗褐色の単一層(1層)で、1・2の壺小片が含まれていた。廃絶後、ゴミ捨て穴に利用されたものである。出土土器からこの時期と認定した。(旧D地区土坑442)

B区-17号土坑 (第40・41図 一回版8)

N19調査区で検出された不定形の土坑で、底面は平坦だがやや傾斜する。規模は長軸長180cm、短軸長124cm、深さは29cmである。埋土は四層に分かれるが、4層が黄色土ブロックを



第41図 B区-17号土坑出土遺物 (1/4)

む無遺物の土砂廃棄層である。3層以上は炭・焼土・小礫・土器細片を多量に含む層で、廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたとみられる。土器はいずれも小片で、1は蓋口縁片、2は突審を施す壺Bで、3の底部は被熱している。いずれも胎土は在地産。土坑の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土坑436)



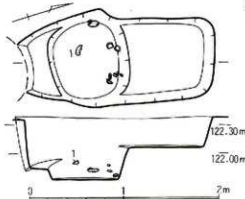
- 1層: 暗茶褐色土(サラサラした土・焼土・炭・小礫多量、土器片が多い)
 2層: 暗茶褐色軟質土(炭・土器片含む)
 3層: 暗褐色軟質土(焼土・炭・土器片多量含む)
 4層: 暗褐色土(焼土・炭・土器等ほとんど含まない)

第40図 B区-17号土坑 (1/30)

B区-18号土坑 (第42・43図 一回版9)

N18・M18調査区で検出された小型円形の竪穴状土坑で、南北の段がついて大きく広がるが、あるいは別な土坑と重複しているかも知れない。底面は平坦で、その規模は長軸長208cm以上、短軸長104cm、検出面からの深さは66cmである。小型貯蔵穴の可能性はあるがはっきりしない。

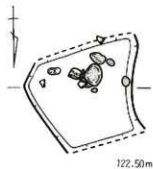
埋土は炭片と土器片と多量の黄色土ブロックを含む暗褐色の軟らかい単一層(1層)で、その層中には1の壺、2の壺の小片が含まれていた。黄色土ブロックを多量に含む遺物も少ない点から、廃絶直後に埋め戻されたと推定される。1・2はそれぞれ沈線を描す壺Aと壺Aで、いずれも在地産の胎土で2は被熱している。土坑の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土坑448)



第42図 B区-18号土坑 (1/40)



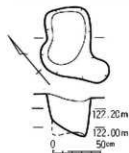
第43図 B区-18号土坑出土遺物 (1/4)



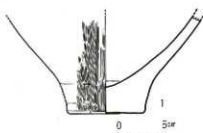
第44図 B区-19号土壌 (1/30)



第46図 B区-20号土壌 (1/40)



第47図 B区-21号土壌 (1/40)

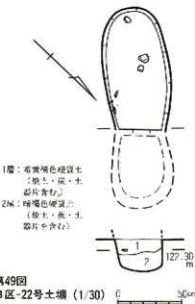


第48図 B区-21号土壌出土遺物 (1/4)

B区-20号土壌 (第46図)

同じくM18調査区で検出された小型円形の土壌で、底面はやや傾斜するが平坦である。規模は長軸長66cm、短軸長56cm以上、深さは19cmである。小型貯蔵穴の可能性もあるがはっきりしない。埋土は炭片と焼土を含む暗褐色の硬い単一層(1層)で、土器の小片が含まれていた。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌450)

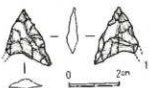
B区-21号土壌 (第47・48図)



第49図

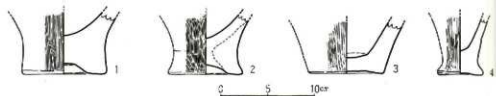
B区-22号土壌 (1/30)

- 1層: 暗褐色硬質土
(焼土・炭・土器片を含む)
2層: 暗褐色硬質土
(焼土・炭・土器片を含む)



第50図

B区-22号土壌出土遺物 (2/3) 地区土壌451)



第45図 B区-19号土壌出土遺物 (1/4)

B区-19号土壌 (第44・45図)

M18調査区で検出された不定形の土壌で、底面は平坦で、南北の境界は不明瞭である。規模は長軸長97cm、短軸長80cm以上、深さは31cmである。用途はまったく不明である。

埋土は二層に分かれ、下部に炭片を多量に含む暗褐色土(2層)が堆積し、その底部に土器片と糠の一括廃棄が認められる。そこに含まれる土器はいずれも底部の破片(1~4)で、埋没位置からみて底部片のみを廃棄したものと推定される。土器はいずれも在地深の胎土を用い、1と3は被熱が明瞭で、4はあるいは蓋かもしれない。土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌449)

B区-20号土壌 (第46図)

同じくM18調査区で検出された小型円形の土壌で、底面はやや傾斜するが平坦である。規模は長軸長66cm、短軸長56cm以上、深さは19cmである。小型貯蔵穴の可能性もあるがはっきりしない。埋土は炭片と焼土を含む暗褐色の硬い単一層(1層)で、土器の小片が含まれていた。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌450)

B区-21号土壌 (第47・48図)

N18調査区で検出された不定形の土壌で、底面は高低がある。規模は長軸長76cm、短軸長45cm、深さは48cmである。断面土層の観察をおこなっていないので埋没状態の詳細は不明であるが、内部から1の甕の底部が出上した。被熱が明瞭で、胎土は在産地である。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌460)

B区-22号土壌 (第49・50図 一図版9・38)

M18調査区で検出された長円形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長156cm、短軸長52cm、深さは25cmである。土壌塞の可能性もあるが明確ではない。

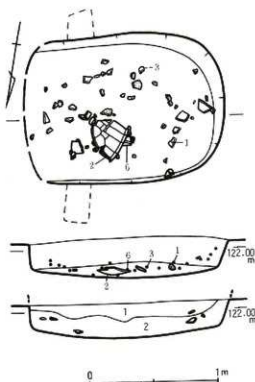
埋土は二層に分かれ、2・1層は炭・焼土・土器細片を含み、廃絶後生活廃棄物の捨て場所に転用されたとみられる。土器はいずれも小片で図示できるものはない。1の脚を破損したサヌカイト製打製石礮が含まれていた。土器細片の質感からこの時期の遺構と認定した。(旧D

B区-23号土壌 (第51・52図 一図版9・38)

N 2調査区で検出された長円形の土壌で、底面は浅い皿状である。規模は長軸長156cm、短軸長117cm。検出面からの深さは30cmである。用途は不明であるが、底面の2層に遺物一括廃棄が認められる。

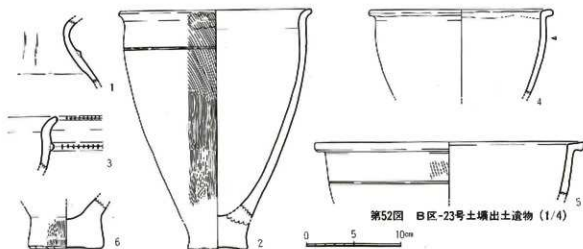
埋土は二者に分かれ、全体に炭・焼土と土器片を多量に含む。特に底面に近い2層下部に集中する。なかでも2の壁は中央にほぼ完形のまま横倒しでつぶれていた。ところがこの土器の一部の破片がB-33土壌の上層から検出されているので、廃棄される前に割られていた可能性が高い。この壁は胎土に大型石英粒子を多量に含む搬入品である。一方1の壺片、3~6の甕はいずれも断片的な破片で出土した。

出土土器は1・3が突帯を施す壺Bと甕B、2が沈線を施す甕A、4と5が逆L字口縁の甕Cである。沈線は一条のものである。6の底部片を含めてほとんどの土器が被熱している。また5の甕も胎土に余炭母を含む搬入品である。土器の出土状態からみて廃絶直後に一括廃棄があり、その後ゴミ捨て穴に利用されたと推定される。土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌416)

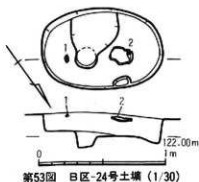


1層：褐色褐色土(焼土・炭・土器片含む)
2層：暗褐色軟質土(焼土・炭・土器片多く含む)→土器集中

第51図 B区-23号土壌(1/30)



第52図 B区-23号土壌出土遺物(1/4)



第53図 B区-24号土壌 (1/30)



第54図 B区-24号土壌出土遺物 (1/4)

B区-24号土壌 (第53・54図 一図版9)

同じくN2調査区で検出された長円形の小型土壌で、底面は高低がある。規模は長軸長97cm、短軸長63cm、検出面からの深さは20cmである。中央にピットがあり小型貯蔵穴の可能性はある。

埋土は炭片と焼土を含む暗褐色粘質の単一層(1層)で、土器の小片が含まれていた。1の甕口縁片のみが図化できた。この土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌405)

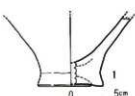
B区-25号土壌 (第55・56図)

O1・N1調査区で検出された不定形の土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長132cm、短軸長95cm、検出面からの深さは23cmである。その用途は不明である。

埋土は土器細片のみを含む暗黄褐色の単一層(1層)で、土器片は散在していた。胎土に魚骨母と石英を含む搬入品の1の甕底部片のみが図化できた。この土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土壌402)



第55図 B区-25号土壌 (1/40)

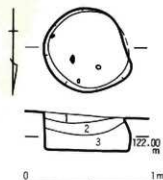


第56図 B区-25号土壌出土遺物(1/4)

B区-26号土壌 (第57・58図 一図版9)

N1調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、底面は平坦である。規模は長軸長73cm、短軸長64cm、検出面からの深さは32cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は三層に分かれ、3層は黄色土ブロックを含むが遺物はなく、2層は多量の小礫と土器片を含む。そして1層は小礫を含むサラサラした土である。土器片は2層にのみ含まれ、小片で散在している。おそらく埋め戻しの土砂廃棄の過程で、2層が一括廃棄されたものとみられる。2層からは1~3の甕の破片が出土した。いずれも胎土は在地産で、2の被熱は明瞭である。土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌404)



- 1層：暗褐色土(サラサラした上、小礫含む)
 2層：明褐色土(1~20cmの小礫が多量にある。土器片はこの層のみ含む)
 3層：暗褐色粘質土(黄色土ブロックを少し含むが、小礫と土器は含まない)

第57図 B区-26号土壌 (1/30)



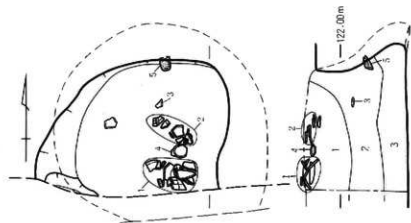
第58図 B区-26号土壌出土遺物 (1/4)

B区-27号土壌 (第59・60図 一図版9・38)

O19・N19調査区で検出された大型円形の袋状土壌で、南端は擾乱坑で削られている。規模は長軸長189cm、短軸長181cm、検出面からの深さは81cmである。底面は平坦である。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

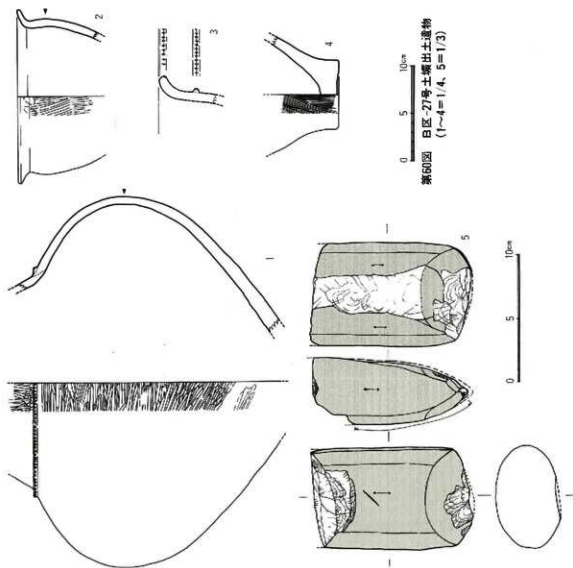
埋土は大きく三層に分かれ、1層の検出面に遺物一括廃棄が認められた。まず暗黄褐色の3層が底部に堆積する。遺物を含まず一気に廃棄されたと思われる。次に炭片・黄色土ブロックと土器片が少量混入した2層が堆積

する。遺物は破片で、3の甕口縁片と5の半分に折れた磨製石斧が出土した。そして最後に小量の黄色土ブロックが均一に入り、炭と焼土を多量に含む1層が堆積する。この層の上部では土器の大型破片が第59図のようにまとまって検出された。1の甕と2の甕は割れた破片を集積した状態で、4の甕底部はその間で検出した。いずれも完形には復元できず、少なくとも甕1個体・甕2個体の破片が一括廃棄されている。2・4の甕は被熱してい

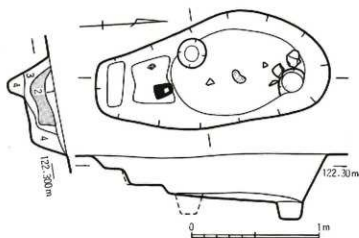


- 1層：暗赤褐色土（炭土・焼土を多く含む）層の厚さは約1.0m、この層の黄色土ブロックが全体に広がる。一土器廃棄中。
- 2層：甕破片土（炭土も含み、黄色土ブロックのまばらに入らぬ）。
- 3層：暗赤褐色土（炭物なし）→埋納時に用いたよりな土。

第59図 B区-27号土坑 (1/30)



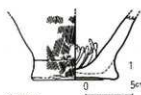
第60図 B区-27号土坑出土遺物 (1~4=1/4, 5=1/3)



第61図 B区-28号土壌(1/30)

(解序)

- 1層：暗褐色粘質土（砂土・炭を含む）
- 2層：黒色土（一皮層、焼土多く、土器片も含む）
- 3層：暗茶褐色粘質土（砂質強く、炭少し含む）
- 4層：明茶褐色粘質土（粘質強く、黄色土ブロックを含む）

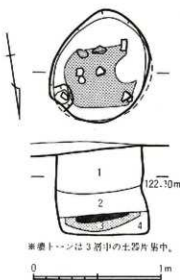


第62図

B区-28号土壌出土遺物(1/4)

埋土は四層に分かれ、4・3層は無遺物で、2層に土器片を含む炭・焼土層が認められる。土器片は2層にのみ含まれ、小片で散在している。おそらく埋め戻しの土砂廃棄の過程で、焼却廃棄物の2層が一括廃棄されたものとみられる。2層からは1の壺底部の破片が出土した。粘土は在地産で、被熱は明瞭である。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(IFD地区土壌437)



(解序)

- 1層：暗褐色粘質土（やや硬い、黄色土ブロック少量と、多量の焼土・炭片を含む）
- 2層：暗褐色土（ノコギリ状した上、焼土・炭・黄色土ブロック少し含む）
- 3層：赤褐色土（粘土層、かたく焼けて、最上層、2層上の境に土器片集中）
・人為的な被炭層
- 4層：暗褐色粘質土（サクサクした上、土器片含む）

● 破片は3層中の土器片集中。

第63図

B区-29号土壌(1/30)

る。以上の埋没状態をまとめると、廃絶直後に3・2層の土砂を投棄して埋め戻し、1層の時点で何らかの目的で火にかけられた土器を、その灰や焼土とともに廃棄したものである。

出土遺物のうち、1は頂部三角突帯に刻目を施す甕B、2は如意形口縁の甕A、3は突帯に刻目を施す壺Bである。5は基部を失った硬質砂岩製の磨製太形給刃石斧で、刃こぼれの激しい廃品である。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌426)

B区-28号土壌(第91・92図 一図版9)

N19調査区で検出された長円形の土壌で、底面は段がつきビットが2箇所ある。規模は長軸長187cm、短軸長86cm、検出面からの深さは38cmである。

B区-29号土壌(第63・64図 一図版10)

同じくN19調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、B-80土壌(時期不明)に切られる。その規模は長軸長90cm、短軸長75cm、検出面からの深さは74cmである。底面は平坦で、その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は四層に分かれ、さくさくとした4層が堆積した後に、硬く焼けた焼土層の3層が投棄され、その上に土器片が散在していた。焼土と土器片は一括して廃棄されたものとみられる。土器はいずれも破片で、1・2の壺口縁片や3の亀の甲タイプの甕Dなどが含まれる。胴部以下の破片は出土せず、別の場所に廃棄されたようである。その遺物一括廃棄のあとには、炭・焼土・黄色土ブロックを含む2・1層が堆積する。



第64図 B区-29号土壌出土遺物(1/4)

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌 459)

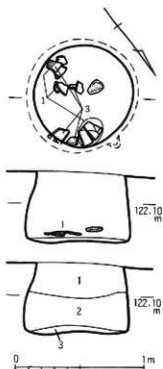
B区-30号土壌 (第65・66図 一図版10・38)

同じくN19調査区で検出された小型円形の袋状土壌で、底面はおおむね平坦である。規模は長軸長90cm、短軸長87cmでほぼ正円形に近い。検出面からの深さは56cmである。その形態からみて小型の貯蔵穴であったと推定される。

埋土は大きく三層に分かれ、3層と2層に挟まれたように遺物一括廃棄が認められた。まず黒褐色のばさばさした3層が底部中央に盛り上がるように堆積する。貯蔵穴使用停止直後に穴の上から落ちた土である。その上にかぶさるように土器の大型破片と円礫が検出された。1～3が出土した甕の口縁部片で、胴部以上は接合して完形に近くなるのに、底部の破片は一点もない。三点ともよく被熱している。おそらく別な場所で使用されたのちに割られ、胴部破片のみをこの土壌廃絶時に廃棄したものであろう。そして次に基盤層に由来する黄色土の2層が堆積する。遺物は含まず土器廃棄後に埋め戻したものとみられ、最後に暗褐色の1層が堆積して埋没する。

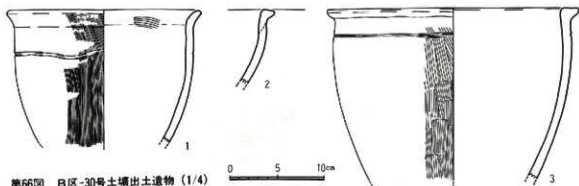
出土土器のうち、1は如意形口縁-条沈線の甕Aで、胎土に金雲母・石英を含む搬入品である。2・3は逆L字口縁の甕Cで、いずれも胎土は在地産である。

土壌の時期は出土土器から弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌 432)

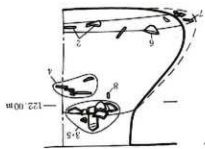


- 1層：暗褐色硬質土（炭灰少し含むが、土器片なし。下部に黄色土ブロック含む。）
 2層：橙黄色粘質土（黄色土ブロック層で土器は含まない。）
 →大角切にうのもどした土
 3層：黒褐色軟質土（わずかに砂りした土、炭灰少しと、土器片多量に含む）
 →土器集中

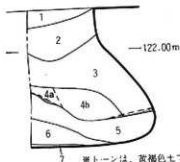
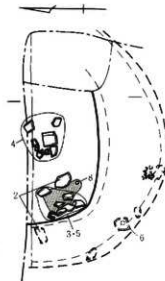
第65図 B区-30号土壌 (1/30)



第66図 B区-30号土壌出土遺物 (1/4)



4000 221



※トーンは、黄褐色土ブロック

第67図
B区-31号土塊 (1/30)



- (層序)
- 1層: 暗褐色粘質土 (硬まった土、炭・灰・土器片多く含む)
 - 2層: 暗褐色土 (炭片・土器片と黄色土ブロックが、全体にまばらに含む)
 - 3層: 暗褐色粘質土 (粘質強、炭・灰・土器片多く含む) → 上部は土器集中
 - 4a層: 暗褐色土 (炭片・黄色土ブロックが集中)
 - 4b層: 暗褐色粘質土 (よく硬まった土、炭・灰・土器片少し含むが、上部は含む)
 - 5層: 黄褐色粘質土 (粘質あり、炭片・灰・土器片を多く含む、全体に黄色土ブロック多量含む) → 下部は土器集中
 - ※5層上部に薄い黄色土ブロック層が広がる
 - 6層: 黄褐色粘質土 (炭・灰・土器片を多く含む) → 中央に盛り上がるように堆積
 - 7層: 暗褐色粘質土 (硬まっている) → 貯蔵穴使用中の堆積土

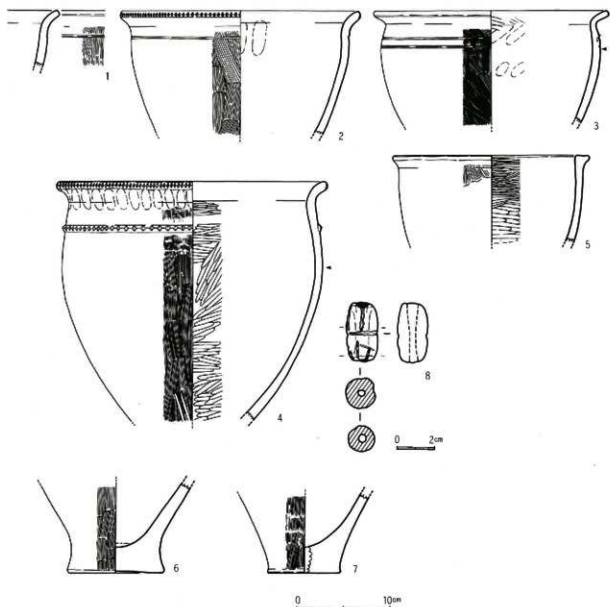
B区-31号土塊 (第67・68図 一図版10・39)

N18調査区で検出された大型円形の袋状土塊で、北半分を攪乱坑で破壊されている。規模は径192cm、検出面からの深さは107cmである。底面は平坦で、その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定される。

貯蔵穴使用時の痕跡として、底面に薄い黒褐色の7層が広がっている。硬く締まっており踏み締められたと思われる。6～1層は貯蔵穴使用停止後の堆積層で、上位と下位の二回の遺物一括廃棄がある。まず底面全体に炭・焼土を少量に含む6層が中央に盛り上がるように堆積する。おそらく使用停止から下位の遺物一括廃棄がおこなわれるまでのわずかな日時の間に、穴の上から落ちた土が堆積したものである。次に炭・焼土・土器片を多量に含む黒褐色の5層が廃棄される。この層は黄色土ブロックがかなり含まれる遺物一括廃棄層である。2・6・7の壁の大型破片が含まれる。いずれもよく被熱している。その上に薄い黄色土ブロック層が積ったのち、硬く締まった4層が同じく中央が盛り上がるように廃棄され、その後の3層に再び遺物一括廃棄がおこなわれる。3層は炭・焼土・土器片を多量に含む暗褐色の軟らかい層で、土器はいずれも大型破片で廃棄され上下の別がある。まず4の壁の破片が中央にまとまって廃棄され、その斜め上に1・3・5の壁の上半部と8の丸形の上縁が黄色土ブロックの塊とともに一ヶ所に廃棄されていた。そして最後に2・1層が堆積して埋没する。以上の埋没過程のうち5層から3層までの廃棄層は、炭片や黄色土ブロックをかなり含む点、炭や焼土の集中が明確に認められる点などからみて一連の廃棄行為の結果である。何らかの壁を使用した行為を介在させて貯蔵穴を埋め戻していったと推定される。

出土土器の胎土はすべて在地産で、土通もそうである。1～3は如意形口縁の甕Aで一条沈線と二条沈線がある。4は突帯を施す甕B、5は逆L字口縁の甕Cで、4以外の甕はい

ずれも被熱が顕著である。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土塊433)



第68図 B区-31号土壇出土遺物 (1~7=1/4, 8=1/2)

B区-32号土壇 (第69図)

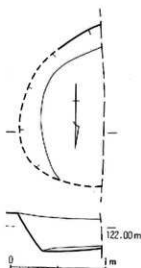
○2調査区で検出された大型円形の土壇で、西端は調査区外になり、B-11住(古墳時代前期前半)に切られている。その規模は長軸長170cm以上、短軸長88cm以上、検出面からの深さは40cmである。底面は皿状であったと推定される。その用途は不明である。

埋土は炭・焼土と土器細片を多量に含む暗黄褐色の単一層(1層)で、土器片は散在していた。図示できないが雙A・B・Cの小片がある。土壇廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものであろう。

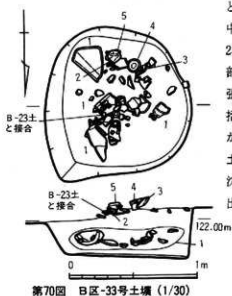
土壇の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壇417)

B区-33号土壇 (第70・71図 一図版10・39)

○1調査区で検出された不定形の土壇で、底面は傾斜するが平坦である。規模は長軸長133cm、短軸長117cm、深さは41cmである。貯蔵穴の可能性があるがはっきりしない。埋土は炭・焼土と土器片を多量に含む暗黄褐色の単一層(1層)で、大型土器片が上下に分かれて一括廃棄されている。下部には1の甕が大きく割れてその破片が散らばっていた。ほとんど

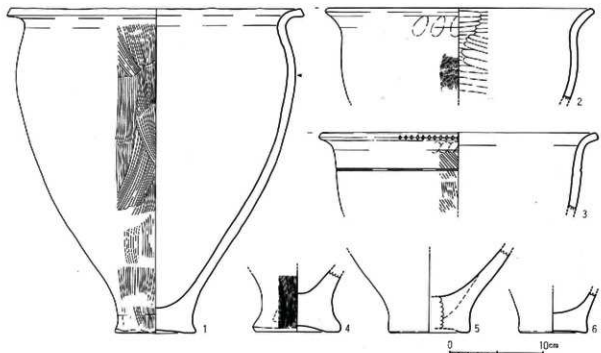


第69図 B区-32号土壇 (1/40)



第70図 B区-33号土坑 (1/30)

ど完形に復元でき、被熱して赤変している。上部には2～5の甕の破片が中央にまとまって堆積していた。またこの上部の一括廃棄のなかにはB-23土坑出土の土器(第52図2)の破片が含まれていた。そのうち4の底部片は胎土に金雲母を含む搬入品である。他の在地産の甕に比べて胴部が強くない。以上のように土坑使用停止後すぐに二度に分けた一連の土器一括廃棄がおこなわれている。土器の出土状態からみて、甕を使用した何らかの祭祀行為を介在させて貯蔵穴を埋め戻していったと推定される。出土土器の甕は、如意形口縁の甕Aで在地産は沈線がなく、搬入品には一条の沈線を施す。また3以外は被熱の形跡が顕著である。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(HD地区土坑418)

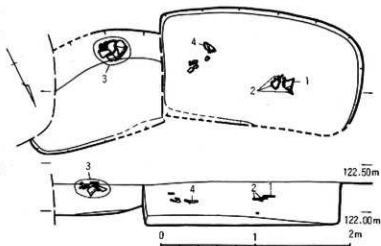


第71図 B区-34号土坑出土遺物 (1/4)

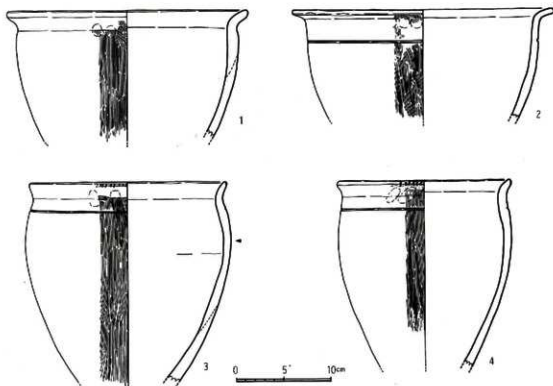
B区-34号土坑 (第72・73図 一版図10・39)

同じくO1調査区で検出された不定形の大型土坑で、底面に高低があり、二つの土坑が重複しているように見えるが、これは西側を調査時に掘りすぎたためである。規模は長軸長361cm、短軸長113cm、検出面からの深さは46cmである。その用途は不明である。埋土は炭と土器片を多量に含む暗褐色の軟らかい単一層(1層)で、大型土器片が3箇所に分かれて検出した。第72図をみると底面からかなり浮いているように見えるが、これは掘りすぎたため、実際は底面近くに位置したと推定される。まず西に1・2の甕の口縁の破片がまとまり、中央に4の甕の口縁部が、東に3の甕が逆さになってそのまま潰れた状態で検出された。この4個体はほぼ同じ高さで検出されたので、以上の土器は一括して廃棄されたものと見られる。いずれも底部の破片がなく、土器の上半部のみを廃棄した可能性が高い。2以外は被熱して赤変している。そのうち1～3は胎土に金雲母を含む搬入品である。

このように土壌使用停止直後に土器一括廃棄がおこなわれている。出土した4個体の土器はすべて甕で、いずれも如意形口縁の甕Aで一条沈線が多い。搬入品1・2には口縁部刻目がなかったり、口縁部の屈折がくの字に近くなる新しい特徴が認められる。土器廃棄の時期は、以上の出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌401)



第72図 B区-34号土壌 (1/40)

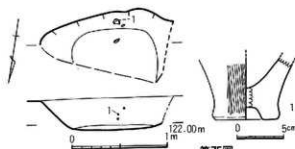


第73図 B区-34号土壌出土遺物(1/4)

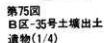
B区-35号土壌 (第74・75図)

○19調査区で検出された不定形の土壌で、大半を攪乱坑によって破壊され西端はB-12住(古墳時代前期前半)によって切られている。規模は長軸長144cm、短軸長80cm以上、深さは34cmである。底面は皿状である。埋土は炭・焼土と土器細片を多量に含む暗黄褐色の単一層(1層)で、土器片は散在していた。図示できるのは1の甕底部片のみで、被熱している。土壌廃絶後、生活廃棄物の捨て場所に転用されたものとみられる。

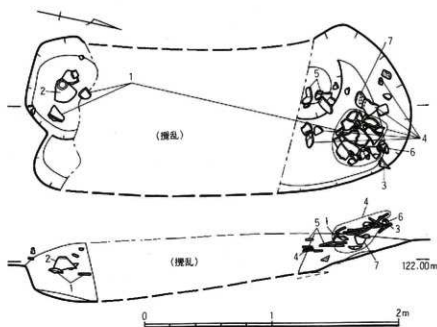
土壌の時期は、出土土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌425)



第74図 B区-35号土壌 (1/40)



第75図 B区-35号土壌出土遺物(1/4)

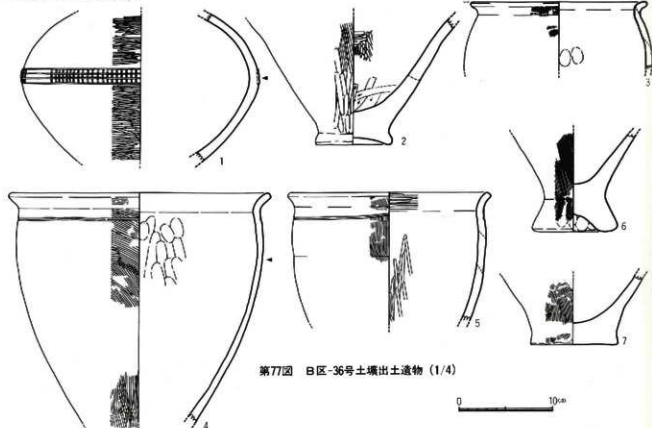


第76図 B区-36号土壌 (1/30)

B区-36号土壌 (第76・77
図一図版11・39)

同じくO19調査区で検出された船底形の上墳で、中央部を攪乱坑によって破壊されている。北部でB-3住を切り、南部をB-12住(古墳時代前期前半)によって削平されている。底面は船底状で南側が深くなっている。規模は長軸長305cm、短軸長125cm以上、検出面からの深さは55cmである。

断面上層の観察をおこなっていないので埋没状態の詳細は不明であるが、埋土中に土器の一括廃棄が認められる。1の臺の破片が、中央の攪乱坑を隔てた南北の土壌から見つかっているので、ひとつの土壌とみなした。



第77図 B区-36号土壌出土遺物 (1/4)

土器の出土状態は、大型破片で折り重なり、場所によって集中する。たとえば1の壺は破片がばらばらになって土壌全体に分散し、2の壺底部は逆さで検出され、4の甕は一ヶ所で横倒しに潰れた状態で見つかった。壺以外はよく被熱している。また1の壺は胎土に石英粒子を多量に含む搬入品で、4の甕も胎土に金雲母を含む搬入品である。つまり異なる地域から搬入された壺と甕が、廃棄の際に異なる取り扱いを受けているのである。以上の観察から、土壌廃絶後に壺と甕を使用した何らかの祭祀行為を介在させて土壌を埋め戻していったと推定される。

出土土器は、1が胎土の異なる搬入品の壺で、胴部最大部に幅広の浅い突帯を一周させ、その上に格子状に沈線文を施す。横4条の沈線が等間隔で平行し、その間を縦に沈線で分割するが、その分割線は全周せず一部空白を残す。2はあるいは蓋かもしれないが、被熱して赤変している。3～5の甕はいずれも如意形口縁の甕Aで、一条沈線がめだつ。6の甕底部は被熱していないので、あるいは蓋かもしれない。7は甕の底部である。

土器廃棄の時期は、以上の川上土器からみて弥生時代前期末と推定される。(旧D地区土壌427)

3) 墓 (第4・6・8表)

B-2住のそばで一基の墓が検出されている。掘乱坑が多いので断定はできないが、周辺に墓の分布はなく、単独の埋葬の可能性が高い。

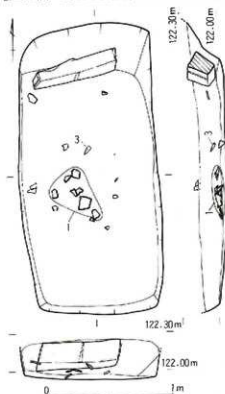
B区-1号墓 (第78・79図 一図版11・40)

N0調査区で検出された箱形木棺墓と推定される墓である。墓壇は長方形で、断面は逆台形あるいは箱形をなして、底面は平坦である。南北の長さ230cm、東西の幅112cmを測り、検出面からの深さは32cmである。長軸の方位角は356度ほぼ南北を向く。北側に、長さ80cmほどの角柱形のきめの細かい安山岩角礫が横たわる。この角礫は、後述するように弥生時代中期後半の埋葬で頭部に置かれて特別な意味をこめたものとして使われている石と同質の石材である。土壇の形状から箱形の木棺を使用したのではないかと推定され、頭部には先ほどの石材を置いたものと見られる。したがって頭位は北となろう。なおほぼ中央部に底面からやや浮いて、3の石剣の先端部破片が検出された。副葬品かあるいは人体に刺さって折れた先端が残されたものと推測される。

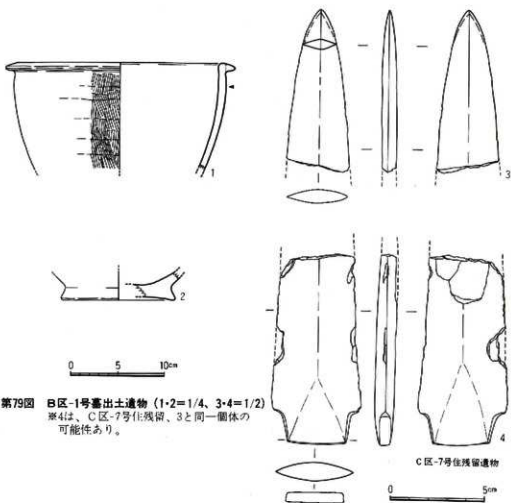
埋土は炭・焼土と土器片を少量に含む暗黄褐色の軟らかい単一層(1層)で、1～2cm大の黄色土ブロックを多量に含んでいるので、埋め戻されたものと考えてよい。土器片は中央部の底面近くに集まり、その位置よりやや浮いた状態で3の石剣の切っ先を検出した。含まれる土器は1・2の甕とともに被熱していない。副葬土器とも考えられるが、破片はばらばらに出土したので、土壇と同様に埋葬儀礼にかかわる土器を廃棄した可能性が高い。3の石剣の先端部は切っ先を南西方向にむけ、底面から約10cmほど浮いて検出された。また北端におかれた石材も底面からやや浮いており、その形状からみても木棺の小口に利用されたと考えられるよりは、むしろ木棺外の頭部近くに特別な意図をもって置かれたと考えたほうが妥当である。

出土した土器は、1が逆し字口縁の甕C、2が底部の細片で、ともに胎土は在地産である。3の石剣切っ先は硬質頁岩製の鉄剣形磨製石剣で表裏とも錆が明瞭である。長さ8.4cmを測る。なおこの石剣と同一個体の可能性のある基部破片が、このB-1墓から東に100m以上はなれた古墳時代前期前半のC-7住の埋土内から出土している(4)。参考までにここに掲げた。

この墓の埋葬時期は、土器から弥生時代前期末と推定され、石剣の年代もその推定と矛盾しない。(旧D地区土壌421)



第78図 B区-1号墓(1/30)



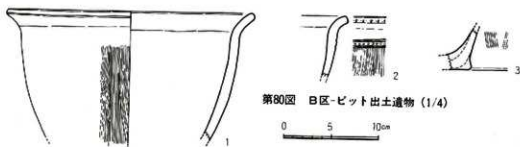
第79図 B区-1号墓出土遺物 (1・2=1/4, 3・4=1/2)
 断片は、C区-7号住残留、3と同一團體の
 可能性あり。

C区-7号住残留遺物

4) ビット (第2・80図・第6表)

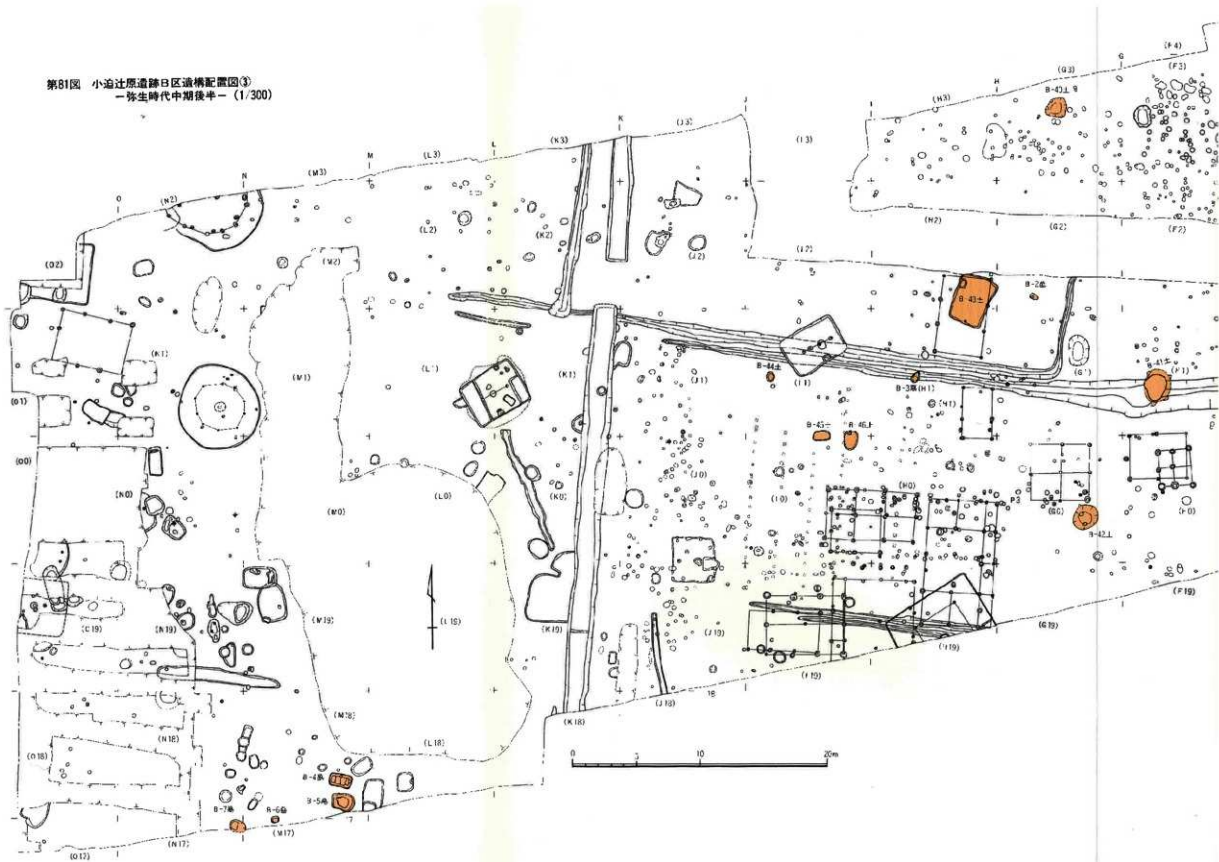
遺物の出土状態から、この時期のビットと認定したのは以下の3例である。

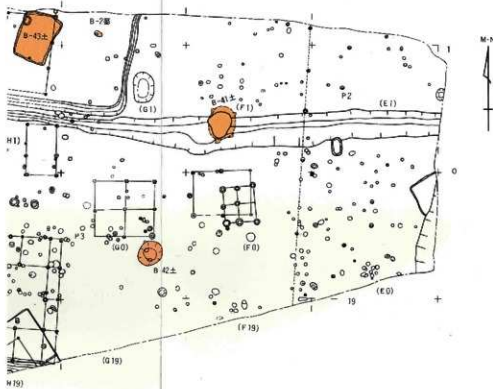
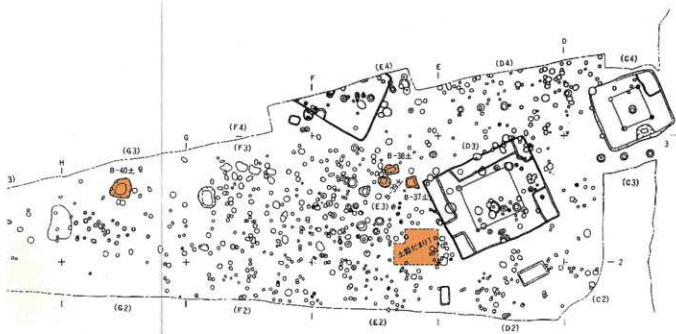
K0調査区ビット2からは1の堯の大型破片が出土した。1は如意形口縁の堯Aである。K1調査区ビット2からは2の堯口縁片が出土した。二条沈線間に小さな竹管文をほどこす堯Aである。L2調査区ビット3からは3の底部片が出土している。



第80図 B区-ビット出土遺物 (1/4)

第81图 小迳迁原遗址口区遺構配置图③
— 新石器时代中期後半 — (1/300)





第3節 弥生時代中期後半（第81図）

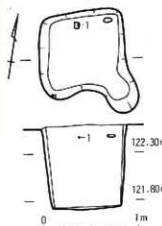
この時期にあたる遺構はきわめて多く、土壌10基と、遺構として検出できなかった土器溜り1箇所、それに墓6基を確認した。ほかにピット2本を本文に掲載した。この時期のピットはまだ存在するであろうが、土器を含まないためにほかの時期のピットと区別できなかった。

この時期の遺構はB区全体に散らばって分布するが、遺構の配置は大きく二群に分かれる。東北部はB-43土壌を中心にして、その周辺に小児焼棺墓・貯蔵穴や土器焼成坑と推定される土壌がある空間である。一方南西部には成人墓・小児墓が集まる墓地空間が存在する。

なお弥生時代中期後半としたこの時期は、北部九州の土器編年と比較した場合の須玖1式の新段階から須玖Ⅱ式並行期にあたると思われる。

1) 土壌（第3・6・7表）

A区と同じく①小型円形(A)、②大型円形(B)、③小型方形(A5)、④長円形(C)、⑤長方形(E)、⑥形の定まらない不定形(F)の6種類が存在する。A区と同じく、袋状土壌はこの時期まで存在し、船底形土壌はみられなくなる。



第82図 B区-37号土壌 (1/40)

B区-37号土壌（第82・83図）

E3調査区で検出されたやや扁平な小型方形の竪穴状土壌で、底面は平坦である（第82図）。規模は長さ114cm、幅90cm、検出面からの深さは90cmである。小型貯蔵穴の可能性もあるが判然としない。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。埋土中から1の甕の底部破片が出土している（第83図）。この土器から弥生時代中期後半の土壌と認定した。（旧A地区D3調査区土壌1）



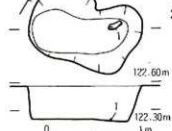
第83図
B区-37号土壌
出土遺物 (1/4)

B区-38号土壌（第84・85図 一図版40）

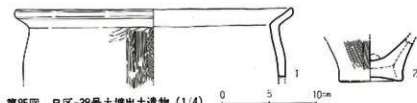
同じくE3調査区で検出された不定形の土壌で、底面は平坦

である（第84図）。規模は長軸長121cm、短軸長60cm、検出面からの深さは37cmである。その用途は不明である。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。底部から1の甕の口縁部破片が出土している（第85図）。1は遠賀川以東系の甕A、2は甕の底部で、胎土はいずれも在地産である。

以上の土器から弥生時代中期後半の土壌と認定した。（旧A地区D3調査区土壌2）



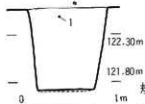
第84図 B区-38号土壌 (1/40)



第85図 B区-38号土壌出土遺物 (1/4)



第87図 B区-39号土壇出土遺物(1/4)



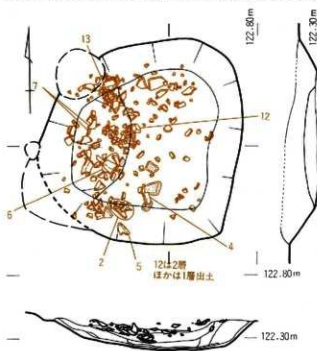
第86図 B区-39号土壇
(1/40)

B区-39号土壇 (第86・87図 一図版40)

同じくE3調査区で検出された小型円形の竪穴状土壇で、底面は平坦である(第86図)。規模は長さ103cm、幅89cm、検出面からの深さは89cmである。小貯蔵穴の可能性もあるが判然としない。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。埋土上部から1の大型甕の口縁部破片が出土している(第87図)。この土器は復元口径47cmの大型品で、小型の甕棺に利用されてもおかしくない土器である。口縁部直下に二条一単位三角突帯がめぐる点が特徴である。胎土は在地産。この土器から弥生時代中期後半の土壇と認定した。(IIA地区D3調査区土壇3)

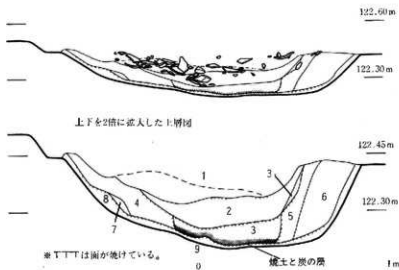
B区-40号土壇 (第88~91図 一図版12・40)

G3調査区で検出された不定形の土壇である。土壇そのものの形状は、平面偏円形で断面は皿状である(第88図)。西側の一方向に張り出しがつく。その規模は長軸長167cm、短軸長157cmで、検出面から最初の掘り底面までの深さは32cmである。この土壇の用途については、次のように土器焼成坑の可能性が指摘できる。(第89・90図)。まずいったん基盤層(9層)を深く掘削して、すぐに基盤層の土である黄褐色粘土(8層)を底面から側面にかけて薄く全体に貼っている。さらにこの粘土で、張出し部分に段が一段形成されている。8層には炭や焼土などの遺物はまったく含まないので、炉床整形用に選択されたものと考えられる。この層の上面全体がよく焼けており、最初の炉面として使用されたことが判明する(一次面)。次の二次面は部分的な改修である。8層の土と同質の基盤層に由来する黄褐色粘土(7層)を土壇の側面に貼りつけて、張出し部分により明確な階段状施設が形成される。さらにその後土壇の西半分に粘質の強い褐色土(4層)を貼りつけて三次面の炉床がつくられる。その結果、張出し部分の階段状施設は埋められてなだらかな斜面となるが、張出し部そのものは維持されている。同時に土壇全体が西側を中心にひたまり縮小する。この4層褐色土は8・7層の黄褐色粘土に比べて焼土・炭の小片を含んでやや汚れており、粘土の質が悪くなっている。そのため4層は8・7層に比べてかなり厚く貼られている。この三次面の上面は非常によく焼けておりかなり内部まで変色している。その後今度は土壇の東半分の壁にそって粘質の強い褐色土(6層)を、南側に赤褐色土(5層)を段がつくように盛って四次面の炉床がつくられる。6・5層中には白色粘土が含まれ、同時にこの



第88図 B区-40号土壇①

—1-2層遺物出土状態と撮影— (1/30)



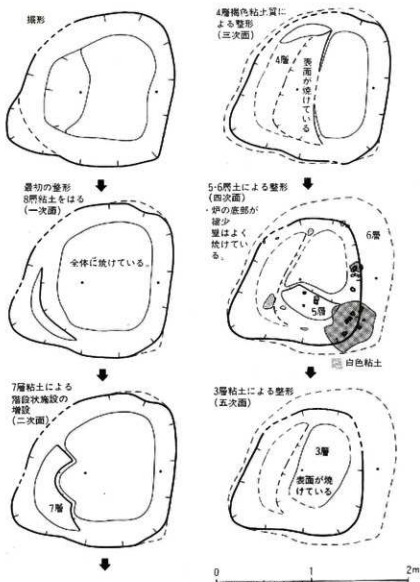
- 1層：暗褐色土（焼土・土塊・炭を多量に含む、軟質）→土塊繊維状の炭の形を遺物と推定
- 2層：暗茶褐色粘質粘土（炭・焼土・白色粘土が混在し、土器が多い。上部は下部の焼土面があり、六次面がもっとも顕著もある）
- 3層：明茶褐色粘質土（焼土・炭多量に含む。下部は非常にかたくしまった焼土と炭でおおわれる。）→二次面
- 4層：暗褐色土（粘質土）。焼土・炭の量は少ない。上部と下部は黄褐色を呈して焼けている。）→二次面
- 5層：暗褐色土（粘質土）。焼土・炭が多く、土器が少なく、土層より軟く、粘性が強い。壁状の暗白色粘土を伴う
- 6層：暗褐色土（粘質土）が厚く、土器の下部には5層と同様に炭・炭と焼土が堆積する。）→二次面、→四次面
- 7層：明茶褐色粘土（粘土片・炭はまったく含まない→階段状の粘質土（施設）→二次面
- 8層：明茶褐色粘土（焼土アロークや、炭等は含まず）その上部が焼けている。→二次面
- 9層：灰色粘質土（焼土・炭多量に含む）

第89図 B区-40号土壌②-土層断面-(1/20, 上下1/10)

四次面の貼り土と三次面の間には炭と焼土が薄く残っている。また5層中には炭・焼土と土器小片が残されている。このような炉床整形時の様相は三次面までと大きく異なり、炉床の構築方法が「変化」したか、あるいは「粗雑」化したか、評価は分かれる。その結果、張出し部そのものは維持されるが、土壌全体が大きく縮小する。この四次面の上面もまたよく焼けている。最後に四次面の底部に明茶褐色の強粘質の3層土が貼られている。この層中には炭と焼土を多量に含み、下部には焼けて硬く締まった焼土と炭が堆積し、構築方法は四次面以上に「粗雑」化する。またこの焼土と炭の堆積はおそらく炉の残骸の一部であると見られる。この3層の上面はよく焼けており、これが五次面である。この五次面は底面を改修したのみでが全体の構造は4次面の炉床とほぼ同じである。

以上都合四回の改修がおこなわれ、計五面の炉床をもつ燃焼施設であることが判明する。その第1の特徴は、土壌南西方向の張出し部分が改修を重ねても維持されていることである。ところでこの張出し部分は特に焼け方が激しいわけでもなく、また外部から階段状施設あるいは斜面として底面につづく。炊口部分ではなく、土壌内部への入口施設と考えたほうがよい。第2の特徴は、三次面の構築を境に炉床の構築方法が変化する点である。それ以後は土壌の規模が縮小し炉床が上昇する。張出し部分を入口施設としてよければ、おそらく炉の側面の傾きから想定して、燃焼時に煙体がある程度存在していた可能性が高い。第3に、一定期間の使用のたびに炉床を更新することである。形態と張出し部分の位置が一定しているから、同一工人集団が繰り返し使用した可能性が高い。

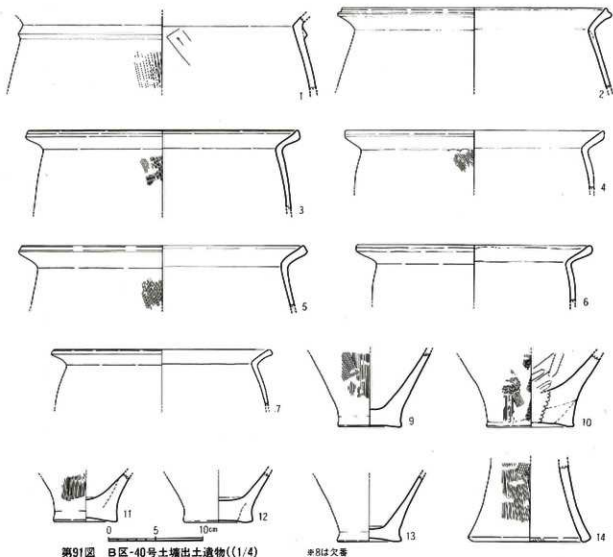
さて上部の2層以上の堆積は五次面以後の廃絶状態を示している。まず2層は暗茶褐色の粘質土で、白色粘土の固まり・炭・焼土と土器片が含まれている。この粘土は、四次面の6・5層中に含まれる粘土と同質のものである。この2層の上面はところどころ焼けているが、一次面から五次面までのような広がりをもたない。あるいは六次面の炉床がつけられた可能性もあるが、廃絶後の遺物廃棄の際に焼けた可能性も高い。最後に黒褐色で軟らかい1層が堆積して埋没する。この中には大量の炭・焼土と土器片を含み、この土壌廃絶直後に焼却廃棄物を一括廃棄したものとも推定される。



第90図 B区-40号土坑③-炉底部構造の変遷-(1/40)

以上のようにこの土坑がなんらかの炉であることは判明した。金属関係の遺物が出土していない点を考慮すると、このような構造をもつ燃焼施設は土器焼成坑か、炊事施設のいずれかである。入口をもって壘体の存在した可能性があり、短期間のうちに連続して炉面を更新していく状態からみて、一定の焼成期間の都度に炉を作り替える必要のある土器焼成坑の可能性が最も高い。そうすると少なくとも5回の換業がおこなわれたことになる。遺物はいずれも破片化している。図示した遺物はこの大半が1層から出土した。2層から出土した土器で図示できるのは12の甕底部片のみで、残りは細片である。この土器はよく焼けている。1層からは1~7の甕口縁部と9~11・13の甕底部片、14は器台の破片が出土している。甕の底部はほとんど二次使用により被熱しており、11のように内面におこげの煤が付着している例もあり、焼成時の失敗品ではない。しかし炊事に使用した廃品とするには破片の量が多すぎる。おそらくほかの土坑と同様に炉の廃絶時に土器を使った祭祀行為がおこなわれた可能性を考えたい。

出土土器はいずれも在地産の胎土を用いた遠賀川以東系の甕Aで、1には口縁直下に一条三角突帯が施されている。また被熱のはげしい2の甕の一部はB-1土器溜りにも廃棄されていた。土坑廃棄の時期は、出土土器から弥生時代中期後半と推定される。(旧A地区2号土坑)



第91図 B区-40号土壇出土遺物(1/4)

#8は欠番

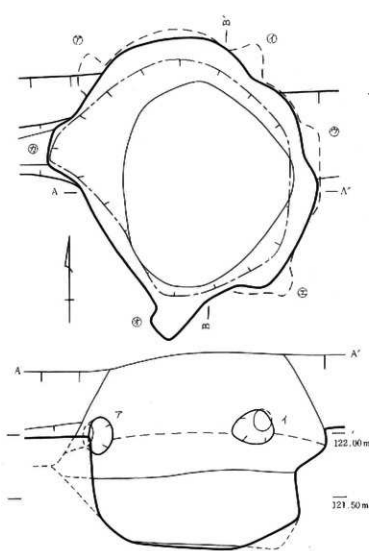
B区-41号土壇 (第92・93図 一図版13・14・40)

F1調査区で検出された大型円形の袋状土壇で、南側上部をB-5溝(近世)に切られている。規模は長軸長219cm、短軸長190cm、検出面からの深さは143cmである。底面は皿状である。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定されるが、底面が平らでないものはこの土壇だけである。壁の四方には穴が5箇所ある。

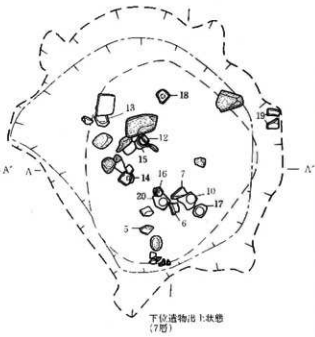
使用状態をしめす痕跡はなく、埋没状態の特徴として上位と下位の二度の遺物一括廃棄が認められる。まず底面の一部に黄褐色土と暗褐色土の互層をなす17~14層が堆積する。わずかに土器片を含み、4の丹塗りのある壺の底部が出土した。その上に黄色土ブロック層である13層が厚く堆積する。この層は基盤層の土そのものである。南側でオの穴から続くように13層が堆積する状態を確認したので、おそらく壁の側面に穿たれた穴からの排出と推定される。つまり壁に穴を掘ってその上で土壇の底部を埋める行為がおこなわれているのである。側面の穴がどのような機能をもつのか不明だが、このような行為は大型貯蔵穴でしばしば認められる。なおこの層中では11の甕底部片が出土した。次に黄褐色土と暗褐色土の互層をなす12~9層が堆積する。以上の層までは時折土器片を混入するが、炭・焼土等はまったく含まず、人為的な埋め戻し層といつてよい。土器片も少量の破片にすぎないので、土砂廃棄時に偶然混入したものと見られる。

次に5cm大の基盤層に由来する礫と黄色土ブロックを少量含む暗褐色の8層と、下部に大量の土器片と円礫に炭・焼土が含まれた暗黄褐色の硬い7層が堆積する。この7層は下位の遺物一括廃棄層である(第92図下)。

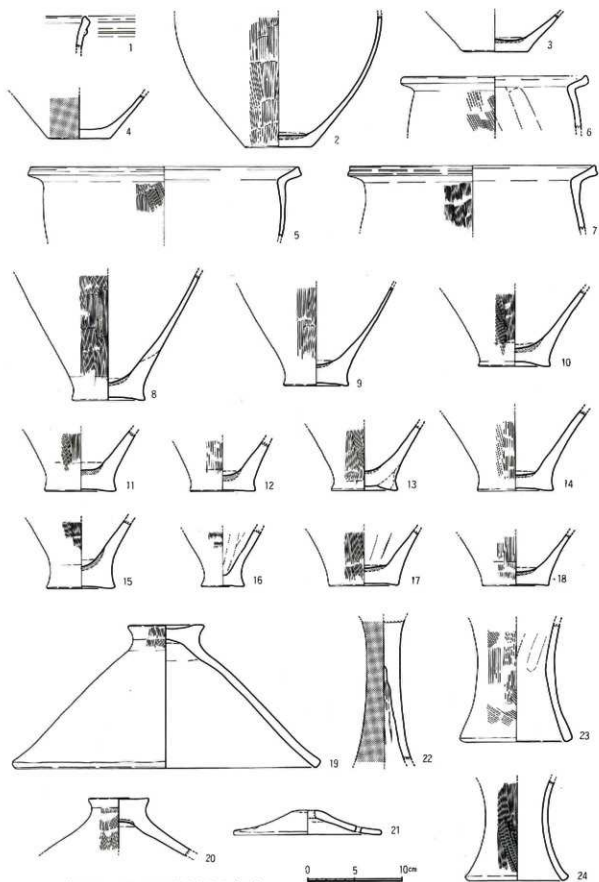
5~7の甕口縁部片や10・12~18の甕底部片、19・20の蓋の破片が円礫と重なるように出土した。甕の大部分は



- (番号)
 1階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 2階：赤土
 3階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 4階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 5階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 6階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 7階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 8階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 9階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 10階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 11階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 12階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 13階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 14階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 15階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)
 16階：埋藏物出土 (黄色土アモロク多量と赤土)



第92図 B区-41号土壌 (1/30)



第93图 B区-41号土坑出土器物(1/4)

被熱して煤の付着した日常生活用具である。しかし完形に復元できるものはなく、破片のまま一括廃棄したものと考えられる。次に土器片をほとんど含まない6～3層が堆積する。いずれも黄色土ブロックを多量に含み、おそらく遺物一括廃棄の直後に土壌の上から土砂を投棄したものであろう。さらに2層で上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。その層には黄色土ブロックと炭・土器片を多量に含む。土器は細片が多く2・3の壺底部、8・9の甕底部、21の小型蓋片、22の高坏脚部、23・24の器台片が出土した。壺・蓋・高坏は被熱していないが、甕と器台はよく被熱していた。日常生活用具の廃品を一括廃棄したものと考えられる。その後は黄色土ブロックを多量に含む1層が投棄され埋没する。上下の一括廃棄土器に後述するように時期差はなく、19の壺のように上下で接合する例があるので、一連の埋め戻しの過程の中で二度土器を中心とする一括廃棄がおこなわれたわけである。したがってその二度に分かれて廃棄された土器群は、実は同時に使われていたものと考えられる。

出土土器の胎土はすべて在地理である。土器全体でみて壺・蓋・高坏は被熱していないが、甕と器台はよく被熱する。1は口縁下に突帯のある直口壺、2・3は壺の底部、5～7は遠賀川以东系の壺Aである。8～18は壺Aの底部と推定される。19・20は蓋で、21は穿孔のある小型壺の蓋である。22は丹塗りの須玖系の高坏D、23・24は器台である。土器製作の特徴は砂粒を多量に含む胎土を、最終工程で底部の内面に貼りつけてザラザラした内面になることである(底部Aとする)。同時にこの底部Aの外面にはかならずヨコナデで底面潮部を調整している。以上はきわめて明瞭な特徴で、2・3の壺、8～15・17・18の壺、20の蓋で確認される。以上の土器と5～7の甕口縁、19の蓋、23・24の器台は、胎土・色調・調整などの特徴が一致し、少なくとも以上の壺・壺・蓋・器台などの土器は同一工人集団によって製作されたと推定される。もしB-40土壌が土器焼成坑であるとすれば、この一群の土器がそこで製作された第一の候補となるだろう。一方1・4の壺、21の小型壺の蓋、22の高坏は丹塗りのある須玖系の土器であるが、胎土は在地理であるので、先ほどの土器群と同じ場所で焼かれた可能性もある。

土器廃棄の時期は、出土土器から弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区土壌488)

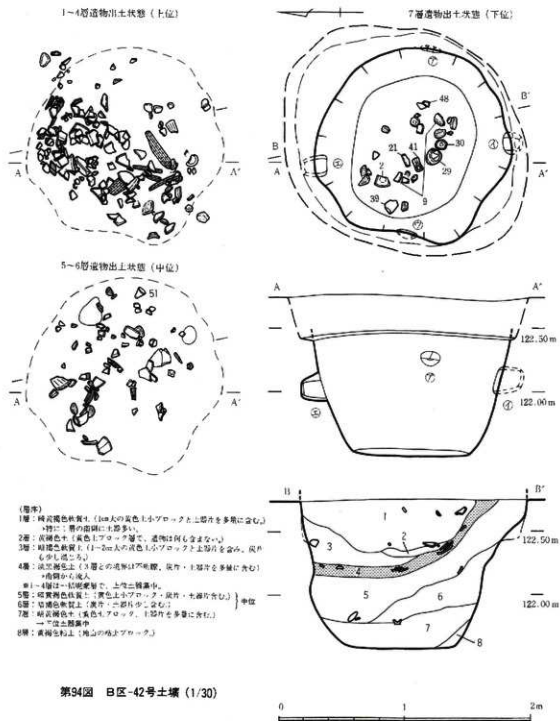
B区-42号土壌(第94～97図 一図版14・40・41)

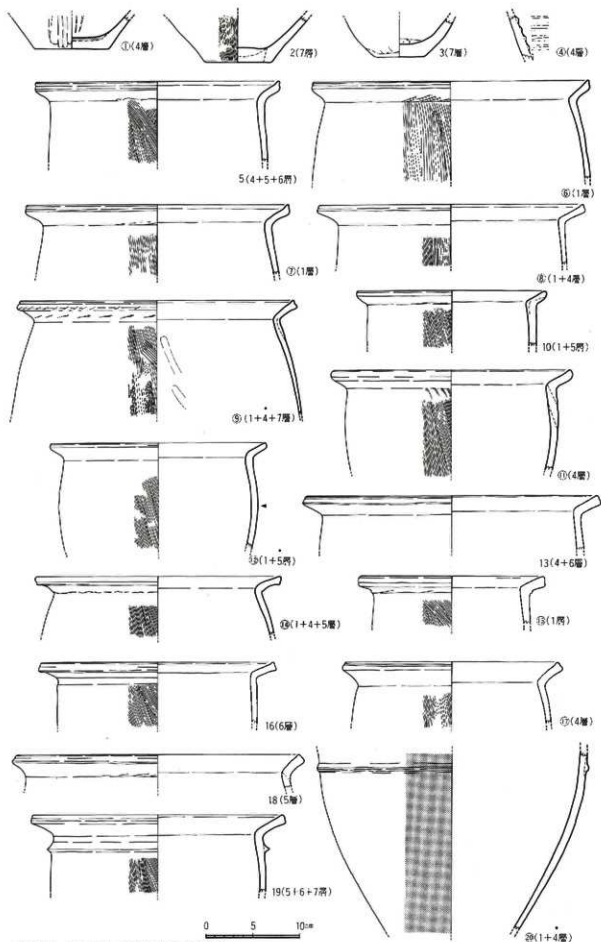
G0調査区で検出された大型円形の竅穴状土壌で、底面は平坦である。壁は直立せず上に向かって開いていく。規模は長軸長158cm、短軸長145cm、検出面からの深さは123cmである。その形態からみて大型の貯蔵穴であったと推定されるが、ほかにこの形態の類例はない。側面には穴が東西南北に4箇所ある。深さは揃わず、ほかの例よりも小さい。

使用状態をしめす痕跡はなく、埋没状態の特徴は上位と下位の二度の遺物一括廃棄が認められることである。まず底面の片側に黄褐色粘土8層が堆積する。これは基盤層の上である。あるいは側面の穴からの排出土かもしれない。次に黄色土ブロックと土器片を大量に含む暗黄褐色の7層が堆積する。この7層が下位の遺物一括廃棄層である(第94図)。2・3の壺底部片、19・21の甕口縁部片、29・30の甕底部、39の甕底部、40・41の高坏片、47・48の器台片と、52の完形の磨石が出土した。そのうちの多くは7層上部から出土した破片で、円礫と一緒に出土している。39の甕のみ被熱している。次に炭と土器片を含む軟らかい6・5層が、南側から投棄されて厚く堆積する。これらの層中からは全体にかなり土器片と小礫を含むが、あまりまとまらない中位の遺物である。5・10・12・14・16・18・24の甕口縁部片、27・32・33・36の甕底部片、44の鉢口縁片、50の器台片、51のコップ形の坏が出土し、そのうち51は完形のまま検出されたが、ほかの土器はすべて破片化していた。おそらく下位の遺物一括廃棄の直後に土壌の上から土砂とともに投棄されたものであろう。さらに4層で上位の遺物一括廃棄がおこなわれる。その層には炭・炭化材・土器片を多量に含み、特に炭が多く炭色化している。同じく南側から廃棄された状態である。土器は大型破片と細片がとり混ぜられ、1・4の壺片、8・9・11・17・22の甕口縁部片、20・23・34・37・38の甕底部、40・43の高坏片、45の鉢片などが出土した。その後黄色土ブロックを多量に含む3～1層が投棄され埋没する。特に2層は黄色土ブロックそのものの廃棄層であり、1層はふたたび土器片を多量に含む。そこでは6・7・15・25・26の甕口縁部、28・31・35の甕底部片、46の鉢口縁部片、49の器台片が出土した。以上の上下の一括廃棄土器は後述するように時期差はなく、上下で接合する例がきわめて多く、47・48の器台のように上下で検出された破片が接合して完形に復元できる例もあった。一連の埋め戻しの過程の中で土器を含む焼却遺物の一括廃棄がお

こなわれ、その廃棄された土器はまだ使える土器であった可能性が高く、おそらく割られて廃棄されたと思われる。したがってその廃棄された土器群は、同時に使われていたものと考えられる。

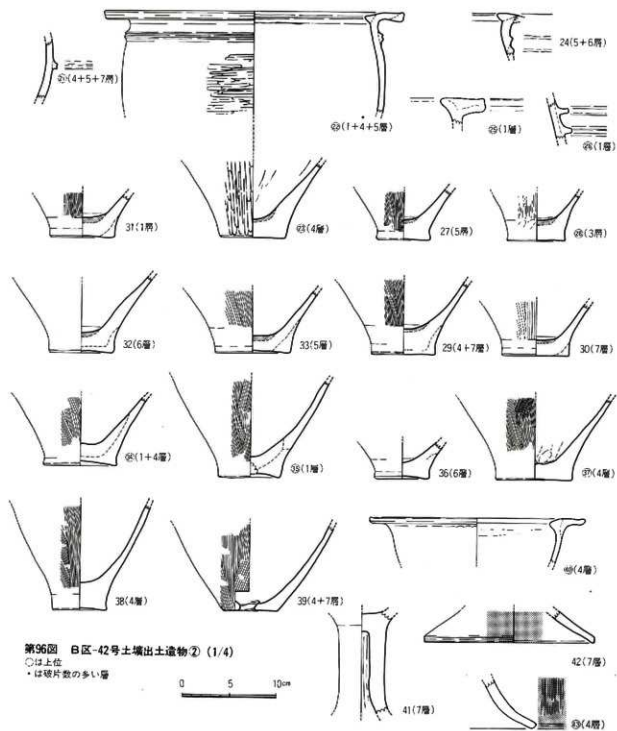
出土土器の胎土はすべて在地産である。土器全体でみて壺・高坏は被熱していないが、7層出土の41の高坏口縁のみは被熱する。甕と器台はよく被熱する。1は壺の底部、4は5条の突帯を施した遠賀川以東系の甕。5～19は遠賀川以東系の甕Aで、19のように口縁下に一条三角突帯を施す例もある。20～23は丹塗りを施す須玖系の甕で、22と23は同一個体を見られる。24は遠賀川以西系の甕B、25は甕棺の口縁部と思われる大型破片。27～38は甕Aの底部と推定される。39は焼成前に底部に穿孔した甕。40は在地系の高坏。41～43は丹塗りを施す



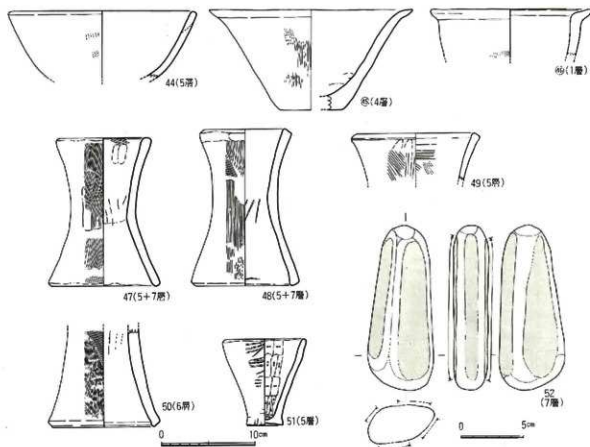


第95図 B区-42号土埴出土遺物①(1/4)

○は上位、・は破片数の多い層



須玖系の甕D。45と46は在地系の鉢。47～50は器台。51はコップ形の坏で、外面に叩き痕跡が明瞭で、内面はヘラケズリ状の掻きあげが顕著である。また内面に赤褐色の粘土が付着するので何かの容器である。出土石器は、52が安山岩製の小型の磨石である。土器製作の特徴はB-41土壇出土の底部破片に認められる特徴的な底部Aの技法と同じ、砂粒を多量に含む粘土を最終工程で底部の内面に貼りつけて、ザラザラした内面にするところである。この特徴は1と23の壺、27～33の甕で確認される。特に23の丹塗りを施す須玖系の甕Dに、この特徴が認められることは重要である。この特徴はB-41土壇出土土器とも共通し、その土器も含めて同一工人集団により製



第97図 B区-42号土壌出土遺物③(44~51=1/4, 52=1/3) ○は、上位

作されたと推定される。そして彼らは、須玖系の丹塗りの甕も製作していると考えられるのである。もしB-40土壌が土器焼成坑であるとすれば、B-41土壌出土土器とともにこの一群の土器がそこで製作された第一の候補となるだろう。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ時期と推定される。(旧D地区土壌480)

B区-43号土壌 (第98~100図 一図版15・41・42)

H1・H2調査区で検出された長方形の大型土壌で、底面は堅穴建物のように平坦である。規模は長さ400cm、短軸長300cm、検出面からの深さは30cmである。床面積は10.3㎡、長軸の方位角は21度である。内部には西辺のやや北に偏ったところに、壁に接して長円形の土壌が1箇所検出した。廃棄された土器の一部がこの土壌の中に入りこんでいるので、おそらく土壌廃絶時には開口していたと見られる。底面が全体によく踏みしめられた硬化面になっている。炉がないにもかかわらずかなり使用された状態をしめすのは、この土壌が何らかの作業施設であったこと示している。

埋没状態の特徴は、廃絶直後の遺物一括廃棄が認められることである。まず底面の周縁部を中心に暗褐色の粘質の強い2層が堆積する。比較的硬く、通常の即決土に混入する黄色土ブロックがまったく含まれない。この層下部の床面に土器小片が散在して出土するので、土壌廃絶直後に廃棄された土層である。含まれる土器は、1の甕片、甕柄として使われてもおかしくない3の大型甕胴部、5・14~16の甕口縁部片や23・24の甕底部片、28の高環口縁片と、半分に割れて焼けた29の磨石が出土した。以上の土器のうち5・15・16の甕の破片は、後述する1層の土器集中地点の中にも破片の一部が含まれ、16などは大部分の破片が床面直上で検出されてその上に1層の土がかぶるが、一部の破片は土器集中地点でも出土した。したがって2層下部の土器廃棄→2層堆積→1層遺物一括廃棄はきわめて短時間の一連の行為によって生じたものと推定される。さらに1層で遺物一括廃棄がおこなわれる。その層には1~2cm大の黄色土ブロックと炭・土器片を多量に含み、粘土の固まりが土器片といっしょ

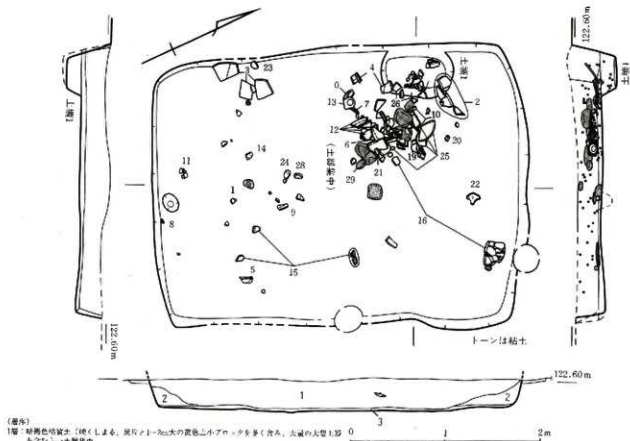
にまとまって出土した。土器は大型土器破片が多く、0の壺口縁片、2の大型甕口縁片、4・6～8・10～13の甕口縁片、17～22の甕底部、25・26の蓋片、27の高坏脚部が出土した。壺・甕・高坏は被熱していないが、甕と器台はよく被熱している。1層は一気に埋没しており、遺物一括廃棄をともしながら埋め戻された可能性が高い。ところで粘土の固まりが廃棄されているのは、この遺構をふくめてきわめて限られる。おそらくこの作業土壌と廃棄された粘土、そして近接する推定土器焼成坑（B-41土壌）の三者は関係が深いものと推定される。

出土土器の胎土はすべて在地産である。0は丹塗りのある須玖系の壺D、1は頂部にM字突帯を施す甕、2・3は大型甕で甕棺の胎土によく似ている。4～16は遠賀川以東系の甕A、17～24は甕Aの底部と推定される。25・26は蓋で、27・28は高坏Dである。28の高坏は焼けている。大型破片の中には表面が薄く剥離したようなものが目立つので、廃棄された土器のなかには焼成失敗品が含まれている可能性がある。また甕の底部には内面に砂粒含みの胎土をもちいた例（底部A）はない。

土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。（旧D地区堅穴住居35）

B区-44号土壌（第101図）

I 1調査区で検出された小型円形の土壌で、底は丸い皿状である。規模は長軸長78cm、短軸長68cm、検出面か



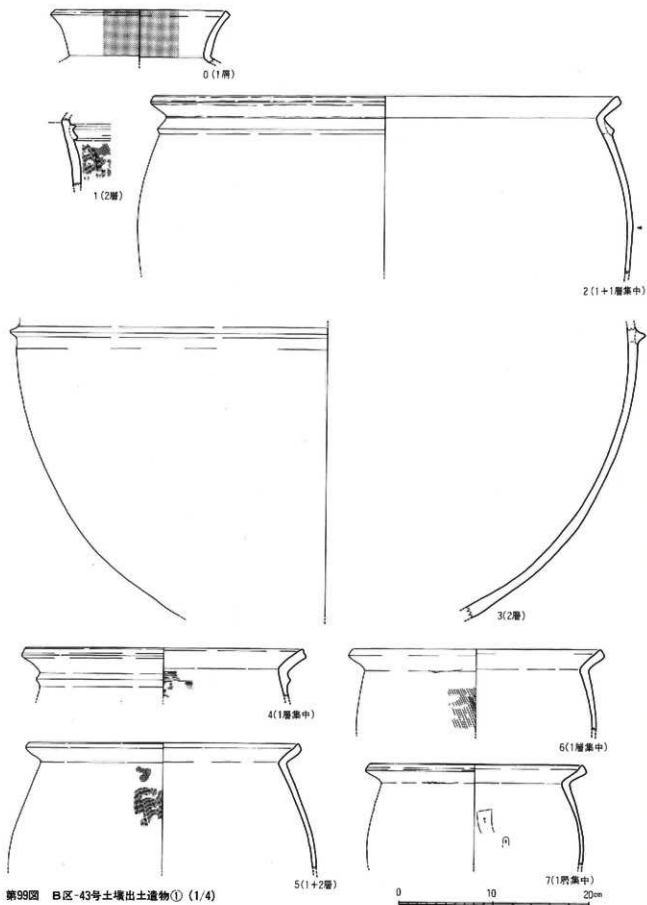
（備考）

1層：鮮明な赤土（硬くしめる。炭灰など20cm程度の炭色土小アロートを多く含む。大甕の大型1層を含む）土器廃棄中

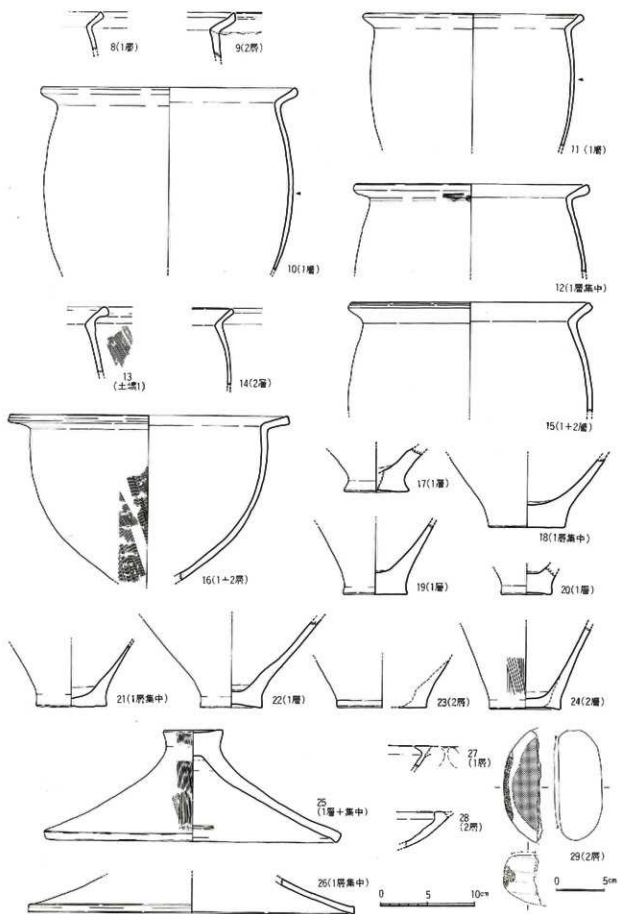
2層：暗褐色粘土（硬い。炭灰土アロートを含まず。この層下部の3層に土器の含む）→後地層後の埋積

3層：赤土（赤土のみ）のりてきた地層。

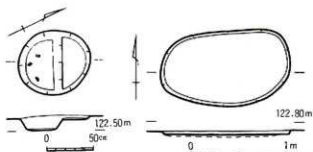
第98図 B区-43号土壌 (1/40)



第99図 B区-43号土壇出土遺物① (1/4)

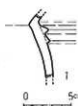


第100図 B区-43号土壙出土遺物②(1/4)



第101図 B区-44号土坑 (1/40)

第102図 B区-45号土坑 (1/40)



第103図 B区-45号

土坑出土土遺物(1/4) 一図版16)

らの深さは16cmである。性格は不明である。断面観察をおこなっていないので、埋没状態の詳細は不明である。埋土中から土器の細片が出土している。この土器から弥生時代中期後半の土坑と認定した。(旧D地区土坑420)

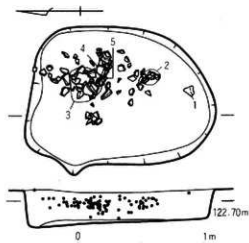
I O調査区で検出された長円形の浅

い土坑である。規模は長軸長135cm、短軸長79cm、検出面からの深さは10cmである。底面は平坦なので、何らかの使用目的をもって掘られた土坑と考えられるが、その用途は不明である。埋土は土器細片を含む暗黄褐色の単一層(1層)で、その層中から頸部にM字突帯を貼りつけた甕の破片を検出した。その土器からこの時期の遺構と認定した。(旧D地区土坑478)

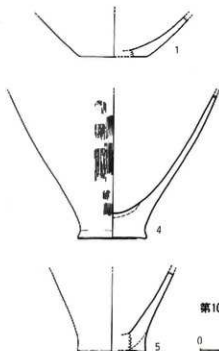
B区-46号土坑 (第104・105図 一図版16・42)

同じくI O調査区で検出された不定形の大型土坑で、底面はやや傾斜するがおおむね平坦である。規模は長軸長153cm、短軸長105cm、検出面からの深さは30cmである。底面の形状からみて何らかの使用目的をもって掘られた土坑と考えられるが、その用途は不明である。

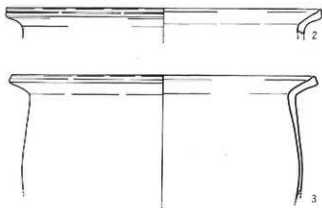
埋土は多量の黄色土ブロックと、炭片と焼土片をわずかに含む暗黄褐色の単一層(1層)である。その中ほどに遺物一括廃棄がある。いずれも土器の小片でばらばらになった破片を片付けたような印象を与える。黄色土ブロックを多量に含むので埋め戻しの過程で土器片の一括廃棄がおこなわれたと推定される。



第104図 B区-46号土坑 (1/30)



第105図 B区-46号土坑出土土遺物(1/4)



一括廃棄の土器には、1の壺底部片、2・3の遠賀川以東系の甕Aの口縁部片、4・5の甕底部片が含まれる。とくに4の甕底部は内面底部に砂粒を多量に含む胎土を用いる底部Aである。胎土は在地産で、底部片は被熱している。土器廃棄の時期は、出土土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区土壇481)

B区-1号土器溜まり (第106・107図 一図版42)

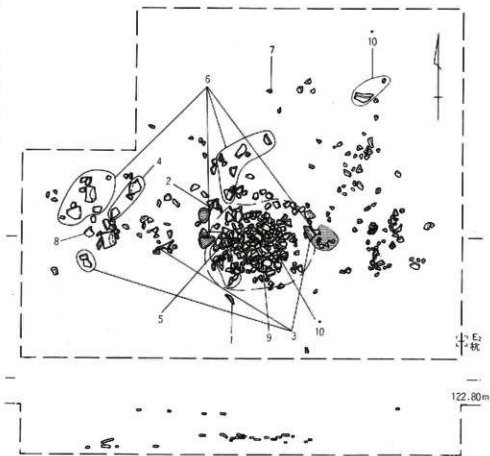
E3調査区で検出されたもので、土器を多量に検出したが遺構の輪郭をつきとめることができなかったので、「土器溜り」と呼んで報告する。土器片の分布・集中には偏りが認められ、中央部の特に集中する地点はおそらく土器が廃棄された土壇である可能性が高い。

出土土器の胎土はすべて在地産である。器種は甕・器台と高坏で、壺は含まない。甕と器台は被熱するものが多い。1～5は遠賀川以東系の甕Aである。6・7は甕Aの底部と推定される。8・9は器台である。10は完形に復元できた高坏。7の甕底部片の一部は、土器焼成坑と推定したB-40土壇の廃絶後の一括廃棄層(1層)に混入していた。おそらくB-40土壇と同時に廃棄されたと推定される。

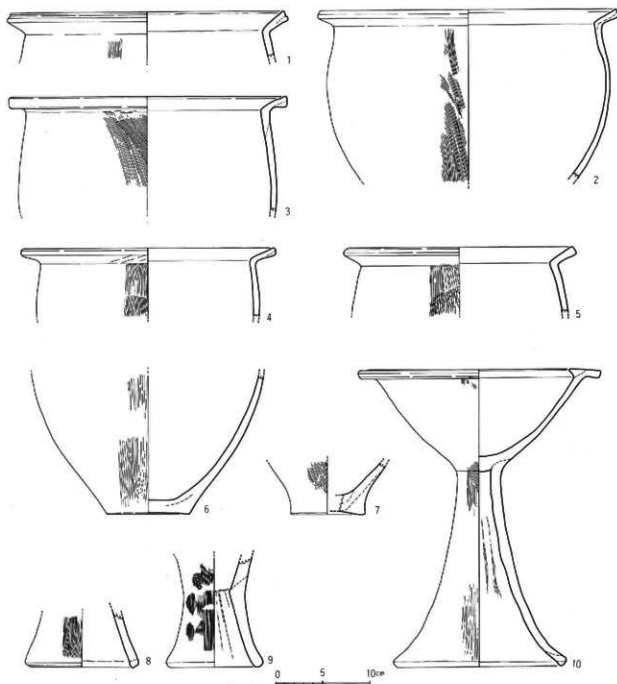
土器廃棄の時期は、出土土器から弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧A地区1号集中)

2) 墓 (第4・6表)

B-2墓からB-7墓までの6基の墓がこの時期のものである。B-2墓とB-3墓の二基はいずれも小児墓で、上下とも焼を転用した合口甕棺墓である。B-43土壇のまわりにあり、推定される頭位方向はいずれもその土壇の方を向いている。これに対し残りの4基の周辺には竪穴住居跡や土壇のような生活遺構がなく、独立した墓地の一部と推定される。墓の形式は成人用が石葺土壇墓・土器蓋甕棺墓・土器蓋土壇墓というように変化にとみ、小児墓も高坏と甕を合口にしたもので、前記した二墓とは異なっている。またこの四基は頭位が東向きに揃っている。



第106図 B区-1号土器溜まり (1/30)



第107図 B区-1号土器溜まり出土遺物 (1/40)

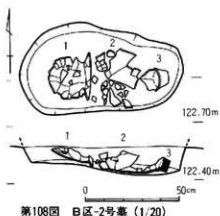
B区-2号墓 (第108・109図 一図版16・43)

G2調査区で検出された合口甕棺墓で、上半は削平されている。上下ともに甕もちいる。墓壇の平面形は土器の形にあわせた楕円形で、その規模は長軸長82cm、短軸長49cm、検出面からの深さはもっとも深いところで16cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓である。西側の甕の底部が高くなるように置かれているので西頭位と推定される。頭位の方は方位角で270度となり、B-43土壇の方向に頭を置いたことになる。甕棺内の土はすべてふるいにかけてたが、遺物は検出できなかった。したがって、副葬品はなかったと推定される。

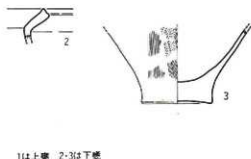
1. 壺に使われた1の壺は遠賀川以東系の壺Aである。下壺に使われた2・3の壺も遠賀川以東系の壺Aである。1は被熱しており、3の底部は被熱していない。壺棺の時期は弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区壺棺8)

B区-3号墓(第110・111図 一図版16・43)

H1調査区で検出された合口壺棺墓で、B-5溝(近世)に上部を削平され、つぶれた状態で検出された。上下ともに壺をもちいている。墓墳の平面形は土器の形にあわせた精円形で、南西側が高くなっている。その規模は長軸長92cm、短軸長54cm、検出



第108図 B区-2号墓(1/20)



1は上壺 2・3は下壺



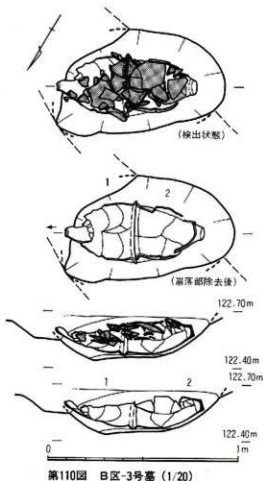
第109図 B区-2号墓出土遺物(1/4)

面からの深さは24cmである。土器の大きさからみて小児用の壺棺墓で、北東側の壺の底部が高くなるように置かれていることから東北頭位と推定される。頭位の方は方位角で60度である。この墓もB-43土壇の方向に頭を置いたことになる。壺棺内の土はすべてふるいにかけてが、遺物は検出できなかった。したがって副葬品はなかったと推定される。

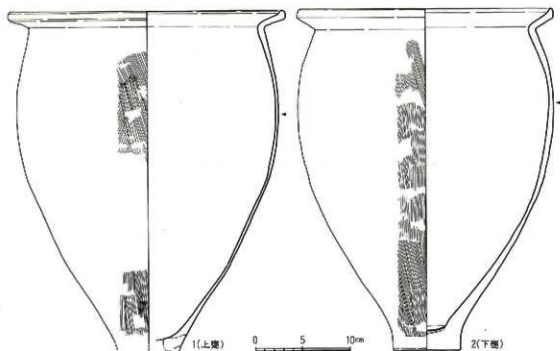
上壺に使われた1の壺と下壺に使われた2の壺はどちらも遠賀川以東系の壺Aである。1・2の壺はまったく被熱していない。通常の炊事用の壺であるのに使われた痕跡がない。つまり未使用の新品を埋葬用に転用したものとして推定される。また2の壺は内面底部に砂粒を多量に含む胎土を用いる底部Aである。壺棺の時期は弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区壺棺7=墓2)

B区-4号墓(第112図 一図版17)

M18調査区で検出された石蓋土壇墓で、B-5墓と平行して作られている。蓋石がやや落ち込んだ状態で検出された。墓墳は長方形の二段掘りである。上段の規模は長さ188cm、幅104cm、検出面からの深さは43cmである。石蓋をかぶせている下段の墓墳は上段墓墳の中央にやや方向をずらして掘りこまれ、その規模は長さ182cm、幅61cm、深さは27cmである。下段墓墳の規模から成人用の墓と推定される。蓋石の置き方は、まず安山岩の板石を西から東の順で三枚重ねにかぶせ、最後に頭部と脇に安山岩のきめの細かい角礫をかぶせている。この角礫と同質の石はB-7墓の最後にも置か



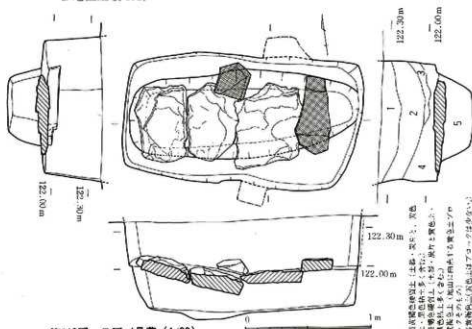
第110図 B区-3号墓(1/20)



第111図 B区-3号墓 (1/4)

れている。蓋石の重ね方からみて被葬者の足元からかぶせはじめ、最後に顔をふさいだものと推定される。したがって東頭位に死者を安置したものと考えられる。そうすると墓壇の頭位方向は方位角94度となり、ほぼ東向きである。墓壇内の土はすべてふるいにかけて、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。

ところでこの墓の蓋石の幅は下段墓壇の幅より狭く、そのままかぶせたのでは蓋石が落ちてしまうはずであるが、実際はやや落ち込んでいたもの、きちんと正しくかぶせた状態になっていた。墓壇内部には黄色土ブロック混じりの土が堆積していたので、おそらく被葬者を横たえて土壇内に土を入れて、その上から蓋石を重ねたものと推定される。墓の時期は、弥生時代中期後半の墓地の一角で発見されたことから、この時期と認定した。(旧D地区上墳452)



第112図 B区-4号墓 (1/30)

B区-5号墓 (第113～115図 一図版17・18・43)

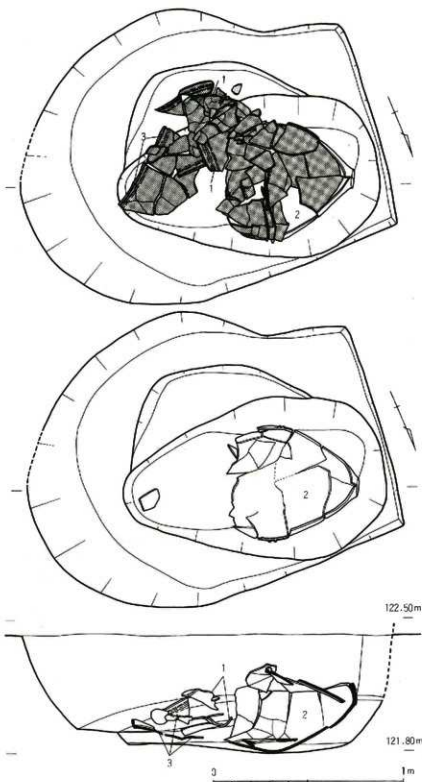
B-4墓の南となりに近接し、ほぼ平行して設けられた土器蓋甕棺墓である。墓壇の平面形は土器の形にあわせた楕円形の二段墓壇である。上段墓壇の西側が角張っているのは輪郭の検出を誤ったための掘りすぎである。上段の規模は長軸長190cm、短軸長154cm、検出面からの深さは51cmである。下段の規模は長軸長133cm、短軸長87cm、深さは12cmである。下段墓壇の平面形は甕棺の

(備考)
 1 第一土壇(上段)は、西側に角張っているのは、検出の際の掘りすぎによるものと思われる。
 2 第二土壇(下段)は、第一土壇の南側にあり、第一土壇の西側に接している。
 3 第三土壇(下段)は、第二土壇の南側にあり、第二土壇の西側に接している。
 4 第三土壇の西側の角張りは、掘りすぎによるものと思われる。
 5 第三土壇の西側の角張りは、掘りすぎによるものと思われる。
 6 第三土壇の西側の角張りは、掘りすぎによるものと思われる。

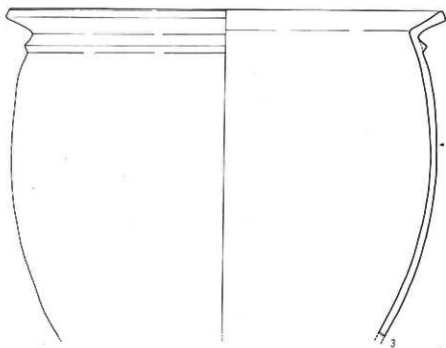
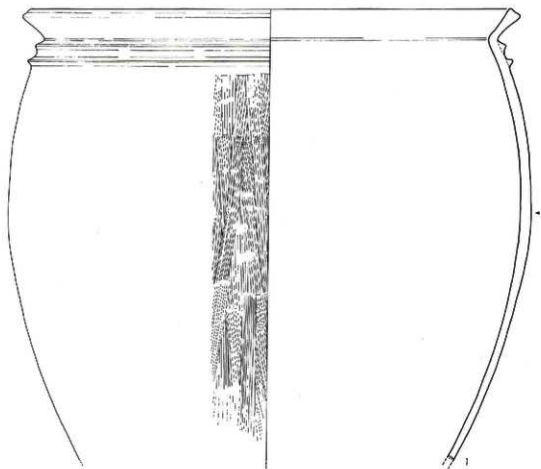
形にあわせた西側が広い楕円形で、東側がやや高くなっている。これに対し上段意壙は東側が丸く大きくふくらんでいる。この形は甕棺の搬入口が東側にあったことを推察させる。下甕の大きさからみて成人用の甕棺墓で、蓋には本来上甕に使われてもよい大型の甕が2個体大きく割って被せられていた。下甕から推定される頭位方向は、方位角で113度のおおよそ東向きである。甕棺内の土はすべてふるいにかけて、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。

下甕には第115図2の遠賀川以東系の大型広口甕が使用されている。口縁部を丁寧に打ち欠いた中型の成人用甕棺である。胴部には二条の高い台形突帯がつき、外面にはうっすらとタタキの痕跡が観察される。3の大型甕は底部下半がなく、上半の3分の1の破片は外面を上にかぶせるように置かれていた。遠賀川以東系の甕Aの大型品で、口縁直下に一条の三角突帯がめぐる。1は下甕と2の大型破片の上にかぶせられていた大型甕で、20～30cm大の破片に割ってかぶせていたが、底部の破片はなかった。形態は基本的に遠賀川以東系の甕Aだが、口縁直下の三角突帯は二条で、外面のハケメもナデ消していない。蓋に使用された2・3の甕は底部を取り除いたうえで利用されており、豊前地方の土器蓋蓋の強い影響が認められる。

墓の時期は、土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区甕棺5)



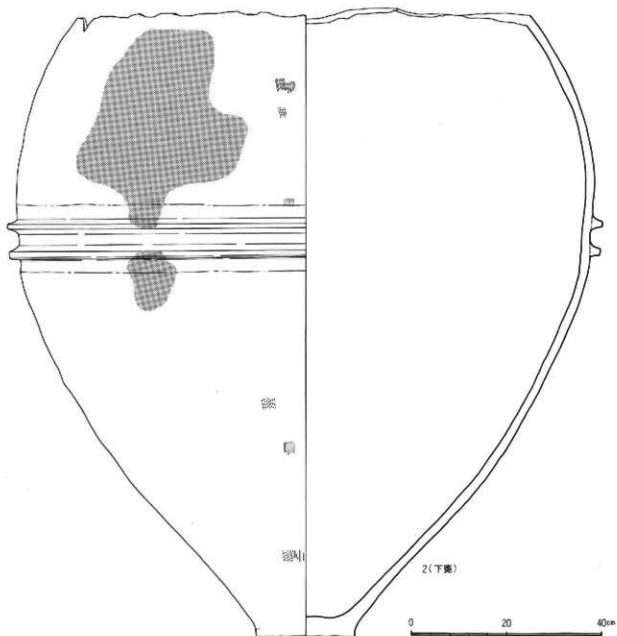
第113図 B区-5号墓 (1/20)



0 10 20cm

1・3は土質変

第114図 B区-5号墓出土遺物①(1/4)

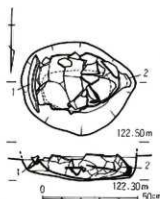


第115図 B区-5号墓出土遺物②(1/8)

B区-6号墓 (第116・117図 一図版19・44)

成人墓にかこまれたM17調査区で検出された合口甕棺墓で、下甕に甕としての高坏を被せている。上半は削平されていたが、つぶれた状態で検出した。墓壙の平面形は土器の形にあわせた楕円形で、底面は東側がやや高い。その規模は長軸長61cm、短軸長50cm、検出面からの深さは13cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓で、高坏の方向から東頭位と推定される。頭位の方向は方位角で89度となる。甕棺内の土はすべてふるいにかけたが、遺物は検出できなかったため刷製品はなかったと推定される。

「上甕」に使われた1の高坏は丹塗りを施した須玖系の高坏Dで、おそらく脚部を折りとられて坏部のみを使ったものであろう。下甕に使われた2の甕は遺賀川以東系の甕Aで、被熱して煤が付着している。通常の炊事用の甕を埋葬用に転用している。また2の甕は内面底部に砂粒を多量に含む胎土を用いる底部Aである。甕棺の時期は弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区甕棺4)



第116図 B区-6号墓 (1/20)

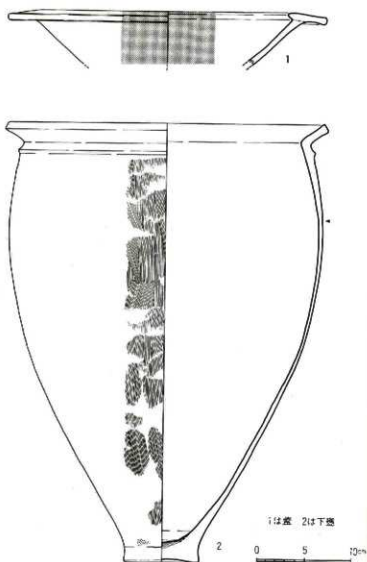
B区-7号墓 (第118～120図 一岡版
19・44)

N17調査区で検出された土器蓋土墳墓で、最も西に位置している。墓墳の平面形は、甕棺を据えていないにもかかわらず土器の形にあわせたとおもわれる楕円形で、東側は階段状になった変形の二段蓋墳である。当初は、B-5墓同様に甕棺を安置する予定であったのに、何らかの理由で甕棺を割って蓋に転用したと思われる。上段の規模は長軸長126cm、短軸長93cm、検出面からの深さは42cmである。下段の規模は長軸長95cm、短軸長93cmで、深さは13cmである。蓋にはB-5墓で甕棺に使用されたものと同じ大きさの甕を大きく割って利用しているので成人用と推定される。また土器で蓋をしたのち、B-4墓の蓋石の一部に利用されたものと同じ安山岩のきめの細かい角礫を三つ最後にかがせている。

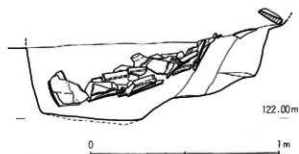
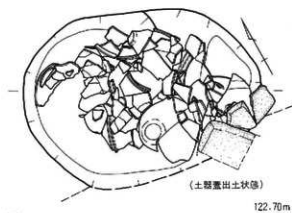
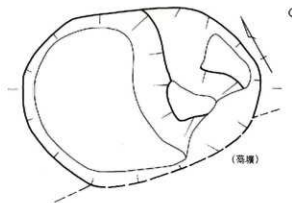
この角礫はB-4墓の石蓋の最後に置かれた石とまったく同質のものである(註1)。その石の置かれた方向からみて頭位は南東頭位と考えられる。墓墳内の土はすべてふるいにかけてが、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。なお埋土は炭片と焼土片を多量に含む暗褐色の軟らかい土で、分層はできなかった。

甕棺葬ならば本来下甕として使われるべき2の大型広口壺が、割られて重ねられている。破片のほとんどは外面を上に向け、底部の破片は逆さにされて最後に置かれている。この壺を復元すると頸部以上を丁寧に打ち欠いていることがわかる。B-5墓の甕とまったく同じ打ち欠き方法である。おそらく埋葬の準備段階まではB-5墓のように甕棺葬にする予定だったが、埋葬実施段階に変更されたものと推定される。土器そのものは胴部に二条の高い台形突帯がつく中型の成人用甕棺である。B-4墓3と同一型式である。1の甕は日常品で被熱して煤の付着した既使用品を埋葬に転用したもので、同じくばらばらに破砕されて土壌の西側を中心に2の破片をおおるように置かれていた。復元すると完形になった。しかし2の壺の上甕に使うには口径が小さすぎで、「上甕」に予定されていたとは考えるのは疑問である。この甕は遠賀川以東系の甕Aである。

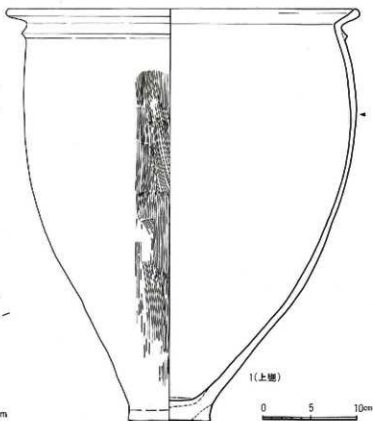
甕の時期は、土器からみて弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式期と推定される。(旧D地区土壌444)



第117図 B区-6号墓出土遺物 (1/4)

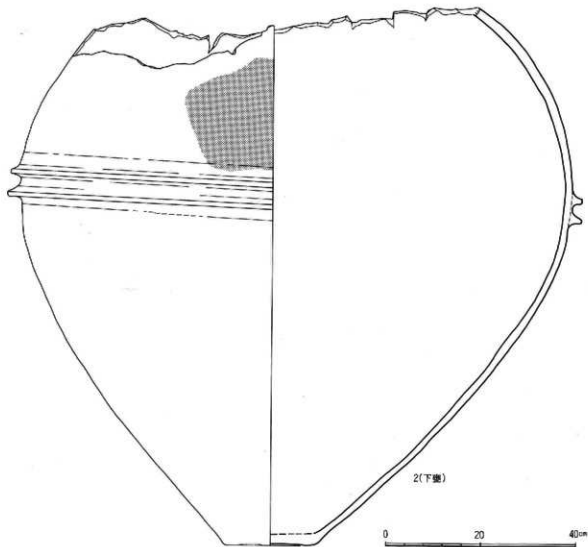


第118図 B区-7号墓 (1/20)



第119図 B区-7号墓出土遺物①(1/4)

註1、弥生時代前期末の墓であるB-1墓の北端に置かれた石とも同質であり、時代をこえて小迫辻原遺跡を利用した集団に受け継がれた埋葬習慣のひとつとみなせる。



第120図 B区-7号墓出土遺物②(1/8)

3) ビット (第121図、第6表)

遺物の出土状態から、弥生時代中期後半と認定したのは以下の二例である。

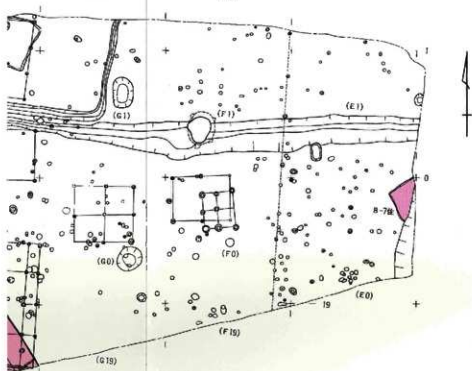
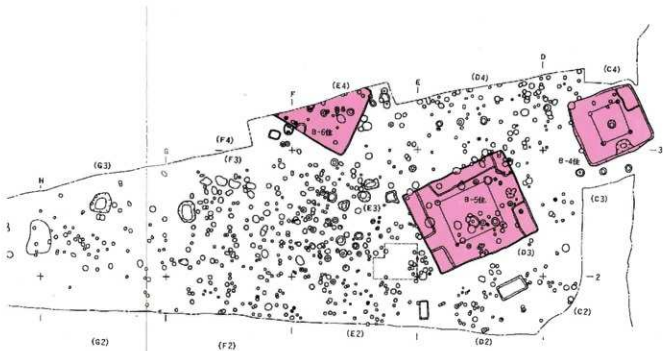
E1調査区ビット2からは、1の甕口縁片が出土した。この土器は遠賀川以东系の甕Aである。GO調査区ビット3からは2の甕口縁片が出土した。この土器も遠賀川以东系の甕Aである。



第121図 B区-ビット出土遺物 (1/4)

第122图 小海洼遗址白区遗址配置图(4)
—古铜时代前期前半— (1:300)





第4節 古墳時代前期前半（第122回）

この時期の遺構はB区全体に散発的に分布する。竪穴住居跡9軒・土壇1基と墓1基を確認し、ほかにピット1本を本文に掲載した。この時期のピットはまだ存在する可能性が高く、掘立柱建物がなお存在したことを考慮しなければならない。遺構の配置の特徴として竪穴の方向に統一性がある。竪穴は長軸方向から次の三群に分けることが可能である。第1は長軸が北西から南東方向をとるB-6住の1軒、第2は北東から南西方向をとるB-4・5・7・9・10住の5軒、第3は南北方向をとるB-11・12住の2軒である。特に第2の竪穴群の方向はA区の竪穴群の方向と一致しており、小迫辻原遺跡内のかかなり広い空間で、同一方向に建物を建設する時期があったことをうかがわせる。ちなみにこの三群は時期が微妙に異なっている。すなわち第1群が小迫辻原1～2期、第2群が小迫辻原3期、第3群が小迫辻原4期に相当する。ちなみに第2群の竪穴住居跡の方位角は1号方形環溝の角度と近似する。

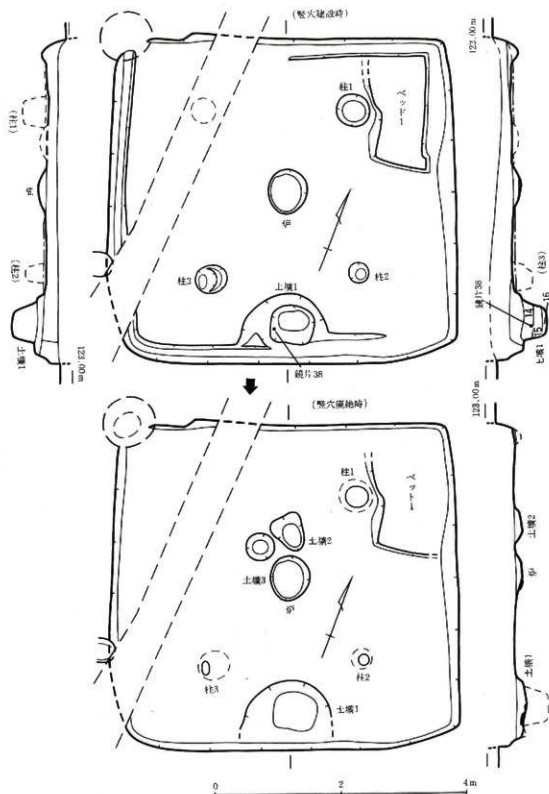
1) 竪穴住居跡（第1・6表）

B区-4号竪穴住居跡（第123～127図 一巻頭図版11・図版20・21・44・45）

B区とC区との間の農道で検出された方形竪穴建物で、中央西寄りに現在の水道管が走りその一部を破壊している。規模は東西長軸長560cm、南北短軸長510cmでやや東西に長く、深さは28cmである。東西長軸の方位角は68度で、床面積は25.3㎡の中型竪穴である。南西の柱穴1本が水道管によって破壊されているが、ほぼ等間隔に配置された4本柱の構造に復元でき、柱穴の深さも揃っている。ベッドの背後を含めて周溝がほぼ全周し、土層の観察からみて建設時に掘削された壁材固定用の溝と考えられる。床面は、踏みしめられて硬化した床である。なお床面の下には建設時の土壌は存在しなかった。

内部施設としては、東北隅に浅く短いベッド状遺構が柱穴1に接して設けられている。このベッドは地山を削りだしたものである。中央の炉は焼上面のある地床炉である。南辺中央の壁に接して土壇1があるほか、炉の周辺に小土壇が2箇所検出された。その小土壇2と3は建設当初から設けられたものではない。土壇2は竪穴使用中のある時点で付加されたもので廃絶時には炉と並んで存在し、土壇3は廃絶時の祭祀行為にもなって掘られた可能性が高い。炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。ところで南辺に設けられた大型の土壇1は、通常炉の南側に設けられる対面土壇で、その上部は実際廃絶時まで囲口していたことが埋没状態の観察から明らかである。ところがその「底部」のさらに下に、もう一段深い土壇が検出された。一見二段掘りの土壇に見えるが、その下の土壇は埋上りが異なっており（第124図）、下部埋土の14～16層は、それまで多量に検出されていた土器片や炭・焼上などをまったく含まず、黄色土ブロックを多量に含む明るい黄褐色土が詰まり、明らかに故意に埋められた状態であった。そしてこの土壇の14層中の西の壁際に中国製船載鏡片（38）が見つかったのである。したがってこの鏡片は明らかに埋納されたものである。しかしこの土壇は鏡片を埋納するために掘られたものではない。鏡片は土壇を埋める行為の最終段階に近い時にその片隅に置かれたのであるから、土壇の中央の下部には何か別な、鏡片以上に重要な意味をもった品物が埋納されたはずである。調査時に検出できなかったのも、何かは不明であるが、おそらく腐朽してしまうようなもの、つまり人体から繊維製品などにいたる有機物の可能性が高いであろう。先にふれたようにこの土壇の上段部は、通常の土壇として使用されていたと考えられるので、下段の土壇が掘られ埋納行為がおこなわれたのは、住人が生活を開始するの先に立つこの竪穴建物の建設時のことと推定される。

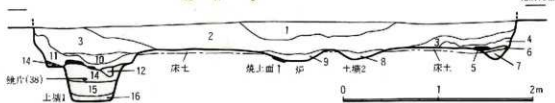
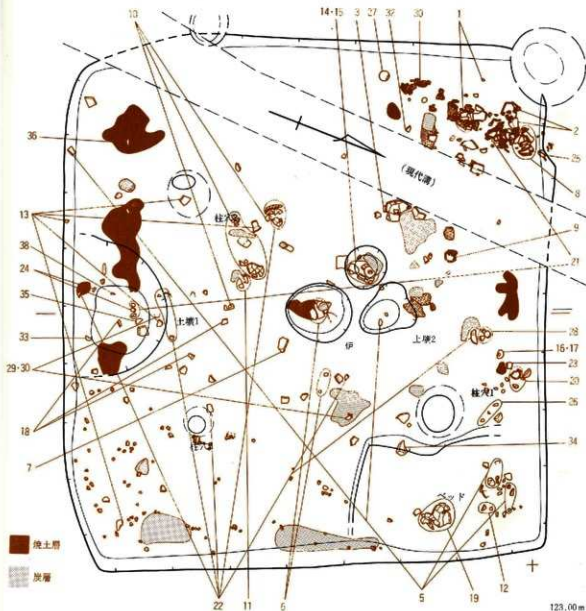
その後竪穴廃絶時には次のような焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている（第124図）。まず床面上に炭片・焼上を多量に含む淡黒褐色の軟らかい4層が、竪穴の床面全体に薄く広がる。この層中には焼土層が点在し、炭化した木材を多量に含み、炭屑とした堆積物も多くは炭化材がつぶれたものであった。また炭片の中には茅材とみられる炭化物が点在し、おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。そして興味深いことに、以上の焼土層・炭層や炭化材の下、すなわち床面直上に大量の土器と鉄器1点が検出された。遺物が廃棄された後に焼却行為に起因する大量の廃棄物が投棄されているのである。床面そのものには被熱の痕跡は認められなかったの



第123図 B区-4号竪穴住居跡①-竪穴内遺構の変遷-(1/60)

の小型台付鉢の脚部のみがベッド近くの壁ぎわに正位に置かれていた。以上の3点は何れも故意に打ち欠かれた土器である。19の鉢は完形品のままベッド中央に正位に置かれ、つぶれた状態で検出された。28の完形の碗も17の近くでつぶれた状態で出土した。さらに36の定角式の鉄罐の完形品が焼土層の下になって床面に貼りつくように検出された。この罐には装着痕はなく、鉄罐のみが置かれたものと推定される。

で、竪穴内部で焼却がおこなわれたとは考えられないが、別の場所でおこなわれた焼却行為の片付けが、この竪穴を対象におこなわれた点は指摘できる。ただし不思議なことに柱穴の周囲には排出土はなく、柱抜きの際の柱穴の掘り広げも認められなかった。柱のみをそのまま残して腐朽するのにまかせたのか、あるいは丁寧に抜かれたかの何れかと推測される。さてこの4層下部の焼却廃棄物におおわれた遺物の出土状態は、竪穴の床面に置かれたものと、4層廃棄の直前あるいは同時に一括して廃棄されたものに分けることができる。床面に置かれた例としては9の甕の上半が伊の北側に逆さで置かれ、14・15の高坏口縁部の完形品が土壇3の内部に逆さで置かれ、17

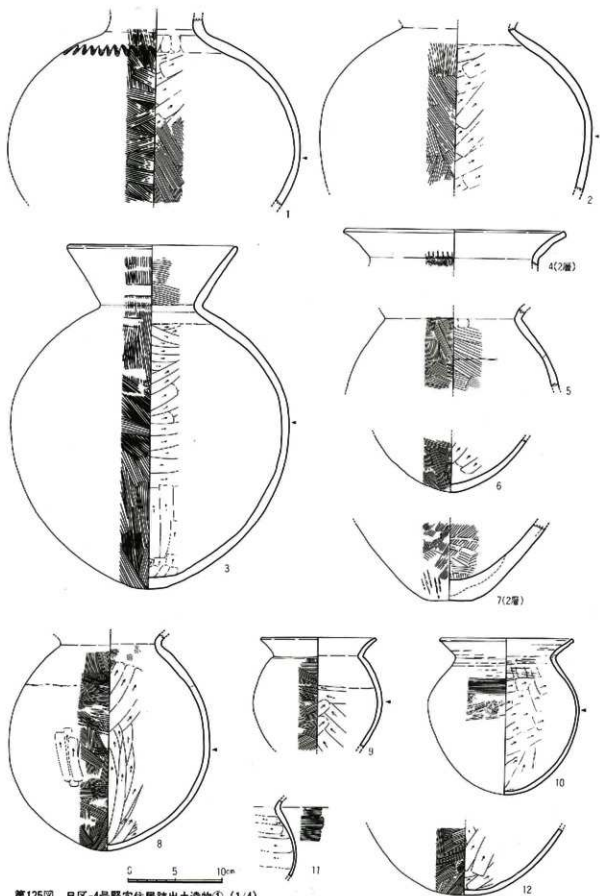


- 1層：白灰色粘質土（黄砂含む）
 2層：暗褐色粘質土（土器・灰片多く含む）
 3層：暗褐色粘質土（2層よりやや細かい土器・灰片含む）
 4層：灰褐色粘質土（灰、炭多量。下部に完形に近い土器・焼物の破片が散在している）
 5層：焼土層
 6層：暗褐色粘土→黄砂は厚層に埋まっている
 7層：灰褐色粘質土
 8層：暗褐色粘質土（灰土材・大型灰片・土器片散入）→4層に対応する中層の厚土層（焼土）には開孔している。
 9層：暗褐色灰まじり土（焼土がブロック多量を含む）→4の厚土

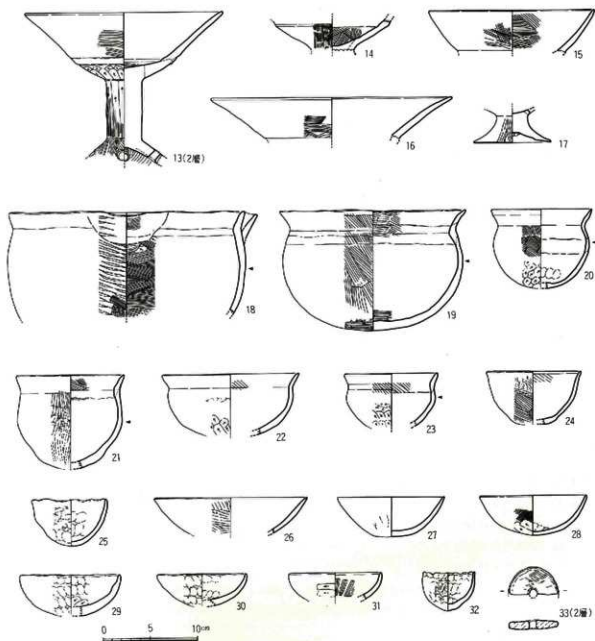
- 10層：暗褐色粘質土
 11層：暗褐色粘質土（灰・焼土・土器片多量含む。下部に焼土層が広がる）
 12層：暗褐色粘質土（11層よりやや細かい）
 13層：暗褐色粘質土（11層よりやや細かい）
 14層：暗褐色粘質土（灰褐色粘質土より多く含む。この層の上層部で焼土(38)が堆積した。）
 15層：暗褐色粘質土（灰褐色粘質土より多く含む）
 16層：暗褐色粘質土（灰褐色粘質土より多く含む）

14層と15層の間、厚層に灰土層が埋まっている。この層の上層部には開孔している。また、14層と15層の間、土層1の厚層が埋まっている。したがって、土層1の下部は、灰土層に埋められた可視性が低い。

第124回 B区-4号竪穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一(1/40)

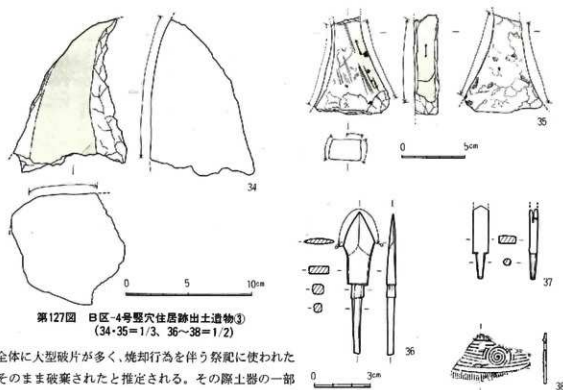


第125图 B区-4号竖穴住居跡出土物①(1/4)



第126図 B区-4号竪穴住居跡出土遺物②(1/4)

一方焼却廃棄物と一括廃棄されたものには、1～3の壺、5・6・8・10・12の甕、16の高坏、18の鉢、21の小型甕、22～24の小型鉢、25～27・29～31の碗、32のミニチュアの鉢、35の砥石片がある。そのうち1の壺は大型破片でまとまって出土し、接合した破片の半分は1号条溝C-1溝14・15・22群にも廃棄されていた。2の甕も1の壺のそばで大型破片がつぶれて出土し、接合した破片のかなりの部分が1号条溝22群でも検出された。3の壺はほぼ1個体分の破片が炭層の下で重なって出土したが、破片の一部はB-10住の3層一括廃棄層の中でも発見された。このことはこの竪穴住居跡とB-10住の鹿嶋祭祀がほとんど同時におこなわれたことを示している。8も口縁部以外はほとんど完形品のまま1・2の壺のそばでつぶれていた。10の甕は破片が分散して出土したが、復元すると完形となった。25の碗は、8のそばで完形のまま横倒しの状態で出土した。32のミニチュアの鉢も1の壺の近くで完形で出土した。残りの土器は破片となって4層中に散在していた。以上の土器のうち甕の大部分と19の鉢は被熱して煤が付着するが、壺・高坏と小型七器群には被熱の形跡はない。また廃棄された土器には小型の器種が目



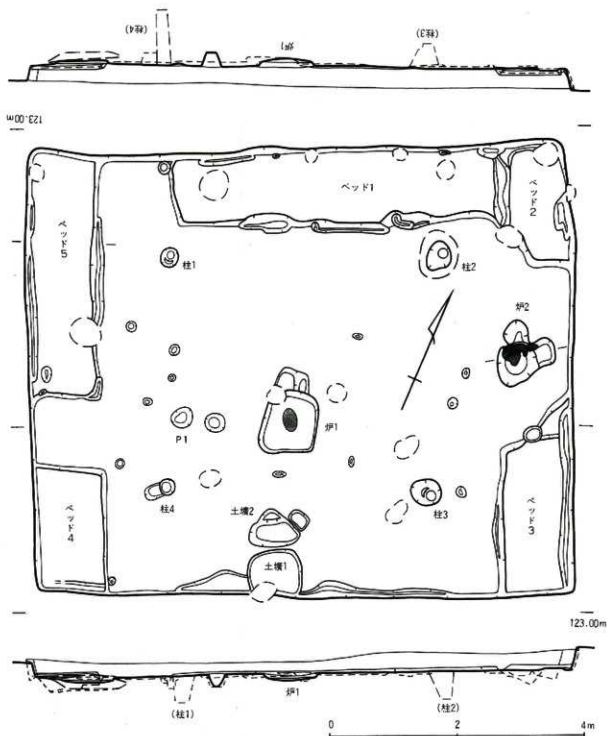
第127図 B区-4号竪穴住居跡出土遺物③
(34・35=1/3, 36~38=1/2)

立ちまた全体に大型破片が多く、焼却行為を伴う祭祀に使われた土器群がそのまま放棄されたと推定される。その際土器の一部は、再度使用しないことを示すために打ち欠けたり破砕したりして、この竪穴内に置かれたものと見られる。その後、炭・土器片を含む3~1層が順次レンズ状に堆積している。遺物は底面に比べてはるかに少なくなる。おそらく廃絶祭祀後この竪穴住居の跡はそのまま放置され、自然埋没にまかされたと推定される。この上層特に2層中から4の甕口縁部片、7の甕底部片、13の高坏、33の土製紡錘車、34の石皿片が出土した。そのうち13の高坏は2層中で破片が散在し、脚部以外は完形に復元でき、さらにその破片の一部は隣接するC-9住の埋土中から検出された。おそらくC-9住廃絶時にはまだこの竪穴住居跡は2層堆積中であったことを示している。なお出土位置は不明だが、37の鉄錘基部片が出土している。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の構造物を取り払われ、②この竪穴住居跡と1号条溝の間どこかで焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③そこで少なくとも釜3個体、甕7個体、高坏2個体、鉢2個体、小型の甕鉢碗等14個体以上を使っている。④祭祀終了後、一部は1号条溝内に廃棄されたが、大部分は焼却廃棄物とともに、この竪穴住居内に廃棄された。以上の祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち、土器の大半は粘土からみて在地産である。6と11の甕のみは胎土に金雲母を含む搬入品である。1~3は布留系の甕D、4~8は在地系の甕Aだが、6と8は内面ヘラケズリが顕著で布留系技術の影響が明瞭である。9は伝統的V様式系の甕Bだが、内面ヘラケズリの布留系技術の影響がある。10~12は布留系の甕Dで、11は搬入品。13は伝統的V様式系の高坏B、14と15は同一個体の高坏、16は在地系の高坏A、17は在地系の小型台付鉢A、18は片口のつく大型の鉢A、19は伝統的V様式系の影響が残る鉢B、20・21は小型甕で、22~31は小型の鉢または碗で、22と23は布留系の影響を受けた形態。28と31はヘラケズリとミガキに布留系の影響が認められる。32は手づくねのミニチュアの鉢Aである。33は半分に割れた土製紡錘車、34は安山岩製の石皿の破片、35はよく使い込まれた砥石の破片である。36は定角式の鉄錘の完形品で、茎部が二段になり、断面は方形である。古墳の副葬品として発見されることが多い型式で、竪穴住居跡で発見される例はめずらしい。37は鉄錘の基部破片である。38は懸垂孔のある鏡片で、後漢時代の中国製雲雷文内行花文鏡の外区文様帯の破片である。文様面には赤色顔料が付着している。長さ4.5cm、幅2.5cm、厚さ約1.5mm、懸垂孔の径は約3mmである。

以上のように建設時に鏡片の埋納がおこなわれて使用が開始され、廃絶時には鉄錘と土器の埋置を伴う廃絶祭

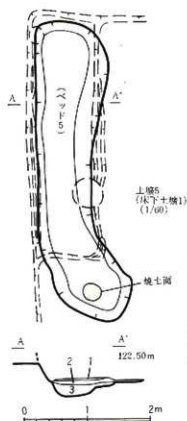


第128図 B区-5号竪穴住居跡① (1/60)

紀がおこなわれた竪穴住居跡である。正方形4本という典型的な古墳時代型式の竪穴建物を採用している点も注目される。いったいどんな人が住んでいたのだろうか。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用され、廃絶の時期は出土土器から小迫辻原3期の末と推定される。(旧A・B地区竪穴住居3)

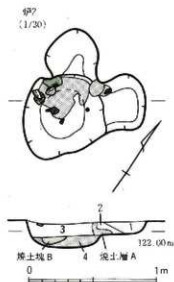
B区-5号竪穴住居跡 (第128～136図 一図版22・23・45～47)

B-4住の南西に数m離れてほぼ同じ方向で検出された長方形の竪穴建物で、後世の多くのピットが重複しており、調査は根気のいるものであった。規模は東西長軸長880cm、南北短軸長700cmで東西に長く、残存部の深さは35cmで、東西長軸の方位角は66度、床面積は58.0㎡の大型竪穴である。竪穴の平面形にあわせて配置された



第129図
B区-5号竪穴住居跡②
-内部構造-(1/60・1/30)

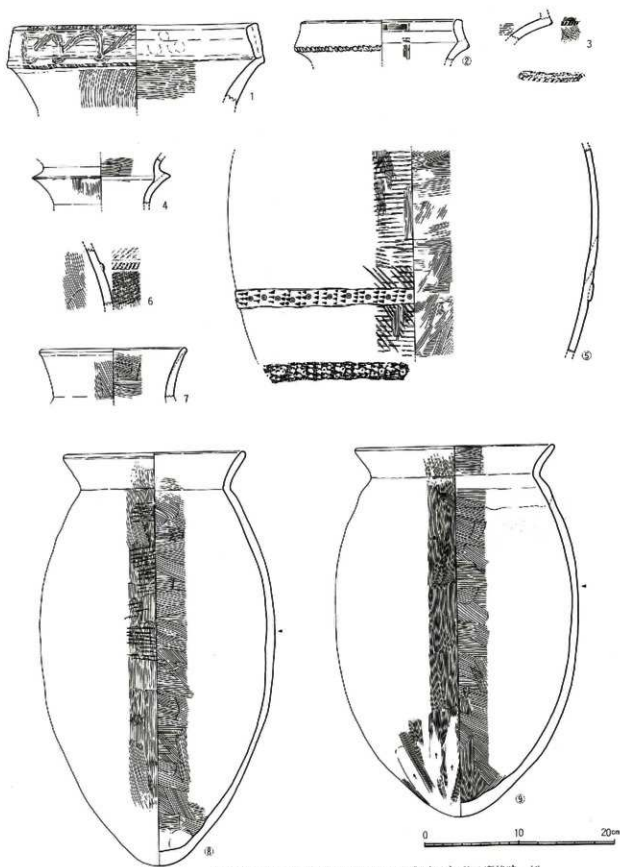
- ①ベツノミ→床下土塊1層序
1層: ベツノミ層序の中心にみかたまっている。
2層: 黄褐色粘土(焼く、2かいた中で、何も含まない)
②ハハノミ状塊状土塊のための土層。
3層: やや赤みからかった黄褐色土(黄赤土ブロックを含ま、灰・土層を少し含む)
→床下土塊の層上



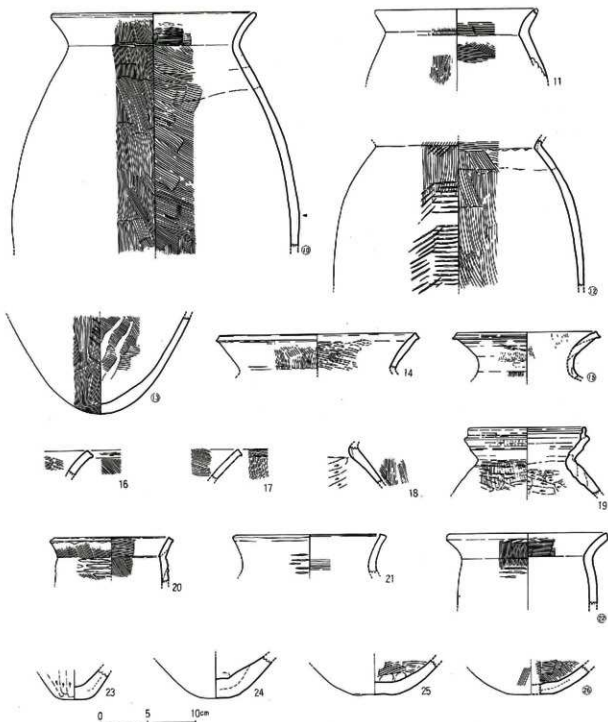
- 1層: 褐色土(柱穴跡の周囲に対応)
2層: 黄褐色土
焼土層B: 灰土層含む
3層: 黄褐色粘土(焼土・灰・土層を含む)
①: 柱穴跡の壁・階土跡
4層: 黄赤土ブロック 灰土層

4本柱の構造であり、柱穴4のみが非常に深く掘られている以外は柱穴の深さは揃っている。ベッドの背後およびベッド前面を含めて周溝がほぼ全周し、土層の観察からみて建設時に掘削された壁材固定用の溝と考えられる。特にベッド前面の周溝はC-8住で確認されたように、ベッドを固定する板材の固定用に掘られた溝と考えられる。床面は踏みしめられて硬化したもので、ベッド上も硬化している。なおベッド5の下には建設時に掘られた床下土塊1が第129図左のように存在した。その土塊の底には1箇所赤く焼けた焼土面を発見した。床下土塊掘削時に火を使用した何らかの行為がおこなわれたと推定される。この床下土塊は床面の高さまでいったん埋めた後、硬い黄褐色粘土を固めてベッド5を構築している。ベッド状遺構は5箇所あり、両面のぞき断続的にコ字形に配置されている(第128図)。ベッド5が前述のように盛り土である以外は、すべて削りだしである。ベッド1と2は一連のものであるが、間に狭い溝が走り、周溝と同じ役割をはたしたと考えられ、おそらく間仕切りの壁が立ち上げられていたと推定される。炉は2箇所あり、中央の炉1は皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成された地床炉である。炉2は東辺に近いベッド2と3の間に切られたもので、当初から造り付けられたものか、竪穴使用中にベッドを削って設けたものかは判然としない。下部に焼土が堆積し炉と認めたが、炉1とはその構造が異なる。しかし埋土内に廃絶時の遺物が流れこんでいるので、竪穴廃絶時には開口していたことは明らかである。土塊は2箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた土塊1は半円形の浅いもので、通常炉の南側に設けられる「対面土塊」にあたる。廃絶時まで開口していたことが埋没状態の観察から明らかである。その土塊の北側に近接して浅く掘りこまれた土塊2は、C-1住で検出された入口施設の位置と構造がよく似ているので、梯子を固定するための穴と推定される。その内部には竪穴焼却時の堆積層(2層)が流入しており、梯子は竪穴廃絶時に抜取られたと推定される。炉と多数のベッドの存在とその規模からみて、この竪穴遺物は居住用の竪穴住居とみられる。

竪穴の使用中に床面にめりこんだ遺物がある。30-35の高坏頸部片である。廃絶の際にはまず雑物の取り壊しが行われており、排出土の堆積はなかったが柱穴2・3・4の3箇所では明瞭に柱の抜取痕跡が認められる。た



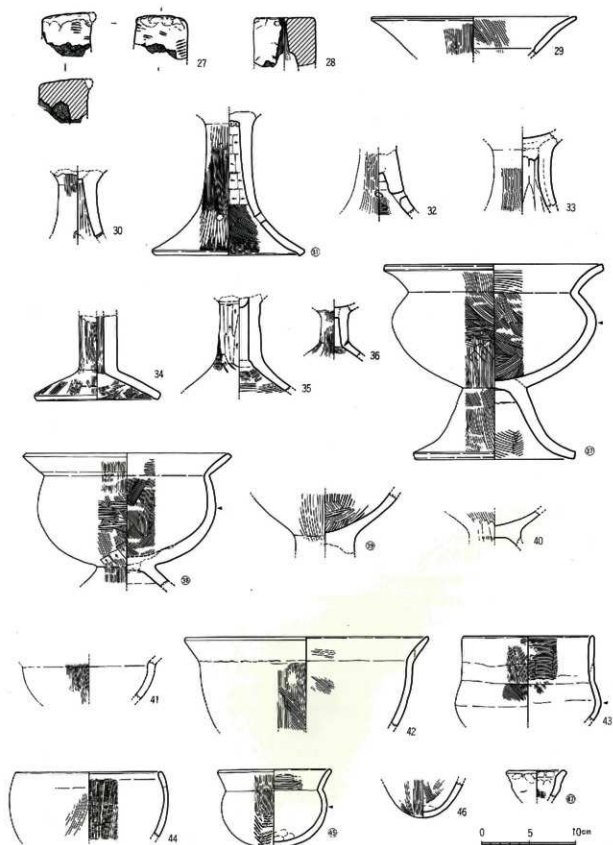
第131图 B区-5号竖穴住居跡出土遺物①(1/4) ○は炭絶時一括



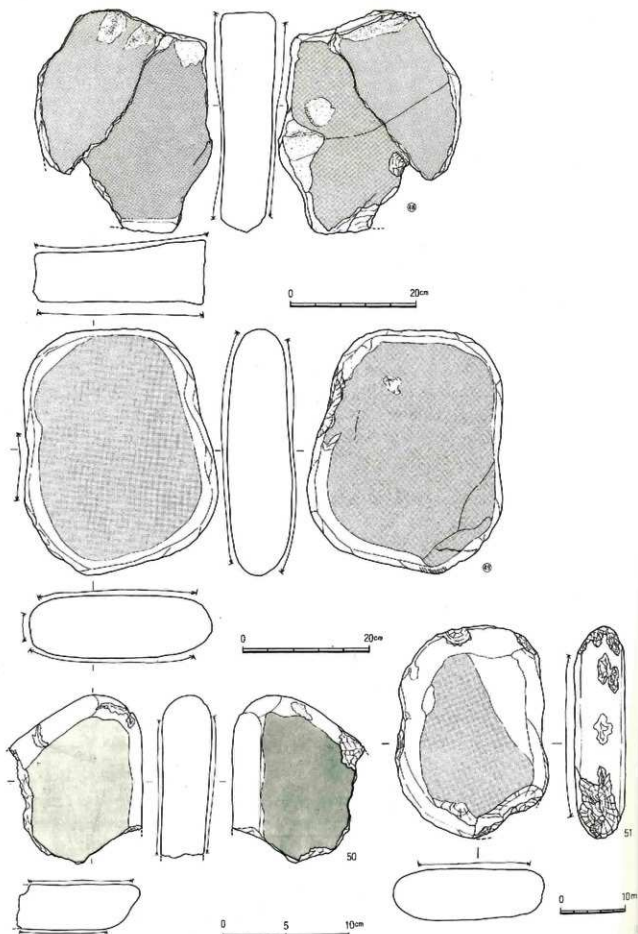
第132図 B区-5号竪穴住居跡出土遺物② (1/4) ○は廃絶時一括

だし柱穴1にはその痕跡がなく、切り取られたかあるいは丁寧に抜かれたと推測される。そして廃絶から焼却廃棄物一括廃棄の間に多少の時間の経過があったようで、竪穴の東側と南側に厚く暗黄褐色の1層が堆積している。この1層におおわれた床面直上において60の柳葉形の鉄鏝の完形品が、先端を壁に向けて出土した、この鉄鏝には矢柄の木質が残存しており、矢全体が廃絶直後に置かれたものと推定される。同じ状況はB-4住でも認められた。ほかにこの層には炭・焼土と土器片が少量含まれる。7の壺口縁部の完形品、19の甕口縁部片、23の甕底部片等である。

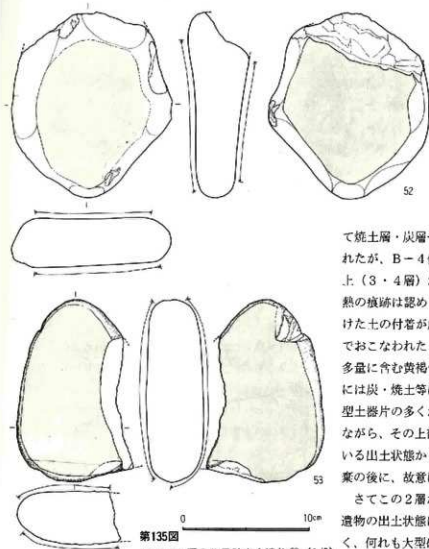
その後、次のような焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている(第130図)。まず床面上に炭片・焼土を多



第133图 B区-5号竖穴住居跡出土遺物③(1/4) ○:1號地時一括



第134圖 B区-5号竪穴住居跡出土遺物④ (48・49・51=1/6、50=1/3)
○は底絶時-括



第135図 B区-5号竪穴住居跡出土遺物③(1/3)

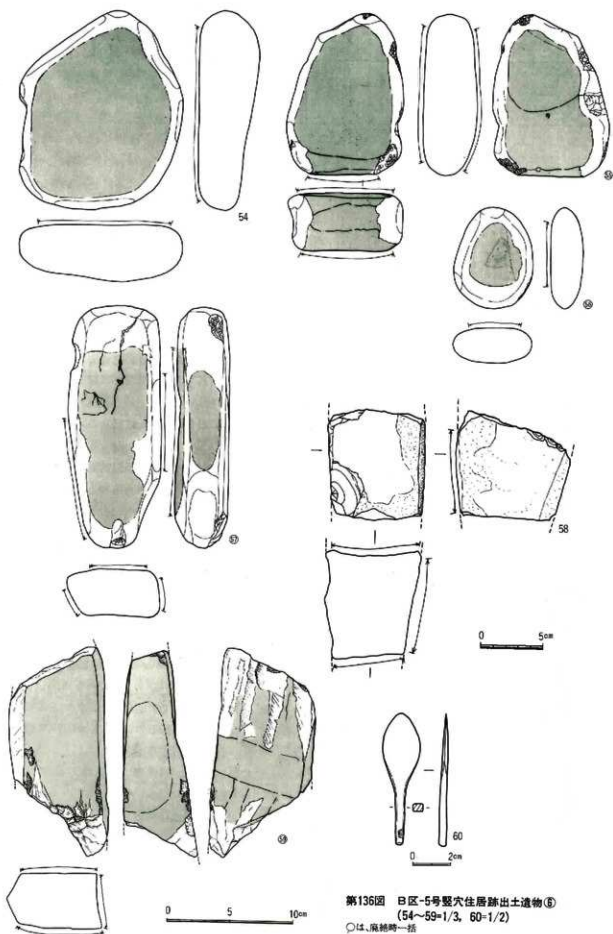
盆を含む淡黒褐色の軟らかい2層が、竪穴の床面全体に広がる。この層中には焼土層が点在し中には5~10cm大の焼土ブロックが混じる。炭化した木材を多量に含み、炭層とした堆積もその多くは炭化材がつぶれたものであった。また炭片の中には茅材とみられる炭化材が点在し、おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。そして

焼土層・炭層や炭化材の上下に大量の土器が検出されたが、B-4住と異なり大半の遺物は焼却廃棄物の上(3・4層)から検出された。床面そのものには被熱の痕跡は認められなかったが、赤色顔料と見紛う焼けた土の付着が床面に認められ、焼却行為はこの竪穴でおこなわれたと考えられる。さらに下部に土器片を多量に含む黄褐色系の3~5層が堆積する。この層中には炭・焼土等は少なく、土器のみが多い。さらに大型土器片の多くがその上部を底面あるいは2層に接しながら、その上部は3層あるいは4層に取り巻かれている出土状態からみて、3~5層は焼却と遺物一括廃棄の後に、故意に埋め戻されたものと推定される。

さてこの2層から3・4層下部の焼却廃棄物に伴う遺物の出土状態は、完形品を配置した状態のものではなく、何れも大型破片をまとめて捨てた状態で、大部分が破片として散在していた。このように焼却廃棄物と

一緒に一括廃棄されたものには、1~6の壺片、8~10・12~17・20~22・25・26の甕片、27・28の支脚片、29・31~34・36の高坏、37~41の台付鉢、42~46の鉢、47のミニチュアの鉢、48~57の石皿磨石頭、58・59の砥石片などほとんどの遺物が含まれる。そのうち5の壺と12の甕は大型破片で散らばり、8~10の甕は半個体分の破片がそれぞれまとまって出土し、12・13・15・22の甕片は2層中に散在し、31の高坏脚部は坏部を折り取られて、炭層の上に横倒しでつぶれていた。37は完形だが鉢部に1箇所内部から穿った穿孔があり、これも横倒しで検出した。38も脚部が折り取られて底部が穿孔されて廃棄されていた。45もほぼ完形で検出された。また48の石皿は被熱して割れている。49は完形の石皿で焼土層の上で検出され、55~57の磨石と59の砥石片も焼却廃棄物の中にはまじりこむように出土した。以上の土器のうち甕の大部分は被熱して煤が付着するが、壺・高坏と小型土器群には被熱の形跡はない。例外的に32の高坏脚部片と43の直口壺が被熱していた。祭祀時に焼けたのか焼却時に焼けたのかは不明である。また廃棄された土器では小型器種は少ない。全体に細片が多いので焼却行為を伴う廃絶祭祀に使われた土器群がそのまま破棄されたものと、その後の片付けにより混入したものの両者があると推定される。第131~136図で番号に丸をかこった遺物は前者と推定されるものである。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①柱が抜き取られ竪穴建物の構造物が取り払われ、②矢が床面に置かれたのち、部分的に土砂を廃棄する。おそらく焼却のための準備である。③この竪穴の内部で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、④そこに祭祀に使用された土器群と石器群が廃棄されている。⑤祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻され、その際多量の土器残片が混入する。以上の行為は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると



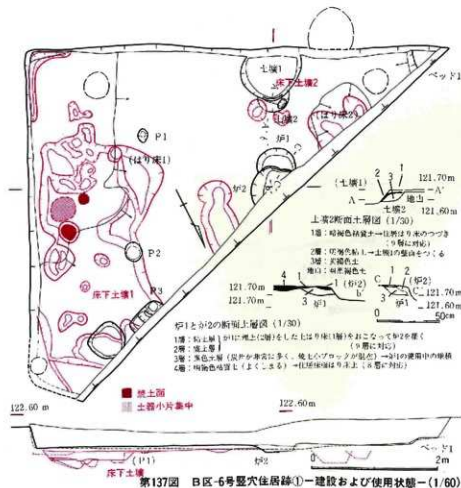
第136図 B区-5号竖穴住居跡出土遺物⑤
(54~59=1/3, 60=1/2)

○は、麻絲時一拵

推定される。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産である。9の甕は胎土に金雲母を含み、20の甕は石英を多量に含む搬入品である。1～7は在地系の壺Aで、1～4は複合口縁壺、1の口縁部外面には粗雑な櫛描きの波状文があり、5の胴部突帯には竹管文と4点一組の列点文が施される。8～17は在地系の甕Aで、15は単口縁の壺としてもよい。ヘラケズリが認められるのは搬入品と考えられる9の甕の底部外面のみである。18は内面ヘラケズリの布留系の甕Dである。19は内面ヘラケズリで口縁を貼りつけて立ち上げる外來系の甕Fで、搬入品の可能性も残る。20～22は口縁部外面まで粗いタタキが残る小型甕Aである。23～26は平底気味の底部片で、23・24は在地系の甕Aで、25・26は内面に退化した籠状ハケの施された伝統的V様式系の影響が残る甕Bである。27・28は在地系の支脚Aで割れ方からみて破砕された可能性がある。29～33は在地系の高坏Aで、34～36は脚の軸部と端部の境が明瞭な、外來系の影響を受けた高坏である。37～41は在地系の台付鉢Aで、36と37には廃棄時の穿孔がある。42・44は在地系の鉢A、43は在地系の鉢あるいは直口壺A。45は製作技法は在地系だが、外來の形態を指向した鉢である。46は小型壺Aの底部で、47は手づくねのミニチュアの鉢Aである。石器は48～57が石皿と磨石で、その内49・51・54～56は完形品。58・59は砥石で何れも破片である。60は柳葉形の鉄鏝の完形品で木質が残る。土器の大半が在地系のA類であることは特筆される。また礫石器類が多量に廃棄されている点も注目される。

以上のように廃絶時に鉄鏝の埋置を伴う廃絶祭祀がおこなわれた竪穴住居跡である。その点と位置・方向からみて、B-4住と密接な関係があったと推定される。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向からみて古墳時代前期前半の小迫土原3期に建設・使用され、廃絶の時期は、出土土器からみて同じく小迫土原3期の間と推定される。(旧A地区竪穴住居5)



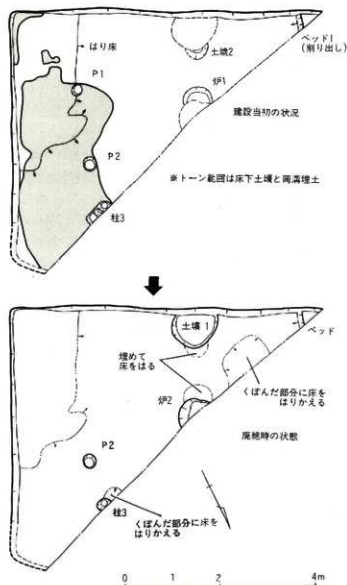
B区-6号竪穴住居跡
(第137～142図 一図版
24・47)

調査区北辺で検出された長方形の竪穴建物で、北半分は調査区外にのび、後世の多くのピットが重複している。規模は長軸長690cm以上、短軸長550cmで、深さは約40cmである。長軸の方位角は115度で北西から南東に長軸をおく。ほかの同時代の遺構とは方向が大きく異なっている。床面積は少なくとも34.0㎡以上の大型の竪穴である。竪穴を半分しか掘れなかったために柱穴は明確ではないが、その候補となるピットを3本検出した。P1とP3が当初が

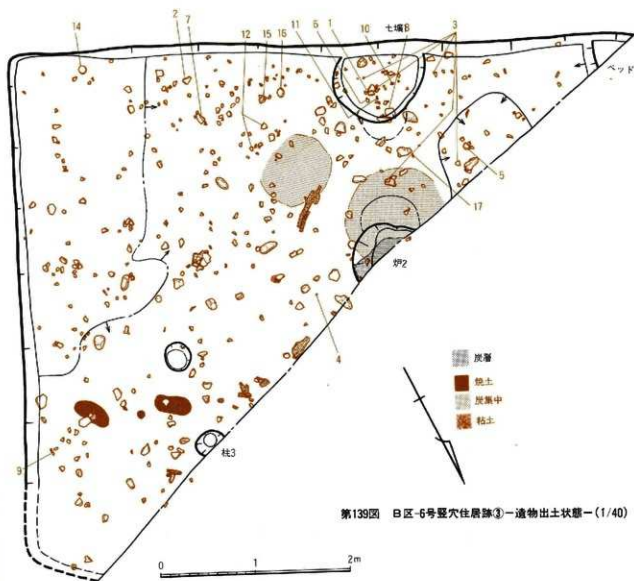
ら存在しており、柱穴ならば4本柱と考えられるが、P1はその後床が貼られていて、廃絶時にはP2とP3しかないから、2本柱の可能性も否定できない。周溝は南東隅でL字形に検出したにとどまり、全周していない。土層の観察から建設時に掘削された溝と考えられる。床面は明確な貼り床で、南西の一部をのぞいてほぼ全面に認められる。黄褐色土を敷いたもので硬くしまって光沢がある。なお後述するように炉や土壇の造り替えにあわせて床が貼りなおされている。建設時に掘られた床下土壇が第137図のように存在した。しかし凸凹で一定の形を造り出そうとしたとは思えない。その土壇の底には1箇所焼土面が発見され、小土器片が集中する地点があった。床下土壇掘削の際に火の使用があったと推定される。ベッド状遺構は削りだしベッドを西端でかろうじて検出した。炉は2箇所あり切りあっている。中央の炉2がまず検出され、周囲の貼り床をはいだ際に炉1を検出した。いずれも皿状に掘り囲め、底面には焼土面がなく代わりに炉内には多量の炭片と硬い小さな焼土塊からなる黒色土が堆積していた。通常の地床炉ではなく、焼土と灰を混ぜて炉床とした「灰床炉」である。小迫辻原遺跡ではC-10住・D-1住などで確認されている。炉1が当初の炉で、後に炉2に造りかえ、その際炉1を埋めて貼り床をおこなったものである。炉は南から北に移動したことになる。土壇は2箇所ありこれも切りあっている。南壁中央の壁に

接して設けられた土壇1は半円形の浅いもので、通常炉の南側に設けられる「対面土壇」にあたる。廃絶時まで開口していたことが埋没状態の観察から明らかである。この土壇の北側に土壇1によって大部分破壊された土壇2を検出した。この土壇も炉1と同じく貼り床されてふさがれており、造りなおされたものである。以上の遺構の造り替えをまとめると第138図のようになる。竪穴建設当初は土壇2と炉1が使われ、後に土壇1と炉2に造りなおされる。その際床のくぼみ、特に床下土壇2の付近とP3の周辺に貼り床をおこなって床を新しくしている。おそらく住んでいるうちに、かつて床下土壇を埋めた場所が下がってきたので、改築をおこなう際に床を張替えたのであろう。以上炉とベッドの存在と竪穴規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

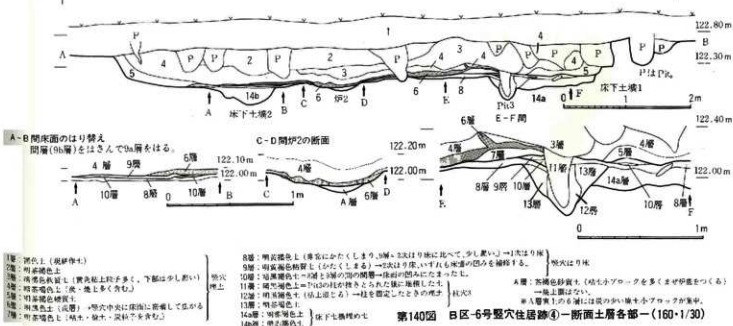
廃絶の際にはまず建物の取り壊しが行なわれて、排出土の堆積はなかったがP3では明瞭に柱の抜取痕跡が認められる。ただし焼却廃棄物が廃棄されてから抜き取られている。その後焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれる。まず床面上に炭片・焼土を多量に含む炭層（6層）が竪穴の床面全体に広がる。この層中には焼土層が点在し、炭化した木材を多量に含んでいた。おそらく焼却された建築材の名残りと考えられる。そして6層中から大量の遺物が検出されたが、床面そのものには被熱の痕跡は認められず、P3の柱は廃棄後抜き取られているので、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この6



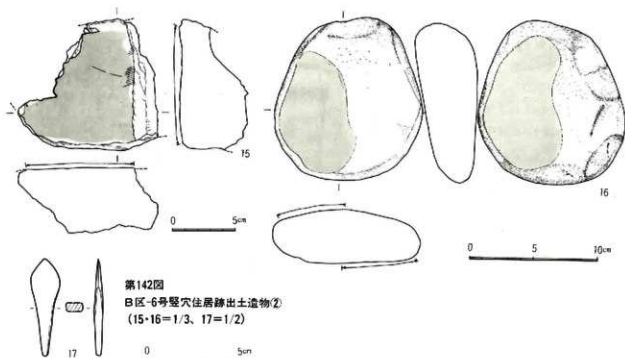
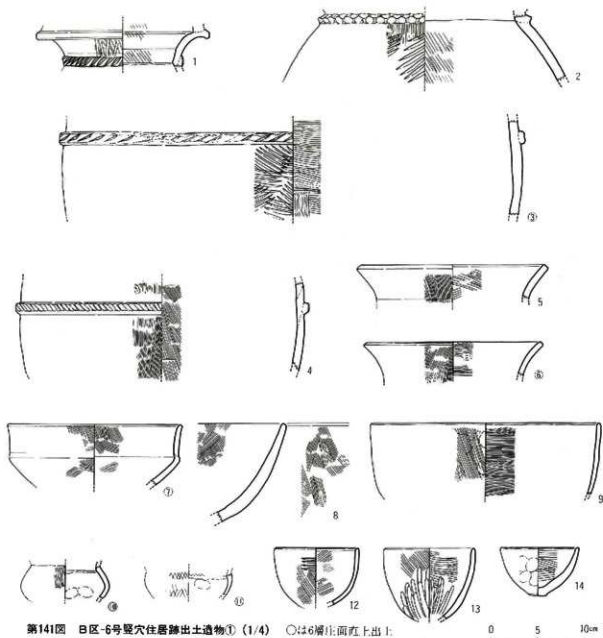
第138図 B区-6号竪穴住居跡②-実測-(1/80)



第139図 B区-6号竪穴住居跡①-遺物出土状態-(1/40)



第140図 B区-6号竪穴住居跡①-断面土層各部-(160/130)



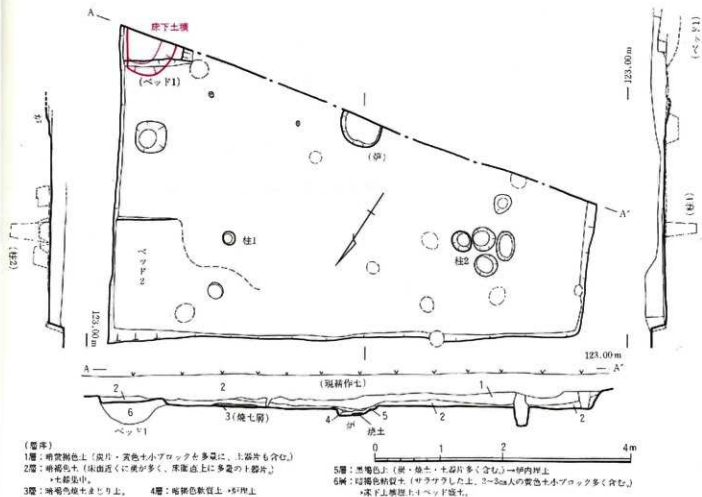
層中からは、6の焼口縁片と10・11の小型土器片が土壌1の中に流れこんで、3の壺胴部片と7の高坏片が床面に散在し、16の磨石も床面直上で検出された。また4層中ながら6層の直上に14の完形の碗が正位で置かれた状態で検出され、17の鉄鏝もその高さから出土した。さらに土器片を多量に含む5～2層が順次堆積する。この層中には炭・焼土と黄色土ブロックが多く、焼却廃棄物と遺物の一括廃棄の後に埋め戻された可能性も残るが、自然埋没の可能性も高い。上記した以外の遺物は5～2層中で検出された破片である。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の構造物を取り払われるが柱は残され、②この竪穴住居跡の外で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③祭祀の焼却廃棄物と遺物群が廃棄されている。④祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻され、その際多量の土器残片が混入する。以上の祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産である。1～4は在地系の壺Aで、1は複合口縁壺、2と3の外面には粗いタキ痕が残る。5～6は在地系の壺A、7は在地系の高坏A、8・9は在地系の鉢A、10・11は小型壺あるいは鉢で、11の形態は外来系小型鉢の影響を受けている。12・13は在地系の小型



1層：暗褐色軟質土
2層：暗褐色粘質土（炭・土器片多く含む）
第143図 B区-7号竪穴住居跡 (1/60)



第144図 B区-8号竪穴住居跡① (1/60)

鉢Aで、12にはタタキ痕が残り、13はタテヘラミガキが顕著、14は伝統的V型式系の製作技法で作られた碗Bである。石器は15が石皿の破片で16が磨石、ともに安山岩製。17は柳葉形の鉄鏝の完形品である。土器の大半が在地系のA類で、外面にタタキ痕を残すものが多い。また一部ではあるが外来系の影響が認められる。竪穴住居跡の時期は、礎設時の方向と、土器の特徴からみて古墳時代前期前半の小辺辻原2期と推定される。(旧A地区竪穴住居6)

B区-7号竪穴住居跡(第143図 一図版24)

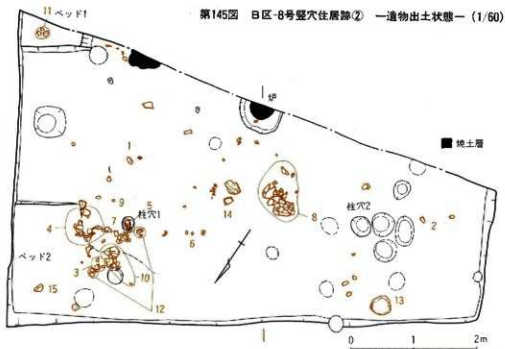
B区の東端でコーナーのみを検出した竪穴遺構で、床面が検出されたので竪穴住居跡に分類した。おそらく方形の竪穴建物であろう。規模は長軸長270cm以上、短軸長250cm以上で、深さは13cmである。長軸の方位角は60度である。床面は踏みしめられて硬化したものである。埋土は二層に分かれ、底面に炭と土器細片を含む2層が堆積する。土器はいずれも細片で図示できないが、内外面ハケメ調整の在地系の變Aの破片ばかりで、内面ヘラケズリの破片は含まれていない。竪穴の方向が周辺の小辺辻原3期の竪穴住居跡と一致するので、この竪穴も同じ時期と推定される。(旧D地区竪穴住居34)

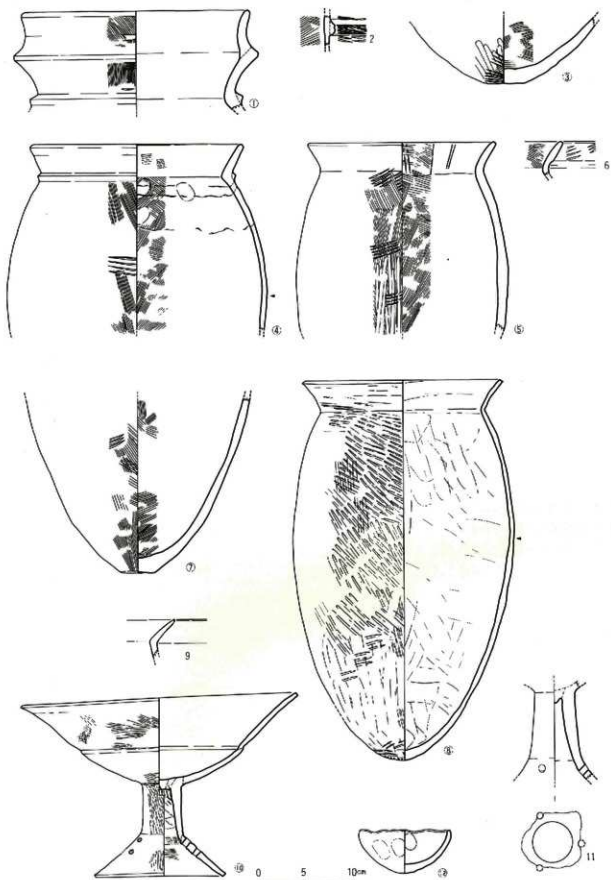
B区-8号竪穴住居跡(第144~147図 一図版24・25・48)

B区南辺で検出された東西に長い長方形の竪穴建物で、後世の溝とピットが重複していた。南半分は調査区外につづき未調査である。規模は東西長軸長760cm、南北短軸長450cmを越え、深さは約25cmである。東西長軸の方位角は60度である。床面積は50㎡前後になると推定される大型竪穴である。竪穴の平面形にあわせて配置された4本柱の構造と推定され、その内2本を検出した。床面を全部剥いだが周溝は検出されなかった。床面は踏みしめられて硬化したものである。なおベッド1の下には建設時に掘られた床下土壌が第144図のように存在した。内部の遺構としては、まずベッド状遺構が2箇所あり、東辺両隅に位置する。ベッド1は前述のように盛土で構築され、ベッド2は削りだして作られている。炉は中央にあり、皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成され、内部に焼土が堆積した地床炉である。柱穴2周辺などで数箇所小土壌を検出したが性格は不明である。以上炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

廃絶時にはまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴1の抜取後に5の甕が廃棄されていることからわかる。次に焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている。まず床面上に炭片・土器片を多量に含む暗褐色の2層が床面全体に広がる。この層中には焼土層(3層)が点在しているが、炭化材は少なかった。床面そのものには

被熱の痕跡は認められず、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この2層中からは、1の蓋口縁部片が床面につぶれて、3の甕底部・4の甕上半部・5の甕上半部・7の甕下半部・10の完形の高坏と12のほぼ完形の碗が、ベッド2から柱穴1の間で一ヶ所にまとまってつぶれた状態で検出された。そのうち5の





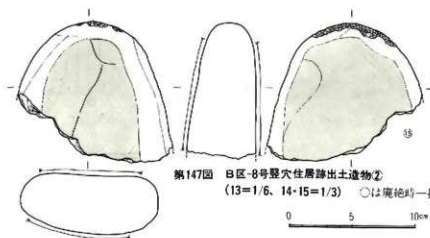
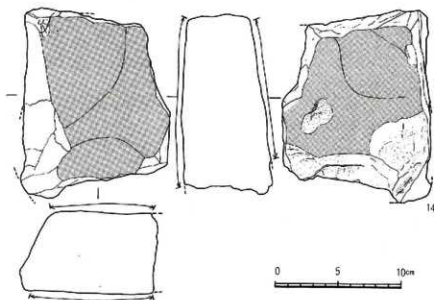
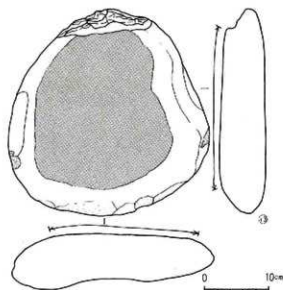
第146图 B区-8号竖穴住居跡出土遺物① (1/4) ○は廃絶時一拓

甕は柱穴抜取り後に落ち込み、10の高環は完形のまま横倒しで検出された。ほかに8の甕は中央で炭層の上について完形のまま横倒しでつぶれ、11の高環脚部はベッド1の床面上でつぶれていた。完形に復元できたものは8・10と12のみで、ほかの土器は破片が不足する。また13の完形の石皿と14の半分に割れた磨石も床面上で検出し、14の磨石は被熱している。以上の出土状態からみて、別な場所でおこなわれた祭祀後にこのような片付け方をしたものと推定される。その上に基盤層に由来する黄色土の小ブロックを多量に含む1層が堆積する。黄色土ブロックの量からみて短期間の埋没であり、焼却廃棄物と遺物の一括廃棄の後に埋め戻された可能性が高い。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の構造物を取り払われ、②この竪穴住居跡の外で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③祭祀の焼却廃棄物と遺物群が廃棄

されている。④祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻される。以上の祭祀は竪穴建替えに際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち、土器は胎土からみてすべて在地産である。甕の大部分は被熱している。1・2は在地系の壺Aで、1は複合口縁壺。3～8は在地系の甕Aで、3の底部は平底がこのころ。4は頸部に三角突帯を施す。7は底部に小さな平底を残す。8はタタキ痕がよく残り、外面下半分にタテヘラケズリを施す。9は口縁部が尖る。10・11は在地系の高環A。10は縦に2箇所の変穴をめぐらし、形態は外来系の影響を受けている。12は平ずくねの碗Aである。石器13～15は安山岩製の石皿である。土器の大半が在地系のA類で、外面にタタキ痕を残すものが多い。また一部ではあるが外来系の影響が認められる。

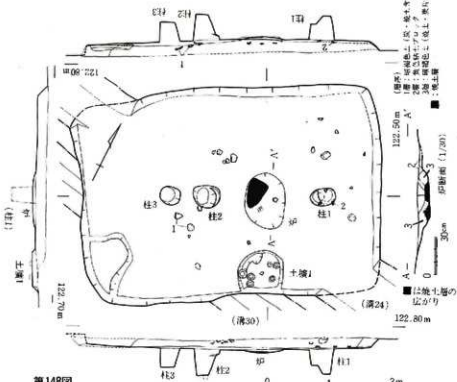


第147図 B区-8号竪穴住居跡出土遺物②
(13=1/6、14・15=1/3) ○は廃絶時一括

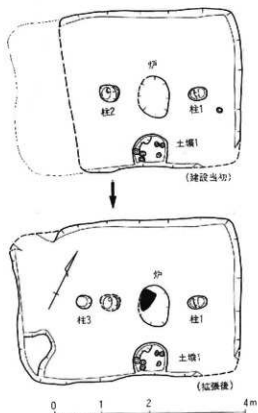
竪穴住居建設の時期は方向からみて小迫辻原3期で、廃絶の時期は土器の特徴がB-6住に近い点からみて小迫辻原3期の始めごろで、使用期間はかなり短かったのではないかと推定される。(旧D地区竪穴住居36)

B区-9号竪穴住居跡 (第148~150図 一図版26)

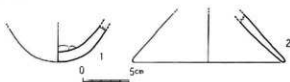
B区中央で近世の溝に切られた方形竪穴建物で、後に改築して長方形に拡張されている。規模は拡張時で東西長軸長490cm、南北短軸長340cmと東西に長く、深さは約30cmである。東西長軸の方位角は63度である。床面積は拡張後で13.7㎡の小型竪穴であり、柱穴の位置から推定して拡張前の床面積はおおよそ10㎡ほどである。柱穴は竪穴の長軸にあわせた2本柱の構造であり、拡張時に西の柱が柱穴2から柱穴3へと外側に移されている。当初の2本の柱穴の深さはよく揃っている。床面は踏みしめられて硬化したもので、当初の床面と壁を丁寧に延長して拡張したものである。周溝と床下土壌はなかった。以上のように最初はほぼ方形の2本柱竪穴建物として作られ、ある時期に西側に1mほど竪穴を拡張し、その際西柱の位置を変えている(第149図)。ベッド状遺構は存在しないが西南隅に竪穴拡張時に掘り残された低い段状の遺構が残されている。その性格は不明である。炉は1箇所のみで造りかえはない。柱穴1と2の中間に床面を皿状に掘り凹め、底部に焼土が堆積した地床炉である。拡張後も同じ炉がそのまま使われている。しかし廃絶時に残された炉内の焼土が西側にかたよって検出された点から推測して、人のすわる「座」の位置が西側から火を使うように変化したと思われる。土壌は1箇所あり、南東壁中央の壁に接し炉の位置に対応して設けられた土壌1は半円形の浅いもので、炉と同様に造りかえはなく、炉の機能と密接な関係にある「対面土壌」にあたる。小規模な竪穴建物だが、炉と土壌の存在からみて、居住用の竪穴住居とみられる。



第148図 B区-9号竪穴住居跡(1/60: 炉断面: 1/30)



第149図 B区-9号竪穴住居跡の変遷 (1/80)

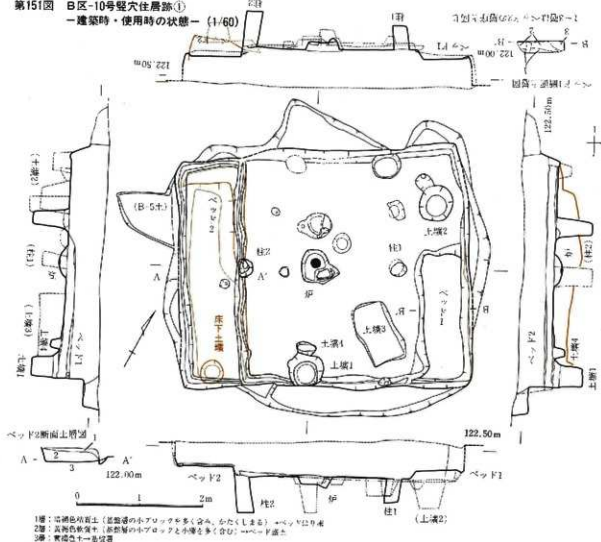


第150図 B区-9号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)

埋土は炭と焼土を含み、一部に黄色土ブロックが混入する。土器片はきわめて少なく、小片が床面に散在する。1の在地系の窠Aの底部片と2の布留系の小型器台脚部片が目立つ程度である。床面上の埋土に黄色土ブロックが目立つので埋め戻された可能性が高く、焼却廃棄物や土器の片付けも認められないので、この竪穴住居では廃絶祭祀はおこなわれていないとみられる。竪穴住居跡の時期は、建設時の方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期で、廃絶の時期は土器からみて同じ3期の間と推定される。(旧D地区竪穴住居25)

第151図 B区-10号竪穴住居跡①

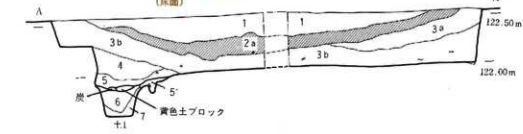
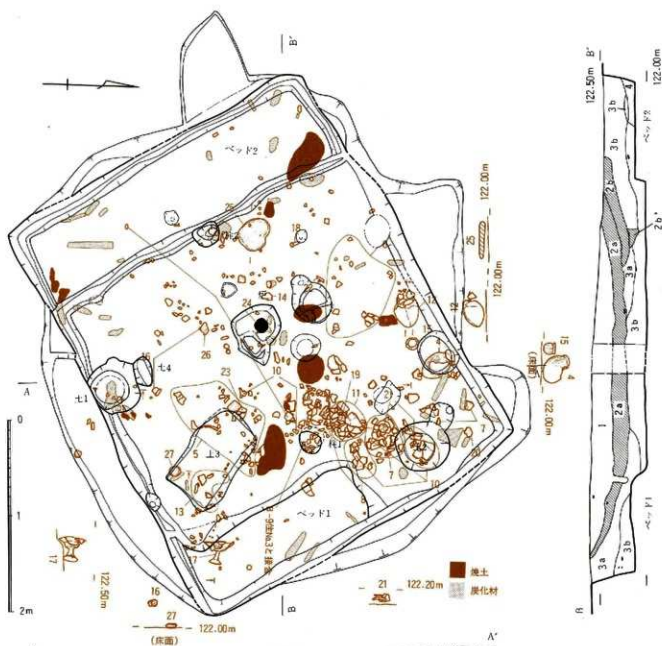
—建築時・使用時の状態— (1/60)



1層：黒褐色粘り土（瓦器等の小アブコックが多く含まれ、分たつ）→ベッド1の裏
 2層：黄褐色軟質土（赤褐色の小アブコックと小塊が多く含む）→ベッド底土
 3層：黄褐色土壌

B区-10号竪穴住居跡 (第151～156図 一図版26～28・48・49)

長方形の竪穴建物で、きわめて保存状態がよく、上部までよく残っていた。そのため円形竪穴と誤認し土層観察用土手の位置が大幅にずれてしまった。規模は東西470cm、南北390cmで、深さは約60cmである。地形との関係から判断して、当初から竪穴部分が深い構造であったと推定される。東西長軸の方位角は59度である。床面積は16.0㎡の小型竪穴である。竪穴の長軸に配置された2本柱の構造で、柱2がやや深い。ベッド1・2の背後にまで周溝が全周し、建設時に掘削された壁材固定用の溝と考えられる。特にベッド2前面の周溝はベッドの枠板材の固定用の溝と考えられる。これに対しベッド1の前面には周溝がなく、構造が異なっていた可能性が高い。床面は踏みしめられて硬化したものである。ベッド2の下には建設時に掘られた床下土壌が存在した。土壌の底には1箇所ピットがあり、土壌はベッドの範囲に対応するように掘られている。竪穴の周囲には張り出しのような段が認められる。特に南東壁の張り出しは層序の観察から遺構埋没時に形成されたものである。しかし形状は安定していないので、後述するように廃絶後に竪穴を埋めた際の掘り崩しの痕跡である可能性が高い。ベッド状遺構は2箇所あり、東西両辺に配置されている(第151図)。いずれも構築方法は盛り土によるものであるが、ベッ



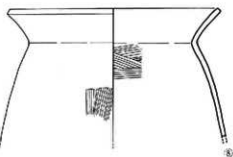
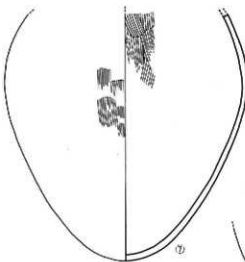
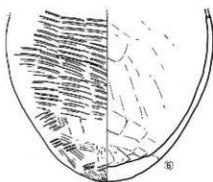
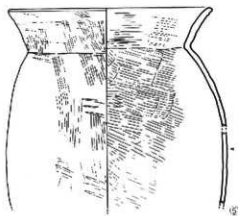
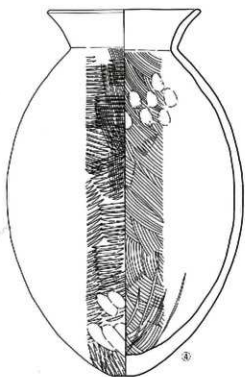
上層
1層
4.

5層：小穴の底
6層：赤褐色軟土（大きくくき、炭・灰色粘土ブロック含む）
7層：黄褐色軟土（成人物なし）→アライになった上

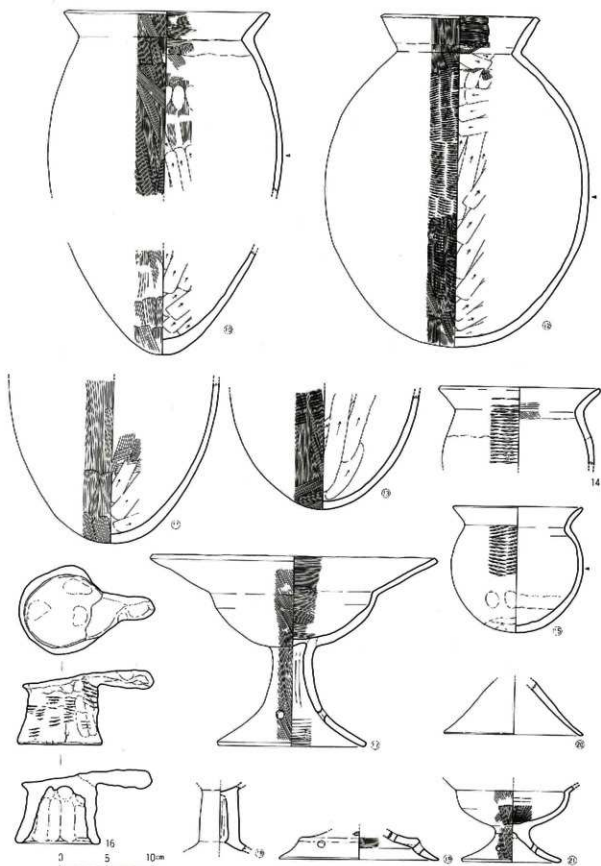
1層：赤褐色土（砂質で土層片多く含む）
2a層：赤褐色土（中部に、黄褐色土層山小ブロックあり）
2b層：灰色土（片断で、土層片まじり）
2b'層：赤褐色土（2b層の下に25%程度にあり）
3a層：暗黄褐色土（1層の、炭・灰・灰色粘土片多く含む）
3b層：暗黄褐色土（3a層より黒い、炭・灰土多量に混じる）
4層：暗褐色土（炭・灰色粘土小ブロック含む）
5層：灰褐色土（炭・黄灰材片含む）→上層1の上層片→埋戻土の相違。

自然埋積層か、
アライして判
用されている
2層を土、人為的な埋積層
層に含む

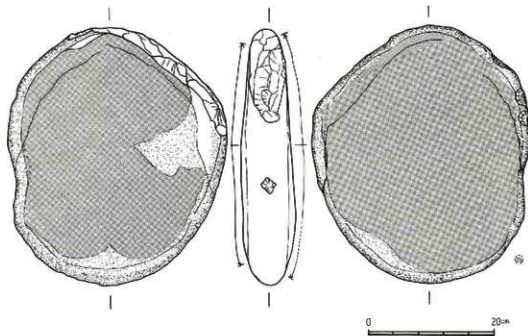
第152図 B区-10号整穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一 (1/40)



第153图 B区-10号竖穴住居跡出土遺物①(1/4) ○は麻糸跡一括



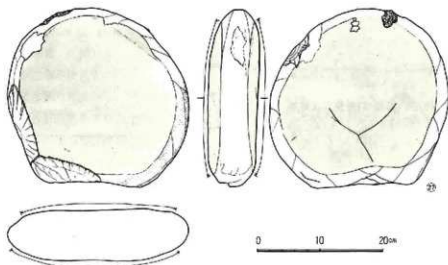
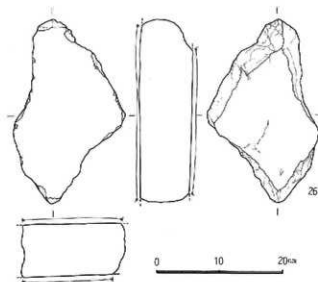
第154图 B区-10号竖穴住居跡出土遺物② (1/4) ○は焼絶赤一拵



D1は水平な床面からそのまま盛り土し、ベッド2は前述したように床下土壌を掘った後に盛り上げているという違いがある。なお背後の周溝の深さがベッドの高さの中に納まっている点からみて、ベッドは双方とも建設当初につくられたものである。炉はほぼ中央に1箇所あり、皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成された地床炉である。土壌は4箇所あり、南東壁中央の壁に接して設けられた土壌1は円形で、炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。きわめて深い点が通常の対面土壌と異なっている。廃絶時に堆積した土の一部が内部に落ち込んでいるので最後まで開口していたことは明らかである。その土壌の北側に近接して掘りこまれた土壌4は、C-1住やB-5住で検出された入口施設の構造とよく似ているので、梯子を固定するための穴と推定される。土壌2は床面で検出したが、土壌3は埋土上面が硬化しており、廃絶時にはすでに埋められている。以上、炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

廃絶時にまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴の上に土器あるいは焼土が廃棄されていたことからわかる。次に焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている(第152図)。まず南側の一部に土器を含まない5・4層が、おそらく壁を掘り崩して廃棄される。そして床面上に炭片・焼土を多量に含む淡黒褐色の3層が、竪穴の床面全体に広がる。この層には焼土層と炭化した木材を多量に含む多量の遺物一括廃棄が認められる。床面そのものには被熱の痕跡は認められないので、竪穴内部で焼却がおこなわれたとは考えられないが、この竪穴廃絶時の焼却行為の片付けが、この竪穴を対象に行なわれた点を指摘できる。さてこの3層の焼却廃棄物におおわれた遺物の出土状態は、竪穴の床面に完形のまま置かれたものと、3層廃棄の直前あるいは同時に一括して大型破片のまとまりとして廃棄されたものに分けることができる。完形のまま置かれたものは、まず側面に穿孔のある4

の甕が北壁にもたれ掛かり、そのそばに12の甕が横倒しで出土し、ふたつの甕の間に15の小型甕が正位で置かれていた。また17の高環はベッド1上から倒れたように横倒しで検出された。さらに25の完形の石皿もベッド脇に置かれた状態で出土し、この石皿は被熱して剥離している。以上は焼却廃棄物と遺物の一括廃棄がおこなわれる直前に置かれたものである。次に大型破片のまとまりで廃棄されたものは5～11・13の甕と18・19の高環、20の小型器台、21の台付鉢、22の鉢と23の碗である。その内5・8は上半のみを、6・7・11・13は下半のみが出土し、10は破片が分散していたが完形に復元できた。20は炭化材の下になっていた。21の口縁を失った台付鉢が7の甕の破片の上に逆さまに置かれていた。また27の小型の石皿も炭化材の上ののって出土

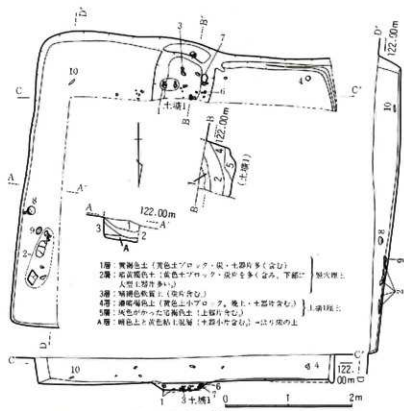


第156図 B区-10号竪穴住居跡出土遺物④(1/3) ○は廃絶時一括

した。さらに興味深いことに、11の甕の近くで出土した壺の破片が、B-4住の3の壺Dと接合した。ところで3層には黄色土ブロックが多量に含まれ、また完形で出土した土器はまったくつぶれていないので、焼却廃棄物と遺物・一括廃棄のあと3層の土が埋め戻されたと推定され、その際3層上部に16の支脚が折られて廃棄されたと推定される。その後は放置され、ゴミ穴に使用されながら自然埋没したと推定される(2・1層)。2層以上に混入した遺物は、1～3の壺片、24の七製紡錘車、26の石皿の破片がある。

出土遺物のうち、土器の大半は胎土からみて在地産であるが、7の甕・20の小型器台・23の碗は搬入品の可能性がある。また甕と支脚はどれも被熱している。1～3は在地系の壺Aで、1・2は複合口縁壺。3は突帯の刻みを交差させる。4～14は在地系の甕Aだが、4・5・14のように外面にタタキ痕が顕著で内面にケズリのない甕と、10～13のようにタタキをハケで消し内面にヘラケズリが施される甕がある。15の小型甕は伝統的V様式系の系譜を引く甕Bである。16は在地系の支脚A、17は在地系の高環Aで、18・19は外来系の高環、20は外来系の小型器台、21は在地系の台付鉢A、22は在地系の鉢A、23は在地系の碗Aである。24は手すくねの完形の紡錘車である。石器は、25～27は石皿でいずれも安山岩製である。土器の大半が在地系のA類であるが、小型器種のなかには外来系の技術で作られたものが目立つ。

以上この竪穴住居跡は位置・方向と土器の接合関係からみて、B-4住と密接な関係があったと推定される。竪

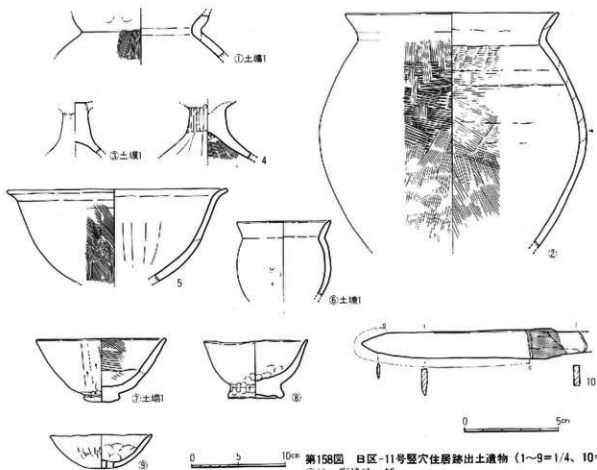


第157図 B区-11号竪穴住居跡 (1/60)

穴住居跡の時期は、その方向からみて古墳時代前期前半の小迫辻原3期に建設・使用され、廃絶の時期は、出土土器からみて同じく小迫辻原3期後半と推定され、B-4住と同時に廃絶した可能性も考えられる。(旧D地区竪穴住居24)

B区-11号竪穴住居跡 (第157・158図 一図版29・49)

稚蚕飼育所の給水塔によって大部分が破壊された方形の竪穴建物である。規模は東西480cm、南北480cmでほぼ正方形になる。深さは約40cmである。南北軸の方位角は6度で、ほぼ真北である。床面積は20.2㎡と復元される中型の竪穴である。柱構造は不明で、周溝は南西部に部分的に確認される。床面は黄色粘土を混ぜた土を厚く敷いた貼り床である。残された遺構の中には床下



第158図 B区-11号竪穴住居跡出土遺物 (1~9=1/4、10=1/2)

○は、廃絶時一括

土壌は存在しない。ベッドや炉は不明というほかないが、土壌は1箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた「対面土壌」にあたる。廃絶時に堆積した土が内部に落ち込んでいるので最後まで閉口していたのは明らかである。

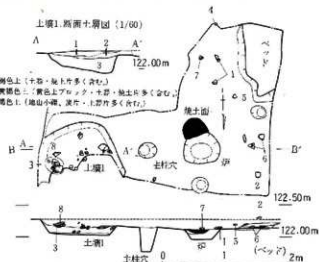
この竪穴では焼却廃棄物の廃棄はおこなわれていないが、祭祀行為に伴う土器の一括廃棄が認められる。まず南側の閉口していた土壌1内に流入した5・4層中に、1の壺頸部片・3の高坏脚部・6の小型壺片、7の碗が、破片の状態で廃棄される。そのうち6は被熱し7は完形で復元できた。次に竪穴の周縁に暗褐色の3層が部分的に堆積する。そこでは4の高坏脚部と10の刀子が単独で検出された。そして炭片と黄色土ブロックを多量を含む暗黄褐色の2層が堆積する。この層の下部の北東壁ぎわに遺物一括廃棄が認められる。2の甕は大型破片で重なり、そのそばで8の台付鉢と9の碗が完形のまま正位で置かれた状態で検出された。2と9は床面に密着し8はやや浮いていた。また2の甕は被熱し、9の碗には穿孔が施されている。さらに黄色土ブロックと炭を多量を含む1層が堆積し、5の鉢片が混入する。以上の出土状況から竪穴廃絶時の祭祀行為に使用された土器を供獻あるいは廃棄したものと考えられるが、焼却行為は行なわれていない。さらに2・1層中に基盤層に由来する黄色土ブロックが多量に含まれる点から、廃棄後埋め戻された可能性が高い。

出土遺物のうち土器はすべて胎土からみて在地産である。1は在地系の壺Aで、2は伝統的V様式系の影響が残る在地系の甕A。3・4も伝統的V様式系の系譜をひく高坏B。5・6は在地系の鉢Aと小型壺A。7・8は伝統的V様式系の技法による碗B。9は在地系の碗Aで穿孔がある。10は刃渡り8、7cmの鉄製刀子で、柄の木質が付着する。土器の多くが伝統的V様式系の系譜をひくB類であることが注目される。

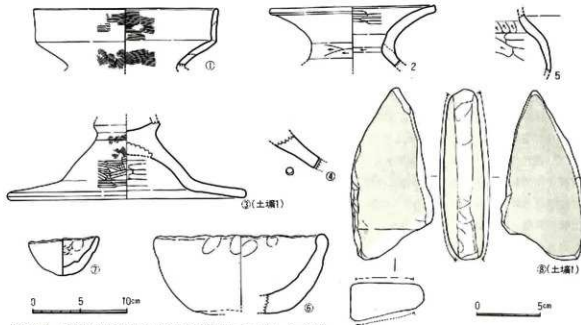
竪穴住居跡の時期は、その方向と竪穴形態から古墳時代前期前半の小迫辻原4期と推定されるが、廃棄された土器は小迫辻原2期とみてもおかしくないものである。後H再検討したい。(旧D地区竪穴住居26)

B区-12号竪穴住居跡(第159・160図 一図版29・49・50)

B区の西端でその一部を検出した長方形と推定される竪穴建物で、稚童何育所の建物建設で大規模に破壊され、B-36土



第159図 B区-12号竪穴住居跡(1/60)

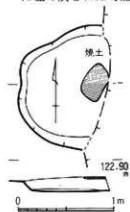


第160図 B区-12号竪穴住居跡出土遺物(1~7=1/4, 8=1/3)

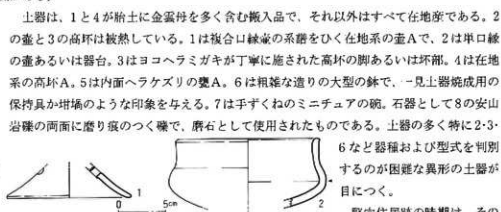
○は廃絶時一括

墳(弥生時代前期末)を切っている。その規模は東西365cm以上、南北290cm以上で、ベッドの位置などから推測して東西に長いと思われる。深さは約15cmである。わずかに残った東壁の方向と炉と柱穴の並びから推して東西に長軸をもち、その方位角はおおよそ90度前後で、B-11住の方向とに近いものと考えられる。柱穴は1本のみ検出したが、炉との位置関係からみて2本柱の構造となろう。床面は踏みしめられて硬化したものである。床下土壌は見つかっていない。削りだして造られたベッド状遺構が1箇所ある。炉はほぼ中央に1箇所あり、皿状に掘り回めた地床炉で、外側南に焼十面がある。土壌は1箇所、東壁に接して設けられたものであり、廃絶時には埋没していた可能性が高い。炉とベッドの存在とその規模からみて、この竪穴建物は何れも居住用の竪穴住居とみられる。

埋土(1・2層)は土器片と炭・焼土と黄色土ブロックをかなり含む暗褐色軟質土で、土器は破片となって床面全体に散在する。なかでも3の高坏らしい脚部と8の異形の磨石は土壌1の上面からまともに出てきた。他に1の壺口縁片、4の高坏片、6の異形の鉢片が床面上で検出され、7の柄は完形のまま正位で置かれていた。また2の壺らしい口縁部と5の甕片はやや浮いて出土した。以上の出土状況から竪穴廃絶時の祭祀行為に使用された土器を供献あるいは廃棄したものと考えられ、さらに2・1層中に黄色土ブロックが多量に含まれる点から、廃絶時に埋め戻された可能性がある。



第161図 B区-47号土壌 (1/40)



第162図 B区-47号土壌出土遺物(1/4)

土器は、1と4が粘土に金雲母を多く含む輸入品で、それ以外はすべて在地産である。2の壺と3の高坏は被熱している。1は複合口縁部の系譜をひく在地系の壺Aで、2は単口縁の壺あるいは器台。3はヨコヘラミガキが丁寧に施された高坏の脚あるいは坏部。4は在地系の高坏A。5は内面ヘラケズリの甕A。6は粗雑な造りの大型の鉢で、一見土器焼成用の保持具か柑桶のような印象を与える。7は手すくねのミニチュアの碗。石器として8の安山岩礫の両面に磨り痕のつく礫で、磨石として使用されたものである。土器の多く特に2・3・6など器種および型式を判別するのが困難な異形の土器が目につく。

竪穴住居跡の時期は、その方向と竪穴形態および出土土

器からみて古墳時代前期前半の小迫辻原4期と推定される。(旧D地区竪穴住居31)

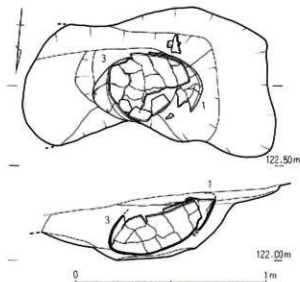
2) 土壌 (第3・6表)

B区-47号土壌 (第161・162図 一図版29)

B-10作近くのK1調査区で検出された不定形の土壌で、B-2溝(中世)に東半分を破壊されている。規模は長軸長132cm、短軸長90cm以上、残存部の深さは16cmで、底面は平坦である。埋土はサクサクした暗褐色の単一層(1層)で、黄色土小ブロックと土器片を含み、検出面で焼土の堆積を検出した。1の高坏あるいは小型器台の脚部片と2の在地系の鉢Aの破片が含まれていた。この土器からみて土壌の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原2ないし3期と推定される。(旧D地区土壌486)

3) 墓 (第4・6表)

1墓の小児土器植壺が単独で発見されている。方向は他の遺構と一致しない。

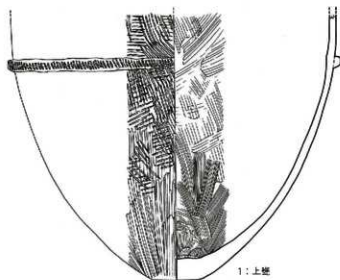


第163図 B区-8号墓(1/20)

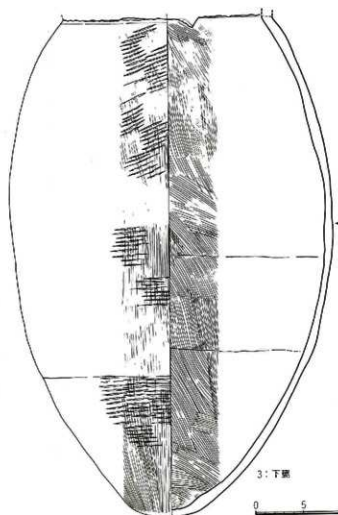
B区-8号墓

(第163・164図 一四
版30・50)

J2調査区で検出
された合口甕棺墓で、
下甕に壺を被せてい



1: 上甕



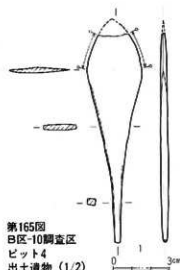
3: 下甕

0 5 10cm

る。上半はかなり削平されている。墓壙の平面形は土器の形にあわせた変形二段の楕円形で、規模は上段で長軸長133cm、短軸長72cm、深さは9cmである。下段の規模は長軸長105cm、短軸長56cmで、深さは30cmである。土器の大きさからみて小児用の甕棺墓で、上甕の方向から西頭位と推定される。頭位の方は方位角で260度である。甕棺内の土はすべてふるいにかけてが、遺物は検出できなかったので副葬品はなかったと推定される。また下甕の内面に赤色顔料の塗布が認められた。

上甕に使われた1は在地系の壺Aで、上半をきれいに除去している。胴部に突帯があり、刻目の代わりに平行タキで条線を施す。底部下半はタキ痕を直接ヘラミガキで消している。下甕に使われた3は在地系の壺Aで、口縁をきれいに打ち欠き、その一部と思われる2の甕口縁部も出土している。また3は被熱の痕跡が明瞭で、実用品を転用したことがわかる。両者の壺甕ともに底部は平底気味で、タキ痕が残る点からみて、埋葬の時期は古墳時代前期前半の小迫辻原1ないし2期と推定される。(旧D地区2号甕棺=墓3)

第164図 B区-8号墓出土遺物(1/4)



第165図
B区-10調査区
ビット4
出土遺物 (1/2)

4) ビット (第122・165図 一図版50)

10調査区ビット4から先端部の破損した1の残長11cmを超える大型の柳葉形鉄鍔が出土している。装着痕は認められない。あるいは故意に埋納された可能性もある。

第5節 奈良時代 第167図)

この時期にあたる遺構は少なく、竪穴住居跡1軒を確認したのみで、ほかにビット1本を本文に掲載した。この時代の遺構はまだ存在したであろうが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

1) 竪穴住居跡 (第1・6・8表)

B区-13号竪穴住居跡 (第166・168・169図 一図版31・50)

J0・J19調査区で検出された東カマドの方形の竪穴建物で、後世の柱穴がかなり重複している。その規模は南北長軸長370cm、東西短軸長350cmで正方形に近い。検出面からの深さは約10cmである。南北軸の方位角は2度でほぼ北である。床面積は10.5㎡の小型の竪穴である。柱穴はなく無柱穴の構造の上屋であったと推定される。同溝・床下土壌・ベッドはない。床面は踏みしめられて硬化したものである。カマドは存在するが床面積はあまりに小さく、上屋構造も簡易なものと考えられるので、居住用の竪穴住居というよりも炊事用のカマドと考えるのが妥当であろう。

カマドはその上部が壊れているので、下部構造のみを検出できた。まず大きくカマドの基礎を造るための掘り込みをおこない、煙道となる地点は竪穴から大きく飛び出すように溝をのぼしている。黄色土ブロックが多く混じる土(3層-第168図)を使って掘り込みを埋めつつ、炉床と煙道を造っている。その炉床の上に同じく黄色土ブロックを混ぜた2層の土でカマドの袖と奥壁を構築している。見大きく基礎土壌を掘って改めて埋めるのは無駄な工程のように思われるが、おそらく除湿や基礎固めなどの効果をねらったものであろう。竪穴南東隅のカマドのそばに、小土壌が1箇所ある。内部には炭・焼土と土器片を多量に含む黒灰色粘質土が堆積し、カマドの掻きだし土と見られるので、この土壌はカマドと関連する施設と推定され、廃絶時に堆積した土が内部に落ち込んでいるので最後まで開口していたことは明らかである。

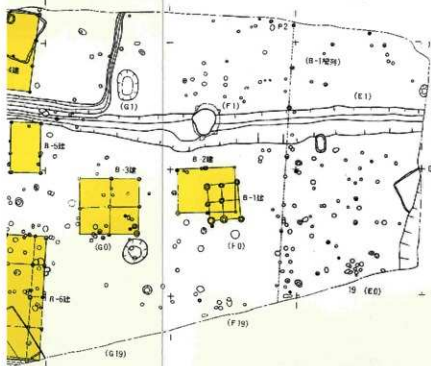
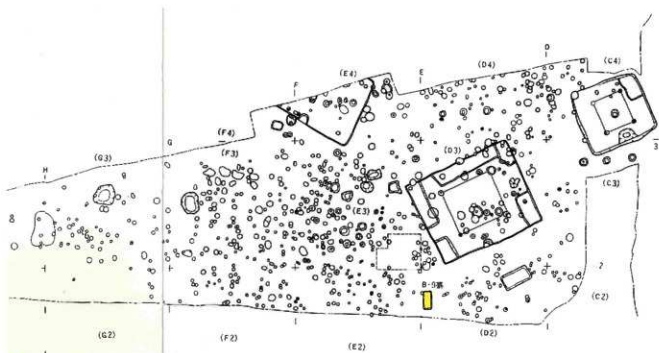
竪穴廃絶時に徹底的に破壊されていて、焼土・炭混じりの層と青灰色の粘土層が、カマドの跡からその南の床面上にかけて堆積し、土壌1の内部におよんでいた。青灰色粘七層におおわれた床面直上で1の須恵器坏身口縁部片が検出され、



第166図 B区-13号竪穴住居跡 (1/60)

第167図 小迫辻原遺跡B区遺構配置図⑤
 -奈良時代・中世- (1/300)

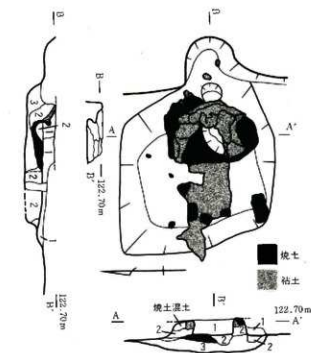




2の焼塩用製塩土器は土壌1内に破片が集中しカマドから掻きだされた焼土の下から検出された。おそらくカマドを破壊した際に破砕されて廃棄されたもので、カマド祭祀の痕跡と推定される。竪穴の埋没状態は残存部が浅いため自然埋没かどうかは不明であるが、床面から3の砥石の破片が出土した。

出土遺物のうち、2は逆錐形の焼塩用製塩土器で、胎土に石英を多量に含む搬入品である。その特徴からみて、北部九州玄界灘沿岸の生産地からの搬入であろう。3の砥石はよく使い込まれており、廃品を捨てたと見られる。

以上の出土土器からみて8世紀中ごろから後半の奈良時代の遺構と推定される。(旧D地区堅穴住居33)



第168図 B区-13号竪穴住居跡のカマド (1/30)

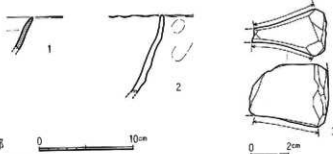
(層序)

- 1層: 焼塩土(径41~50cmの胎土アロークと、3~5cm大の塊色の焼けた粘土アロークを多く含む)→カマドの上層部焼土の崩落土。
2層: 埋没焼土(灰・焼土・褐色アロークを含む)→カマド下部焼土。
3層: 埋没褐色土(焼土・褐色アロークを含む)→カマド下部焼土。

第168図 B区-13号竪穴住居跡のカマド (1/30)

2) ビット (第170図、第6表)

F2調査区ビット2から1の須恵器坏身の底部片が出土した。やはり奈良時代の製品である。



第169図 B区-13号竪穴住居跡出土遺物 (1・2=1/4、3=1/2)

第6節 中世 (カラー図版、第167図 一巻頭図版13・図版3)



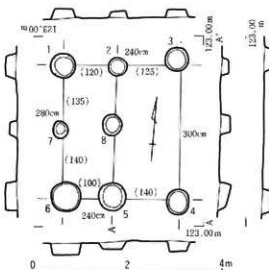
第170図 B区-F2調査区ビット2出土遺物 (1/4)

この時期にあたる遺構はきわめて多く、掘立柱建物跡11棟・土壌8基・墓1基と溝3条を確認した。そのほかにビット6本を本文に掲載した。この時代の遺構はまだ存在するであろうが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかった。

遺構の配置は、B区中央を南北に縦断するB-2溝の東西で大きく異なる。その西側には遺構はきわめて少なく、性格不明の二・三の土壌と溝が残されているのみである。攪乱はひどいが削平の状態は東側とそれほど変わらないので、中世の遺構は現状より多くは存在しなかったと推測される。これに対し東側は掘立柱建物とそれに関連する土壌が密集し、とくにB区南部に集中する。また建物群がなくなるF1・F0調査区では、50m近く隔れているにもかかわらずB-2溝に並行する南北のビット列を検出した。B区-1号

欄列としたが、延長上のH B地区のE 2・E 3調査区では対応するピットを認定できなかったので、今回は中世の遺構とは認定しなかった。今後の周辺調査の結果によって再考したい。さらにその外側にB-9墓が1基存在した。

B-2溝は陸橋をもち、そこは明らかに特定の空間への入り口となっている。掘立柱建物が立ち並ぶ位置からみて、東側が空間の内部であり、建物群は溝に画された広大な広がりの中に配置されていたことは明らかである。溝の方向と建物の方向がよく一致する点もそのことを裏付けている。おそらくB-2溝を西辺の区画施設とする方形の区画があり、その方形区画と方向をあわせて掘立柱建物群が展開する中世の館跡と推定される。南北の区画は調査区内では検出されず、東の区画かと調査時に考えたB-1欄列は確証をえられなかったので、その規模を明示できないが、おそらく一辺が50mをこえる半町四方、あるいはそれより大きな規模のものと推定される。そして館跡の内部構造としては、門あるいは堀などの施設の痕跡は検出できなかったものの、B-2溝の陸橋から掘立柱建物群にかけて建物のない空間が存在しており、広場=庭の存在が推定される。中心施設は扉をもつ大規模なB-9建物とB-6建物である。また内部には井戸は存在しない。これは让原台地の地下水位が低いためで、中世のみならず全時代を通じて井戸は存在しない。



第171図 B区-1号掘立柱建物跡 (1/80)

ところでB-9建物の西側すなわち前の正面にB-10建物とB-11建物が重複して存在しているので、この二棟はB-9建物と同時に建っていたとは考えられない。したがってB-9・10・11建物は時期を異にする建物である。そうすると少なくとも館内では2回の建直しつまり、3小期の変遷があったことになる。

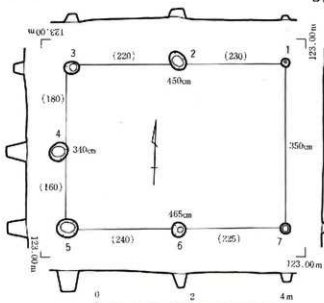
この館跡の時期は出土遺物が少なくかつ断片的なので、はっきりとはしないが中国製磁器などからみて中世前期の13世紀後半を中心とする時期、すなわち鎌倉時代の可能性がもっとも高く、A区の屋敷群とほぼ同じ時期と推定される。

この館跡の時期は出土遺物が少なくかつ断片的なので、はっきりとはしないが中国製磁器などからみて中世前期の13世紀後半を中心とする時期、すなわち鎌倉時代の可能性がもっとも高く、A区の屋敷群とほぼ同じ時期と推定される。

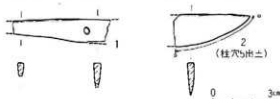
1) 掘立柱建物跡 (第2・6・9表)

B区-1号掘立柱建物跡 (第171図 一版収31)

掘立柱建物群の東端で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、B-2建物と重複している。東の梁を支える柱穴が1本未検出である。四隅の柱穴が大きく、かつやや深く掘られている。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約300cm、東西短軸長約240cmをはかる。床面積が約7.0㎡の小型の建物で、倉庫と推定される。長軸の方位角は173度の南北棟である。建物の方向がほかの掘立柱建物と異っており、あるいは中世では



第172図 B区-2号掘立柱建物跡 (1/80)



第173図 B区-2号掘立柱建物跡出土遺物 (1/2)

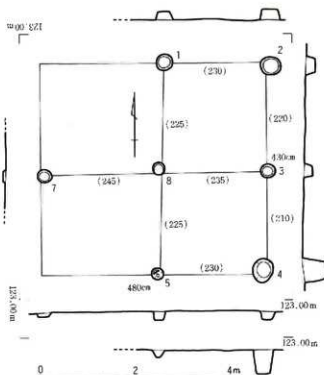
ないかもしれない。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物29)

B区-2号掘立柱建物跡 (第172・173図 一図版31・50)

同じく掘立柱建物群の東端で検出した2間×1間の掘立柱建物跡で、B-1建物と重複している。柱穴4はあるいはこの建物の梁を支える柱の穴かもしれない。柱穴の大きさはまちまちだが、深さはおおよそ揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約465cm、南北短軸長約350cmをはかる。床面積が約15.9㎡の小型の建物で、長軸の方位角は89度の東西棟である。建物南西コーナーの柱穴5から、同一個体と推定される1・2の鉄製小刀の破片が2点出土している。建物建設あるいは廃絶時の祭祀行為にかかわる可能性がある。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物35)

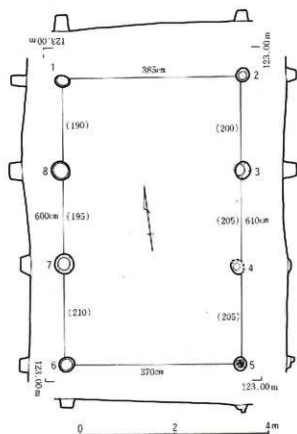
B区-3号掘立柱建物跡 (第147図 一図版32)

B-2建物の長軸延長線上で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、二本のコーナーの柱の穴

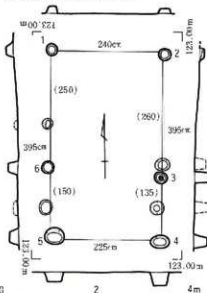


第174図 B区-3号掘立柱建物跡 (1/80)

が未検出である。残る二隅の柱穴は大きくかつやや深く掘られている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約480cm、南北短軸長約430cmをはかる。床面積が約21.5㎡と推定される中型の建物で、簡易な倉庫と推定される。長軸の方位角は89度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物34)



第175図 B区-4号掘立柱建物跡 (1/80)



第176図 B区-5号掘立柱建物跡 (1/80)

B区-4号掘立柱建物跡 (第175図 一図版32)

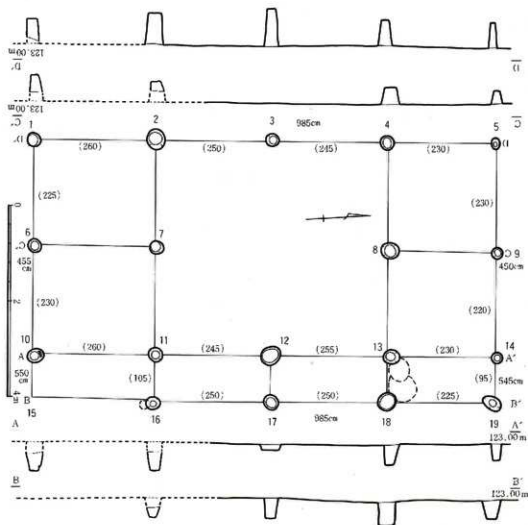
B-6建物の長軸延長線上の掘立柱建物群北端に位置する3間×1間の掘立柱建物跡である。南北の梁を支える柱の穴はみあたらない。柱穴の大きさと深さはおおよそ揃っている。柱間寸法は、中心距離で南北長軸長約610cm、東西短軸長約385cmをはかる。床面積が約22.9㎡の中型の建物で、長軸の方位角は8度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物30)

B区-5号掘立柱建物跡 (第176図 一図版32)

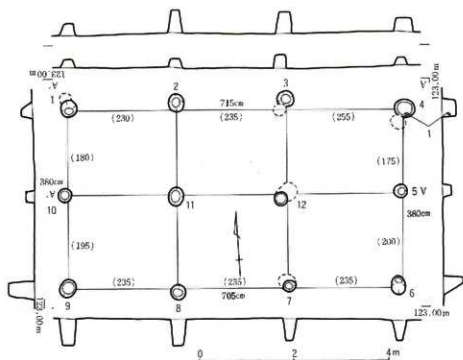
B-4建物とB-6建物の中間に方向を一致させて建てられた、やや変則な2間×1間の掘立柱建物跡である。桁行の柱穴3と6が偏った位置にある。四隅の柱穴が大きい、深さはおおよそ揃っている。柱間寸法は、中心距離で南北長軸長約395cm、東西短軸長約240cmをはかる。床面積が約9.3㎡の小型の建物で、長軸の方位角は3度の南北棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物31)

B区-6号掘立柱建物跡 (第177図 一図版33)

建物群の中央に位置し、東側に廂の付く4間×2間の掘立柱建物跡である。廂南端の柱穴は調査区外になる。建物内部に床を支える東柱が二本検出された。柱穴の大きさはまちまちだが、梁間と東柱である柱穴6~9の深さが浅い傾向にある。柱間寸法は、中心距離で南北長軸長約985cm、東西短軸長約455cmをはかり廂を含めると545cmである。床面積は約44.5㎡で廂部分を含めると53.8㎡となる大型の建物で、長軸の方位角は4度の南北棟である。



第177図 B区-6号掘立柱建物跡 (1/80)



第178図 B区-7号掘立柱建物跡 (1/80)

さが浅い傾向にある。柱間寸法は、心点距離で東西長軸長約715cm、南北短軸長約380cmを測る。床面積が約26.7㎡の中型の建物で、床をもつB-6建物の崩壊的な建物と推定される。長軸の方位角は92度の東西棟である。

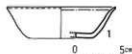
東北コーナーの柱穴4の掘り内から1の口先の白磁皿の破片が出土している。建物建設時に入ったものである。コーナー柱に入っている点と一般に副葬品として陶磁器片を納める例があり、小泊辻原遺跡でもB-9窟でも類例があるので、あるいは建物建設時の地鎮的な意味を含めた磁器片埋納である可能性もある。この白磁からみて建物の時期は13世紀後半を前後する鎌倉時代の遺構と推定される。(旧D地区掘立柱建物28)

B区-8号掘立柱建物跡 (第180図 一図版33)

B-7建物と重複する2間×2間の掘立柱建物跡である。東の梁を支える柱の穴はみあたらない。柱穴の大きさと深さはおおよそ揃っているが、柱穴6・7が浅い。柱間寸法は、心点距離で東西長軸長約400cm、南北短軸長約335cmをはかる。床面積が約13.3㎡の小型の建物で、長軸の方位角は92度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物36)

B区-9号掘立柱建物跡 (第181・182図 一図版33・36・50)

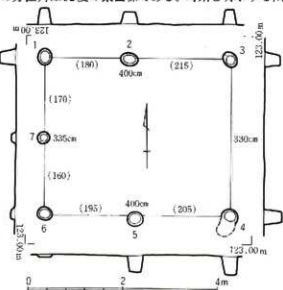
B-6建物の背後にそれと並行して建てられた桁行2間以上、梁間2間の廂付き掘立柱建物跡で、南半分は調査区外になる。B-6建物とは正反対の方向に廂をつける。柱穴の大きさと深さはよく揃うが、廂を支える柱穴8～10は浅い。柱間寸法は、心点距離で南北長軸長約490cm以上、東西短軸長約560cmをはかり廂を含めると650cmである。床面積は約30.6㎡以上で廂部分を含めると36.7㎡以上となり、復元すると60㎡前後の大型の建物となろう。検出された掘立柱建物のなかでは最大の建物となる。長軸の方位角は0度の南北棟である。



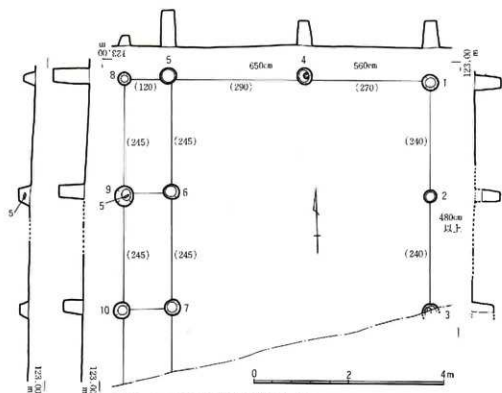
第179図 B区-7号掘立柱建物跡出土遺物(1/4) 時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区掘立柱建物32)

B区-7号掘立柱建物跡 (第178・179図 一図版33・50)

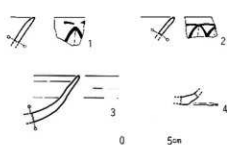
B-6建物の背後にそれと直交して建てられた3間×2間の総柱の掘立柱建物跡で、柱穴の大きさは揃うが、梁間と床を支える束柱である柱穴5・10・11・12の深



第180図 B区-8号掘立柱建物跡 (1/80)



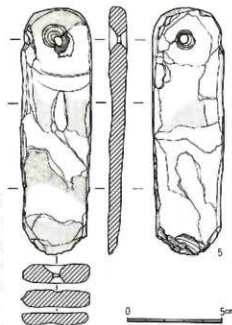
第181図 B区-9号掘立柱建物跡 (1/80)



第182図 B区-9号掘立柱建物跡出土遺物
(1~4=1/4, 5=1/2)

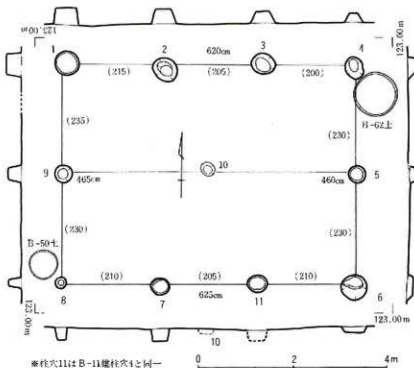
東北コーナーの柱穴1から1の青磁碗の口縁片が、柱穴7から2の青磁碗の口縁片が、北西コーナーの柱穴5から3の青磁碗の口縁片と4の土師質土器の小片が出土した。建物建設時あるいは廃絶時の磁器片埋納である可能性が高く、通常1箇所みの場合が多いが、この建物では3箇所に見られ、おそらくこの建物がこの館跡の掘立柱建物群のなかで、最大の建物であることと関係するのであろう。また柱穴9の柱痕内から5の携帯用砥石の完形品が出土している。建物廃絶時に廃棄されたもので、意図的な埋置の可能性はある。

出土遺物の詳細は、1・2が銘蓮弁文の中国製青磁碗、3が中国製青磁碗、4が底部回転糸切りの土師質土器、5が千枚岩製の砥石で一方に両面穿孔の穴が穿たれ、片面がよく磨れている。携帯用の砥石である。以上の遺物からみて建物の時期は13世紀後半を前後する鎌倉時代の遺構と推定される。(旧D地区掘立柱建物37)



**B区-10号独立柱建物跡(第183
図 一図版34)**

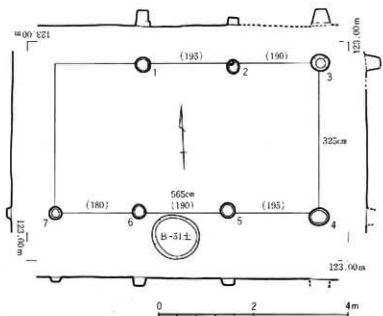
B-9建物と直交して重複する3間×2間の独立柱建物跡で、内部中央に小さな柱穴10があり、床を支える束柱の可能性はある。柱穴の大きさは不揃いだが、深さはよく揃っている。柱穴10のみ深さが浅い。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約625cm、南北短軸長約465cmをはかる。床面積が約28.8㎡の中型の建物で、長軸の方位角は89度の東西棟である。なおこの建物の壁の外側に接するように東西にB-50土壌とB-62土壌が検出された。ほかに例のない束柱の配置と考えあわせると、この二つの土壌もこの建物の機能にかかわる可能性が高い。しかしその機能がなっていたかはわからない。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区独立柱建物26)



第183図 B区-10号独立柱建物跡(1/80)

**B区-11号独立柱建物跡(第184・185
図 一図版34)**

B-10建物と重複する3間×1間の独立柱建物跡で、北西隅の柱穴は未検出である。柱穴の大きさはまちまちで深さも一定しない。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約565cm、南北短軸長約325cmをはかる。床面積が約17.9㎡に復元される小型の建物で、長軸の方位角は93度の東西棟である。なおこの建物の南壁の外側に接するようにB-51土壌が検出された。その位置からみてこの建物と関係する土壌であろう。B-10建物の場合と同じであり、重複するB-10建物とB-11建物は、同じ機能をもった建物が同一地点に建て替えられたものと推定される。南西コーナーの柱穴7から1の土師質土器の坏底部破片が出土している。建物建設または廃絶時の祭祀行為にかかわる可能性がある。この土器と柱穴埋土の類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区独立柱建物25)



第184図 B区-11号独立柱建物跡(1/40)



第185図
B区-11号独立柱
建物跡出土遺物
(1/4)

2) 土壌 (第3・6・7表)

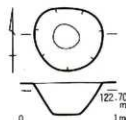
掘立柱建物群の周辺を中心に小規模な土壌が検出されている。しかしほかに出土遺物がきわめて少ないために時期判定困難な土壌が多く、実際はさらに存在したことは疑いない。



第186図 B区-48号土壌 (1/40)

B区-48号土壌 (第186図)

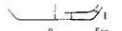
I O調査区で検出された小型円形の土壌で、きわめて浅く底面は平坦である。規模は長軸長90cm、短軸長72cmで、検出面からの深さは12cmである。用途は不明。埋土は黒灰色の単一層(1層)で、炭と土器細片を含み、そのなかには土師質土器が含まれていた。その土器から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌482)



第187図 B区-49号土壌 (1/40)

B区-49号土壌 (第187-188図)

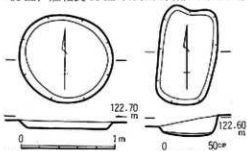
同じくI O調査区で検出された小型円形の土壌で、底は丸い皿状である。規模は長軸長67cm、短軸長65cmで、検出面からの深さは32cmである。用途は不明。埋土は黒褐色軟質の単一層(1層)で、炭および焼土と1cm大の黄色土ブロックと土器細片を多量に含み、そのなかには1の底部回転系切りの土師質土器片が含まれていた。その土器から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌474)



第188図 B区-49号土壌出土遺物 (1/4)

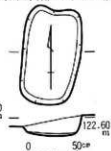
B区-50号土壌 (第189図)

I 19調査区のB-10建物西側で検出された小型円形の土壌で、きわめて浅く底面は平坦である。規模は長軸長61cm、短軸長60cmでほぼ正円形である。検出面からの深さは4cmである。前述したようにB-10建物と関係する



第190図

B区-51号土壌 (1/40)



第191図 B区-52号土壌 (1/40)

可能性が高い。用途は不明。埋土は淡黒褐色軟質の単一層(1層)で、焼土と土器細片を含み、B-52土壌とB-1溝の埋土とよく似ている。時期を明示する出土遺物はないが、掘立柱建物の柱穴埋土との類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌475)

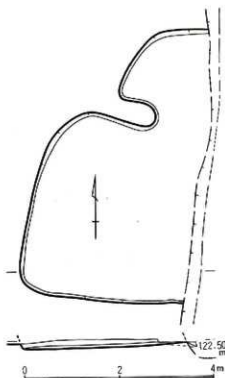
B区-51号土壌 (第190図)

同じくI 19調査区のB-11建物南側で検出された小型円形の

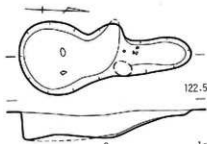
B区-52号土壌 (第191図)

K 19調査区のB-1溝とB-2溝の間に、前者と並行するように検出された不定形の土壌で、底面は皿状である。規模は長軸長105cm、短軸長60cmで、検出面からの深さは21cmである。B-1溝の埋土と同じ土が埋まっている。用途は不明。埋土は暗黄褐色の単一層(1層)で、焼土と土器細片を含み、B-50土壌とB-1溝の埋土とよく似ている。時期を明示する出土遺物はないが、掘立柱建物の柱穴埋土との類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌469)

土壌で、きわめて浅く底面は平坦である。規模は長軸長99cm、短軸長90cmで、検出面からの深さは11cmである。前述したようにB-11建物と関係する可能性が高い。用途は不明。埋土は暗黄褐色軟質の単一層(1層)で、炭・黄色土ブロックと土器細片を少量含む。時期を明示する出土遺物はないが、ほかの中世遺構の埋土との類似から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌476)



第192図 B区-53号土壌 (1/80)



第196図 B区-55号土壌 (1/40)

と推定した。(旧D地区土壌415)

B区-55号土壌 (第196図 一図版35)

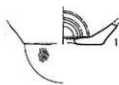
N18調査区で検出された不定形の土壌で、底面は凸凹で一定しない。その規模は長軸長181cm、短軸長49cmで、検出面からの深さは29cmである。埋土中から青磁小片が出土した。その遺物から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌436)

3) 墓 (第4・6・9表)

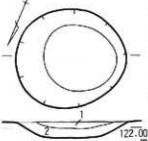
B区では掘立柱建物群からはなれたD2調査区で1墓のみ検出されている。B区の北側の日田市調査地区ではかなり多くの中世墓が調査されており、その分布とは対照的である。

B区-9号墓 (第197・198図 一図版35・51)

箱形木棺墓と推定される墓である。墓壇は正確な長方形で、断面は箱形をなし、底面は平坦である。南北の長さ143cm、東西の幅67cmを測り、検出面からの深さは25cmである。長軸の方位角は0度で、正確に磁北を向く。土壌の形状から箱形の木棺を使用したのではないかと推定され、副葬品が北側に集中する点から北頭位とみられる。また成人を直肢葬したとするには墓壇が短いので、膝を曲げた屈肢横臥の姿勢で葬った可能性が高い。副葬品として、鉄製短刀1振り、青磁破片1点、土師質土器環2枚と小皿3枚が検出された。その副葬状態はまず完形の土師質土器環2・3が左右対称に、まるで頭部を挟むように正位で置かれ、その北側に土師質土器小皿5が



第193図
B区-53号土壌出土遺物
(1=1/4、2=1/2)



第194図 B区-54号土壌 (1/40)

第195図 B区-54号土壌出土遺物 (1/4)

L2調査区で検出された円形の土壌で、底は丸い皿状である。規模は長軸長118cm、短軸長104cmで、検出面からの深さは16cmである。埋土は二層に分かれ、底面の暗褐色粘質の2層には、炭片と炭化種実が多量に含まれていたが、土器の出土はなかった。その上の1層には黄色土ブロックと土器片が含まれて埋め戻された可能性がある。1層からは1の中国製青磁碗の口縁部片と2の底部回転系切りの土師質土器片が出土した。その遺物から中世の遺構



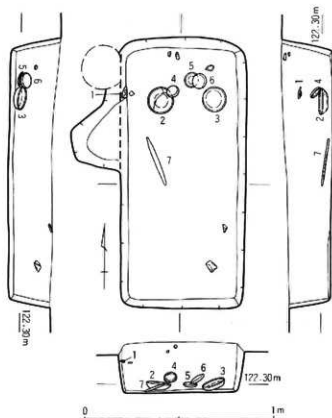
B区-53号土壌 (第192・193図 一図版35・51)

同じくK19調査区で検出された不定形の大型土壌で、B-2溝の西にありその溝に切られている。底面は浅く平坦である。その規模は長軸長585cm、短軸長355cm以上で、検出面からの深さは20cmである。埋土は暗褐色の単一層(1層)で、炭および焼土と基盤層由来する角礫と土器細片を多量に含み、そのなかには1の底部回転系切りの土師質土器片と2の土釜が含まれていたほかに、銘蓮弁文のある青磁碗の小片が含まれている。その遺物から中世の遺構と推定した。(旧D地区堅六住居32)

B区-54号土壌 (第194・195図)



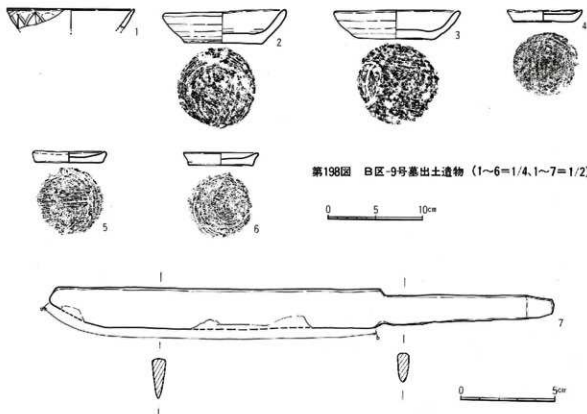
第195図 B区-54号土壌出土遺物 (1/4)



第197図 B区-9号墓 (1/20)

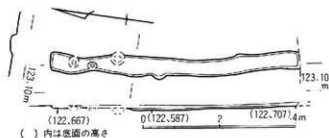
同じく正位で置かれていた。以上の3枚は同じ高さで検出された、おそらく被葬者の頭を囲むように配置したと見られる。その3枚の上に土師質土器小皿4・6の2枚が斜めに伏せられた状態で検出された。以上5枚の土師質土器には煤痕等の使用の跡はなく、何かを供献していたものと推定される。さらに最初に置かれた土師質土器3枚と同じ高さで、7の鉄刀が中央西寄りに検出された。先端を南側に刃を内側に向けている。以上の土師質土器と鉄刀からなる副葬品はその出土位置からみて棺内に置かれたものと推定される。ところで他に墓境内の埋土中のかかなり浮いた位置から青磁片が2点が検出されている。南東部から出土した青磁の小片は、検出面で出土したもので混入の可能性が高いが、西の壁に接して土師質土器の横にあたる位置でやや浮いて出土した1の青磁碗の口縁部片は、破片の部位と出土位置から考えて破片を棺外副葬した可能性が高い。

出土物の詳細は次のとおり。1は竜泉窯系中国製青磁碗で、外面に鉢蓮弁文がある。土師質土器はすべて底部回転糸切りで、3の坏と5の小皿には板状圧痕がつく。また2と3の坏、4～5の



第198図 B区-9号墓出土遺物 (1~6=1/4, 1~7=1/2)

小皿の法量はきわめて近似し、同時に製作された一器を副葬に利用したものと思われる。いずれも胎土は在地産のもので、14世紀前半に使用の中心時期をおく型式である。7の鉄刀は全長約27cm、刃渡り17cmの小刀である。土師質土器の年代観からみて14世紀前半ごろの墓と推定される。(旧A地区1号土壌墓)



第200図 B区-1号溝
出土遺物 (1/4)

第199図 B区-1号溝 (1/100)

4) 溝 (第5・6表)

方形区画を限る西の溝と、性格不明の2条の短い溝が検出されている。

B区-1号溝 (第199・200図 一図版34)

B-2溝と掘立柱建物群の中間に位置し、南北にのびる細い溝である。断面は浅いU字形をなし、長さ6m余りを検出して調査区外に達する。性格は不明である。埋土は軟らかい淡黒褐色の単一層(1層)で、焼土と土器片を含む。この埋土は近接するB-52土壌のそれによく似ている。土器はいずれも小片であり、1の中国製青磁碗の口縁部片を含み、これは銘蓮弁文を有する。埋土の様相とこの青磁から中世の遺構と推定した。(旧D地区溝28)

B区-2号溝 (第201・202図 一図版34・35)

B区の中央を南北に縦断する長大な溝で、B区で45m余りを検出している。なおその後の日田市の調査によってこの溝はさらに南北にのび、全長150m近くに達することが明らかになっている(註1)。B-47土壌(古墳時代前期前半)とB-53土壌を切って掘られている。溝の方向の方位角は4度で真北に近い。K2調査区付近で約3.5mにわたって溝が途切れている。これは計画的に掘り残された障溝である。すでに触れたようにこの障溝が中世方形館内部への入り口のひとつであろう。溝の断面はどこで切っても逆台形で、検出面での幅は最も広いところで2.2m、狭いところで1.3mである。なお底面の幅は1.3~1.5mで比較的一定しており、つくりも丁寧に仕上げられている。溝の底面の高さは北に行くほどやや低くなる微妙な傾斜をしめし、この方形館の建設された時期の微地形を反映していると推定される。なお検出面からの深さは50cmほどであるが、第201図に示すG点で段が付き南側が浅くなる。また断面Aの付近で径1mほど深さ80cmの円形の土壌を検出している。土層観察からこの溝に付設されたものであることは明らかなが、性格は不明である。ところでこの溝にとまなう門などの建築物や土塁の痕跡はみあたらなかった。

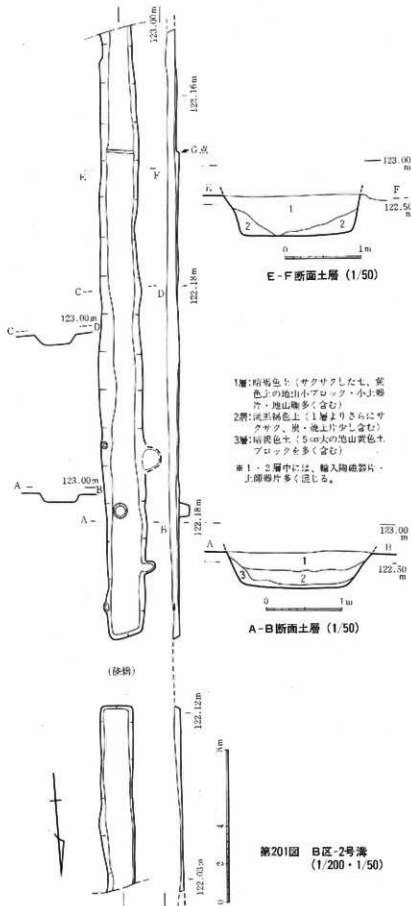
埋土は単純で、三層あるいは二層に分層でき、A-A'断面では、底部に5cm大の基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に含む3層が堆積し、そこでは東側からより多く流れこんでいた。この土は内容物からみて人為的に破壊されたものである。3層は部分的な堆積であるのに対し、次の2・1層は溝全体で認められる。まず炭・焼土を含むサクサクと軟らかい淡黒褐色の2層が堆積し、さらに黄色土ブロック・礫・土器片を多量に含む1層が堆積している。層単位が厚く土質も軟らかいので、短期間に埋没した印象を与える。2・1層からは青磁片・常滑焼の破片、土師質土器片などの破片が、点在した状態で出土し、埋没時に混入した廃棄物であると推定される。

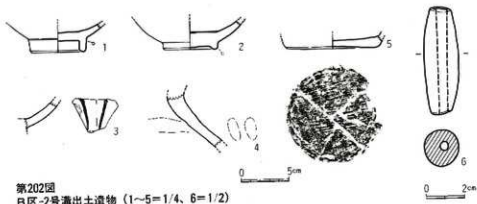
出土遺物の詳細は次のとおり。1~3は毫東窯系中国製青磁碗の破片で、3は外面に銘蓮弁文がある。4は胎土の小石英の粒子を含む常滑焼の壺と推定される頸部破片である。5は底部回転切削りで板状圧痕がつく土師質土器の坏、6は土錐である。この遺物からみて13世紀後半から14世紀前半ごろにこの溝が機能していたと推定される。(旧D地区溝26)(中世前期)

注1. O-1区2号溝とQ区1号溝である。

土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』V、1990、日田市教育委員会

土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VII、1993、日田市教育委員会





第202図
B区-2号溝出土遺物 (1~5=1/4, 6=1/2)

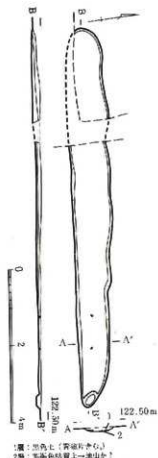
B区-3号溝 (第203図 一図版35)

方形館跡の外側に検出された東西にのびる溝である。断面は浅いU字形をなし、長さ9.8mを検出した。幅は1m余り、長軸の方位角は96度である。性格は不明であるがB-2溝とほぼ直交する。埋土は軟らかい黒色土で、青磁の小片が出土した。図示できないがその小片の出土と埋土の様相から中世の遺構と推定した。(旧D地区土壌434)(中世)

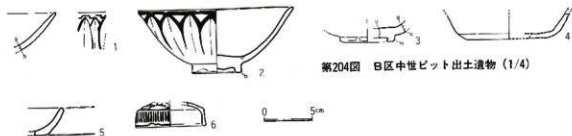
5) ビット (第167・204図、第6表 一図版36・51)

掘立柱建物群の周辺あるいは重複して、この時期の遺物を含む柱穴が6本検出されている。いずれも掘立柱建物の柱穴の一部と推定され、さらに多くの掘立柱建物が存在していたことを示している。

I O調査区ビット6からは1の青磁碗口縁片が出土した。外面に鑄蓮弁文がある。破片埋納の可能性もあり、このビットをコーナーの柱穴とする掘立柱建物が存在した可能性がある。I O調査区ビット8からは2の青磁碗が完形のまま出土した。明らかに柱抜き取り後の埋納と考えられ、ビットの位置が掘立柱建物の密集地の中なので、別の掘立柱建物が存在した可能性を示している。I O調査区ビット9からは3の青磁碗の底部小片が出土している。I O調査区ビット11からは4の底部回転糸切りの土師質土器の坏片が出土した。H O調査区ビット7からは5の土師質土器の坏片が出土した。I 19調査区ビット7からは6の小型の陶器製香炉蓋が出土している。



1層：黒色土(青磁片等)
2層：赤褐色粘質土(埋土)
第203図 B区-3号溝 (1/100)



第204図 B区中世ビット出土遺物 (1/4)

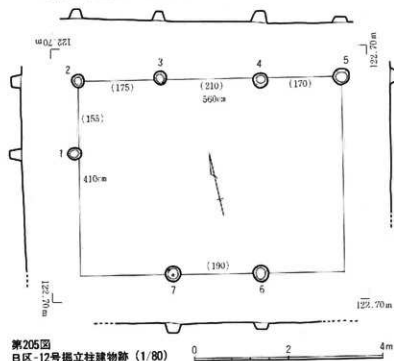
第7節 近世 (第208図)

この時期にあたる遺構は少ないが、B区全体に分布する。掘立柱建物跡1棟および土壇2基と溝5条を確認した。この時代の遺構はまだ存在するだろうが、土器を含まないためにほかの時期の遺構と区別できなかつた。なお中世の掘立柱建物群周辺で認められる教条の南北の小ピット列は、近世以後のなんらかの植栽の痕跡である。

遺構の配置をみると、西部には溝がなく、代わりに掘立柱建物跡1棟のみが存在するのに対し、東部では東西南北に溝がはしっている。つまり全体は畑地として利用され、B区西端の一部のみは小規模な宅地として利用された可能性がある。ちなみに小迫辻原遺跡では、近世の掘立柱建物跡は単独で検出されることが多く、継続した宅地というより、開発初期の作業小屋あるいは農作業用の出作り小屋であった可能性が高い。

近世の遺構の時期は、出土遺物からみて遅くとも18世紀後半には溝が掘られ、その後1960年代の耕地整理まで溝は維持されていたものである。

1) 掘立柱建物跡 (第2表)



第205図
B区-12号掘立柱建物跡 (1/80)

B区-12号掘立柱建物跡 (第205図一図版36)

B区の西端のO1調査区で検出された3間×2間の掘立柱建物跡で、コーナーの二本の柱穴は稲藁飼育所の建物建設による攪乱で破壊されている。東の梁をささえる柱の穴は未検出である。柱穴の大きさと深さは揃っている。柱間寸法は、心寸距離で東西長軸長約560cm、南北短軸長約410cmを測る。床面積が約23.4㎡の中型の建物で、長軸の方位角は102度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、近世畑地境界溝と方向が一致するので近世の遺構と認定した。(旧D地区掘立柱建物24)

2) 土壇 (第3表)

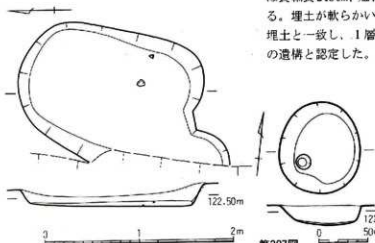
B区-56号土壇 (第206図)

J1調査区検出された不定形の大型土壇で、底面は浅く平坦である。その規模

は長軸長245cm、短軸長143cm以上で、検出面からの深さは2cmである。埋土が軟らかい暗褐色の単一層(1層)で、近世畑地境界溝の埋土と一致し、1層中から近世染付磁器の小片が出土したので近世の遺構と認定した。(旧D地区土壇419)

B区-57号土壇 (第207図 一図版36)

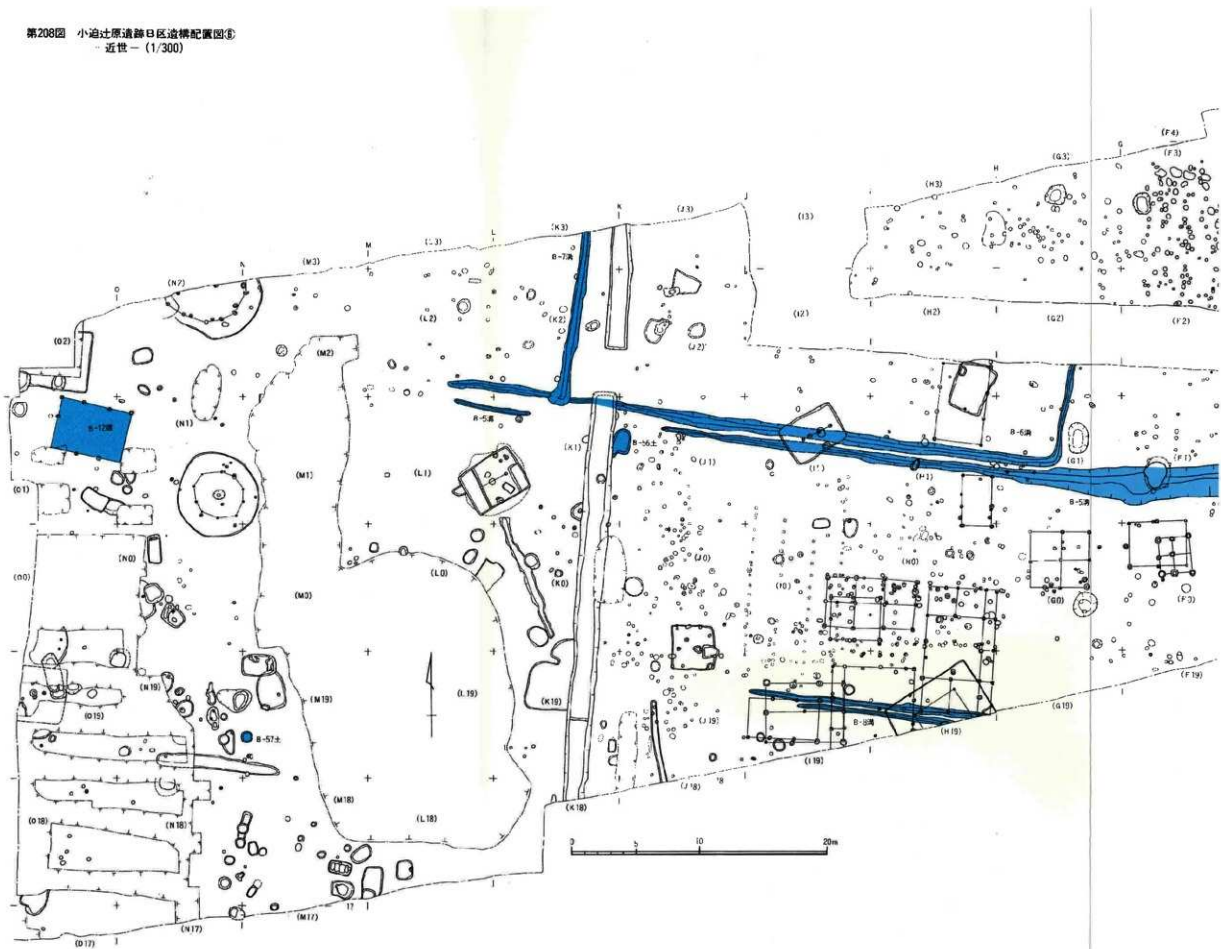
M19調査区で検出された小型円形の土壇で、底面は皿状である。その規模は長軸長95cm、短軸長85cmで、検出面からの深さは22cmである。埋土が軟らかい暗褐色の単一層(1層)で、ほかの畑地境界溝の埋土と一致し、1層中から近世陶器の小片が出土したので近世の遺構と認定した。(旧D地区土壇441)



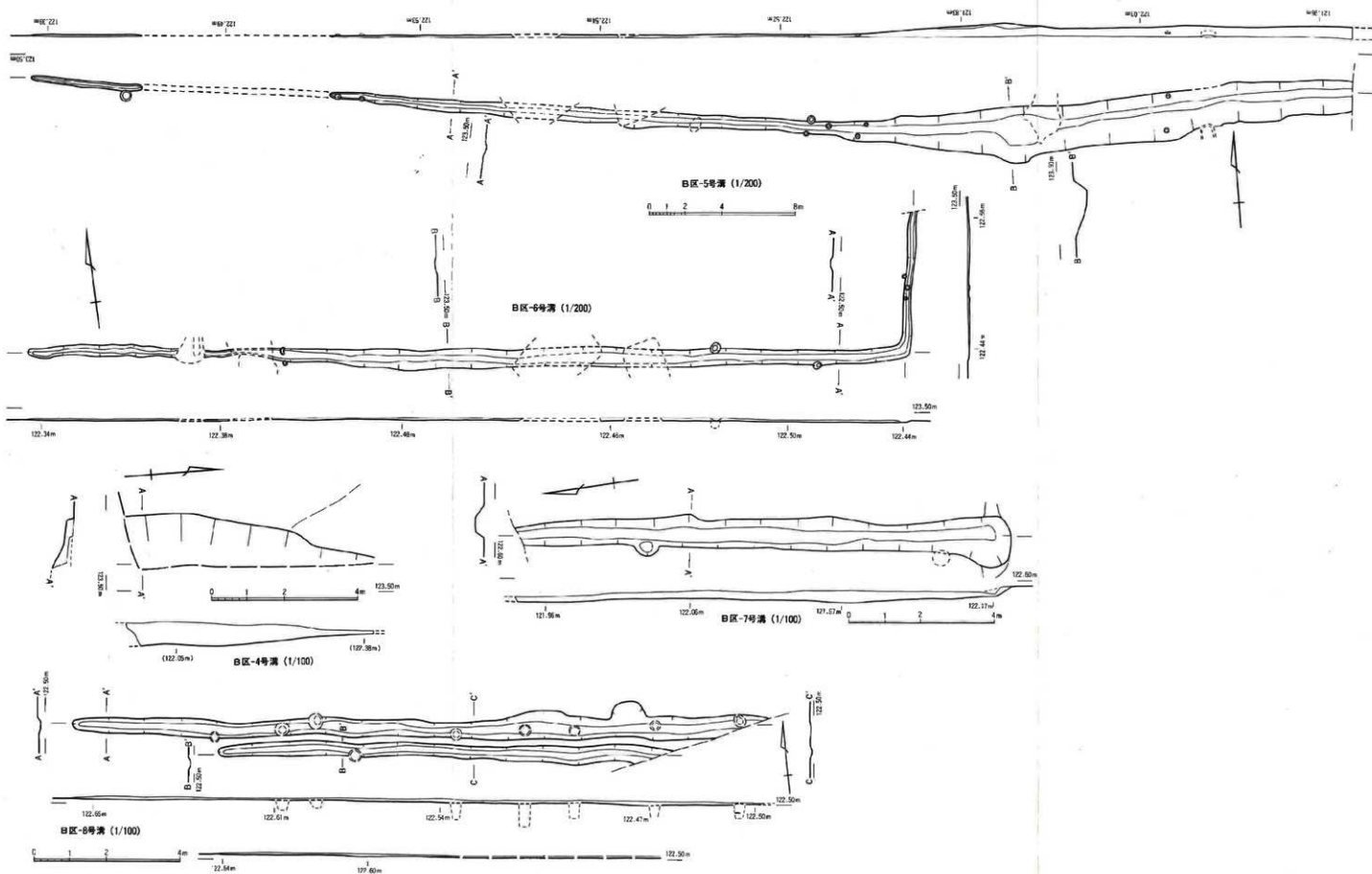
第206図 B区-56号土壇 (1/40)

第207図 B区-57号土壇 (1/40)

第208图 小过水原遗址日区透视配置图④
—近世— (1/300)







第205図 B区-4・5・6・7・8号溝 (1/100・1/200)

3) 溝 (第5表)

5条の畑地境界溝を検出したが、二条一単位の溝が平行して掘られた例をB-5・6溝とB-8溝で確認した。この二条が平行する畑地境界溝は、現在の日田市内でも耕地整理のおこなわれていない古い地割りを残す畑地で観察される。耕作者に聞き取りをおこなうと、その二条の溝を境にして畑地の所有者が異なる場合が多い。そこから推測すると、二条平行の畑地境界溝は、異なる畑地所有者が両側から各々掘ったものであって、二条の溝の間には、単なる耕作上の便宜による境界線が走るだけでなく、畑地耕作者の境界線としての意味をもち、その後近代になると土地所有者の境界線へと変わっていくものと思われる。

B区-4号溝 (第209図)

B区の東端でその一部を検出した、南北にのびる畑地境界溝である。B-7住(古墳時代前期前半)を切っている。断面は深いじ字形と推定され、長さ7.5mを検出した。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので近世の遺構と認定した。(旧D地区溝31)

B区-5号溝 (第209図)

東西に75m近く検出した長大な畑地境界溝で、K1調査区で一部途切れているが、その延長部分を含めて後世に削平されたものであろう。また東の延長はC-12溝につながるかと推定される。途中からB-6溝が平行して走る。平行する部分の南北では耕作者が異なっていた可能性が高い。溝の断面はU字形で、B-6溝と別れるところから東では、急に深くかつ広くなり、方向も方位角98度から87度へとわずかに変化する。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝30)

B区-6号溝 (第209図)

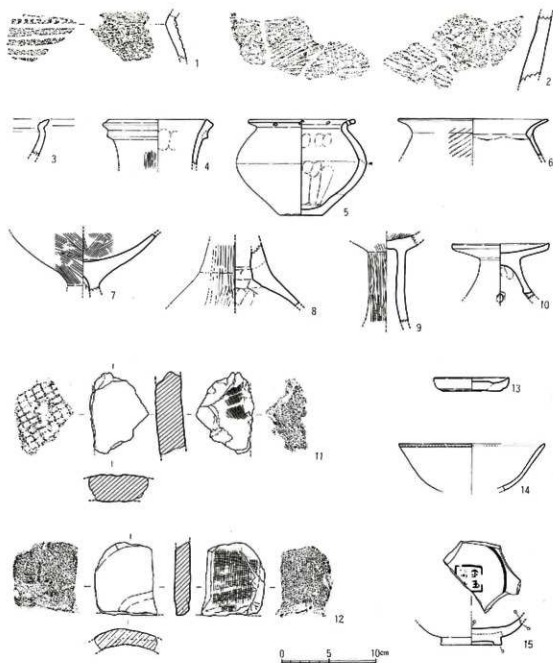
B-5溝に平行して走り、途中から北に直角に曲がるL字形の畑地境界溝である。西の延長は削平され、北の延長は、旧B地区に伸びていたはずであるが、検出時の下げすぎで飛ばしてしまった。B-7溝と一部重複する。溝の断面はU字形で、底面の高さはほぼ水平である。東西部分を約49m、南北部分を約8m検出した。方位は東西溝が方位角98度、南北溝が10度である。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝24)

B区-7号溝 (第209図)

B-6溝と直行して重複する南北方向の畑地境界溝である。溝の断面はじ字形で、底面の高さはほぼ水平である。溝の方位角は8度である。B-6溝との切り合い関係は不明だが、南端がB-6溝に接して終わる点から推定して、B-6溝-B-7溝の順となるだろう。おそらくB-6溝に囲まれた一筆の畑地の耕作者が、なんらかの都合で畑地を東西に分割する必要が生じて設けた溝と推定される。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝25)

B区-8号溝 (第209図)

B-6溝の東西溝とB-5溝の西部分と平行し、約20mの間隔において掘られた二条平行の畑地境界溝である。西の延長は削平され、東の延長は調査区外にのびる。溝の断面はU字形で、底面の高さは西に行くほどやや高さを増す。東西約19mを検出した。溝の方位角は96度である。やはりこの溝の南北で耕作者が異なると推定される。時期を明示する出土遺物はないが、埋土がほかの畑地境界溝のそれと一致するので、近世の遺構と認定した。(旧D地区溝29・32)



第210図 B区表面採集遺物①(1/4)

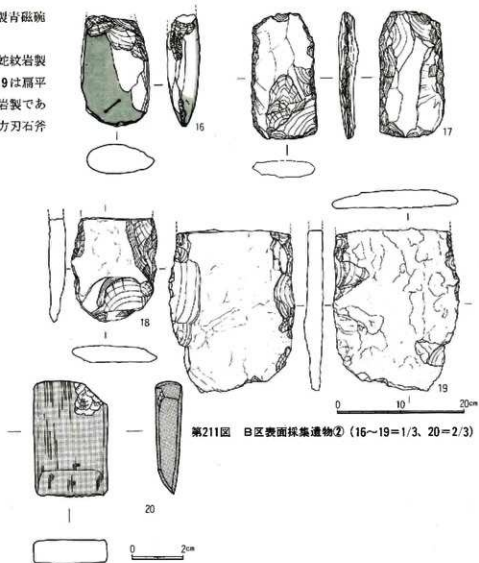
第8節 表面採集遺物(第210・211図、第6表 一四版52)

以下の遺物は、試掘調査と表面採集および遺構検出時の遺物と、遺構内出土遺物であるがより古い時代からの残留遺物と考えられるものである。

第210図は土器で、1は縄文時代後期の西平式の精製深鉢の頸部で、くびれに半截竹管文を施している。2は縄文土器茅山式の深鉢片、3は縄文時代晩期の浅鉢口縁部片である。4・5は弥生時代中期末の長頸壺と短頸壺で、5は完形品で試掘時出土。本調査ではこの型式の土器は出土していない。6は古墳時代前期前半の伝統的V様式系の壺Bで、胎土は在地産である。7～9は同じく古墳時代前期前半の高坏である。10は古墳時代前期前半布留系の小型器台である。11と12は旧A地区の試掘調査時に出土した布目瓦で、おそらく奈良時代の遺構に関係するとみられる。13は13世紀ごろの土師質土器の小皿である。14は口壳の中国製白磁碗で、15は見込み「金玉滴

堂」の押し型のある中国製青磁碗
である。

第211図は石器で、16は蛇紋岩製の
縄文時代の石斧、17～19は扁平
打製石斧で、17は結晶片岩製であ
る。20は弥生時代の磨製方刃石斧
の完形品で、硬質頁岩製。



第211図 白区表面採集遺物② (16～19=1/3、20=2/3)